
リリカル銀魂～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～

ナナフシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル銀魂〜魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀〜

【Nコード】

N2725Z

【作者名】

ナナフシ

【あらすじ】

赤夜叉さんは退会しましたが、ちゃんと赤夜叉さんの許可をもらって書いている作品です。

赤夜叉さんの『銀魂×魔法少女リリカルなのは』〜魔法少女と銀髪の侍〜と黒龍さんの『リリカル銀魂ライダー』〜異世界鎮魂歌〜を参考に書いています。

天人によって侍は衰退の一途をたどっていた。

そんな中、己の侍魂を決して曲げぬ男が一人居た。その男の名は坂田銀時。この物語の主人公である。

銀時には相棒がいる。だが、人ではない。

銀龍と言う刀がある。

普段は姿を見せず、銀時が任意したとき、銀時がピンチの時に姿を現す。

銀龍はただの刀ではなく、喋る刀であった。

銀時は源外に呼ばれて工場に向かい、装置の実験体となった。

そして、飛ばされたのは『リリカルなのは』の世界だった！

銀時は魔法少女と出会い、事件に巻き込まれていく。

新八と神楽が無印編では出てきません。すみません……被らない様にしたらこうなりました。後、新八はロリコンアニメオタクにするつもりなので

僕が書いているもう一つの銀魂の二次小説『銀魂〜冷血の鬼姫の日常〜』のオリキャラ達が出てきます

第一訓：始まりは突然に（前書き）

ナナフシ「どうも！ナナフシです！」

銀時「こいつが書くなんてな」

ナナフシ「悪いか！後、黒龍さんに一言……銀龍の件ありがとうございます！」

銀時「考えてくれたもんな」

ナナフシ「もう俺マジで感謝感謝です！」

銀時「その内銀八先生をやるつもりだからよろしく！」

ナナフシ「それでは『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります！」

第一訓：始まりは突然に

ここは江戸の歌舞伎町。ここに万事屋銀ちゃんと言う何でも屋がある。

中では銀髪で天然パーマの男、坂田銀時。この物語の主人公である。他には……て、あれ？居ないんですけど。

「ああ、新八はお通のライブ、神楽は定春の散歩だ」
え？マジで？

「マジだ」

銀時は地の文と会話をしていた。
プルル、プルル。

すると、電話が鳴った。

銀時が電話を見てダルそうに取る。

「ハアイ、万事屋でえす」

銀時が怠そうに言った。

『銀の字か？』

「んだ。じーさんじゃねえか」

電話の相手は江戸随一の機械師、平賀源外からくりからであった。

『依頼なんじゃが』

「何だよ」

銀時は訪ねた。

『新しい発明品を開発したから来てくれ』

「絶対ロクな発明品じゃねえだろ。それに実験体にされるのがオチだ。断る」

『そんな事言つて良いのか？』

「あ？」

『来ないなら今までのツケ今日までに耳揃えて払え』

銀時はそれを聞いて行かざるを得なかった。

「行くか……」

『主よ……ちゃんと払わなければならないではないか』

ぎんりゅう
「銀龍の言う通りです」

銀時は誰も無いのに、手に突然刀が現れてそれと話していた。

銀龍は白かった。柄から鞘まで白かった。鍔は白銀だった。

刀身は見せてないが、刀身も白銀である。

銀龍はまた姿を消した。

銀龍は普段は見えないのだ。銀時の任意、ピンチの時に姿を現す。
そのまま銀時は工場へ向かった。

＊

「おい、じーさん」

銀時が工場の中に声を掛けた。

「来たか銀の字」

工場の中から老人が一人出てきた。

平賀源外である。

「ん？銀の字。あいつ等はどうした？」

源外は新八と神楽が居ない事を聞いた。

「二人共野暮用」

銀時はそう言った。

「まあ、良い。中に入れ」

源外に言われて銀時は工場の中に入った。

「おおー！」

中に入った銀時は驚きの声を上げた。

工場の中には大きな装置があった。

「おい、じーさん、何だよこいつア？」

「こいつはな瞬間移動装置だ」

「瞬間移動装置？」

「ジジイイイイ！また欠陥品作りやがってええええええ！」

『主！落ち着いてください！』

銀時が源外に向かって怒鳴って、銀龍が慰めている時だった。

バチツと言う音と共に装置の中から強い光が発した。だんだん光がおさまる。

源外が装置の扉を開けると銀時の姿はなかった。

「…厄介な事にならなきゃ良いんだが」

源外は一人になった工場で呟いた。

*

「ん？」

銀時は目を覚ました。

上半身を起こして、周りを見回した。

どこかのコンクリートで出来た道で、周りはコンクリートで出来た壁がある。そして空は暗く、月が出ていた。

「どっ、どこ？」

銀時はそう呟いた。

第二訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり（前書き）

ナナフシ「次回から銀八先生コーナーを始めたいと思います！」

銀時「いきなりだな！」

ナナフシ「いや、今回リリカルなのはキャラ出るからさ」

銀時「それでつて……」

ナナフシ「今回は銀龍が使われる！」

銀時「ネタバレ！」

ミラクル∞「ナナフシはそう言う人だし……てか、何故ミラクル∞（エイト）！」

ナナフシ「ミラクル∞と神楽は前書きと後書きに出してるんだよ。無印編出番ないから」

銀時「だつてよ。神楽、ミラクル∞」

ミラクル∞「いや、銀さんまで！」

神楽「ミラクル∞の理由が知りたかったら、『銀魂』冷血の鬼姫の日常』の質問コーナー、もしくは霜月サヤの『妖と夜叉』を見ると理由がわかるネ」

ミラクル∞「僕は新八じゃあああああ！」

銀時・ナナフシ「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪侍と白銀の刀』始まるぜ！」

ミラクル∞「無視するなアアアアア！」

第二訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり

「だアアアアア！チクショー！！あのクソジジイのせいで何か良くわからねえ場所に飛ばされちまったじゃねえか！あのクソジジイ！！帰ったら絶対瞬間移動させてやるからなア！」

目が覚めた銀時は怒りを露わにしながら怒鳴っていた。

『主よ。落ち着いてくれ』

銀龍ぎんりゅうが銀時を慰める。

今怒鳴っていても仕方がないと言って銀時を慰めた。

『それに主よ。周りを見る限り江戸ではない事は確かだ』

銀龍の言葉を聞いて銀時は……。

「ああ！ちくしょう！イライラする！あの綺麗な星空までイライラする！あんなに綺麗なのにイイ！」

銀時は顔を上に向けて怒鳴る。

銀時がそう怒鳴っている時だった。

ドカーン！

「！？」

爆発音らしきものが聞こえた。

『主！行ってみましょう！』

「言われなくてもわかってらア！」

銀時は腰に挿してある『洞爺湖』を握りしめながら轟音の方に向かった。

*

銀時が聞いた轟音の発信源は動物病院であった。
そしてそこには栗色の髪をリボンでツインテールに結んだ美少女・

――高町なのはがフェレットを抱えていた。

そして驚く彼女の眼前には病院の壁に埋まって、黒い何かがかもがいている。

ブヨブヨと形を変えて少し気持ち悪さを覚える。

なのはは慌ててフェレットを抱えて逃げ出した。

なのはは学校帰りに酷い怪我をしたフェレットを拾い、動物病院で手当をもらった。

そして夜、頭の中に謎の音が聞こえて、気になったなのはは動物病院に来た。

そして今の状態になっているのだ。

私、高町なのははフェレットさんを抱えてあの、変な怪物から逃げています。

あの怪物にも驚いたけど、フェレットさんが喋った事にも正直驚いています。

それに周りにも景色もおかしいし、正直頭の中はぐちゃぐちゃなの。

「あの、お礼は必ずします！ だから僕にあなたの力を……！」

「お礼とかそんな事言ってる場合じゃないでしょ」

フェレットさんがさっき私に力があるって言ったけど、正直私にそんな力があるかは分からない。

全然今の状況は把握できないけど、あの怪物をどうにかする力があるなら――。

「ぐおおおおおおお！！」

私が逃げながらそう考えていると、怪物が雄たけびを上げて私に飛び掛ってきた。

「っー!!」

私はもうダメだと思い思わず目を瞑ってしまった。

でも、いつまで経ってもくるはずの痛みがこない事を不思議に思った私はゆっくりと目を開けた。

「おいおい、トラブル遭遇とはついてねえな」

黒い服の上に白い和服を半分抜いた状態で着て、銀髪に木刀を持った男の人が立っていました。

なのはがピンチになったその時に銀時がなのはの前に立ち、木刀で怪物を抑えたのだ。

銀時はそのまま怪物をぶっ飛ばした。

「おいおい、トラブル遭遇とはついてねえな」

銀時はまたメンドーな事に首を突っ込んでしまったと思い、メンドくさそうに頭を掻く。

そして、後ろに居るのはに顔を向ける。

「っで、大丈夫かお前？」

「え！は、はい！ありがとうございます！」

なのはは俺を言っで頭を下げる。

「あの、ありがとうございます」

フェレットも頭を下げた。

「イタチが喋った！」

銀時はフェレットが喋った事に驚いていた。

「あの、フェレットなんですけど」

「イタチもフェレットも変わらねえだろ」

「いや、変わりますよ！」

銀時とフェレットが言い合いをしていると……。

「グオオオオオオ！」

銀時にぶっ飛ばされた怪物は怒っている様だった。

「改めて見ると気持ち悪いなコイツ」

銀時は怪物を見ていつもの様なダラけた口調で答えた。

まあ、この人、エイリアンとか、人に寄生する刀とかと戦ってますね。

銀時は横目で怪物を見ながらなのはに話し掛ける。

「えっと、お前等名前は？」

「え？た……高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアです」

なのはとユーノは戸惑いながらも自己紹介した。

「じゃあ、なのはとユーノ、お前等はそこに居ろよ」

銀時は軽く手を振るうと怪物の元へ向かう。

「えっ！？ちよつと待ってください！危ないですよ！」

ユーノは必死に叫んで銀時を止めようとした。

ユーノは銀時が木刀で怪物を吹き飛ばしたのを見ていた。

だが、アレは『ジュエルシード』と言う『ロストロギア』思念体。

魔法も使えない銀時がどうにか出来る相手ではない。

銀時にも自分を抱きかかえているのは同様『リンカーコア』があり、しかもなのはより高い魔力量を有しているのがわかる。

だが、なのは同様魔法の力に目覚めていない事をわかっている。

銀時は魔法なしの肉弾戦戦わなければならない。

それは無謀と言いようがない。

だが、ユーノは後々驚かされる。

ズバババババ！

銀時はユーノの予想を遙かに上回っていた。

銀時が思念体に近づいた時襲ってきたが、銀時は凄まじいスピードで木刀を振り、思念体をバラバラにした。

「す……すごい！」

「なんて強さだ」

なのはとユーノは銀時の強さに驚いていた。

バラバラになった怪物の破片は飛び散り、壁や電柱を破壊する。

なのはは銀時の剣の強さに見惚れていた。自分の家族も剣の腕はかなりの物だが、銀時の剣技はそれ以上の物を感じた。

「はい、終了オ」

銀時は思念体を倒したと思い、腰に木刀を挿し、なのはとユーノの所に戻る。

だが、思念体の欠片はじょじょに集まっていき、さっきの丸いブヨブヨの怪物に戻った。

「グオオオオオオオ！」

怪物は雄叫びを上げて銀時に襲いかかる。

「危ない！」

なのはが叫び声を上げ、銀時は後ろを振り向く。油断していた事もあり、銀時は木刀の刀身で防ごうとした。

『我が主よ……油断してはダメではないか』

銀龍がそう言つて姿を現して、銀時に銀色のオーラを纏う。よく見るとこれは魔力である。

その纏ったオーラは白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧と言う。

オーラそのものがバリアジャケットの強度を持ち、AAランクの攻撃を喰らっても平気になる。

更にはそれを纏っている時の銀時は身体能力が上がる。

何とかそれで怪物からの攻撃を防いだ。

そのまま白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧は消えた。

ユーノは白銀の鎧に驚いていた。

（い、今のは魔力で出来ていた！何であの人が魔力を使えるんだ！？）

ユーノはそれだけではなく、銀龍にも驚いた。

（そ、それに刀が喋ってる！）

ユーノはデバイスかと思ったが、デバイスではない事は確かである。
そしてなのはは……。

「か……刀が喋ってる！」

銀龍に驚いていた。

それと同時に白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧の綺麗さに見惚れていた。

「あ？こいつか？不思議だよな……喋ってたから……」

銀時も始めての時は驚いていたらしい。

でも今では慣れている。

銀時は怪物に目を戻した。

「ぐおおおお！」

まだ動いている。

鞘から銀龍を抜いた。

そして銀時は銀龍を振り上げた。

「オラア！」

そして振り下ろした。

すると銀色の斬撃が放たれた。

それも魔力で出来ていた。

これを魔力操作マジックコントロールと言う。

銀時の戦闘スタイルに合わせた魔法攻撃が出来る様になる。

つまり、自分の考えた魔力攻撃が可能になる。

（魔力の斬撃まで……一体何者なんだこの人！？）

ユーノは驚きの連発であった。

そして斬撃が怪物に直撃して真つ二つに斬れた。

だが、やはり元に戻ってしまふ。

「ちっ、こいつ不死身か……」

『厄介ですね』

銀龍も色んな攻撃方法があるが全て無駄だと踏んだ。

「どうすれば良いの！？」

「いけない！あれを何とか『封印』しなければいけないんだ！」

「その封印ってどうすれば良いの？」

なのはとユーノが封印の事について話しているのに気付き、銀時は銀龍でバラバラに斬つたり、魔力攻撃を行つたりして時間を稼いだ。「さっき言つた事は覚えてる？」

「魔法の事？」

「そう、それを使うにはさっき渡した宝石が必要なんだ」

「これの事？」

なのははさっきユーノから貰つた赤い綺麗な宝石を見せた。

「それで、それを手に、目を閉じ……心を澄ませて……僕の言つた通りに繰り返して……」

なのはは目を閉じてユーノが言つた言葉を繰り返す。

「我……使命を受けし者なり……」

「我……使命を受けし者なり……」

「『契約の元、その力を解き放て』」

「『えと、契約の元その力を解き放て』」

「『風は天に…星は空に……』」

「『風は天に…星は空に……』」

「『そして、不屈の心は……』」

「『そして、不屈の心は……』」

『『『この胸に！！』』』

なのはとユーノの声が重なる。

『『この手に魔法を……レイジングハート！セーットアップ！』』』
するとなのはの体が光に包まれていく。

<Stand by ready, set up!>
「うわっ！眩し！」

あまりの光に銀時が目を細める。

光が収まると白いバリアジャケットを着ており、手にレイジングハートを持って浮かんでいるのはが居た。銀時はその姿を見て唖然した。

「僕らの魔法は発導体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです！！そしてあれは……忌まわしい力の元に生み出されてしまった思念体。あれを停止させられるにはその杖で封印して元の姿に戻さないといけないんです！！」

なのははレイジングハート見て聞く。

「よくわかんないけど……どうすれば良いの？」

「攻撃や防御みたいな基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力とする魔法には呪文が必要なんです！」

「呪文？」

「心を澄まして……心の中にあなたの呪文が浮かぶはずです」

そう言われてなのはは目を閉る。そしてなのはは目を開ける、その目は真剣そのものだった。

「リリカル、マジカル」

「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

杖を掲げながら呪文を紡ぐなのは、それを見ながらユーノは叫ぶ。

「ジュエルシード、封印！」

<Sealing Mode・Setup>

なのはの魔力系が敵を縛り上げ、怪物の額に『？？？』の文字が浮かび上がる。

<Stand by ready>

「リリカル、マジカル……ジュエルシード、シリアル？？？、封印

！」

その時銀時が、

「なに、あのセリフ！？ 恥ずくない！」

『主よ……あの子も恥ずかしいのだぞ』

場の空気を壊すようなセリフを言った。銀龍はなのはも恥ずかしがつていると言った。なのは恥ずかしがつているのは本当だ。

レイジングハートの声に答え、なのはは何故かくるくる横回転しながら呪文を紡ぐ。

<sealing>

そして、なのはの魔力系が怪物を貫き、宝石の状態に封印する。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

なのははフェレットの指示に従い、レイジングハートの先を近づけるとジュエルシードが宙に浮かび杖のコア（赤い宝石）に取り込んだ。それと同時に周りの景色が異空間のような不思議な景色から元の普通の景色に戻った。

そしてゆっくりと地面に降りる。

「ふう……」

なのははバリアジャケットを解き、安心して息を吐く。

そしてバタリとユーノが気を失って地面に倒れた。

「フェレットさん大丈夫！？」

なのはは気絶したユーノを抱きかかえて心配そうな顔をする。

さっきのユーノだって自己紹介したって言うに……。

「な、なあ」

「ふえっ！？ な、なんですか？」

突然銀時に声を掛けられたなのはは驚いた顔で聞く。

「いや、ここにしていると不味くね？」

「えっ？」

なのはは銀時に言われ、周りの景色を見る。道路や電柱は壊れたり没落したりなどかなり酷い状況だった。

更に、

ピーポーピーポーピーポー！

パトカーのサイレンの音が向こう側から響いてきた。

『主よ。このままだとどこからどうみても我等がやった様にしか見えぬぞ』

銀龍の言った言葉を聞いて銀時は……。

「に、逃げろオオオオオオオ！」

「ご、ごめんなさー……い！」

銀時となのははその場からすぐ離れる為に全力疾走した。

『我は戻るか』

銀龍は呑気に言って姿を消した。

第三訓：謎の組織にはご用心

銀時となのは、ユーノが走り去る所を見ていた人物が居た。

「ククク、面白い力じゃねえか」

それを見ていたのは、天然パーマの男で、背中には薙刀を背負っている。

「それにしても銀の兄貴もここに迷い込んだとはな」

男はそう呟いた。

「銀の兄貴と銀龍ぎんりゅうのコンビは相変わらずだなア……ククク」

男は楽しみに満ちた笑顔だった。

男がそうやってしていると……。

「雷雅らいがここ居たの」

後ろからロングヘアーの女がやって来た。

男の名前は雷雅と言うらしい。

「おう、忍か」

雷雅は女の事を忍と呼んだ。

「探したのよ。アンタは私達『雷撃』のリーダーなんだからね」

忍は雷雅に向かってそう言った。

「わかってるよ。今さっき面白いもんを見ていたんでな」

「面白いもの？」

雷雅の言葉に忍は首を傾げて聞いた。

「銀の兄貴が来ている」

「『白夜叉』が！」

忍は雷雅の言った言葉に驚いていた。

「どうやら俺等と同じ様に迷い込んだのかもしれないな」

雷雅は不気味な笑みを浮かべながら言った。

「で、どうするの？」

「ちよつくら挨拶してくるわ。攘夷戦争で『迅雷』と恐れられたこ

の俺……疾風雷雅はやてがな」

雷雅はそう言つと姿を消した。
実は凄く速いスピードで移動したのだ。
「まったく……先に戻つてよ」
忍も姿を消したのであつた。

＊

銀時達三人はあの後公園に居た。

『とりあえず自己紹介から始めるか』

「そうだな」

銀龍が言つた事に頷いた三人。

銀龍も自己紹介と言つ事て姿を現した。

「俺の名前は坂田銀時。頼まれれば何でもやる万事屋つてのをやつてんだ。後、銀ちゃんでも銀さんでもテメエ等の好きな様に呼んでくれ」

『我は主の相棒である。銀龍だ』

「私は高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアです」

それぞれ自己紹介を終わらせた後、銀時達はユーノから魔法の事を聞いた。

ユーノからそれを聞き終わった後、銀時も自分の事情を話した。

ユーノは銀時の話を聞いて『次元漂流者』だと言つた。

「『次元漂流者』？」

銀時はもちろん、なのはもわからなかつた。

「簡単に言えば迷子ですよ。未開の世界から何かの拍子で別の世界に飛ばされた人の事です」

銀時はそれを聞いて、

「マジでか？」

確かに辺りを見回す限り江戸ではない。

それに天人さえもいなかった。

銀時はそれを信じるしかなかった。

「で、僕からも聞きたいんですが」

「何だ？」

ユーノは銀時に聞いた。

「その銀龍は一体なんなんですか？」

「あ、それは私も気になります」

ユーノとなのはは銀龍が気になる様だ。

「コイツか？……」

銀時は黙り込んだ。

そして……。

「何だろうな」

ズテン！

銀時が言った言葉に二人はズッコけた。

「何で持ち主であるあなたが知らないんですか！？」

「いや、俺もよく知らないんだよねエ。たまたま見つけて使ってる？的な」

「いや、何ですかその理由！？」

銀時が言う事にユーノはツツコンでいた。

『主が我を見つけたのは幼少の頃だ。これ以上は言えん』

銀龍はそれだけを言った。

「まあ、わかりました。後一つだけ良いですか？」

『なんだ？』

「あなたはデバイスでもないのに何故魔法を使えるんですか？」

ユーノの言葉を聞いた銀時は……。

「え！？あれ魔法だったの！？」

「今まで知らなかったんですか！？」

銀時は攘夷戦争でも使っていたが魔法だとは思っていなかったらしい。

たぶん銀時は「不思議な能力が使える刀」とでも思っていたのだろう。

ユーノは銀時が魔法に気付いていなかった事に驚いた。

「いや、て言うか。俺の世界で魔法は架空の産物だから」

まさか自分が普通に魔法を使っていたとは思ってもよらなかった銀時だった。

そして視線を銀龍に戻す。

『我か……確かにデバイスとやらではない……我は目覚めた時には主に拾われていたのだ』

どうやら銀龍も何故銀時の魔力を解放する事が出来るのかわからないらしい。

『我は何処で作られ、何処で何をしたか、何故この能力を持つており、使い方、名前しか覚えていないのかは謎なのだ』

つまりは記憶には能力と使い方、名前しか覚えていなかったらしい。

『だが、主は我が何者であろうと拾ってくれたのだ』

銀龍はそれ以来銀時と一緒に居る様だ。

「ま、コイツも自分自身がよくわからねえんだよ」

銀時がそう言くとユーノは「そうですか」と言って引いた。

「でも、凄いですよね」

なのはは目を輝かせながら銀龍を見ていた。
すると……、

「楽しそうじゃねえか……俺も混ぜてくれよ」

いきなり男の声が聞こえた。

その声が出た方向を見ると……雷雅が居た。

「雷雅！」

「よオ、銀の兄貴」

雷雅はニヤリと笑った。

ソワツ。

なのはとユーノは恐怖を感じた。

雷雅の目は戦いたいと言う目だった。

「デメエ……何でこの世界にいやがる！」

銀時は敵意を剥き出しにして言った。

なのはとユーノは敵意剥き出しの銀時にも驚いた。

「何……俺も銀の兄貴と似た理由でこの世界に来たんだよ」

雷雅は銀時にそう言った。

「デメエも！」

「ああ、俺達の組織のバカ機械師からくりのせいでこの世界に飛ばされたんだよ」

「俺達？と言う事は『雷撃』の奴らも！」

「ああ、居るさ」

雷雅は「ククク」と笑いながら言った。

「まあ、今回は挨拶に来ただけだ……今度会う時が楽しみだな……アハハハハ！」

雷雅は笑って去っていった。

「銀さん……あの人誰ですか？」

「強者を求める戦闘狂野郎だよ」

銀時はそれだけを言った。

「でだ……その話は置いてこうぜ」

銀時はこれ以上聞かれない様に言った。

「思えば銀さんって行く当てがないんですね？」

「ん？ああそうだな」

銀時はなのはの言った言葉に頷いた。

「なら、家に来ませんか？」

「え？」

銀時はなのはの言葉に驚いた。

「助けて貰ったお礼もしたいですし。それに銀さんと銀龍さんともつとお話がしたいのでノノノ」

なのはは頬を赤らめながら言った。

銀時がなのはを助けた時、銀時が格好良く見えたのであろう。

「マジで良いのか？お前の家族が何て言うかわからないぞ」

『そうだぞ。主は大丈夫だが、見ず知らずの男を家に入れるのはどうかと思っぞ』

銀時と銀龍はそう答えた。

「大丈夫です。私を助けてくれた人って説明すれば、お母さん達は銀さんを泊めるのを許してくれると思います」

「そうか？ならお言葉に甘えて」

銀時はそう言った後、「あ、後」と言った。

「その『ジュエルミート』集め俺も手伝うぜ」

「銀さん『ジュエルシード』だよ」

銀時の間違いをなのはが訂正した。

「居候させて貰う代わりに手伝ってやるよ。俺は万事屋だからな」

銀時がそう言った。

「でも……」

ユ一ノは渋っていた。

「十歳を満たない女の子がそれを集めるのは危ないだろ。だから俺も手伝ってやるんだよ」

『我もその意見には賛成だな』

銀龍は銀時の意見に賛成した。

「わ、わかりました」

ユ一ノは銀時と銀龍との言い合いでは勝てないと思ったのだ。

銀時はこうしてなのはの家に居候する事になった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、それでは銀八先生コーナーを始めます。アシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「はい、その内魔王になる高町なのはがアシスタントだ」

なのは「なりません！」

銀八「早速質問行くけど、一つしか来てないんだよね」

なのは「そうなんですか？」

銀八「ああ、と言う訳で始めるぞペンネーム『月光閃火』さんから質問

『ども…月光閃火^{げっこうせんか}という。

しかし…タグにもあったが、また新八をそう扱うか…（黒）。（そう言いながら、黒いオーラを放ちつつ右掌から紫焰を立ち上らせる
（汗）

輝刃「…閃火…とりあえず落ち着こう…（汗）。あ…さっそくだが質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・銀龍^{ヒト}に質問…銀龍って話にもあった通り『喋る刀』だが、やはり人間の姿にもなれるのか？

あゝ…確かに、そういうタイプの武器って大概何かしらの人化設定はありそうだもん…。次は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問…というか忠告ね？タグにもあった通り、『新八はロリコン』なんてあったけど…あんまり酷い扱いはしないですよ？（黒笑み&紫焰メラメラ（汗））

輝刃「…とりあえず、加減はしとけよ（汗）？俺も種族上言えた義理では無いが…（汗）。」「……」
月光閃火の言葉に黙り込んでいた。

銀八「まずは一つ目だが」

銀龍『我か？我は人の姿になる事は無理なのだ』

銀八「だそうです。二つ目の質問の答えをナナフシ」

ナナフシ「き……気を付けないと……」

ナナフシはガクガクとなっていた。

銀八「と言う訳で『月光閃火』さん。あまり脅したらダメだぞ」

なのは「質問は以上です」

銀八「それではまた次回」

第四訓：化け犬には気を付けよう（前書き）

ナナフシ「ミラクル∞が広まると良いなあ♪」

ミラクル∞「いい加減にしろオオオオオオ！」

ミラクル∞が木刀で襲いかかってきた。

ナナフシ「うゝん、これくらいなら大丈夫だよね！ロケラン！」
ドカーン！

ミラクル∞は黒こげになった。

銀時「『月光閃火』に殺されてもしらねえぞ」

ナナフシ「……やりすぎたか？」

銀龍「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ」

第四訓：化け犬には気を付けよう

なのは朝目覚めてユーノに挨拶をしてから、リビングに向かった。いつもより、騒がしい声が聞こえる。

何故なら……。

「おはようございます。銀さん」

「おう、おはよう」

銀時が居候仕始めたからだ。

銀龍は姿を消しているので気付かれていない。

銀時が居候した事により騒がしくなったのだ。

朝ご飯では……。

「てつめ、離しやがれ！これは俺のウィンナーだ！俺はコイツを生まれる前から目をつけてたんだぞ！！」

「ふざけるな！お前こそ離せ！」

「銀さん！お兄ちゃん喧嘩しないで！」

銀時と恭也はウィンナーを箸で引つ張り合う。

そして喧嘩する二人を宥めようとするなのは。

こんな風に騒がしくなったのだ。

*

なのは学校でユーノと念話をしていた。

ユーノは魔力が回復したらこのまま自分一人でジュエルシード探しすると言ったが、なのはも手伝うと言った。

ユーノは渋ったのだが、なのはは魔法が自分のやりたい事かもしれないと言いながら、ユーノを説得する。

その上で銀時ものりくらりとユーノを説得し、最終的にはユーノ

は折れた。
そしてこれからはなのはと銀時がジュエルシード探しを手伝うことになった。

*

なのはは放課後に町の神社に来ていた。ユーノも一緒である。

ジュエルシードの反応があったからだ。

そしてそこにはジュエルシードを取り込み、子犬から巨大な犬に変わった怪物がいた。

たまたま飼い主と散歩をしていた犬が落ちていたジュエルシードを取り込んでしまったのだ。

体は鎧のような黒く堅そうな皮膚で覆われ、目は四つになり、鋭そうなたをむき出していた。

「気をつけてなのは！ 現住生物を取り込んでいる！」

「どうなるの？」

「実態がある分、強い」

ユーノ目を細くしながら化け物になった犬を見ている。

これからは化け犬と呼ぼう。

「なのは！ レイジングハートの起動を！」

「起動つてどうやるんだっけ！？」

「えっ……！？」

なのはの言葉を聞いてユーノは呆けた声を出してしまう。

なのはが起動の仕方を忘れてしまったとは思っていなかったからだ。

ユーノはなのはの肩に乗って言う。

「ほら、“我使命受けし者”からの起動パスワードだよ！」

「あんな長い覚えてないよ！」

なのはとユーノがもたついていいると、化け犬が唸り声を上げてなの

はに向かつて駆け出す。

「じゃあもつかい言うから僕の言う言葉を繰り返して！」

「わ、分かったの！」

ユーノとなのははレイジングハートの起動に注意がいつていたので気が付かなかったが、化け犬は二人のすぐ前まで来ていた。

ユーノは化け犬が近づいて来ている事に気づき声を上げる。

「危ない！！」

「えっ！？」

ユーノはなのはに声を掛けてなのはが反応する時には既に間に合わず、化け犬はなのはに襲い掛かる直前だった。

なのははダメだと思い目を瞑った時……

ドカァ！

「グワァッ！」

と何かがぶつかる音がした。

なのははゆっくりと目を開けると、化け犬は自分の目の前から離れた所で呻きながら倒れ、自分の目の前には木刀を構えた銀時の背中があった。

「銀さん……」

なのははつい銀時の名前を呟いてしまった。

銀時はなのはの言葉を聞いて振り返る。

「おいおい、随分メンドーな事になってんじゃねえか」

銀時は愚痴を零しながら化け犬を横目で見る。

化け犬は銀時の攻撃が思った以上に重いらしく、まだ立ち上がれずふらついていた。

「あの、どうして此処に？」

ユーノは慌てていたので銀時を呼ばずに来たのだ。だから銀時がここに居る事を疑問に思った。

「ジャンプ探してたらたまたまお前達が神社に行くのが見えたんで

な」

「ジャンプ？」

『まあ、主の言った事は忘れてくれ』

ユーノが聞き慣れない言葉に首を傾げていると銀龍がそう言った。

銀時がジャンプを探していて、なかなか見つからず、探していた途中でなのはとユーノが神社に入っていくのが見えたので銀時は後を追って今の場面に遭遇している。

銀時がそう説明し終わると……。

「グルルルル！」

化け犬が怒りの形相で銀時をにらみついていた。

どうやら銀時に木刀でぶつ飛ばされたのが頭に來た様だ。

「おいおい。それにしても何だよアレ？ あの変なブヨブヨの化け物といい、コイツと良い、ジュエルシードってのはモンスター製造機ですかコノヤロー」

銀時がダルそうに化け犬を見ながら愚痴を零した。

「気をつけてください！ 昨日と思念体と違って現住生物を取り込んでいるから強くなっているはずです！」

ユーノがさっきなのはに言った忠告を銀時に言うが、銀時は「はい」と軽い返事をした後、木刀を肩に掛けながら化け犬に近づく。それを見たユーノは慌てて銀時に声を掛ける。

「ちよっ！ だから危ないですってば！」

ユーノも昨晚の戦いで銀時が思念体を圧倒していたのは知っていたが、今回の相手は現住生物を取り込み昨晚の思念体よりも強い。

銀時が銀龍のおかげで魔法を使えるのは知っているが、銀龍を出すすに向かっている。

魔法なしで銀時が肉弾戦で戦えるとは思わなかったからだ。

だが、ユーノの考えはすぐに覆された。

近づいて來た銀時を化け犬がこぞとばかりに爪で引き裂こうとするが、銀時はそれを簡単に木刀でいなしていく。

上からこようが、下からこようが、斜めからこようが全ての攻撃を

完璧に防御していた。

（す、凄い……！！）

ユーノは目を見開いて驚いていた。
肉弾戦だけではどうやったって限界があると思っていたが、自分の考えがまったく意味をなさない事を銀時の戦いを見て思い知った。
確かに今の戦いの様子は銀時が押されているように見えるが、それはまったくの逆。

銀時が最小限の動きで化け犬の攻撃を防いでいたのだ。
そして攻撃した手が木刀で弾かれた事でスキができた。
すかさず銀時が反撃の態勢に入った。

「おいたいも大概にイ——！」

銀時は木刀を振り上げ飛び上がる。

「しやがれエエエエエ！！！」

ズドン！！

重い一撃が化け犬の脳天にクリーンヒットした。

ドサツ！

化け犬は声も上げずに白目を剥いてゆっくり倒れた。

「はい終了」

銀時は腰に木刀を挿す。

「や、やったアアア——！」

なのはは銀時の勝利を見て喜び飛び上がった。

銀時が勝った事をつい自分のように喜ぶところは子供らしいと言え

るだろう。

『ユーノよ。主を甘く見てはいけないぞ』

「は、はい」

（僕は……彼の事を侮っていたのかもしれないな……）

ユーノはユーノで、思い返していた。

魔法の才能があるなのはこれから手伝ってもらおうと思っていたが、やはり銀時には極力手伝ってもらわないようにしようと思っていた。

それはユーノが純粋に銀時の事を気遣っていたからだ。

いくら腕に覚えがあつても魔法がなければ何もできない。さっきまでそう思っていた。

だが……銀時の戦いを見てその考えを改めた。

そして帰ったら改めて銀時にジユエルシード集めを手伝ってもらおうと思った。

「おい。倒したは良いんだけどよ、この後どうすんの？」

銀時は二人に歩いて近寄りながら聞く。

なのはとユーノも“あっ”と思い出し、ユーノがなのはに言う。

「なのは。さっきも言ったとおり、僕に続いて起動パスワードを言つて」

「うん」

なのははユーノ言葉に頷き、レイジングハートを握り締める。

（銀さんがあれだけ頑張ったんだから、私も……！）

——銀さんの役に立ちたい。

そんななのはの思いに反応したのか、レイジングハートが強く光を發した。

<Standby lady・Setup>

「えっ……？ レイジング、ハート？」

「これは……！」

レイジングハートから女性の声が聞こえ、なのはとユーノは驚いて

いた。

そして光が収まると杖の姿になったレイジングハート持ったなのは姿があつた。

「これって……」

なのははレイジングハートを見て呆然としてしまった。

「まさか起動パスワードなしで起動させたなんて……」

「なんだ？ 何かおかしい事でもあんのか？」

ユーノは今更ながらなのはの才能に驚いていた。

やはりなのはは自分よりも遥かに魔法の才能があると実感した。

銀時は二人の様子から何か問題があるのかと思ひ首を傾げる。

『主よ。聞くからにはパスワードがいるらしいのだ』

「なるほど。それなしで発動したからか」

銀時は銀龍の言つた事を聞いて理解した。

「なのは。次に防護服を」

「うん。レイジングハート、お願い」

<Barrier jacket>

そしてまた桃色の光になのはが包まれる。

そして光が収まると、白いバリアジャケットを身に着けたなのはがいた。

（あ、あの服のデザインってさっきの服だったんだな）

銀時はなのはのバリアジャケットがなのはの聖祥小学校の制服に似ていると気づく。

結構どうでも良い事に気づいた銀時なのであつた。

そしてその後、昨晚の思念体同様、桃色の紐で気絶している化け犬を縛り封印する。

なのはがジュエルシードを封印する横で、銀時とユーノは話をしていた。

「何で銀さんは銀龍を使わないんですか？ 自分にもリンカーコアがあるのはわかるでしょ」

「え？ そうなの？」

銀時はユーノの言葉に驚いていた。

「でなければ使えていませんよ」

「そうなのか……俺はてっきり銀龍が持っているのかと思ってた」ズテン！

ユーノは銀時の言葉にすっ転んでしまった。

『主の魔力を使って我は初めて魔法を使えるのだ』

「そうだったのか」

銀時は納得がいった様だ。

「で、話を元に戻しますけど」

「銀龍を使わない理由か？今はこいつだけでことが足りてんだよ」

銀時は木刀を握った。

「ま、たまに使うかもな」

銀時はそう言った。

「そうですか」

ユーノはそれを聞いて引いた。

銀龍の存在がドンドン気になりだしたユーノだった。

何故デバイスでもないのに持ち主の魔力を解き放てるのか……。

それが謎だった。

なのはが封印を終えたので、帰った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

銀龍
「銀龍だ」

銀八「刀がかよ！」

銀龍「気にするな。字くらいは読めるぞ」

銀八「そうか？なら、質問行こうか」

銀龍「まずはペンネーム」黒龍「さんからだ。」

「黒龍」では、早速質問にいきましょう」

1・ミラクル∞に質問。ロリコンに墮ちる予定だそうですね？　リカルナのはの世界には一生行かない方が良いんじゃないですか？

2. なのはに質問。こちらの小説のミラクル[∞]を見てどう思いますか？

3・ナナフシさんに質問。ナナフシさんはリリカルなのはのキャラであるクロノや、組織である管理局が嫌いですか？

新八「おいしいおいしい！！！！いい加減僕をミラクル∞言うの止めろ！！」『だそうだ。一つ目だがミラクル∞よ』

ミラクル∞「誰がミラクル∞じゃあああああ！後、黒龍！それは僕を出番なしにしろって言う意味かアアアア！」

ミラクル[∞]は思いつきり叫んだ。

銀八「哀れだなぱっつあん。二つ目の質問の答えをなのは」

なのは「最低だと思います」

銀八「こつちのなのはに嫌われてやんの。三つ目」

ナナフシ「僕はあんまりクロノは嫌いじゃありませんよ。時空管理局は……大きな組織には裏があるからあんまり好かないな……寧ろ、他の人の作品を見るとクソと思うから」

銀八「すんごい言いようだ……」と言う訳で『黒龍』さん廊下に立つてなさい」

銀龍『最後の質問だ。ペンネーム『支配者』さんからの質問だ』
『質問です』

この物語での無印編では銀時の味方キャラやフェイトの味方をしてくれる銀魂キャラはいないんですか？』だそうだぞ」

銀八「これネタバレにならないか？まあ、今の所はありません。雷雅達が支配者さんの所と言うジユド達みたいな感じですね……つまりは裏で糸を引いているような……銀時は見ていけばわかると思いますと言う訳で『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

銀龍『それではまた』

第四訓：化け犬には気を付けよう（後書き）

ナナフシ「もう……黒龍さんの所パクった様にしか見えない」
銀時「おいおい」

ナナフシ「とりあえず、次回はね……大丈夫かな……」

銀龍『それではまた次回』

第五訓：間違いは誰にでもある（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「おいおい」

ナナフシ「良いじゃん別に……………それに早くフェイト出さないと…
…」

銀時「思えばまだだったな」

ナナフシ「いや……………向こうに銀魂キャラ居ないからさ……………」

銀時「おいおい」

ナナフシ「砲撃が来る前に出さない……………」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

第五訓：間違いは誰にでもある

銀時ははなのはの父親である土郎が監督を務める翠屋JFCのサッカーの試合を成り行きで見っていた。まあ銀時はつまらなそうにしていたが。

アリサとすずかとはその時に挨拶をした。

銀時はその時思った。

アリサと神楽の声が同じだと気付いたのだ。

銀時が居る理由はなのはに誘われたからである。

銀時はメンドくさがっていたがなのはに「銀さんも一緒に行かないの？」（上目遣い＋涙目）で頼まれて渋々ついてきたのだ。それで今に至ると言う訳である。

*

そしてその夜、なのはと銀時、ユーノはビルの屋上に立っていた。ちょうど暴走したジュエルシードを封印したところである。

なのはとユーノ後ろには銀時が立っている。

なのはは、今とても後悔していた。

なぜならジュエルシードの気配に気づいていたのにそれ勘違いだと思ってしまったからである。

今町はジェルシードの暴走ので発生した被害で酷い有り様になって

いる。

「ごめんユーノくん私・・・ジェルシードの気配に気づいていたのに、それを勘違いだと思ってた」

なのはは、今にも泣きそうだった。

「なのは・・・」

ユーノはどんなのはに言葉を掛けて良いか分らないでいた。すると……。

「よぉ、なのは」

銀時はいつものダルそうな声でなのはに声を掛けた。

「・・・銀さん」

なのはは、泣きそうな顔で俯いていた。

こんな失敗をして、銀時の顔をまともに見れないでいた。

「別におまえが気に病む必要はねえ。だからそうやって自分を責めるんじゃないよ」

『そうだぞ。なのはよ』

「銀さん、銀龍さん・・・でも、これは全部私のせいで・・・」

なのはは、まだ俯いて辛そうにしていた。

場の空気がさらに重くなった感じがした。

「はぁー」

銀時は溜息をつきながら頭を掻いた。

なのはは、こんな事になったのは自分のせいだと言う考えが頭の中を巡っていた。

長い沈黙が続いた。

「いい加減にしろやアアアアアアア！」

突然、銀時が豹変して怒声を上げた。

鬼の形相になった銀時は、なのはの頭に拳骨を食らわせた。

「ッ！！！！」

なのはは、両手で頭を押さえて痛みに悶えた。

「ちょッ！？銀さん、何やってるんですか！！」

ユーノは、なのはないも悪くないのに銀時が怒ったことに声を荒げた
「フェレットもどきは黙ってる!!」

銀時の凄みある言葉にユーノは押し黙った。

「なのは、俺が怒ってんのは別にお前が失敗したからじゃねえ」

銀時は首を横に振る。

「ふえッ!？」

なのはは涙目になって頭を抑えながら銀時の顔を見る。

「そうやってお前がいつまでも後ろばっか向いているからだ」

「ッ!」

なのはは何かを気づいたような顔をする。

銀時の言う通り今の自分は自分を責めているだけで前を向こうとしていない。

銀時は坦々と語り続ける。

「確かに過去にあった事は消せやしねえ!。だからと言って、過去の過ちを振り返るなとも言わねえ!」

『主よ……』

銀時は空を見ながら何かを思い返す様に言う。

その顔がどこか寂しさを漂わせていた。

銀龍は銀時が何を思い出しているのかはわかっていた。

再び銀時はなのはに顔を向ける。

「だからそう言うもんを全部背負って前に進むんだ。なのは、おまえはどうしたい?」

なのはは、銀時の問いを受けて顔を俯かせる。

そして再び顔を上げる。

「私、ただ誰かに傷ついてほしくなくて、ユーノ君のお手伝いでジュエルシード集めをしようって決めました。けど、今は違います!

こんな失敗を起こさないためにも、皆を守るためにも、自分の意思でジュエルシード集めを続けます!」

なのはの顔には強い意思が籠っていた。

「そうか」

なのはの答えに満足だったのか銀時は微笑を浮かべながらなのはの頭を撫でる。

「けどな、なのは。お前はまだガキなんだからよ、もっと周りを頼れ。甘えていいんだよ。お前にはユーノだけじゃねえー、他にもお前を心配してくれる奴が、支えてくれる奴がいるんじゃないか？」

銀時はなのはを頭をゆつくりと撫でながら何かを諭すように言う。

「ま、お前がまた立ち止まった時には、いつでも俺がお前の背中を押してやるよ」

そう言って銀時はなのはの頭から手を離れた。

「銀さん……」

なのはは銀時に顔を向けた。

『我にも頼って良いぞ』

銀龍は姿を現してそう言った。

「もう一人で悩むんじゃないぞ。良いな？」

「はい！」

なのはは嬉しそうに頷く。

「銀さん、銀龍さん、本当にありがとう」

なのははその時、目を奪われそうなほど良い笑顔でお礼を言った。

ユーノはなのはの笑顔を見て少し顔を赤くしていた。

まあフェレットだから誰にもそんな変化なんて分らないけど。

なのはは顔を赤くしながら銀時を見ていた。

銀時はなのはへのフラグを強化したのだった。

*

そして時間は夜になる。

とあるビルの屋上にはそこに二人の人間と一匹の獣がいた。

一人は黒いマントなびかせ黒い斧のような杖を持った金髪の少女。

「ロストロギア……形状は青い宝石、一般名称はジュエルシード」
少女はそう呟いた。

「早く手に入れないと……母さんのためにも」

「ワオオオオオオオン！！！！」

そしてその声に答えるかのように金髪の少女の近くに控えていたオカミが夜の街に遠吠えを響かせた。

そして数瞬、その場にいたはずの一人と一匹の姿が消える。

少女——『フェイト・テスロツサ』は自分の大切な人のために目的の物を集める。

第五訓：間違いは誰にでもある（後書き）

ナナフシ「やっと……フェイト来た……」

銀時「殺されなくてよかったな」

ナナフシ「たぶん、フェイト視点も出てくるかも」

銀時「かもかよ!」

ナナフシ「後……見直したらユーザーのみになってた……これ解除した方が良いかな?」

銀時「好きにすれば?」

ナナフシ「だよね……解除しとくので感想待ってます」

銀龍『それでは次回は主となのはがフェイトと遭遇するぞ!』

第六訓：迅雷ってどれだけ速いの？（前書き）

ナナフシ「アハハハハハハハ！……！！！」

銀時「どうした！ナナフシ！？」

ミラクル∞「テスト……赤点取って追試になったそうですよ」

銀時「それやかよ！てか、何が落ちたんだよ！」

ナナフシ「食品学」

銀時「そんなやつあったか？」

ナナフシ「俺が通ってるのは調理師専門学校だよ」

銀時「マジかよ！？」

ナナフシ「本当だよ」

銀時「でも、お前高校生って！」

ナナフシ「三年制の調理師専門学校……つまり、卒業と同時に調理師免許と高校卒業資格が貰えるんだよ」

銀時「そうなのか……で、学科だけなのか？」

ナナフシ「アハハハハ！」

神楽「中華料理が落ちたらしいアル」

銀時「おい！」

ナナフシ「アハハハハハ！」

ミラクル∞「もう始めましょう」リリカル銀魂「魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀」始まります！」

ナナフシ「おっと、今回は銀時VS雷雅です！後、黒龍さんが考えてくれた技を一つ出しますので！」

銀時「おい！」

第六訓：迅雷ってどれだけ速いの？

翌日。

銀時ははなのはとなのはの兄の恭也そしてなのはの友達であるアリサと一緒に月村すずかの家に遊びに来ていた。

あ、銀龍は姿を消してるけど。

銀時が何故なのは達と一緒に居るかと言うとまたなのはに「銀さんも一緒に行かないの？」（涙目＋上目遣い）で誘ってきたので、渋々着いてきたのだ。

そして月村邸に来た銀時の第一声が……

「でか!？」

だった。

まあお金持ちの中のお金持ちである月村家の家はめちゃくちゃでかい。

さすがに一般庶民である銀時にとっては驚かずにはいられなかった。ついでに銀時の服装はいつも通りだが、木刀は竹刀袋に入れている。月村邸を見て呆然している銀時に恭也が声を掛ける

「おい、何しているんだ。置いて行くぞ」

銀時はその言葉を聞いて、なのは達の後を追った。

銀時達は月村邸の庭に来た。

銀時は庭にある椅子に座った後、恭也が美女と一緒にどこかに行くのが見えた。

「ん？ アイツと一緒にいるねーちゃん誰？」

「あつ、あの人はすずかちゃんのお姉さんの月村忍さんです」

「ちなみにあの二人付き合っているのよね」

「マジか？」

そして銀時は……。

『主やめろよ』

銀龍が姿を消したまま銀時の耳元で囁いた。

銀時は大人しくした。

とりあえず恭也の話はここまでにしてなのは達は紅茶を飲んだりお菓子を食べながら楽しそうに話していた。

銀時は話に参加していない。

銀時はこういうのにあまり参加しないのだ。

とりあえず銀時はお菓子食べながらなのは達の話の話を耳を傾ける程度に聞いていた。

（何か詰まんねえ）

銀時がそう思った時だった。

「キューキュー！」

さっきからネコに追われてたユーノが鳴き声を上げながら銀時の肩まで上った。

「うおッ!？」

突然ユーノが自分の肩に登って来た事に驚いた銀時は少しバランスを崩すがすぐに持ち直す。

そして自分の右肩に乗っているユーノを見ると、さっきから追いかけて来たネコを見下ろしながら少し怯えていた。

（なんつつか、コイツも苦労してんだな）

ちよっとユーノに同情した銀時であった。

その時、なのはは一瞬驚いたような顔をした。

【ユーノ君！】

なのはは念話でユーノに話し掛けた。

【うん。近くにジュエルシードがあるね】

どうやら二人はジュエルシードの気配を感じ取ったようだ。

ユーノは、銀時の肩から降りて森の中に走っていった。

アリサ達を巻き込まないためだ。

「ごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。ユーノ君どこかに行っちゃったみたいだから探してくるね」

そう言って、なのはは席を立つ。

「ユーノが？ 私たちも探すわよ？」

「ううん、大丈夫。すぐ見つかると思うから」
手を振りながらなのはが言う。

なのは達の様子に銀時は気付いた。もしかして二人がジュエルシードの反応を捉らえたと思ったのである。

「じゃあ、俺も行くか」

銀時が頭を掻きながら立った。

銀時はなのはの後を追った。

*

なのは、ユーノ、銀時は森の中でジュエルシードを探していた。

なのはバリジャケットを着て、手にはデバイスの『レイジングハート』を持ってる。

「なのは、こちら辺にあるのか？」

「そのハズなんですけど……」

すると大きな足音のような音が聞こえた。

『この足音は？』

銀時達は辺りを見回す。

「アレ！」

ユーノが何かを見つけて前足で見つけたモノを指す。

『！！！！』

ユーノが指したモノを見て皆驚いた。

「にゃ〜」

皆の目の前に大きな大きな猫がいたのだ。

どれくらいでかいかと言うと体長八メートルはありそうなほどだ。

『でかいな』

銀龍は呑気に言った。

「えっと……これは……」

「多分あの子の『大きくなりたい』って願いが叶えられた……んだと思う」

大きな猫を見ながら、なのはとユーノは苦笑いした。

「いやア、でかいなア」

銀時は大きな猫を見ながら言った。

後、ユーノが言った事を聞いて思った。

（ああ、ジュエルシードってそんな感じか）

銀時は巨大化した猫を見ながらジュエルシードの力を認識した。

例えて言うならいい加減なドラゴ○ボールだと思った。

「でも、あのままじゃ危険だから早く封印しないと」

ユーノは『広域結界』と言う辺りの空間と時間軸をずらす魔法を使った。

「そ……そうだね。流石にあのままじゃ、すずかちゃん困っちゃうだろうし……」

そう言うてなのはレイジングハートを構えた。

銀時は頭を掻きながらやる事を決める。

「よし……帰るか」

『そうだな』

銀時と銀龍はそう言った。

「って待つてくださいよ！」

ユーノは銀時を止めた。

「銀さん何帰ろうとしてんですか！？ 封印するんでしょう封印！ ！手伝つてくれるって言ったじゃないですか！？」

「あん？ あんなでかい奴はウルト○マンに任せとけば良いんだよ」
「ウル○ラマン！？ ウルトラ○ンってなんですか！？」

銀時とユーノがそうやって揉めていると、背後から金色の光が通過して猫に直撃した。

「にゃ〜〜！」

猫は悲鳴を上げてよろけた。

「だ、誰！？」

全員が光が発射された方へ振り返った。
そこには金髪のツインテールで黒い服を着た少女——フェイトが空中にたたずんでいた。

そして、フェイトはなのは達を見る。

（私と同じ魔導士……）

フェイトはなのはを見ながらそう思った。

（でも……母さんのためにも、ジュエルシードは譲れない）

フェイトは、なのは達の方へ飛んでいった。

*

「あれは……まさか僕と同じ世界から来た魔導師！？」

フェイトを見てユーノが驚く。

『と言う事はジュエルシード狙いだな。主よ』

「はいはい、わーったよ」

銀時は竹刀袋から木刀を取り出した。

フェイトは木の上に着地した。

なのは達は木の上に立ってるフェイトを見つめた。

フェイトの持つバルディッシュは鎌のような姿の『サイズフォーム』になる。

「申し訳ないけど、頂いていきます」

フェイトはバルディッシュを構えて、なのはに襲い掛かる。

「なのは！」

ユーノが叫ぶ。

バルディッシュの刃がなのはに迫る。

ガキン！！

「！！」

だがバルディッシュの刃がなのはに届くことはなかった。なのはに当たる直前、刃は一本の木刀によって止められた。攻撃を止められた事にフェイトは驚いた。

「銀さん！！」

なのははフェイトの攻撃を止めた人物の名前を叫ぶ。

銀時はそのまま木刀を横薙ぎ振る。

「くっ！」

フェイトは銀時の力に押され後退し、体勢を整えて少し地面に近い辺りで体を浮かせる。

フェイトを後退させた後、銀時は肩に木刀を掛けながらフェイトに言葉を掛ける。

「おいおい、ガキが随分物騒なモン振り回してんじゃねえか」

軽口叩く銀時をフェイトは睨みながら質問する。

「……何者ですか？」

「俺か？ 俺は坂田銀時です。趣味は当分摂取。キャプテン志望してまゝす」

銀時はいつものダルそうな声で言った。

「それでお前は？ お前も何者なんだよ」

「……」

名乗らなかった。

「おいおい、自己紹介も出来ないのか？ 今の世の中ア、自己紹介くらい出来ないと友達も禄に出来ないぞ！ って何処かの誰かさんが言っていました！！」

ズーン！

銀時の最後の言葉にその場に居た全員がズッコケた。

「何処かの誰かさんって誰ですか！？」

「何処かの誰かさんだよ！」

ユーノは銀時にツツコンだが、銀時の答えは変わらなかった。

「フェイト…… フェイト・テストロッサ」

フェイトは銀時達に名乗った。その後……。

「フェイトー!!」

オレンジ色のいん「狼だ!」狼……アルフがやって来た。

「大丈夫かい!？」

「うん」

フェイトはそう言った後地上にいる銀時となのはを見る。

アルフもつられて銀時達を見る。

「他の魔導師かい？」

「うん」

アルフの問いにフェイトは答えた。

「よし! あたしが連中の相手をするから、その隙にフェイトはジ

ュエルシードを回収して!」

「でもアルフ……」

「大丈夫。あたしはフェイトの使い魔だよ? 心配いらないつて」

「……うん。お願いね」

アルフの言葉を聞いてフェイトは微笑んで、巨大猫の方へ向かった。

「マズイ! ジュエルシードを封印するつもりだ! 止めないと!

!」

ユーノが叫んだ後、フェイトを追いかけてようとする。

「そうはさせないよ!!」

だがその時空からアルフがユーノに迫る。

「ユーノ君!」

なのはがユーノに向かって走る。

「大丈夫だよ、なのは!」

ユーノは防御の障壁を張ってアルフの攻撃を防いだ。

それを見て安心したなのはは足を止めて安堵する。

「ちっ!」

舌打ちした後アルフは一旦、ユーノから離れる。

「なのは! ジュエルシードを!」

「う……うん!」

ユーノに言われて、なのはが走り出す。

「させないって言っただろ！」

アルフは素早く動いてなのはの背後に回り襲い掛かる。

「なのは！！！」

ユーノが叫んで、後ろを振り向いてアルフの攻撃に気づいたなのはは咄嗟に目を瞑ってしまふ。

その時。

ガキン！

「お前……！」

アルフは声を上げ、目の前で自分の爪での攻撃を木刀の刀身で防いでいる銀時を睨みつける。

「銀さん……！」

銀時に助けられたなのはは嬉しそうな顔で銀時の名前を叫ぶ。

「わかりが、そう簡単に傷つけさせねえぜ」

ニヤリと微笑を浮かべてアルフの攻撃を防いでいる銀時。

銀時はそのまま思いつきり木刀を振った。

アルフは後ろに飛ばされ、着地した。

銀時とアルフが対峙していると……

「……！」

銀時は何かに気付いた様に後ろに飛んだ。

ドスッ！

何かが地面に刺さる音がした。

銀時が立っていた所を見ると薙刀が刺さっていた。

「これは……！」

銀時は驚いた。

この薙刀は……。

「よオ、銀の兄貴」

雷雅の薙刀だった。

雷雅が薙刀がある所に姿を現したのだ。

「あんた誰だい……！」

アルフは雷雅に言った。

雷雅はそれを聞いて振り返った。
ソクッ。

雷雅の目を見た途端逆らつてはいけないと思った。

「何…… お前等の手伝いをされる様に雇われた者よ」

雷雅は不気味な笑みを浮かべた。

「銀の兄貴は俺に任せな」

アルフはそれを聞いて頷いた。

「なのは、ユーノ……ここは俺に任せろ」

「わかりました」

なのはとユーノは一度会った事がある雷雅が危険だとわかっていた。
そのまま銀時と雷雅だけが残った。

「さア……勝負と行こうぜ……銀の兄貴」

「雷雅！」

銀時と雷雅が睨み合い……同時に動いた。

雷雅が突きを放ってきた。

銀時はそれを右に交わした。

雷雅はそのまま右に薙刀を振った。銀時はそれを木刀で防ぐ。
そのまま銀時は雷雅の腹に蹴りを入れ、蹴り飛ばした。

雷雅はすぐさま態勢を取り直して、銀時を見た。

「銀龍を使う気はねえか」

「当たり前だ」

雷雅の問いに銀時は答えた。

「なら……本気で行く」

雷雅がニヤリと笑うと目の前から姿を消した。

『主！出たぞ！』

「わかつてらア！」

雷雅の異名は『迅雷』……その名の通り、素早いのだ。

素早さで相手を翻弄し、そのままドンドン斬っていくのだ。

銀時は雷雅が何処に行ったか辺りを見回しながら一生懸命探してい

る。

すると……。

ブシュッ！

銀時の体に切れ目が入った。

それが始まりの様にドンドン銀時の体に切れ目が入っていく。

「ククク、銀の兄貴……俺を捕らえられるかな？」

雷雅が銀時にそう言った……と同時に木刀を弾かれた。

木刀は地面に落ちた。

取りに行こうとするが……雷雅が行かせない。

「ちっ！」

「銀の兄貴……得物がないぜ？」

雷雅の姿は見えないがきつと笑っているであろう。

銀時は銀龍を取り出した。

「ククク、銀の兄貴！勝負だ！」

雷雅はまだ連続で銀時に襲いかかる。

銀時の体にドンドン切れ目が入る。

そして……。

「オラア！」

雷雅が上に現れて、突きを放った。

銀時はそれに反応して、後ろに飛んで避けた。

「なっ！！！」

雷雅は驚いていた。

自分の攻撃が避けられたのだから。

銀時はそのまま白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧を纏った。

そして、銀龍を鞘にしまった。

「やべえな」

雷雅は態勢をまだ整えていなかった。

「喰らえ」

銀時が一瞬にして雷雅に近づいた。

すると……。

ズババババババババ！

雷雅の体に斬った後が出来る。

銀時は雷雅に近づいた時に斬撃を浴びせたのだ。
つまりは強力な居合い切りを放ったのだ。

「瞬銀……」

銀時はそう呟いた。

雷雅はそのまま地面に倒れたがまた立ち上がった。

「まだ立ち上がれるのか」

銀龍は驚いていた。

「ハアハア……今回はここまでだ……またな」

雷雅は姿を消した。

「主よ。なのはの元へ向かおう」

「おう」

銀時はなのはの元へ走っていった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、今回も質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

ユーノ「アシスタントのユーノ・スクライアです」

銀八「はい、それじゃ張り切って行こうか」

ユーノ「まずはペンネーム『月光閃火』さんからの質問

『1・雷雅（名前：合っているだろうか？（汗）に質問：銀時の『甘党』のように食べ物の好みのこだわりってあるのか？

あゝ…確かに、それは気になるかも…。桂の兄ちゃんも大の『そば好き』だし。次は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問…というか、この前の質問の続きだ…。第四訓の前書きでやり過ぎたな？（黒笑）…全身煤まみれ決定♪（そいうって、漆黒笑みを浮かべながら右掌から立ち上らせた紫焰でナナフシの全身を煤まみれにする）

輝刃「あゝあゝ…だから言わんこっちゃない…（呆）。あと、閃火は新八を蔑むような事柄も嫌悪感を抱くからな。」…って作者大丈夫なの！？」

銀八「ナナフシなら」

ナナフシ「ぎゃあああああああ！！！！！」
ナナフシの断末魔が聞こえた。

ユーノ「……」
ユーノはナナフシを哀れな目で見ていた。

銀八「で、雷雅どうなんだ？」

雷雅「特にねえな。食のこだわりなんて……」

銀八「らしいです。と言う訳で『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

ユーノ「次です。ペンネーム『黒龍』さんからの質問です

『黒龍「酷い意味の納得のされ方だ！！」で、では、質問します」

1・ミラクル∞に質問。ユーノが“あなたのツツコミより僕のツツコミの方が冴えている”と言ってましたが、どうしますか？

2・なのはに質問。ミラクル∞が“なのはちゃん萌えエエエエエエエエエエ！！”とか叫んでましたけど、どう思いますか？

3・銀さんに質問。結婚するのならなのはとフェイトのどっちが良いですか？

新八「お前は僕を虐め過ぎだろうがああーーーー！！！！！！」

『そんな事言ってませんよオオオオオオ！？』

ユーノは一つ目の質問にツツコンだ。

ミラクル∞「僕のツツコミより冴えているだとオオオオオオオオ！勝
負しろオ！」

ユーノ「え！？だから言つて……あああああああ！」

ユーノはミラクル∞に連れて行かれた。

銀八「……二つ目だが」

なのは「……」

なのはは黙り込んだまま、黒龍さんの所の方角にレイジングハートを向けた。

なのは「デイベインバスター！！」

と、黒龍さんの新八に放った。
まあ、こっちでは新八はまだだしね。

銀八「放っちゃったよ！最後は却下で！」

銀八は言うが……聞いてしまったなのはが。

なのは「銀さん……」（涙目＋上目遣い）
で、銀時を見ていた。

銀時「これは……言えない」

銀時はさすがに言えなかった。

銀八「むかつく！と言う訳で『黒龍』！廊下に立っている！」

銀八は黒龍さんに八つ当たりした。

ユーノ「やっと解放された」

ユーノが新八から解放されて帰ってきた。

銀八「次行くぞ」

ユーノ「はい。ペンネーム『黒神』さんからの質問
『質問します。』

銀時へ

『リリカル銀魂strickers』攘夷戦争』に関する質問を2
つ。

その1 自分の専用デバイス『ブレイシルバー』でのバリアジャケツトに関する感想を。(黒笑)

その2 桂の重要人物扱い、神楽とエリオの関係、九兵衛のキャラ崩壊、山崎の彼女持ちなど大抵のキャラクターは原作とは程遠くなりましたがそのご感想を。

『銀魂王デュエルモンスターズSD』に関する質問を1

貴方はここでは決闘者^{デュエリスト}として覚醒しており、使用デッキは白のイメージとして『青眼の白龍^{ブルーアイズ・ホワイトドラゴン}』を使いこなします。

そんな自分の決闘者としての感想は?『銀さん、お願いします』

銀時「一つ目だが、おいしいおいしい!これ完全にコスプレじゃねえか!?何でブレイ。ルーのラグナの服なんだアアアアア!武器も武器だし!」

銀時は完全にコスプレに怒っていた。

銀時「二つ目だけど、ヅラの重要人物として扱うとはなア……神楽とエリオは良いと思うぜ別に。一番驚いてんのが、九兵衛のキャラ崩壊とジミーの彼女持ちだわ!特に九兵衛はもう誰!?!」

銀時は九兵衛のキャラ崩壊に驚いていた。

銀時「最後だが、良いんじゃないか?見た限りスゲー使いこなしてるし。俺も使えるんじゃないか……あっちの俺みたいに」

銀八「と言う訳で『黒神』さん廊下に立ってなさい」

ユーノ「最後です。ペンネーム『獄黒』さんからの質問

『質問』

総悟と神楽と銀時とトシに
にじファンでは、神楽と総悟の恋愛小説があります。どう思います
か。』それでは指定の四人お願いします」

沖田「誰がチャイナなんかと！」

神楽「それはこっちのセリファル！」

沖田と神楽は喧嘩を始めた。

銀時「神楽と総一郎君がなア」

沖田「総悟です。旦那」

喧嘩をしながら銀時に間違いを指摘した。

土方「チャイナと総悟がか……ブフツ」

土方は妄想しただけで笑ってしまった。

沖田「覚えとけ、土方コノヤロー!!」

沖田は青筋を浮かべながら土方に怒鳴った。

銀八「ハアイ、と言う訳で『獄黒』さん廊下に立ってなさい」

ユーノ「質問は以上です」

銀八「それではまたア」

第六訓：迅雷ってどれだけ速いの？（後書き）

ナナフシ「さすがに長すぎた」

銀時「だろうな」

ナナフシ「雷雅は相変わらず速いねエ」

銀時「それがあいつの戦闘スタイルだからな」

ナナフシ「思った。黒神さんの所のスバルの刹那の瞬間移動と雷雅のスピード……どっちが速いんだろう？」

銀時「さア」

ナナフシ「もし、刹那の瞬間移動が地雷亜並み、もしくはそれ以上だったら雷雅より速いね」

銀時「雷雅は地雷亜の次かよ」

ナナフシ「まあね。それではまた次回！」

瞬銀

シルバー・オブ・アーマー

白銀の鎧を纏い、身体能力が上がった事で使える技

刀を鞘に納め、一瞬にして相手に近づき相手にいくつもの斬撃を浴びせる技。

簡単に言えば、強力な居合い切りである。

第七訓：温泉では心と身を癒そう（前書き）

ナナフシ「今回はまあ……なんて言えば良いんだろうか……」
銀時「おい！」

ナナフシ「とりあえずなのはお願い」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

第七訓：温泉では心と身を癒そう

銀時がなのはの所に向かう途中でフェイト達が飛んで行くのが見えた。

銀時がそのまま見ていると、

「銀さん！」

「なのは」

バリアジャケット姿のなのはが飛んでやって来た。

そして銀時の近くに降り立ったなのはは申し訳なさそうな顔で銀時に謝る。

「ごめんなさい銀さん！ ジュエルシードあの子に取られちゃったの！」

なのはは巨大猫の所に付いた時には既に黒い魔導師にジュエルシードを取られていたと銀時に説明した。

「銀さんに任されたのに、何も出来なかったの……」

なのはは悲しそうな顔で俯いていた。

銀時が体を張って自分をジュエルシードの元まで導いてくれたのに対し、自分は何も出来なかった事が悔しくてなにより悲しかった。落ち込んでいるなのはの頭に銀時は手を置く。

それに気づいたなのははゆっくりと顔を上げる。

「ま、しゃあねえよ。取られたんなら取り返せば良いだけの話だ。そう自分を責めんじゃねえよ」

銀時はそう言ってなのはの頭をゆっくりと撫でた。

「銀さん……」

なのはは銀時に慰められた事でつい嬉しくなり涙を流しそうになるが、すぐに笑顔を作って言っ。

「うん！」

なのはは今度あの魔導師に遭ったら銀時のためにも次は頑張ろうと思った。

＊

翌日。

銀時は高町家と一緒に海鳴温泉来ている。

ちなみにアリサは執事の鮫島とすずかは姉の月村忍と一緒に来ている。

何故銀時達と一緒にいるかというと、なのはの親である土郎や桃子に誘われて一緒に温泉に行く事になったのだ。

銀時としても温泉と言う心体がリフレッシュできる上に美味しい料理が食べられると思ったのですぐに着いて行くと言った。

そして女湯ではなのは達が温泉に入っていた。

そして、なのはの腕の中には、

「キューキュー！」

^{オス}男のフェレットであるユーノが鳴きながら暴れていた。

顔も赤くなっている。

「ユーノったら、初めての温泉でそんなにはしゃいじゃって♪」

「可愛いね」

一緒に入っているアリサとすずかは勘違いしながらユーノに触れる。

（銀さん！助けてー！！）

ユーノは念話で隣の男湯に入っているであろう銀時に助けを求めた。だが、魔導師でない彼に念話が届くことはなかった。

＊

「良い湯だね」

「そうだな」

銀時と士郎は頭に畳んだタオルを乗せて気持ち良さそうに温泉に浸かっていた。

ユ一ノは届くはずのない念話を銀時にずっと送っていた。

*

温泉を上がった後、なのはは銀時にアルフと会った事を話した。

「マジでか？だってあれ……犬じゃなかったか？」

銀時はアルフの事を犬と言った。

狼なのにね。

なのははそのままアルフが脅してきた事も話した。

「それでやめんのか？」

銀時はなのはに訪ねた、

「やめません。誰かが傷つくなんて嫌だから……」

なのはは銀時にそう言った。

銀時はフツと微笑みながらなのはの頭を撫でた。

なのはは顔を赤くしながら笑っていた。

銀時はなのはを撫でるのをやめて立ち上がった。

「何処に行くんですか？」

なのはは銀時に訪ねた。

「ちよつくら出掛けてくらア」

銀時はそう言う外に出て行った。

*

銀時は旅館の周りを歩いていた。旅館の周りは森に囲まれていて、鳥の鳴き声などが聞こえてくる。

そんな森の中で銀時は探していた人物を見つけた。

木の上にフェイトが座っていた。

（やっぱな）

銀時はアルフが居るのならフェイトも居るのではないかと思い探していたのだ。

「おーい」

「！！」

銀時の声に驚きフェイトは『パルディツシュ』を取り出した。

フェイトは銀時を睨みながら警戒している。

「いや、別に戦いに来た訳じゃねえから」

銀時はそう言うがフェイトは警戒を解かない

「坂田銀時……何か用？」

フェイトは警戒しながら言う。

「銀時で構わないぜ」

銀時はそう答える。

「それじゃ、銀時……何か用？」

もう一度銀時に言った。

「何……たまたま見つけたただだよ」

銀時はそう言った。

「そう……」

フェイトはまだ銀時を睨んでいる。

「なあ、フェイト、お前は何でジュエルシードを集めてんだ？」

「それは言えない」

フェイトは銀時の問いを断った。

「どうしてもか？」

「どうしても」

銀時がもう一度問うがフェイトの答えは変わらなかった。

「まあ、それなら良いや」

銀時は旅館に戻ろうとする。

「銀時……何しに来たの？」

フェイトの言葉に銀時は振り返った。

「だから言っただろ？ たまたま見つけたただけだって」

銀時はそう言った。

フェイトは思った。

敵の魔導士の味方である銀時だが、何故か信頼が出来る気がする…

…。

フェイトは考えて口を開いた。

「銀時に私がジュエルシードを集めてる理由を言っ」

銀時はそれを聞いて止まり、フェイトは銀時に近づいた。

「私がジュエルシードを集めている理由は母さんの為なんだ」

「お前の母ちゃんの為に？」

銀時はフェイトの言葉に首を傾げた。

「母さんがジュエルシードを必要としているの。私はそれを集める様に言われたの」

「ジュエルシードは何に使うんだよ？」

銀時はフェイトに訪ねた。

「わからない。集めろって言われたただけだから」

フェイトは銀時にそう言った。

「そうかい。これはなのはに言わないで置いてやるよ」

銀時はフェイトの頭を撫でながら言った。

フェイトは顔を赤くしながらくすぐったそうにしていた。

「ま、お前はガキなんだからちつとは周りを頼れよ。アルフって言う最高のパートナーも居るじゃねえか」

「うん」

「それに……俺はなのはの味方だからボンボン助ける事は出来ねえがお前が危なかったら助けてやるよ」

「え！？」

フェイトは銀時の言葉に驚いた。

「でも、それじゃあ」

「だから言つたろ？俺はなのはの味方だからお前をそんなに助ける事は出来ねえがって……でも、お前が困っていたら助けてやるからよ」

銀時はそれだけを言うのと旅館に戻っていった。

フェイトは顔を赤くしながら銀時の背中を見送った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！！」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

フェイト「フェイト・テストロッサです」

銀八「それじゃあ質問行こうか」

フェイト「まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』では、質問します」

1・ミラクル∞に質問。なのはがちみの事を好きだと言っていました
がどうしますか？ニヤ（・・）ニヤ

2・なのはに質問。なんでも銀さんがあなたと結婚したいと言っていますが、どうしますか？

3・銀龍に質問。あなたが一番苦手な人は誰ですか？』まずはミラクル∞」

ミラクル∞「フェイトちゃんまで！？それよりも黒龍！それ本当！？」

なのは「そんな事言っていないよおおおおお！」

ミラクル∞「なのはちゃアアアアアん！」

ミラクル∞なのはに向かって走り出した。

なのは「にゃあああああああああ！」

ミラクル∞「ぎゃあああああああああ！」

なのははミラクル∞にデイベインバスターを撃ち込んだ。

なのは「黒龍さん！嘘をつかないでえええええええええ！」

なのはは黒龍さんに向けてスターライトブレイカーを撃った。

銀八「おい！二つ目だが」

なのは「本当ですか銀さん！！！」

銀時「んな事言ってねえよ！黒龍の嘘を信じるんじゃない！それに子供じゃ無理だろ！！！」

なのは「それじゃ大人になったら良いんですよね！！！」

銀時「そう言う問題じゃねえ！！！」

なのはと銀時はそんなやりとりをしていた。

フエイトはそれを頬を膨らませて面白くなさそうに見ていた。

銀時「要らねえ嘘を吐くんじゃねええええええええ！」

銀時は怒って銀龍で魔力の斬撃を黒龍さんに向かって放った。

銀八「何かむかつく！三つ目だが銀龍」

銀龍「そうだな……変わり果てた高杉だな……」

銀八「と言う訳で『黒龍』さんそつちにスターライトブレイカーと魔力の斬撃が向かいましたんで気を付けてください」

フエイト「次行きます。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問

「輝刃「…俺もたまに狼の姿になるが、よく『犬』扱いされる事が多いな…（汗）。まあ…子供によく懐かれるから悪くはないが…。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1. ユーノに質問…ぶっちゃけ言つて、変身魔法で『フェレット』以外になれるか？ちなみに、俺は『ニホンオオカミ』をオススメするぞ？

一緒に寄り添って寝るのか？家族みたいに……。次は俺からだ。

2. ナナフシさんに質問…何かこの小説読んでオリキャラの設定案が沸々と湧き上がるのだが、投稿してもいいか？あと、この前の煤まみれの刑だが…一応ヤケドにならないように煤まみれにさせたからな…。

輝刃「…後半の質問、完全にフォローだな…（汗）。」
「二つ目だ
けど本当に大丈夫なのナナフシ!？」

ナナフシ「ヤケドはありませんけど煤まみれになりました……オリキャラですが、投稿しても構いませんよ。オリキャラを見て使うか使わないか決めるので」

銀八「先に二つ目を答えたよ！で、ユーノどうなんだ？」

ユーノ「うーん、たぶんフェレットにしかねません」

銀八「まあ、原作ではフェレットだからな。と言う訳で『月光閃火』さん廊下に立ってなさい」

フェイト「次です。ペンネーム『支配者』さんからの質問

『さあ、質問行きましよ

雷雅へ

神速剣術の剣心を如何思いますか？

銀さんへ

今回の格好ってコスプレになるんじゃないんですか？つまりコスプレマニアなんですね。

ミラクル∞さんへ

地獄汁を送りますから誰かに飲ませて遊んで下さい。て言うか全員に飲ませてほしい』って三つ目恐いんですけそオオオオオ！」
フェイトは三つ目を見て驚いた。

ミラクル∞「ふははははははは！今までの恨みいいいいいいいい！」

銀八「作者ガード」

ナナフシ「え？ぶびやあああああああ！」

ミラクル ∞ 「……まあ満足ですね」
ミラクル ∞ はい、いつもナナフシに苛められているので満足して去っていった。

フェイト「ひ、一つ目だけど」

雷雅「あの剣術はスゲーなア……ククク、一度手合わせを願いてえなア……ククク」

銀八「本当に戦鬪狂だな！！」

フェイト「二つ目の答えて銀時」

銀時「なつてたまるかアアアアア！黒神と真王の所になつてるけどここではなつてたまるかアアアアア！」

ナナフシ「デバイスが手に入ったらなるかも」

銀時「やめろおおおおお！」

銀八「と言う訳で『支配者』さん廊下に立ってなさい」

フェイト「最後の質問です。ペンネーム『獄黒』さんからの質問

『はあくい、またまた質問おくらせていきまゝす。では、

・ナナフシさんへ、また、コラボするんですか？（コラボするんだ
ったらさつさと言って、断られて、玉砕して、落ち込んでろ。）

あつ、ちなみに私ナナフシさんけっこうすきですよ。（いじりがい
ありそうだから。）『ナナフシ可愛そう』

銀八「一つ目だがコラボなんてしてねえぞ？それにあいつは前向き
だから落ち込みもしねえぞ。逆に「あ、来ねえや！」ってぐらいだ
からな。後、限度を考えろよ。幾ら何でもナナフシは怒りだす時が
あるからな。これ見て結構心痛めたらしいぜ。あいつどっちかって
言つとSだから」

フェイト「ナナフシSだったんだ」

銀八「と言う訳で『獄黒』さん限度を考えて質問を送れよ」

フェイト「それではまた次回」

第七訓：温泉では心と身を癒そう（後書き）

ナナフシ「銀さんがフェイトにもフラグを立てた〜」

銀時「お前がやっただろ！」

ナナフシ「まあね。それではまた次回」

第八訓：子供は夜更かしをしてはいけません！（前書き）

ナナフシ「今回はおまけ2を載せます」

銀時「投稿されたキャラクターを載せるんだよな」

ナナフシ「はい！と言う訳でフェイト！お願い！」

フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始
まります」

第八訓：子供は夜更かしをしてはいけません！

外は夜であり、その闇に一つの月が光っていた。
そして影は三つある。

銀時となのはとユーノである。なのはは足に桃色の羽を生やして飛びながらある場所に向かっている。

その向かっている場所とは旅館の近くにある森の中だ。

何故ならそこにジュエルシードの気配を感じたからだ。

森の中にある橋が架かった池には既にジェルシードを封印し終えたフェイトとアルフとがいた。

「これで、二つ目……」

「順調に集まってるねフェイト」

封印をし終えて安堵の息を漏らすフェイトにアルフは笑顔で賞賛する。

アルフとしてもこの調子ならすぐに全部のジュエルシードが集められると思った。

ただ、あの白い魔導師じまものがいなければ話だが。

フェイトが丁度封印を終えた時だった。

「あ…あれって！」

銀時となのは、ユーノがやって来た。

「おいおい、ガキがこんな時間まで起きてちゃダメだろうが」

「銀時……」

フェイトは銀時を見た。

自分は銀時とは戦いたくない……。

フェイトはそう思った。

（戦いたくない……戦おうとしたら……考えるだけで胸が苦しくなる）

フェイトは困った表情を浮かべた。

「フェイトどうしたんだい？」

アルフがフェイトに訪ねた。

「うん、なんでもない」

フェイトはアルフにそれだけを言った。

「それを・・ジュエルシードをどうする気だ！？それは危険な代物なんだ！」

ユーノがフェイト達に向かって叫んだ。

「さあね。答える理由が見当たらないよ。それにあたし親切に言っただよ？良い子にしないでないとガブツと行くよって・・・」

アルフは目をギロリと光らせた。

「いやいや、それは親切とは言わねえ……」

銀時が言っている時だった。

アルフが人から狼に変わったのだ。

「おわあああああ！」

銀時はそれに驚いて尻餅をついた。

「ひひひひひ、人が犬になった！！」

「あたしは狼だ！」

銀時の言葉にアルフは叫んだ。

「犬も狼も同じだろ」

「違う！！」

アルフは銀時に怒っていた。

「やっぱり彼女は使い魔だったか」

ユーノは狼になったアルフを見ながら言った。

「使い魔？」

なのはは聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「そう。あたしはこの子に造って貰った魔法生命。主の魔力を命とする代わりにその命と力の全てを賭けて護るのさ」

アルフが自分について説明した。

「フェイト……なのはだってお前が悪い奴じゃないってわかってんだ」

「そうだよ。だから私達が分かり合える事だって！」

「それとこれとは話はが別なんだよ！」

「っ！？」

フェイトが肯定の意を見せた事でなのはは声音を強くしながら必死にフェイトと分かり合おうと試みるが、なのはの言葉をアルフが声を上げて遮る。

「あんた等二人の言うとおりアタシはとにかくフェイトは良い子だよ？ でもね、だからと言ってアタシ達とあんた達が分かり合えるって理由にはならないんだよ！！」

「それに……私達はジュエルシードを集めなきゃいけない。それは貴女も同じ事。だったら私達はジュエルシードを求めて争う敵同士って事になる」

「だから！ そんな勝手に決めない為に話し合いって必要なんだと思うー！！」

（やつぱ母ちゃんの為か……）

銀時はそう思った。

フェイトの言葉に、なのはは声を大きくして言った。

なのはは必死にフェイトと分かり合おうと言葉を投げ掛けるが、フェイトはそれを受け付けないかのように目を閉じた。

「言葉だけじゃ……何も変わらない……伝わらない！」

フェイトとなのはの空中戦が始まる。

そう言ってフェイトは目を開く。

バルディッシュを構えてフェイトは『ソニックムーブ』でなのはの背後に高速移動して、バルディッシュを死神の鎌のような形にした『サイズフォーム』に変形させて金色の刃でなのはを斬ろうとする。

「くっ！」

<Flier fin>

なのはは足から翼の様なものを展開し、空に舞い上がってフェイトの初撃をかわした。

「けど、だからって！」

「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ」

なのはの言葉にまったく聞く耳を立てないフェイトは、なのはを追って空を飛ぶ。

「なのは！」

まだ魔導師として未熟なのはではフェイトに苦戦を強いられるとユーノは考えた。

それに純粹に心配もしている。

ユーノは慌ててなのはを援護しようとするが、ユーノの前に一つの影が立ちはだかる。

「あんたの相手はアタシだよ！」

牙を見せながら威嚇するアルフが居た。

「おいおい」

「銀さん！」

「え？何？なのはとフェイトの所に行けっか？行けっか！？」

「お願いします！」

「無理だよオ。俺空飛べないし」

「それにあんたもあたしが相手だよ」

『まったく……主よ……空ぐらい飛べるだろうに』

銀龍が姿を現した。

「刀が喋ってる……！」

アルフは驚いた。

「ええ？でも行くのメンドーだからなア」

銀時が愚痴を言う。

「銀さんアナタ飛べるんですか！？」

ユーノは驚いた。

『飛べるぞ。ほら』

シルバーオブ・アーマー

いきなり白銀の鎧を纏い、背中にドラゴンの様な銀色の翼が二つ生えた。

「二翼一对の翼だな」

銀時がそう言った。

（ま、魔力……！こいつ魔導士でもないのになんで魔法を使えるんだ

い！？)

アルフは驚いていた。

てか、皆驚くよね。

「それって？」

シルバー・オブ・アーマー

「白銀の鎧のもう一つ的能力だよ」

銀時はそう言った。

「でも、今頃行っても無駄か……」

銀時が空を見る。ユーノもつられて見てしまう。

*

なのはとフェイトの空中戦。フェイトの足元と前方に魔法陣が展開される。

「Thunder smasher」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる。

「Divine buster」

なのはのレイジングハートからも桜色の閃光が放たれた。

二つの閃光が火花を散らせて激しくぶつかり合う。

「レイジングハート！お願い！！」

「All right」

なのはの言葉にレイジングハートが応える。

桜色の閃光が更に勢いを増して金色の閃光を押ししていく。

「！！」

金色の閃光は桜色の閃光に掻き消された。

フェイトは少し表情を強張らせた。

地上で見ていたユーノは驚いた。

「なのは…強い！」

だがフェイトの使い魔アルフは冷静だった。

「でも…甘いね」

アルフは勝負の結末を読んだ。

「なのは…!!」

ユーノが叫ぶ。

「あっ!?!」

なのはの砲撃はフェイトには当たらなかった。

なのはの上空からフェイトは、鎌に変形したバルディッシュを振り下ろす。

「…!!」

鎌の刃は、なのはの首筋に当てられた。
勝負は決した。

「Pull out」

レイジングハートから女性の電子声が聞こえて、赤いコアからジュエルシールドが一つ出てきた。

「レイジングハート…何を!?!」

「きっと主人思いの良い子なんだよ」

フェイトはジュエルシールドを受け取ると、地上に着地した。

「さっすが、あたしのご主人様♪」

アルフはフェイトの下へ戻る。

「待つて!」

なのはも地上に降りる。

なのはの声にフェイトは足を止めた。

「できればもう、私達の前に現れないで。今度会ったら、きっと加減なんて出来ない」

振り向かず、なのはにそう言った。

そしてその後銀時を見た。

「…!!」

銀時を見て驚いた。

刀を持っており、更には銀時は銀色の魔力を纏っており、背中にはドラゴンの様な銀色の翼が二つ生えていた。

（魔導士でもない銀時が何で魔法を！？）

フェイトもやはり驚いた。

もしかしたらなのはを助けるつもりだったのかもしれないと思った。フェイトは銀時を見るのをやめて去っていった。

「ばいばい」

アルフもフェイトの後を追った。

余談だが銀時に生えている銀色の翼を見て驚いたのは当たり前である。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！！」

銀八「ハアイ、質問コーナーを始めるぞ。今回のアシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「それじゃあ行こうか」

なのは「まずはペンネーム『支配者』さんからの質問
『質問です

ナナフシさんへ

地獄汁を送りますから復讐して下さい

凶悪な怪物のラスボスはいいますか？

ミラクル∞へ

なのはが貴方の事を阿呆眼鏡と言っていましたが無如しますか？
『作者は？』

銀八「ナナフシなら」

ナナフシ「ふははははははは！仕返したアアアアアア！」

ミラクル∞「ぶぎやあああああああああ！」

新八は地獄汁を飲まされて気絶した。

二人「……」

二人はそれを見て黙り込んだ。

ナナフシ「二つ目ですけど……A、S編の最後のやつですよ。一様考えてますよ」

銀八「だそうだ。三つ目だが新八が気絶の為答えられません……つて言つかあいつなら『なのはちゃん』がそんな事を言うはずがない！』とか言つてそうだけだな」

なのは「そ、そうなの？」

銀八「ああ、と言う訳で『支配者』さん廊下に立つてなさい」

なのは「次です。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』しゅつれないな！！』コホン……兎にも角にも、質問します」

1 ミラクル ∞ へ。今度はフェイトがあなたを好きだと言ってますけどどうしますか？（。・こ）ニヒ

2・トツシーへ。なんとなのはとフェイトがあなたを好きだといつてまふぎゃあああああああああああああああああああああ
あ!!!!!!
すみません。質問を間違えました。そっちの私に質問んだけど、銀時の事をどう思う? by フェイト。

3 私、高町なのはが質問します。そっちの私、頑張ってください！！！！

銀時「ん？　なんかお前等、顔に赤いモンが付いてんぞ？」

フェイト・なのは

「『ケツチャップだから（ニコ）』『』』 そっちの私とフェイトちゃん
 が黒龍さんを殺っちゃったよオオオオオオオ！」

銀八「いや、生きてるからな！一つ目だが」

ミラクル[∞]「本当ですk」

ドカーン！

言いかけた時に金色の閃光が飛んできた。

フェイト「黒龍さん……嘘を吐かないでください」フェイトはそう言った。

フェイト「で、二つ目だけど……格好いいよ。何故か信頼出来るんだよ銀時は」

フェイトはそう答えた。

なのは「三つ目だけど私頑張るよ！そっちの私も頑張って！」

銀八「と言う訳で『黒龍』さん廊下に立ってなさい」

なのは「最後です。『黒神』さんからの質問
『と言う訳で質問。』

銀さんへ

もしここで魔導士に目覚めたのであれば、バリアジャケットは是非とも『ラグナ・ザ・ブラットエッジ』のコスプレへ（黒笑）

神楽へ

僕の小説では貴方はエリオとは師弟関係と言う形になりました。しかしそのせいでキャラは醜い嫉妬を抱いたジェイソンと化しました。そんな彼女を見てどう思いますか？（黒笑）

ナナフシへ

出来ればこの新八はロリコン設定はなしにしたほうが良いです。
出なければ僕は間違いなく新八を軽蔑して酷い扱いをしなきゃいけないります。』一つ目だけど銀さん」

銀時「なつてたまるかアアアアア！絶対嫌だからな！」

ナナフシ「考えとこ」

銀時「やめろオオオオオオオオ！」

銀八「二つ目だが神楽」

神楽「恐いアルウウウウウウ！何が原因アル力！？」

銀八「それは向こうの神楽と月詠が原因だよ！」

なのは「にやはははは、三つ目だけど」

ナナフシ「すみません……それは出来ません……必要になりましたんで。理由はこの後のおまけ2をみてください……あ、でもロリコン設定は要らないかも……でもアニメオタクに堕ちる事がなくなるのでやっぱ無理です」

銀八「と言う訳で『黒神』さん廊下に立ってなさい」

なのは「それではまた次回」

『おまけ2』投稿されたオリキャラ紹介。

ナナフシ「二つ来てます。二つ共『月光閃火』さんからです」

名前：神宮寺 漸呀しんぐうじ ぜんが

年齢：20代前半くらい（実年齢は忘れた（汗）

性別：♀

容姿：金髪のウルフヘッドに淡い黒の瞳、ほどよく引き締まった体格のクールガイで甚平姿がトレードマーク

性格：飄々としているが仲間思いで気さくな好青年、だが戦いとなれば一転して勇猛果敢な熱血漢に変わる

武器：『エンオウ炎凰』（銀時の『銀龍』と同じく突然漸呀の前に現れいつの間にか契約し長い付き合いになっている『喋る刀』、『銀龍』とは違い性格はしっかり者で漸呀とはよく口喧嘩になるが、共に信頼し合う仲間でもある）

詳細：かつては攘夷戦争で銀時達と共に戦場を駆けたとも戦友であり、『戦場の中を勇猛果敢に駆け抜け、その『黄金』色に輝く髪を血で紅く染め行くその様は正に『戦鬼』。故に彼の者は『おうごんせんき黄金戦鬼』と呼ばれた』と敵味方問わず言わしめた程の剣豪戦争の終焉と共にその行方を眩ませ、その後妹（詳細は後ほど）と共に放浪の旅をしていたが：知り合いのからくり機巧技師（源外）の依頼で次元転送装置の実験に付き合わされその際のいざこざで次元転送装置が暴走を起こし次元の歪みに妹共々引き摺りこまれ銀時達と同じ目に遭う（汗）ちなみに、特殊な家柄な為かその身には『不老（寿命で死ねない）』と『鋼体（どんな病気でも数分で治る&人智を超えた舌と胃腸（汗））を持っている

名前：神宮寺 葵しんぐうじ あおい

年齢：10代後半くらい（実年齢は忘れた（汗））

性別：♀

容姿：金髪の肩まであるウェーブヘアに淡い黒の澄んだ瞳、身長が平均的（165cmくらい）な割に意外と抜群のスタイルで顔立ちはやや童顔、兄と同じ甚平姿だがどちらかと言えば華やかな方
性格：普段はおしとやかな大和撫子だが、一度武器を手にとると転してお転婆で男勝りな性格に変わる武器：薙刀（刀身は木製、どんなにぶつ叩いても壊れない（汗））

詳細：漸呀の実妹であり、漸呀に負けず劣らずの強さを持つ攘夷戦争終焉後、実兄である漸呀の帰還と同時に放浪の旅に付いて行く事になり、その最中立ち寄ったからくり機巧技師（源外）の工房でのドタバタの後漸呀と共に次元の歪みに引き摺り込まれて銀時達と同じ目に遭う（汗）漸呀と同じく特殊な家柄な為かその身には『不老』と『鋼体』を持つているちなみに、実は隠れオタクな所があり…新八と出会った時に同族の勘を感じ親愛と共にその本質の『武士としての芯の強さ』に強く惹かれ恋愛感情を抱く

ナナフシ「どうでしたか？ 後『月光閃火』さん……『炎凰』の事なんですけど……どんな能力ですか？ 『銀龍』と同じでよろしいんでしょうか？ 後、デザインをお願いします」

銀時「後二人目だけど新八に春が来た！？」

ナナフシ「来ましたよ……これは兄が採用されるのに妹が採用されないのは可笑しいでしょ？ それに俺も新八に春を迎えさせてやりたかったのよ！」

銀時「お前……」

ミラクル[∞]「ありがとう！『月光閃火』さん！！」

ナナフシ「で、『炎凰』を見て思った……『銀龍』と『炎凰』だけじゃなんだな……って」

銀時「は？」

ナナフシ「つまり『銀龍』は『龍』、『炎凰』は『鳳凰』じゃないかな？これを見て思った……どうせなら後三つ作らねえ？って」

銀時「おい！」

ナナフシ「一つは『虎』、もう一つは『麒麟』、もう一つは『玄武』って」

銀時「何故！？」

ナナフシ「五つとも中国関係じゃん！だから！」

銀時「そう言う事がよ！」

ナナフシ「その内の一つ『虎』を魔剣士になるスバルに使わせる気満々」

銀時「何故！？ティルヴィング・エアを使っんじゃないのかよ！？」

ナナフシ「魔剣士化ネタはStrikers編を書く時に許可を黒神さんから貰おうかなって。それにティルヴィング・エアも使わせるよ。でも、そのままじゃあストーリーが変わらない気がするから持たせようと思った」

銀時「なるほど」

ナナフシ「『虎』はスバルのイメージカラーに合わせて『蒼』にするつもりだから」

銀時「そうかよ」

ナナフシ「ついでにこの五つを『五天魔刀』、もしくは『五天神刀』にしようかと思っている」

銀時「凄い所まで来たぞ!？」

ナナフシ「と言う訳で募集開始!」

銀時「何の!？」

ナナフシ「下記を御覧あれ」

・スバルに銀時同様『喋る刀』を持たせる

- 1、賛成
- 2、反対

・『銀龍』達『喋る刀』五つをどっちの呼び方にするか

- 1、五天魔刀
- 2、五天神刀

・『虎』『麒麟』『玄武』を元にした『喋る刀』の名前とデザインを募集します。たぶん『銀龍』と同じ能力だから。ちゃんと自分でも考えていますので。

ナナフシ「これぐらいかな。後、一番目が反対が多かった場合は『虎』の方の名前も変わるかも」

銀時「でも、もし一つ目が賛成だったらこのスバル……凄い事にならねえか？」

ナナフシ「まさかア。スバルに『虎』を使わせる理由はこの五つの中でスピードがあるからですよ」

銀時「なるほど。『虎』を静剣用にしようって言う考えか。それにスバルは速いからな」

ナナフシ「そう言う事です。それでは協力お願いします！締め切りは12月20日までです」

第八訓：子供は夜更かしをしてはいけません！（後書き）

ナナフシ「ご協力お願いします！」

銀時「おいおい」

ナナフシ「それではまた次回！」

第九訓：綺麗な物にはトゲがある（前書き）

ナナフシ「やつとここまで来た」

銀時「おいおい」

ナナフシ「今の所のアンケート数です」

スバルが銀時同様『喋る刀』持たせる。

1、賛成 4 票

2、反対 1 票

『銀龍』達『喋る刀』五つをどっちの呼び方にするか

1、五天魔刀 2 票

2、五天神刀 3 票

ナナフシ「今の所こうですね」

銀時「おいおい、二番目は良い勝負じゃねえか」

ナナフシ「12月20日まで受け付けているのでよろしくお願いします！」

なのは・フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪侍と白銀の刀』 始まります」

第九訓：綺麗な物にはトゲがある

銀時は公園に居た。

誰もいない公園で、一人ベンチに座り込んで考えていた。

「ジュエルシードは危険な物なんだ――」

ユーノが言った事を思い出す。

「危険な物ねえ……」

そう呟いて夕焼けの空を見上げた。

*

銀時はなのはとユーノと一緒に街中でジュエルシードを探していた。

三人がジュエルシードを探している時だった。

いきなり空が暗くなり、海では激しく雷鳴が轟く。

「こ……これは!？」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く。

「こんな街中で強制発動!？」

空を見上げてユーノは叫んだ。

「く……! 広域結界! 間に合え!」

ユーノの足下に緑色の魔法陣が展開された。

すると、ユーノの広域結界で世界の色が変わった。

そしてなのはジュエルシードの光を確認した。

『あれはジュエルシードの光だな』

銀龍がそう言った。

なのははレイジングハートを構える。

「リリカルマジカル！」

レイジングハートに桜色の光が集束される。

「ジュエルシード、シリアル19！」

バルディッシュにも金色の光が集束される。

「封！」

「印！」

二人のデバイスから閃光が放たれた。閃光を受けたジュエルシードは光を失い、宙にたたずんだ。

なのはと銀時は急いでジュエルシードのある場所に向かった。

ユーノも走る。

「やった！なのは、早く確保を！」

「そうはさせるかい！」

空からアルフが襲い掛かる。

ユーノが障壁を張って防御する。

銀時は木刀を腰から抜いて構える。

「おっと、あんたの相手は俺だぜ！」

急に銀時の後ろから声が聞こえ振り返ると……刀を持ち、和服を着た男が居た。

「デメエは！」

銀時は後ろに飛んでそいつを見た。

「あれま。雷雅の次はあんたですか……人斬りさんよオ」

「ククク、久しぶりだねエ……白夜叉」

銀時の目の前に居る男は『雷撃』の一人……川下 斬^{ざん}だった。

この男は人斬りの異名を持ち、雷雅同様戦闘狂である。

「銀さん……この人は？」

ユーノが銀時に訪ねる。

「雷雅が作り出した組織『雷撃』の一人、人斬りの異名を持つ川下 斬だ」

「人斬り！！」

ユ一ノは驚いた。

「お前じゃあ無理だ！こいつは俺に任せろ！」

「わ、わかりました」

ユ一ノは斬を銀時に任せた。

銀時と斬は対峙しあう。

「で、お宅等はこの世界で何がしたいんだ？」

銀時は斬に訪ねる。

「ただ強者を求めているだけだ」

斬はニヤリと笑う。

「そうかい」

銀時のその言葉が合図の様に二人は走り出した。

「オラア！」

「ハア！」

ガキーン！

木刀と刀がぶつかり合う。

銀時と斬は一度後ろに下がった。

「行くぞ！」

銀時は斬に向かって、走り、連続で木刀を振る。

「くっ！」

斬は銀時の型が変わる剣に苦戦した……そして。

ドカァ！

「ぐっ！」

木刀が斬の顔面に直撃した。

「ちっ！」

斬は素早く刀を振る。

銀時はそれを後ろに飛んで避けた。

「さすが白夜叉だ」

斬は不気味な笑みを浮かべる。

「へ、ただのザコにやられっかよ」

銀時はそう言った。

「そうかい……」

すると、斬は銀時の目の前まで移動して刀を振り上げてきた。

銀時はそれを何とか避けて、斬に向かって木刀を振った、

斬はそれを刀で防ぐ。

「ちっ！」

「甘いよ白夜叉！」

斬は銀時の腹に蹴りを入れ、蹴り飛ばした。

「ブッ！」

銀時はそのまま地面を転がり、素早く起き上がると目の前に斬が来ていた。

斬は思いっきり刀を振り下ろしてきた、

銀時はそれを木刀で何とか防いだ。

銀時はその態勢のまま斬に蹴りを入れた。

「ぐっ！」

斬が怯んだ所に木刀を振り下ろし、斬の顔面に直撃する。

「があああああああ！」

そのまま斬は殴り飛ばされた。

斬は起きあがると銀時を見る。

「ククク、今回はここまでだ」

「あ？どういうこった？」

斬が空に指を差す。

銀時はつられてその方向を見る。

*

フェイトは、なのはの後ろに回る。

「Flash move」

足に展開した翼が羽ばたき、なのははフェイトの後ろに回った。

「Divine shooter」

レイジングハートから桜色の閃光が放たれる。

「Defencer」

フェイトは金色の障壁を張って閃光を防ぐ。

「フェイトちゃん！」

「……！」

突然、名前を呼ばれてフェイトは驚いた。

「話し合いだけじゃ……言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど……話さないと、言葉にしないと伝わらない事だっけとあるよ！」

「…………！」

フェイトは何も答えない。

「何も知らないのにぶつかり合うのは私、嫌だ！」

声に出して必死に自分の想いをフェイトに伝える。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸かったら嫌だから！」

「…………！」

フェイトは黙って、なのはの話聞く。

「これが……私の理由！」

「……私は……」

なのはの想いに戸惑いながらフェイトが答えようとした時、

「フェイト！ 答えなくていい……！」

アルフがそれを止めた。

「……！」

「優しくしてくれる人達の所で、ヌクヌクと甘ったれて過ごしてきたガキンちよに何も教えずにいい……！」

アルフの言葉に銀時は顔を陰しくした。

（何か関係あるのか？ あいつの母親と……）

銀時はそう思った。

「じゃあな白夜叉」

斬は姿を消した。

銀時は気にしなかった。

あっちの方が一番気になるからだ。

「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

アルフの言葉でフェイトは我に帰り、ジュエルシードの方へ向かった。

なのはもジュエルシードへ向かう。

そしてジュエルシードの前で、二人の持つデバイスがぶつかり合った。互いのデバイスにヒビが入る。

その瞬間、ジュエルシードから強烈な光が放たれた。

「フェイト！」

「なのは！」

アルフとユーノが叫んだ。

フェイトと、なのははジュエルシードから離れた。

フェイトは傷ついたバルディッシュを見た。

「大丈夫？ 戻ってバルディッシュ」

「Yes, sir」

バルディッシュは小さな三角系になり、フェイトの手の甲の手袋に戻った。

フェイトは目の前に佇んでるジュエルシード目掛けて走った。

「フェイト！ ダメだ危ない！！」

アルフの制止も聞かず、フェイトはジュエルシードを掴み取る。するとジュエルシードから強い光が放たれる。

「く……！」

フェイトはその場に座り込み、魔法陣を展開させる。

「止まれ」

光が激しさを増す。

「止まれ…止まれ！」

手袋が破れて血が吹き出る。

「あのバカガキ!!」

木刀を手放して銀時はフェイトに駆け寄った。

「銀時！何のつもり!？」

「こうするんだよ!!」

ジユエルシードを握るフェイトの手を握った。

直後、銀時の体に激痛が走り、手から血が吹き出た。

「ぐあああああ!!」

銀時は悲鳴を上げた。

「銀時！」

「「銀さん!!」」

フェイトとなのは、ユーノは銀時の名を叫んだ。

「がああああ!!」

体に激痛を受けても銀時はフェイトの手を離そうとはしなかった。

「あいつ！敵なのに何でそんな事をするんだい!？」

アルフは銀時の行動がわからなかった。

「銀時！」

フェイトが銀時の名を呼ぶ。

「バ…バカヤロー…さつさと…封印しやがれ…!」

「銀時…！くっ！止まれ、止まれ、止まれ、止まれ！」

懇願するようにフェイトはジユエルシードを握り締める。

やがてジユエルシードの光が収まり、魔法陣も消える。

銀時は地面に膝をついた。

「「銀時（銀さん）!!」」

フェイトは銀時の体を支え、なのはは銀時の木刀を拾った。

「銀時！しっかりして!!」

銀時の手からポタポタ、と血が地面に落ちる。

「…へへ…フェイト…オメーはやればできる子だと信じてた…ぜ

……」

銀時の言葉にフェイトは口を開いた。

「何で私を助けようとしたの？何で？私はあの子の敵だよ」
フェイトは涙目で言う。

「前……言っただろ……忘れたのか……？」
「あつ」

フェイトはあの言葉を思い出した。

『それに……俺はなのはの味方だからボンボン助ける事は出来ねえ
がお前が危なかったら助けてやるよ』

フェイトはあの時銀時が言った言葉を思い出したのだ。

「銀時……」

「へへ……俺は少し疲れたわ……」

銀時はそのまま目を閉じた。

そしてフェイトはアルフに銀時を運ぶ様頼んだ。

「わかったよ」

アルフはそれを承知した。

銀時はフェイトを助けようとしてくれたからだ。

アルフは銀時を抱きかかえて、フェイトと共にビルを渡りながら去っていった。

『主は我に任せておけ』

銀龍はなのはとユーノの目の前に現れてそれだけ言々と姿を消した。
(銀さん……)

なのはは銀時の木刀を強く握った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ、質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

銀龍『主の相棒である銀龍だ』

銀八「それじゃ、質問行こうか」

銀龍『まずはペンネーム『獄黒』さんからの質問だ

『では、質問しますね。』

・なのはに質問、ダークマターをたべると、銀時に「銀さんなんて大嫌い」って言うの、どっちのほうが いや？」だそうだなのはよ』

なのは「銀さんなんて大嫌いって言うのが嫌に決まってますよおおおおおお！」

銀八「だそうだ。と言う訳で『獄黒』さん廊下に立ってなさい」

銀龍『次だ。ペンネーム『支配者』さんからの質問だ

『銀時へ

あなたに『コスプレ・ザ・侍』の称号を与えます。

ナナフシさんへ

何で新八が『ミラクル[∞]』になったんでしたっけ？』……主よ」

銀時「んな称号いるかアアアアアアアア！そんな称号貰っても俺悲しいだけだから！」

銀八「プププ、その称号貰えよ」

銀時「絶対嫌だ！」

ナナフシ「二つ目ですけど……これの生みの親『霜月サヤ』さん曰く、『人気投票ミラクル八位おめでとう』って言う意味らしいですよ……ついでにこれを作るきっかけになったのは原作者が「ほら、新八ミラクルだね」って言ったそうです。それでミラクルと八位を合わせて『ミラクル[∞]』になりました」

銀八「そう言う意味かよ！それでは『支配者』さん廊下に立ってなさい！」

銀龍「次だ。ペンネーム『黒神』さんからの質問だ
『では質問を。』

黒神

「マヨラーへ、前から聞こうと思いましたが、銀時はリリカルキヤラにメッチャモテまくっています。『リリカル銀魂シリーズ』の貴方は全然モテていないような気がします。

そんな自分は銀時以下だと思つか？（黒笑い）」

ティアナ

「いきなり喧嘩売るような質問しちゃったよこの人オオオオ！？」

黒神

「その2、そう言えばマヨラーもロリコンに墮ちるような事になり
 そうな気がしますますが気のせいでしょうか？特に烈火竜さんの小説で
 は貴方はアギトに……」

ティアナ

「止めてええええ!! それ言ったらマジで怒られるからあ!!」
……土方」

土方「うるせえよ！万事屋以下なんて納得出来ねえ！後、黒神！俺はロリコンに何かならねえぞ！喧嘩売ってんのか！？今からでも殴り込みに行つてやろうか！？」

土方は完全にきれていた。

銀八「行くなら勝手に行ってこい。と言う訳で『黒神』さん廊下に立ってなさい！」

銀龍「次だな。ペンネーム『黒龍』さんからの質問だ。

「黒龍」では、質問いきまゝす」

1. フェイトに質問。銀さんが“俺の隣にいてくれ”と言っ
てまし
たが、あなたはこの言葉をどう受け止めますか？

2・ナナフシさんに質問。あなたが一番苦手なタイプの間人はなんですか？

3. なのはに質問。銀さんと大人のホテルに入った時の事を想像してみてください。

銀時「3だけとんでもねえ質問しやがった!!??」『三つ目は子供に答えさせて良いのか?』

銀龍は疑問に思った。

なのは「え!?想像!?え、え、ええええ!?にや……にやああああああ!／＼／＼」

なのはは顔を真っ赤にさせ、頭から湯気が出て倒れた。

銀龍『……一つ目だが』

フェイト「隣に居るよ!ずっと居ても良い!」

フェイトはそう言った。

銀八「んで、二つ目は?」

ナナフシ「そうですね……不良みたいな奴と自分が正しいと思っている奴ですかね。偽善が一番嫌いですね……そう言う奴見ると苛立ってきます」

銀八「時空管理局が嫌いな訳だ。と言う訳で『黒龍』さん廊下に立つてなさい!」

銀龍『最後だ。ペンネーム『坂井ゆら』さんからの質問

『銀八先生に質問です』

1・なんでミラクル∞は
そんなに変なんですか?

（兄弟のお妙さんも周りにいる人もみんな綺麗なのに）

2・ミラクル ∞ へ

たまに死にたくなりませんか？

3・ミラクル ∞ 以外へ

なんでそんなに綺麗なんですか？

あつ

これは質問じゃないんですけど

ミラクル ∞ に侵食（変になること）されないように
気をつけてください！！！！

最後に

ミラクル ∞ へ

なんで存在してるんですか？

銀八先生おねがいしまあす！！』『…………坂井ゆらよ。質問は三つ
までののだ。今回は載せたがな」

銀八「それでは答えて行こうか」

ミラクル ∞ 「うるせええええええええええ！何で僕のいじめ質問なん
だ！？一つ目は知るかアアアアア！二つ目はならんわア！」

銀時「三つ目だが、ドンマイだミラクル ∞ 」

神楽「そうアル。なのは、フェイト、偏食には気を付けるアル」

なのは「は、はい」

第九訓：綺麗な物にはトゲがある（後書き）

ナナフシ「……」

銀時「……何あの状況？俺人質みたいじゃん」

ナナフシ「……」

銀時「何か答えるよ」

ナナフシ「……人質ではないでしょ？」

銀時「それかよ！知るかよ！」

ナナフシ「と言う訳でまた次回！」

第十訓：ちゃんとした食生活をおくれ！（前書き）

ナナフシ「面白い物見つけたぜやふう……と言つ訳でなのは、フ
エイト」

なのは・フェイト「はい？」

ナナフシ「これあげる」

ナナフシが懷から二枚の写真を取り出す。

それを見て、二人は顔を赤くし、目を輝かせる。

なのは・フェイト「良いの！？」

ナナフシ「良いよ良いよ」

二人はナナフシからそれを貰った。

銀時「何渡したんだ？」

ナナフシ「気になります？」

銀時「ああ」

ナナフシ「これ」

ナナフシが見せたのは銀時に猫耳と尻尾が生えており、銀時の顔が
ニツコリ笑っていて、愛らしい写真だった。

ナナフシ「これ……銀時ラバーズに見せたらひとたまりもありませんよ。愛らしい姿だもん」

銀時「何じゃこりやアアアアアアアア！！」

ナナフシ「ふふふ、これを他の次元の銀時ラバーズに……」

銀時「やめろオオオオオオオオ！」

ナナフシ「ゴファアアアアアアア！」

なのは・フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀
の刀』 始まります……可愛い／＼」

第十訓：ちゃんとした食生活をおくれ！

フェイト達はマンションの部屋に戻った。気絶してる銀時を、フェイトの部屋のベッドに寝かせて傷の手当てをしている。

フェイトの方の傷は銀時が庇ったおかげで軽いもので済んだ。

「これでよしと」

アルフが傷の手当てを終える。

「銀時…」

フェイトはそつと銀時の手に触れた。

「ごめんなさい…私のせいで……」

フェイトは悲しげに顔を俯かせた。

「フェイト……」

隣に座ってるアルフは優しくフェイトの肩を抱いた。

「ごめんね銀時……本当にごめんなさい……」

俯きながらフェイトは謝った。

その時。

「何勝手に自分のせいにしてんだコノヤロー」

声がした。

フェイトは顔を上げて銀時を見た。銀時はいつの間にか目を開けて

いてフェイト達を見ていた。

「銀時！」

「気がついたのかい！？」

「ああ」

ゆっくりと銀時は上半身を起こした。

「銀時…本当にごめんね。私のせいで…銀時を危ない目にあわせて

……」

フェイトはまた悲しそうな表情で顔を俯かせる。

銀時がため息をついた。

「顔上げる、フェイト」

銀時の優しい声が聞こえた。フェイトはゆっくりと顔を上げた。

「銀時……」

「コイツは俺の意志で動いて、できた傷だ。だからそうやって自分を責めるんじゃないよ」

「銀時……」

場の空気が少し和らいだ感じがした。

「けどな、フェイト」

銀時は微笑んで、しばし間をとった。

「やっぱお前のせいだろうがアアアアア！」

突然、銀時が豹変して怒声を上げた。

鬼の形相になった銀時は、フェイトの頭に拳骨を食らわせた。

「っ……！」

フェイトは両手で頭を押さえて痛みを悶えた。

「あんた何やってんだい！？」

アルフが銀時に飛びかかるうとして……

「おすわり！」

「わんっ！……は！」

銀時の言葉でアルフは思わず、おすわりをしてしまった。

「フェイト。何でお前は一人で無茶をするんだ？」

「……」

フェイトは黙り込んでいる。

「ガキのくせに、何でも一人で背負おうとしやがって」

「……」

フェイトはまだ黙り込んだままだ。

フェイトの様子に銀時は二度目のため息をついた。

そしてゆっくりと片手をフェイトに伸ばした。

「……」

また殴られると思ったフェイトは、ビクツと体を震わせて目を閉じた。

だが、頭には痛みではなく暖かさを感じた。ゆっくりと目を開ける

と、銀時はフェイトの頭に手を乗せていた。

「お前は、まだガキなんだからよ。もっと周りを頼れ。甘えていいんだよ。お前にはアルフって最高のパートナーがいるだろ？」

微笑みながら銀時はフェイトに言った。

言われてフェイトはアルフを見た。アルフも微笑みながらフェイトを見つめてる。

「ま、俺もな」

そう言っただけで銀時はフェイトの頭から手を離した。

「銀時……」

フェイトは銀時に顔を向けた。

「もう一人で無茶するんじゃないぞ。いいな？」

フェイトを真っ直ぐに見ながら銀時が言う。

「……うん」

フェイトは首を縦に動かして答えた。

フェイトの答に銀時は満足そうに笑った。二人の様子を見守ってたアルフも嬉しそうに笑って尻尾を振ってる。

その時だった。

銀時の腹の虫が鳴った。

『あ……』

三人は同時に声を上げた。

「飯…… 良いか？」

銀時が訪ねるとフェイトは頷いた。

「思えばデメエには挨拶してなかったな。俺は坂田銀時だ」

「あたしはアルフだよ」

二人は挨拶をした。

*

フエイトとアルフが夕食をテーブルの上に置いた。

「それじゃあ食べよつかフエイト」

「うん。いただきます」

とフエイトが食べようとした時。

「ちよつと待て」

「え？」

銀時がフエイトを止めた。

「フエイト。アルフ。これは何だ？」

銀時はテーブルの上を見た。

「何って夕食だけど…」

テーブルに置かれてるのはインスタント料理と冷凍食品ばかりだった。

「バツキヤロオオオオ!!」

テーブルに置かれた料理を見て銀時はテーブルに足をのつけて二人に怒鳴った。

「「えっ!?!」」

銀時の勢いに圧されてフエイトとアルフは体を大きく震わせた。

「育ち盛りがこんなモンばっか食って、ちゃんとしたメシ食わねーとどーなると思っただあぁ!!」

銀時は怒りの形相で二人に怒鳴った。

「あの…えつと……ごめんなさい…」

銀時の迫力に圧されてフエイトは戸惑いながら謝った。

「それからアルフ!!」

銀時はアルフを指差した。

「お前は何を食おうとしてんだ!?!」

「何って…」

アルフは手に持つてゐる箱を銀時に見せる。

「ドッグフードだけど」

「やっぱ犬じゃねえか!!」

「違う!狼だ!!」

アルフが怒鳴り返す。

「ドッグフード片手に持って言っても説得力ねーんだよ！！ってかお願いだからドッグフード食べるのはやめてくれ！何か見てて悲しくなってくるから！！」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

「あゝ銀時…大丈夫かい？」

恐る恐るアルフが声をかける。

「ちっ。しょうがねえ。俺が作るしかねーか」

そう言っただけで銀時は台所に向かい冷蔵庫の扉を開けた。

「！！」

冷蔵庫の中を見て銀時は絶句した。

「今度はどうしたんだい銀時？」

アルフが歩いてきた。

「冷蔵庫の中が空じゃねーかああああ！！」

再び銀時が叫んだ。

「それに銀時、その手で出来るの？」

「あ……」

銀時はフェイトに言われて気付いた。

*

結局銀時達はインスタント料理を食べて夕食を済ませた。

ソファに銀時達は座っていた。

「なのはとユーノは心配してねえかな？……それに木刀置いてきてしまった」

銀時は完全に人質状態だと思っていた。

「ここが何処だかわからねえから帰りようがねえし……しかもこの町の事よく知らねえし」

銀時は諦めていた。

「銀時大丈夫？」

「ああ……」

フェイトの問いに銀時は答えた。

「しょうがねえ。ここに住んで良いか？俺なのは所に帰るにも帰られねえから」

銀時が聞くとフェイトは頷いた。

「まあ、あたしのご主人様が良いなら良いよ」

アルフも許可をした。

『まったく……主よ。我を忘れてはいないか？』

いきなり銀龍が姿を現した。

「おお、銀龍」

『まったく、私の自己紹介もせねばならんのに』

「すまんすまん」

銀時が銀龍に謝っていた。

フェイトとアルフは銀龍に驚いていた。

「銀時……それは？」

フェイトが訪ねると

「こいつか？こいつは」

『我は銀龍と言う。主の相棒だ』

銀龍はそう答えた。

「デバイス……ではなさそうだね」

フェイトは疑問に思った。

『うむ、ユーノと同じ反応か』

「ま、こいつのおかげで俺は魔法を使えるんだけどな」

「「え！？」」

二人は驚いた。

「それデバイスじゃないのに！？」

フェイトは声を上げた。

「ああ、不思議だよな」

銀時は答えた。

「不思議な刀だねえ」

アルフは銀龍を見る。

「いやいや、犬の耳と尻尾がある方が珍しいぞ」

『そうだな』

「あたしは狼だ！」

アルフは狼と言った。

『それにしても獣の耳いてもあいつとは全然違うな』

「ああ、そうだな」

銀時と銀龍の言葉にフェイトとアルフは首を傾げた。

それは銀時が元の世界で万事屋の下の階に住んでる、全然萌えない猫耳年増女を思い出していた。

「何を話してるの銀時？」

フェイトは銀時に訪ねた。

「いや、アルフを見てな。俺の知り合いにも頭に獣の耳が付いてる奴がいるんだよ。でもソイツは顔は濃いいし、性格は悪くて最悪なんだわ」

「ソイツも使い魔なのかい？」

「いや『天人』だ」

「天人？」

アルフは首を傾げた。

「要は宇宙人だ」

「へえ」

「んで、ソイツに比べたらお前の方が可愛いなと思ってな」

「えっ!？」

銀時の言葉にアルフは顔を赤くする。

「ちよっ…！何言ってるんだい銀時！？急にそんなこと言われたら恥ずかしいじゃないか！！／／／」

アルフは両手で頬を押さえながら尻尾を左右に振る。

「ああ。お前は可愛い…」

銀時は口元を吊り上げた。

「犬だ！」

「狼だ！！」

アルフは銀時の言葉を即座に否定した。

「はいはい。わかったよ」

「それよりもこの世界にそんなのが居たなんて」

フェイトは銀時がまだ『次元漂流者』とは知っていない。

「何言ってるんだ？俺の世界の話だよ」

「え？どういう事？」

銀時の言葉に二人は首を傾げた。

『思えば主よ。この二人に我等の事は話していないぞ』

「そうだったな」

銀時はフェイトとアルフに説明した。

「銀時は『次元漂流者』だったの！？」

フェイトは驚いた。

「まあな」

「そんな世界が存在するんだね」

アルフは銀時の世界に驚いた。

「思えば銀時って魔導士じゃないよね？」

「あ？そうだが」

「銀時って何者なの？」

フェイトは銀時に訪ねた。

「思えば凄い事やってのけてたね。銀時は」

アルフも思った。

雷雅との戦い、斬との戦い、どれも凄いものだった。

「俺は『侍』だ」

「『侍』？」

フェイトとアルフは首を傾げた。

「自分の武士道ルールを持つてて、そいつを貫くのが侍だ」

「自分のルール…」

フェイトが小さく呟いた。

「ふ〜ん。じゃああの木刀は？真剣とやり合って折れないなんて丈夫だよ」

アルフは銀時がよく使っていた木刀を聞いた。

『あれでやろうと思えば隕石も壊せるからな』

「「隕石を！？」」

二人は驚いた。

隕石を木刀で壊せるなんてありえないからだ。

「凄い木刀なんだね」

『だが、あれは……！』

急に銀龍は黙り込んだ。

銀時が黙らしたからだ。

「あれはな、修学旅行に行った時に洞爺湖に住む仙人に貰ったんだよ」

「仙人に貰ったのかい！？」

「す……凄いよ銀時！」

銀時の話でフェイトとアルフは驚く。

確かに銀時の木刀は辺境の星に生える『金剛樹』と呼ばれる樹霊一万年の木から作られた代物で、そこらの真剣より丈夫で何でも斬れる。

だがこの木刀、なんと通販でお手軽に手に入るのだ。しかも中には紛い物もあるとかないとか。

「銀時って凄いんだね」

フェイトは完全に銀時の嘘を信じている。

（主……知らんぞ）

バレた時の恐ろしさを銀龍は想像した。

「後だがな。お前の母ちゃんに会わせてくれねえか？」

「え？」

フェイトはそれだけ言つと黙り込んだ。

アルフはフェイトに何か言っているようだ。

『で、でも』

『銀時ならあの人からフェイトを護ってくれるかもしれないよ』

『大丈夫だよアルフ。母さんは私の為だって言ってたし』

微妙に聞こえる声。

（やっぱ何かあんのか？）

銀時は疑問に思った。

「ダメか？」

銀時は訪ねた。

「……」

フェイトは黙っている。

『我と主は会って話がしたいだけだ』

銀龍も頼む。

「わ、わかった。良いよ」

フェイトはそう言った。

銀時はフェイト達と翌日に行く事になった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、今回のアシスタントは」

アルフ「フェイトの使い魔のアルフだよ」

銀八「と言う訳で質問行こうかア」

アルフ「まずはペンネーム『支配者』さんからの質問

『「銀時に質問

一人ばつちですね。さびしくて死にたくありませんか？
唯でさえ主人公っぽくないのに

ミラクル∞に質問

本名無視されてますね。それって貴方には存在価値が無いと思われ
てるからじゃないですか？

んで、3つ目の質問

皆さんへ

屁怒組ティラノと戦って勝てますか？
実際に送りますんで皆さんで戦ってみてください（黒笑）『ちよつ
と三つ目ええええええええええ！』

銀八「来る前に他の二つ答えるぞ！銀時！」

銀時「寂しいが死にたくはならねえよ！てか、唯でさえ主人公っぽ
くないのにつてどついう事だ！」

銀八「二つ目！」

ミラクル∞「何だとオオオオオオオ！そう思っているのか！？作者
！」

ナナフシ「いや、気に入ってるだけ」

ミラクル[∞]「本当に戻せええええええええええ！」

銀八「だそうだって来たアアアアア！」

しばらくお待ちください……

銀八「死ぬかと思った……」

銀八はもちろん、皆ボロボロだった。

銀八「と言う訳で『支配者』さん……恐ろしいもん送らないでください」

アルフ「……次だよ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

「黒龍」では、質問します」

1. フェイトに質問。もしなのはを倒したら銀さんと結婚できる権利を手に入れるとしたら、どうしますか？

2・フェイトとなのはに質問。銀さんは、結のアナと言う女性のファンだそうです。二人はどう思いますか？ ショックで銀さんへの思いを諦めますか？（黒笑）

3・雷雅質問。魔導師の中であなたが興味ある人物は居ますか？」

フェイト「全力で行くよ！」

銀八「ホント銀時が好きだな！二つ目だが」

なのは・フェイト「諦めない！」

銀八「むかつく！三つ目だが」

雷雅「そうだな……今の所は……フェイトかなのはだな」

銀八「だそうだ。と言う訳で『黒龍』さん廊下に立つてなさい」

アルフ「最後だよ。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問

『輝刃』…基本的に伏せ字の意味が無いな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・雷雅に質問…ぶっちゃけ、好きな女性のタイプって…居るか？

たはは…（汗）おもいつきストレートなの言っただな…（汗）。次は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問…色んな『リリカル銀魂シリーズ』の銀時のように、現実でモテたらどうする？もちろん、言い寄ってくる女性性は皆ブツ飛んだ娘ばかりで（苦笑）。

輝刃「…それはある意味大変そうだな…（滝汗）。いくら男のロマンと言えど、言い寄ってくる女性達が皆ブツ飛んだ娘ばかりなのだからな…（汗）。」「一つ目だが」

雷雅「そうだなア……俺は今まで戦闘にしか興味がなかったからな……どっちかって言うとないかもな」

銀八「だそうだ。二つ目だが」

ナナフシ「嬉しいですけど、それはさすがにちょっと……俺銀さん

じゃないんで無理です……」

銀八「だそうだ。と言う訳で『月光閃火』さん廊下に立ってなさい」

アルフ「質問は以上だよ」

銀八「それではまた次回」

第十訓：ちゃんとした食生活をおくれ！（後書き）

銀時「ナナフシイイイイ！それ全部よこせエエエエエエ！
そして灰にしてやるううううう！」

ナナフシ「ふはははははははははははは！」

まだ前書きのが続いていた。

ナナフシ「特にこれ……銀さんがこんな事する事ないから良いんだよ！」

銀時「やめてええええええええええ！」

ナナフシ「それではまた次回！」

第十一訓：自分の子供を虐待してはいけません！（前書き）

ナナフシ「暇だから連続投稿」

銀時「おい！」

ナナフシ「何か面白いから次は銀さんの犬耳と尻尾のやつをなの
とフェイトにあげた」

銀時「またかよオオオオオオオオ！」

ナナフシ「ふははははははははは！次は何にしてやろうかなア！」

銀時「やめてくれエエエエエエエエ！」

銀龍「……『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始
まるぞ」

第十一訓：自分の子供を虐待してはいけません！

翌日。

銀時達はマンションの屋上にいる。

「銀時。準備はいい？」

「ああ」

これから母親に、これまでの報告とジュエルシードを渡しに行く。
フェイトは喫茶店で買ったケーキが入った箱を持っている。母親へのお土産だろう。

「じゃあ行くよ」

「おお」

「次元転移。次元座標。876C 4419……」

フェイトが呟くと魔法陣の光が強くなっていく。

「開け、誘いへの扉。時の庭園、テストロッサの主の所へ！」

魔法陣が強い光を発し、三人を包み込んだ。

*

高次空間内『時の庭園』。

光が止み、三人は時の庭園に到着した。

その直後、銀時は顔を青くして、

「おぼろろろろろー！！」

盛大なゲロを吐いた。

「銀時！？」

「ちょっと！どうしたんだい銀時！？」

二人が心配そうに聞いてくる。

「な…何か気持ちわ…オボロロロロー！！」

「まだ吐くんかい！！」

アルフがツツコんだ。

銀時が気分を悪くしてゲロを吐いた理由。

それは『高次空間内』という空間が、今までいた所とは別の環境の空間だからだ。この空間の環境に慣れていない銀時は気分を悪くし、ゲロを吐いたのだ。

「わ…悪い… 先行っててくんねーか？…後から行くからよ…」

「う…うん。わかった。無理しないでね銀時」

「ゆっくり休んでな」

そう言っ二人は母親の所に向かった。

一人残った銀時は、座り込んで気分を落ち着かせた。

*

しばらくして銀時の気分は落ち着いてきた。

「ふー。やっと落ち着いたぜ」

ゆっくりと立ち上がった。

「あ…フェイトに部屋の場合聞くの忘れてた…」

銀時は軽く舌打ちをした。仕方なく適当に中を歩くことにした。

しばらく歩いていると長い廊下に出た。

『主… 思ったのだが白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧を纏えばよかったのではないか？』

「あ……」

今さらの様に思い出した。

（さてと… 何で集めているのか聞き出すか）

銀時はフェイトの母親に集めている理由を聞くつもりだった。

頭を掻きながら銀時は悩み続ける。

少し歩くとアルフを見つけた。

だが様子がおかしい。アルフは扉の脇で頭を抱えてうずくまってる。

「何やってんだアイツ？」

銀時は首を傾げた。同時にある事に気がついた。

フェイトがいない。

「フェイト！おい！しつかりしろ！」

「……あ……銀時……？」

フェイトはうつすらと目を開けて銀時を見た。

「いきなり扉を開けて入ってきて……貴方、一体何者？」

前から声が聞こえた。

銀時は顔を上げて声の主を見た。

そこには、まるで虫けらを見るような眼で見てくる黒髪の女が立っていた。

この時が、坂田銀時と大魔導師プレシア・テストロッサが初めて対峙した瞬間だった。

「……人に名を名乗らせる前に、自分から名乗るのが礼儀だって母ちゃんに習わなかったか？」

銀時の言葉にプレシアは不快そうに眉間にシワを寄せた。

「……私はプレシア。大魔導師プレシア・テストロッサよ」

「俺は銀時……坂田銀時だ」

銀時はフェイトを抱いたまま立ち上がった。

「アルフ！」

銀時は大声でアルフを呼んだ。扉の外からアルフが駆け寄ってきた。

「フェイト……！」

「フェイトを連れて傷の手当てをしろ」

そう言って銀時はアルフにフェイトを預けた。

「う……うん。銀時は？」

「俺はあの女と話がある」

「……銀時……気をつけなよ……」

アルフはフェイトを抱えて部屋を出た。

部屋には銀時とプレシアの二人つきりになった。

「テメー、フェイトの母親だろ？何であんな仕打ちをした？」

「何故？あの子は、この大魔導師プレシア・テストロッサの娘なのよ。それなのに、回収してきたジュエルシードはたったの四つ。この程度の成果しか上げられなかったから賤しづけをしただけよ」

プレシアの言葉に銀時は怒りを燃やした。

「…フェイトがただけ頑張ったか…ただけ辛い思いをしたか、わかってんのか？」

怒気を含んだ視線をプレシアに向ける。

「さあ？そんなのは私の知った事じゃないわ」

「デメエー！」

『さすがにそれは許せん！主！我を使え！』

銀龍は姿を現した。

プレシアは銀龍に驚いた。

「それは何？」

「銀龍だが？」

プレシアは名前を聞いて疑問に思った。

（銀龍……何処かで聞いた気がする）

プレシアは考えたが思い出せなかったため、また銀時を見た。

「目障りだわ。いい加減消えなさい」

プレシアから紫色の雷が銀時に向かって放たれた。

「ちっ！」

銀時は横に跳んで雷をかわした。

（速い！）

銀時の素早さにプレシアは少し驚いた。

（魔力による肉体強化？違うわ。あの男からは全く魔力を感じない）

プレシアは杖を銀時に向けて再び雷を放つ。

魔法が使えるが、銀時は避けることしかなかった。

「いつまで逃げ切れるかしら！？」

プレシアの容赦のない雷が銀時に迫る。

「くっ！」

銀時は後ろに跳び、雷は銀時の前に落ちた。

後ろを向くと壁があった。

（ヤベッ！このままじゃ壁にぶつかる！）

だが銀時は、壁にぶつからなかった。当たる直前に壁は横にスライ

ドして道が開かれたのだ。

「！！」

この時、初めてプレシアは焦りの色を浮かべた。

「おわっ！」

銀時は床に倒れた。

「何だここ？隠し通路か？」

立ち上がりながら銀時は隠し通路を見渡した。

少し狭い通路の先に何かを見つけた。

「なっ！？」

ソレを見て銀時は驚愕した。

通路の先にはガラス張りのケースのような物があり、その中に一人の少女が裸で入っていた。

「…フェイト…！？」

『これは一体！？』

銀時は驚いた。

中にいる少女はフェイトに瓜二つだった。

銀時がケースに近づこうとした時、

「アリシアに近寄らないで！！」

「！」

プレシアの怒声と共に雷が銀時を襲った。

「うおっ！！」

銀時はなんとか雷を回避した。

プレシアも通路に入ってくる。

「おい…こいつぁどういう事だ？」

銀時は目の前にいるプレシアを睨みつけた。

「何でフェイトがもう一人いるんだ？」

「フェイトがもう一人？ふん。笑わせないで」

銀時の言葉にプレシアは鼻で笑った。

「私の可愛い『アリシア』を、あんな人形と一緒にしないでほしいわ」

「人形だと…？」

『……』

プレシアの言葉に、銀時は目を細め、銀龍は黙り込んだ。

「フェイト・テストロツサは、私がアリシアの代わりに造った生命体よ。」フェイト」の名前はその当時のプロジェクトの名残よ」

「な…！？」

銀時は目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

「けど姿形は同じでも、あの子はアリシアではなかった。アリシアの記憶をあげても無意味だった」

銀時は黙って聞いている。

「アリシアはもつと素直で明るくて、いい子だった…いつも私に笑顔を見せてくれた」

プレシアは遠い目をしていた。

「だから私は、あんな出来損ないを捨ててアリシアを蘇らせる事を決意したのよ！」

プレシアの目がカツと見開かれた。

「ジュエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』へ向かって、娘のアリシアを蘇らせるのよ…！」

プレシアは両手を高らかに挙げて言い放った。

銀時はジッとプレシアを見つめた。プレシアの姿を見て銀時の脳裏に一人の男が浮かんだ。

林流山。

銀時のいた世界の有名な機械技師だ。

自らの実験中に娘を死なせてしまい、死んだ娘を蘇らせようと『芙蓉プロジェクト』を計画した。

からくりになぎょう

娘・芙蓉の人格データを機械人形に引き継がせ、娘が死んでしまった苦しみや悲しみから逃れるために流山自身も実験体に使い、自分の人格データを機械人形に組み込んだ。

全ては死んだ娘のためではなく、自分のためにしたこと。

『あやつを思い出したか？』

「まあ……」

銀時と銀龍は喋りあった後、プレシアに向いて銀時は口を開いた。

「…プレシア」

プレシアは、上げていた視線を銀時に戻した。

「テメーは娘のために、娘を生き返らせようとしてんじゃねえ」

「……何ですって？」

銀時の言葉にプレシアは目を鋭くする。

「フェイトを造ったのも、アルハザードに行って娘生き返らせようとしてんのも全部、自分のためだ」

「！？」

プレシアの目が見開かれる。

「テメーは自分の寂しさを埋めるために、フェイトとアリシアの魂を弄んでんだ」

プレシアの顔が怒りで歪んでいく。杖を握る手に力が入る。

「……黙りなさい」

「テメーは、娘が死んだ事実から逃げてるだけだ」

「…黙れ」

銀時の言葉がプレシアの心に突き刺さる。

「今のテメーが、胸張ってアリシアに”母親”だと言えんのか！！？」

「黙りなさいって言うてるのよ！！」

プレシアから、巨大な雷が銀時に向かって放たれた。

「ぐあああああ！！」

『主！』

雷は銀時に直撃した。

（避けなかった！？）

避けると思っていたプレシアは少し驚いた。雷がおさまる。

銀時は火傷を負い、着物は所々焦げて煙が出てる。肩で息をしながら銀時はプレシアを見る。

「…気が済んだかよ？」

「く…！うるさい！その減らず口を黙らせ…」

杖を掲げようとしてプレシアの動きが止まった。

「う……ごほっ！」

突然プレシアは手で口を抑えて、その場に膝をついて咳込んだ。

「おいっ！どうした！？」

プレシアの異変に銀時が駆け寄る。

床にはプレシアの血が付着していた。

「あんた…まさか病に……」

プレシアは杖を立てて立ち上がった。

「…ふふ。大魔導師でも…不治の病は治せないのよ…」

プレシアは皮肉な笑みを浮かべた。

「…私を殺すなら今がチャンスよ」

目の前の銀時を睨みつける。

「…んな事するかよ。あんたを殺すのが目的じゃねえ。それに…」

銀時は一旦、言葉を切った。

「フェイトのヤツが悲しむ」

「……………」

プレシアは顔を俯かせた。

「銀時…」

「ん？」

プレシアはゆっくりと顔を上げた。

「貴方なら…雷をかわしながら一気に私の懐に入り、その銀龍と言う刀で斬れたはずよ……何故そうしなかったの…？」

「だから、俺ああんたを斬るのが目的じゃねーんだよ」

メンドくさそうに頭を掻きながら銀時は答えた。

プレシアは顔を少し俯かせる。

「…銀時…」

「今度は何だ？」

「……私は……間違っていたの……？」

俯いたままプレシアは銀時に聞いた。

だが銀時はその問いには答えない。

「もし……間違っているなら……私は……私はどうすればいいの？」

プレシアはその場に座り込んでしまう。

「……さあな」

『それは自分で見つけると良い』

銀時は歩き出した。

静かにプレシアの横を通り過ぎる。通路の扉の前で銀時は足を止めた。

「ただよあ」

「……」

プレシアは振り返って銀時の後ろ姿を見た。

「フェイトの母親も、アリシアの母親も、世界中であんただけなんだよ」

「……」

銀時の言葉にプレシアは目を見開いた。

「じゃあな」

銀時は通路から出ていった。

一人残されたプレシアはケースの中で眠ってるアリシアを見つめた。

「アリシア……私は自分のために……貴女を弄んでいたの……？」

近寄ってケースに触れる。

「私は……どうすれば……」

プレシアは力無く床に座った。

その時、プレシアの口から一人の少女の名前が出た。

「フェイト……」

*

『主らしいと言えば主らしいな』

「うるせえ」

銀時はそう言った。

『主よ……プレシアは我を知っているかの様な顔だった』
「だったら何か言うだろ」

『私の予想だが、何処かで聞いた事があるのかもしれない』

「知りたいのか？」

『いや、我は今で十分だ……それに悲しい過去なら思い出したくない』

「……」

銀時と銀龍はそんな会話をしていた。

その時だった。

「銀時！」

銀時に気付いたアルフが駆け寄った。

「あんた……！どうしたんだい、その体は！？」

プレシアの雷を受けてボロボロになった銀時の姿を見てアルフが叫んだ。

「あ？お前これはアレだよ？ドーナツ作りに失敗したんだよ」

「何言ってるんだい！？あの女にやられたんだろ！？」

「大丈夫だよ。それよりフェイトはどうだ？」

銀時は、ベッドで寝てるフェイトを見た。

「……今は落ち着いて眠ってるよ」

銀時は椅子に座って、眠ってるフェイトを見つめた。

「ん……」

フェイトが目を覚ました。

「フェイト！」

アルフが目には涙を浮かべる。

「……アルフ……銀時……」

フエイトは二人を見て小さく呟いた。

「よお」

銀時が声をかけた。

フエイトはボロボロになつてゐる銀時の姿を見て驚いた。

「銀時……！その傷……どうしたの？」

「これか？」

銀時は、指で耳の穴をほじる。そして、アルフにも言った言葉を口にした。

「ドーナツ作りに失敗した」

第十一訓：自分の子供を虐待してはいけません！（後書き）

ナナフシ「俺的には『月光閃火』さんが考えてくれたオリキャラをA、S編に出したい」

銀時「そうかよ」

ナナフシ「いやア……早くA、S編が書きたい……そして銀さんハ―レムを狙う！」

銀時「狙うな！」

ナナフシ「ま、それでは次回！」

第十二訓：会いたくない奴とは会うもんだ（前書き）

ナナフシ「はい！支配者さんの所に銀龍が出る事になりました！」
銀時「喜んでんな」

銀龍『あんな風なお願いは初めてだったそうだ。更にはよく読むリリカル銀魂シリーズの一つだからな』

ナナフシ「嬉しいに決まってるでしょ！と言う訳で『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります！」

第十二訓：会いたくない奴とは会うもんだ

翌日。

銀時はフェイト達を止める方法が思い浮かばず、ジュエルシード集めに付き合うことになった。

屋上に銀時達が立ってる。

「もうすぐ発動するジュエルシードが近くにある」

夕焼けの空を見上げながらフェイトが言う。

後ろには銀時と狼形態のアルフがいる。

（マズイな…今はまだフェイトにアリスアの事はバレないが、ジュエルシードを集めれば、いずれはバレる）

銀時は表情を険しくして考える。

（何か…何か方法は……ないか！？）

*

夕方。

学校からの帰り道。

ユーノが赤く丸い石をなのはに渡した。待機状態のレイジングハートだ。

「レイジングハート。直ったんだね？よかった」

「Condition green」

レイジングハートは、なのはに答えた。

「また、一緒に頑張ってくれる？」

「All right, my master」

なのははレイジングハートを握った。

「ありがとう」

なのはは銀時の木刀を見た。

銀時は無事なのか心配なのだ。

（銀さん……）

*

銀時達はジュエルシードがある場所にやってきた。海が見える公園。公園内には銀時達以外、誰もいない。

公園内にジュエルシードの光の柱が現れた。

一本の木の中に、ジュエルシードが入っていた。木に変化が起こる。

「ゴオオオオオー!!」

二本の腕が生えた巨大な木の化物になった。

「元氣いいなオイ。その元氣を少し分けてほしいぜ」

木の化物を見ながら銀時が呟いた。

「フェイト」

アルフがフェイトに声をかけた。

「うん。あの子もいる」

フェイトは、なのはの姿を捉らえた。

「フェイト」

今度は銀時がフェイトを呼んだ。

「何？」

「あの化物の相手は俺がしてやつからな」

「え？」

銀時の提案にフェイトは戸惑った。

「でも……」

「言っただろ？」

銀時はフェイトの頭に手を乗せた。

「お前はガキなんだから、もっと周りを頼れ」

「！」

銀時は前に出る。

木の化物と対峙する銀時。

「銀さん！」

なのはは銀時の名を呼んだ。

「よっ、なのは」

銀時は無事であると確認させる。

なのは安堵の息を吐く。

「あ、銀さん！木刀です！」

銀時に木刀を渡した。

「ありがとな……あいつは俺が何とかするからな」

「え？でも」

「心配するな」

銀時はそう言うのと左手には銀龍を握った。

右手には木刀である。

木の化物は、目の前にいる銀時を睨みつけている。

「ゴオオオオオオ！！」

銀時を睨みながら木の化物は雄叫びを上げた。

「ギャーギャーギャーギャーやかましいんだよ。発情期ですかコノヤロー」

銀時は構えを取る。

「ゴオオオオオ！！」

木の化物が雄叫びを上げながら、木の根を振り上げた。そして銀時目掛けて木の根を振り下ろす。

「うおおおお！！」

銀時は叫びながら木の化物目掛けて走り出した。

「だらああああ！！」

銀時は、木刀を振るって自身に迫る巨大な木の根を切り裂いた。

次々と襲いかかる木の根を木刀と銀龍で切り裂いて銀時は木の化物に迫る。

＊

「っ…強い！」

戦いの様子を見てるアルフが驚きの声を上げた。

「銀時…こんなに強かったんだ…」

隣に立つてるフェイトも驚いてる。銀時が強い事は知ってるつもりだったが、本当に『つもり』だったようだ。

銀時の戦いはアルフから聞いていたが、予想を遙かに超えていた。

「銀さん……凄い！」

なのはは驚きの声を上げた。

今まで一緒に戦ってきたが、まだ驚きを隠せない。
ユーノも同じである。

＊

「ジュエルシード斬りじゃあああー！」

銀時は叫びながら、木刀を振り下ろして木の根を斬った。

『斬って斬って斬りまくるんじゃあああああー！』

銀龍の言葉に合わせる様に銀時は銀龍を振るって、木の根を斬る。

銀時は木の化け物の前まで迫る。

「ジュエルシード…」

銀時は木の化物に攻撃するが、

「ガアアアア！」

木の化物は、障壁を展開して防いだ。

「ちっ！」

銀時は一旦、木の化物から離れた。

「あいつ、生意気にバリアなんか張ったよ！」

「今までのより強いね」

フェイトはバルディッシュを持つ手に力を入れる。銀時を助けたい気持ちを必死に抑える。

（大丈夫…銀時ならきつと……）

フェイトは銀時を信じて待った。

「ゴオオオオオ！！」

木の化物が両手を上げながら雄叫びを上げた。

「近所迷惑だコノヤロー」

銀時は目を鋭くした。

「ジュー」

「エー」

「ルー」

銀時は木刀と銀龍を構える。

「『シード』」

銀時は凄まじい気迫を放つ。

更には銀龍からも気迫を感じられた。

「ゴオオオ！？」

銀時と銀龍の気迫に、初めて木の化け物は動揺した。

銀時は地を蹴って、木の化物の顔の前まで跳んだ。

「割りじゃああああ！！」

木刀と銀龍を振り下ろす。

木の化物は障壁を展開した。銀時の攻撃は障壁に当たり、ガラスが碎けるような音を立てながら障壁は割れた。

「うおおおお！！」

銀時は一人木の化物の眼前にまで迫った。

「ジュエルシード狩りじゃああああ！！！」

上段から木刀と銀龍を振り下ろし、木の化物を縦に斬った。

銀時は地面に着地した。銀時が斬った木からジュエルシードが出てきた。

「やった！やったよフェイト！」

「うん！」

銀時の勝利にアルフとフェイトは喜んだ。

なのはも喜んでいた。

「さっさと封印だ！」

銀時が言うとなのはハッとした。

銀時に言われて、フェイトはバルディッシュを構えた。

なのはもレイジングハートを構える。

「ジュエルシード、シリアルフ！」

「封印！」

ジュエルシードに光が降り注いだ。

光が収まり、空中にジュエルシードが佇む。フェイトとなのははジュエルシード挟むように対峙する。

「…ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん。この間みたいになったら、レイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀相だしね」

なのはの言葉にフェイトは少し戸惑った。

「…だけど、譲れないから」

フェイトはバルディッシュを鎌の形状に変えた。

「私は…フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど…」

なのはもレイジングハートを構える。

銀時達は地上で二人の様子を見てる。

「アレ？何やってんの？何やるうとしてんの？嫌な予感がするんですけど」

二人を見上げて銀時は言う。

『あの二人戦うつもりだぞ……しかもジュエルシードの近くで』

銀龍が言った。

ジュエルシードの近くで二人が戦ったら、またジュエルシードが暴走するかもしれない。

「おいイイイ！！フェイト、なのは待てエエエ！！お前等そんなト

コでやり合ったら、またジュエルシード暴走するぞ!!」

銀時が必死に叫ぶが、二人の耳には届いていない。

フェイトと、なのはは同時に動いてデバイスを振り下ろす。

「ああああ!!」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

だが二人のデバイスが当たる直前、

「ストップだ!」

二人の間に青い魔法陣が展開され、そこから現れた黒いバリアジャケットを羽織った少年がデバイスを受け止めた。

「!!!!?」

突然の乱入者に二人は驚いた。

「ここでの戦闘は危険すぎる!」

地上にいる銀時達も呆然と見上げている。

「時空管理局執務官クロノ・ハラウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

時空管理局の者と名乗る少年が現れた。

「まずは二人とも武器を引くんだ」

クロノに言われてフェイトと、なのはは一旦デバイスを引いた。ジュエルシードを空中に残して、三人は地上に降りた。

(おいおい、ここで管理局のお出ましかよ…)

銀時は、クロノと名乗る管理局の魔導師を見つめながら顔を陰しくした。

『どうする主』

「どうするって言われてもなア」

銀時は陰しい表情のまま悩んだ。

フェイトと、なのはの間に立ってるクロノは交互に二人を見た。

「このまま戦闘行為を続けるなら…」

クロノが言いかけた時、突如空からオレンジ色の魔力弾が降ってきた。

「はっ!」

クロノは青い魔法陣を展開して魔力弾を防いだ。
全員、空を見上げた。

アルフが空中に佇んでいた。

「フェイト！撤退するよ！離れて！！」

アルフが再び魔力弾を放つ。

フェイトは戸惑いながらも空中にあるジュエルシールド目掛けて飛んだ。

なのはとクロノは後ろに跳んで魔力弾を避けた。銀時達も離れる。
魔力弾は地面に当たり、土煙が立ち込めた。

フェイトはジュエルシールドに手を伸ばす。

その時、クロノは青い魔力弾をフェイトに向かって放った。

「ちっ！」

銀時は、素早く木刀を魔力弾に向かって投げた。投げたと同時に銀時は走り出した。

フェイトの手前で、魔力弾は銀時の投げた木刀によって弾かれた。

「ああっ！」

フェイトは、魔力弾と木刀がぶつかった衝撃を受けて地面へ落ちていく。

「フェイト！」

急いでアルフはフェイトの元へ向かう。地面にぶつかる前に、アルフはフェイトを背中で受け止めた。

クロノは意識をフェイト達から銀時に向けた。

「何の真似だ！？」

銀時に向かって叫びながら黒いデバイスを構える。
だが銀時はクロノには何も答えない。

「抵抗するなら相応の対応をするぞ！」

言いながらクロノは数発の魔力弾を銀時に向かって放つ。

銀時は魔力弾を避けながら一気にクロノに近づく。

「銀時！」

アルフが叫んだ。

銀時とクロノの距離はどんどん縮まる。

（こいつ！魔法を使つてないのに、なんて速さだ！）

面には出さないが、クロノは銀時の身体能力に内心驚いていた。

クロノは再び魔力弾を撃った。銀時は上に跳んで魔力弾をかわした。

（上？今まで左右に避けていたのに何故？）

クロノは上に跳んだ銀時の姿を見た。

銀時の右手には、先ほど投げたはずの木刀が握られていた。

「なっ！？」

「ふっ！」

銀時は、上段から木刀を振り下ろしてクロノのデバイスを地面に叩き落とした。地面に着地して、木刀をクロノの顔に向けた。

「チェックメイトだ。管理局さんよ」

言つて、銀時はニヤリと笑った。

銀時が上に跳んだのは、落ちてくる木刀を掴むため。

その場にいる全員が驚いた。

特に管理局や魔導師の事をよく知っているフェイトやアルフ、ユー

ノは驚愕を隠せなかった。

「か…勝っちゃった…」

銀時の後ろにいるアルフは、開いた口が塞がらなかった。

（あの管理局の人間は、間違いなく一流の魔導師だ。その魔導師に

銀時は勝った！？しかもアツサリと！？）

木の化物に勝った事にも驚いたが、今はその時以上に驚いている。

「凄い…」

フェイトも驚いて、目を大きく見開いていた。

木刀を突き付けられてるクロノは動けなかった。

「き…君達はどれだけ危険な事をしているのか分かっているのか！？」

「さあな。どんだけ危険か教えてくれませんか？黒井教務官さん」

「僕はクロノだ！それに教務官じゃなくて執務官だ！」

銀時に向かってクロノが怒鳴る。

「そう怒るなよ。短気は損気だぜ？カルシウム摂れ。カルシウム摂れば全てうまくいく」

『主はうまくいってないだろ』

銀龍がツツコンだ。

「か、刀が喋っているだと！？」

クロノは銀龍に驚いた。

「もうその反応は飽きた」

『うむ、嫌と言う程皆が言うからな』

銀時と銀龍はそう言った。

「下がってろクロノ」

男の声がした。

「テメーじゃソイツの相手は荷が重すぎる」

クロノの後ろの林の中から三人の男が現れた。

「なっ！？」

男達を見て銀時は驚愕した。

男達は黒い制服を着て、腰に刀を挿してある。

「おいおい、何でテメエ等が居るんだ？」

そう、その男達は、近藤勲、土方十四郎、沖田総悟であつた。

「モニターの映像を見てまさかとは思つたが…本当にテメエだつたとはな」

煙草たばこをくわえた男が言った。

土方十四郎。幕府の武装警察『真選組』の副長。鬼の副長と恐れられている。常に瞳孔開き気味。

「いやゝ奇遇ですねエ旦那」

栗色のサラサラヘアの男が言う。

沖田総悟。真選組の一番隊隊長。組随一の剣の使い手で腹黒いドS。

「おおっ！本当に万事屋だ！」

ゴリラ顔の男が大声で言った。

近藤勲。真選組の局長。新八の姉・お妙に付き纏うストーカーでもある。

『どうしてお前等がここに？』

銀龍が訪ねた。

すると土方は表情を曇らせた。

「…いろいろあったんだよ。それよりテメエこそ何でこんな所にいる？」

「おいおい、銀龍の質問に答えろよ」

木刀を降ろして土方に言う。

「ま…まさか…！？」

突然、近藤が声を上げた。

「まさかお前も俺達と同じように、『魔法少女リリカルなのは』のDVDを持っている事に気付かないで瞬間移動装置を使ってこの世界に来たのか！？」

「『違うんだけどオオオオオオオオオオオオオオ！？』」

銀時と銀龍は瞬間移動装置は一緒だが、こつちの場合は暴走である。

「てか、『魔法少女リリカルなのは』で何！？」

銀時は疑問に思った。

「これでさア、旦那ア」

沖田が銀時に見せる。

「おいおい…マジかよ」

銀時は驚いた。

パッケージに載っているのはとフェイトに驚いた。

銀龍もだ。

「ここアニメの世界かよ……」

銀時は驚愕した。

『で、それを持っていたのはまさかだと思っが』

銀時が土方を見る。

「ちっ、俺だよ」

土方は舌打ちをしてから言った。

『やはりな』

銀龍は理解していた様だ。

真選組のメンバーで、アニメのDVDを持つてゐる可能性があるのは土方だけだと考えていたからだ。いや…正確に言えばDVDを持つていたのは『土方』ではない。

『トツシー』。土方が妖刀『村麻紗』を手にした事によって生まれた、もう一人の土方十四郎。主にアニメ等の二次元の作品が好きなヘタレたオタク。別人格ではなく、れっきとした土方十四郎の人格の一部なのだ。

「あの野郎…いつの間にかアニメのDVDなんざ懐にしまいやがって…！」

土方は拳を握って怒りを燃やした。

「ブハハハハ！何？お前またトツシーに体乗つとられたの？」

土方を見ながら銀時は笑った。

「テメー何笑つてやがんだ！斬るぞコラ…！」

土方が銀時に掴みかかる。

「やれるもんならやつてみやがれ！マヨラー侍さんよオ！」

「上等だコラ！」

いつもの銀時と土方の争いが始まる。

「君達！少しは落ち着いて…！」

クロノが二人を止めようとするが、

「うるせー！ガキはすっこんでろ…！」

二人に怒鳴られてしまう。

銀時の後ろで様子を見てるアルフは、どう動くべきか迷っていた。

その時、銀時はチラッとアルフに目配せした。

「！」

アルフは銀時の意図に気付いた。銀時は”逃げる”とアルフに目配せしたのだ。

（銀時……ありがとう…ごめんよ…）

アルフは心の中で銀時にお礼と謝罪をした。フェイトを背中に乗せたまま、気付かれないように静かに動いて、アルフは去っていった。銀時と土方はまだ言い争ってた。

「テメーには、いろいろと借りがあるからな。延滞料金も含めてキツチり返してやるぜ！」

「土方さん」

沖田が声をかけた。

「何だ？」

「金髪の魔導師、いなくなっちまりました」

沖田の言葉で、全員の視線が銀時の後ろに集まった。フェイトとアルフの姿はなかった。

「しまった！」

クロノは顔を険しくした。

「…万事屋。テメーわざと俺と口喧嘩して…」

土方は、目の前にいる銀時を鋭い目で見つめた。

「あ？何の事かわかんねーな」

「ちっ」

*

土方は舌打ちした。

時空管理局の次元空間航行艦船『アースラ』。

緑色の長髪の女性がモニターを眺めていた。

「戦闘行動は迅速に停止。ロストログアの確保も終了。よしとしましょう。事情もいろいろ聞けそうだしね」

リンディ・ハラオウン。時空管理局提督”アースラ”艦長である。

*

公園。

銀時達の前にリンディの映像が現れた。

「クロノ。お疲れ様」

「すみません。片方は逃がしてしまいました」

「ううん。まあ大丈夫よ」

リンディは視線を銀時達に向けた。

「その方達と話がしたいから、アースラに案内してくれるかしら？」

「了解しました。すぐに戻ります」

クロノが返事をすると思像は消えた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「質問コーナー行くぞオ。今回は」

フェイト「フェイト・テストロッサです」

銀八「それじゃ、まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問だ

『黒龍』では、質問に移ります」

1・アルフに質問。銀さんに惚れましたか？ 今の所あなたが一番銀さんと付き合っても問題ないですよ。

2・なのはとフェイトに質問。あなた達二人は美女ではなく、美少女なので、ぶっちゃけ銀さんと恋に落ちる事は倫理的に社会的に無理ですよ？ 諦めたら？（笑）

3・ナナフシさんに質問。リリカルなのはが一番人気アルヒロインはぶっちゃけフェイトですよ？ なのはは次だと思っんですけど、

どう思いますか?』一つ目だが」

アルフ「あたしはその……あの……／＼／」

銀八「ありや惚れてるな。二つ目だけど……二人とも恐い」

なのは・フェイト「大人になったら出来るよオオオオオオオオオ
！何で毎回諦めたらなのオオオオ！」

なのはとフェイトは黒龍さんの所に飛んでいった。

銀八「黒龍確か隠れてるんだよな。……って言うかアシスタントは
！？まあ良いや。ナナフシ最後」

ナナフシ「そうですねエ……リリカルなのはでは一番人気ですよ
フェイト。なのはは確かに次かもしれないね……でも、僕はどっ
ちかって言うとなのはの方が好きですけどね。だからメインヒロイ
ンの可能性が大なんですよね。（フェイトもだけど）」

銀八「だそうだ。と言う訳で『黒龍』さん、そっちになのはとフェ
イトが向かったから気を付けてください。最後だ。ペンネーム『支
配者』さんからの質問だ。

『銀時に質問

甘い物以外に好きなものありますか？

ミラクル∞に質問

本名に戻りたいですか？面白いからそのままで言いと思いますけど

神楽に質問

「ってか神楽って誰？」って完全に喧嘩売ってるよ三つ目！」

銀時「そうだなア……ジャンプだろ？それ以外だったらねえ」

銀八「だろうな。二つ目だが」

ミラクル。「戻りたいわアアアアアア！ナナフシがなかなか飽きないんじゃアアアアアア！」

銀八「最後だが」

神楽「支配者！それどういう事アルカ！ミラクル。は覚えてて何で私は覚えてないアルカ！喧嘩売っているアルカ！なら相手をするヨ！」

神楽は支配者さんの所まで走っていった。

銀八「と言う訳で『支配者』さん。そっちに神楽が向かったのどにかしてください……返り討ちに合うのが目に見えてるけど。質問はここまでだ。それではまた」

第十二訓：会いたくない奴とは会うもんだ（後書き）

ナナフシ「次回は『アースラ』ですなア……僕は管理局の様な偽善大嫌いなんで」

銀時「そうか」

ナナフシ「と言う訳でまた次回！」

第十三訓：お茶に砂糖を入れてはいけません（前書き）

ナナフシ「もうすぐでアンケートが終わります」

銀時「そうだな」

ナナフシ「さあ、どうなるかな」

銀時「さあな」

ナナフシ「楽しみだな」

なのは「と言う訳で『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

第十三訓：お茶に砂糖を入れてはいけません

銀時達はアースラにやってきた。

「ファンタジーの次はSFか…何でもありだな」

銀時が呟いた。

魔法やら使い魔やらジュエルシードなど、いろんなモノを見てきた銀時達は、もう驚きはしなかった。

先頭に立つてるクロノが、なのは達に振り返った。

「ああ。もうバリアジャケットとデバイスを解除しても平気だよ」

「あつ、そうですね」

なのははバリアジャケットを解除して、レイジングハートを待機状態にした。

クロノは視線をユーノに向けた。

「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないかな？」

「ああ、そういえばそうですね。すっかり忘れてました」

「え？」

なのはは首を傾げた。

ユーノの体が光輝く。光の中でユーノの体は、フェレットから人間の姿に変わった。見た目は、なのはとそう歳が変わらないくらいの少年の姿だ。

「えっ!？」

ユーノの姿を見て、なのはは驚いた。

銀時は、

「おお」

と呟いただけで、そんなに驚いた様子はない。

「ふう。なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

ユーノは顔を、なのはに向けた。

なのはは、驚きながらユーノを指差している。

「ふええええ!!??」

アースラに、なのはの声が響いた。

「な…なのは？」

ユーノは首を傾げた。

「ユーノ君って…ユーノ君って…！」

なのははユーノの正体に動揺を隠せないでいた。

「そんなに驚く事か？フェイトんとこのい……狼も人の姿に変身してたじゃねえか」

銀時は冷静に言う。

『そうだな』

銀龍もそう言った。

「お前らの間で、何か見解の相違でもあるのか？」

今まで黙ってた土方が言った。

「えっと…なのは、僕達が初めて会った時、僕はこの姿じゃ？」

「ち…違う違う！最初からフェレットだったよー！」

なのはは、首を横に振りながら答えた。

言われてユーノは記憶を辿った。額に指を当てて最初に会った時の事を思い出そうとする。

「ああっ！」

そして思い出した。

「そ…そういえば、この姿まだ見せてなかった」

「だ…だよね？ビックリした〜！」

なのはは大きく息を吐いた。

『ん？そういえば…』

銀龍も何かを思い出した。

『ユーノ、海鳴温泉に行った時、フェレット姿で、なのは達と入らなかったか？』

「あっ！」

ユーノは銀龍に言われて声を上げた。

「……！！」

思い出した、なのはは顔を赤くして俯かせた。

「いや…違うんだ、なのは！あれは……」

ユーノが、なのはに説明しようとした時、

「おい」

銀時が声をかけた。

「じゃあお前何？フェレット姿なのをいい事に、お前女湯に入っただの？」

銀時は、軽蔑の眼差しでユーノを見つめた。

「いえ…その……」

真選組の三人を見た。みんな冷たい視線をユーノに向けている。いや、沖田だけはイジメ甲斐のありそうな獲物を見つけて、ドSな笑みを浮かべていた。

『ユーノよ……』

銀龍も呆れていた。

「いや違うんです！僕はそんなつもりじゃ……！」

もはや、この場にユーノの味方はいなかった。

ユーノが絶望した時。

「ユーノ」

「銀時さん！」

銀時がユーノの前に立った。

「誰にでも間違いや失敗はあるさ。次はこうならないように気をつけな」

優しく銀時が言った。

「銀時さん……！」

ああ、僕にも味方がいた。ユーノがそう思った時。

「でもな、ユーノ」

銀時は微笑んだ。

「やっぱお前最低だろうがアアアア……！」

突然、銀時が怒声を上げた。

「ええっ……！！？」

ユーノは銀時の豹変ぶりに、驚いた。

やったらんかいイイイ！という銀時の声を合図に、土方、沖田、近藤がユーノに襲い掛かった。

ガキだからって優しく許されると思うなよ！銀魂は甘くねーんだよ！SMシヨ一の始まりでイ！と、鉄拳、蹴りがユーノに降り注いだ。
「ぎゃあああああ！！」

ユーノの悲鳴が、アースラの中に響き渡った。

なのはとクロノは、静かにその光景を見守る事しかできなかった。

*

「艦長。来てもらいました」

銀時達は艦長がいる部屋に到着した。

中に入って、銀時達は少し驚いた。部屋の中には、盆栽やお茶の道具、畳や獅子脅しが置かれていた。

何この妙な和風空間？と銀時達は思った。

畳の上には、艦長のリンディが正座していた。

「ようこそ。まあ皆さんとりあえず座って楽にしてくださいね」

笑顔でリンディが言った。ふとリンディはユーノの姿を見た。

ユーノは服はボロボロで、顔や腕、足には青アザが出来ていた。

「えっと…君は何かあったのかな…？」

戸惑いながらリンディは尋ねた。

「……いえ……何もありません……」

力無くユーノは答えた。

ユーノの答にリンディは苦笑いをした。とりあえず銀時達は畳の上に座った。

「どうぞ」

銀時達の前に、お茶と羊羹ようかんが差し出された。

「ありがとうございます」

なのはが礼を言った。

「私は時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

それから互いに自己紹介をしてユーノ達は、これまでの事をリンディ達に話した。

「まあそうだったの。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

話を聞き終えたリンディが言った。

「…それで僕が回収しようと…」

「立派だわ」

「けど同時に無謀でもある！」

クロノの言葉に、ユーノは顔を俯いてしまう。

「あの、『ロストロギア』って何なんですか？」

なのはがリンディ達に尋ねた。

*

銀時達はリンディ達から『ロストロギア』について話を聞いた。

次元空間の中には幾つもの世界が存在する。その中には、他の世界よりも進化しすぎた世界がある。その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ。使い方によって是世界どこるか次元空間を滅ぼす程の力になる。

話を聞いた、なのは達は自分達がとんでもなく危険な物に関わっていた事を理解した。

ふと、なのははリンディを見た。

リンディはお茶の中に角砂糖を入れていた。

「あっ！」

お茶に角砂糖を入れるという行為に、なのはは驚いた。しかもリン

ディは何の躊躇いもなく、角砂糖を入れたお茶を飲んだ。

（まるで主だな）

銀龍は、そう思いながら銀時を見た。

銀時は、リンディの行為を見ながら不敵な笑みを浮かべていた。

（おもしれえ）

対抗心を燃やした銀時は、角砂糖が入ってる器に手を伸ばした。なのは達とリンディ達が、銀時の動きに気がついた。銀時はみんなの視線を浴びながら、リンディが入れた倍くらいの数の角砂糖をお茶に入れた。

「なっ！？」

銀時の行為にリンディは驚いた。リンディだけでなく、なのは達も驚いてる。

銀時は、リンディの前で沢山の角砂糖の入ったお茶を飲んだ。

（まさか、この男も私と同じ！？しかも私よりも多く角砂糖を入れた！？）

リンディは目を見開いて驚いた。隣に座ってるクロノも目を丸くしている。

銀時はリンディに不敵な笑みを見せた。

「！！！」

銀時の笑みを見たリンディは、更に角砂糖をお茶の中に入れた。

「か…艦長！？」

クロノが驚きの声を上げた。

（さあ、これで私の勝ちよ！）

そう思っ、リンディは銀時を見た。

「！！！！？」

そして驚愕した。

銀時のお茶の中には、更に足した角砂糖と、お茶と一緒に出された『羊羹』が入っていた。

（よ…羊羹をお茶の中に！！！？わ…私でもそんな発想はできなかったわ！！）

動揺しながら、リンディは銀時の顔を見た。

銀時は、またも不敵な笑みを浮かべてリンディを見ていた。

（ふん！糖尿病寸前まで糖分摂取をしてきた俺に敵うと思ったのか？）

銀時は邪悪な笑みを浮かべた。

「俺とあんたとじゃ、糖の器が違う」

「！！」

銀時の言葉を聞いて、リンディは畳に両手をついた。

「わ…私の負けだわ」

悔しそうにリンディは顔を俯いた。

「いや、何がやりたいんだ二人とも？」

銀龍がツツコンだ。

「くだらない争いをしてどうする主よ」

「バカヤロー銀龍。ここで引いたら、糖分王の名折れだろうが」

言って銀時は、角砂糖と羊羹が入ったお茶を飲んだ。

「そんな称号いらぬだろ」

と、銀龍が銀時にツツコンだ時、

「刀の言う通りだ」

土方が口を開いた。

「お茶に角砂糖を入れるなんざ、テメーらの味覚はどうかしてるぜ」

そう言う土方は、お茶の中にマヨネーズを入れていた。

「お前もだろうが！」

即座に銀龍がツツコンだ。

「何故お茶にマヨネーズを入れる！？」

「食い物だけでなく飲物にもマヨネーズを混ぜるのが、一流のマヨラーってもんよ」

土方はフツと短く笑った。

「全然格好良くないぞ！？」

三人の味覚馬鹿のせいで、場の緊張感は完全に消えていた。

なのは達は、銀時達の並外れた味覚に、ただただ目を丸くして驚く

しかなかった。

リンディが敗北から立ち直って顔を上げた。コホン、と小さく咳をする。

「これよりロストログア『ジュエルシード』の回収については、時空管理局が全権を持ちます」

「えっ!？」

リンディの言葉に、なのはとユーノは戸惑った。

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも…そんな…」

「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

なおも戸惑う、なのはにクロノが言った。

「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、それから改めて話をしましょう」

リンディが、なのは達に言った。

土方は、リンディの言葉に目を細めた。

「ちよつと待て」

クロノが、なのは達を送ろうと立ち上がったところで、土方が口を開いた。

「何かしら？」

リンディが土方に顔を向けた。

「何で考える時間なんて与える？民間人を巻き込むつもりが無いなら、そんなもんは必要無いだろ」

煙草に火をつけながら土方が言う。

本当に事件から手を引かせようと考えているなら、話し合う時間など必要無い。なのに何でリンディはあんな事を言ったのか。

「まっ、あんたの考えてる事は大体読めてるがな」

フーッと、土方は煙草の煙を吐いた。

「大方、コイツらの方から協力を申し出るように誘導して、足りな

い人員を補強しようって魂胆だろ？」

土方の鋭い眼がリンディを射抜く。

いや、土方だけではなく近藤、沖田、銀時も眼を鋭くしている。三人もリンディの考えに気付いていたようだ。

「……………」

リンディは無言で表情を険しくした。

「本当ですか艦長!？」

クロノがリンディに尋ねた。どうやらクロノの方は、本心から手を引かせようと考えていたようだ。

「そんな姑息なマネしねーで、堂々とソイツらに頼んだらどうだ？ そしたら俺も余計な口は挟まねえ。決めるのはソイツらだからな」
そう言つて、土方は腕を組んで目を閉じた。

「リンディ艦長。立場上、あなたの方から民間人に協力を頼めないのはわかる。だが、だからと言ってこのような手段で彼女達を巻き込む事を、俺達は認めることはできません！」

近藤がリンディに言った。

しばらく場が沈黙に包まれた。

「あ…あの…！」

なのはが沈黙を破った。

「私にお手伝いさせてください！」

全員が、なのはへ振り向いた。

「その…リンディさんに言われなくても…きっと私、自分から頼んでいたと思います」

「し…しかし……………」

なのはの言葉にクロノが戸惑う。

「お願いします！」

立ち上がって、なのはは頭を下げた。

「ぼ、僕もお願いします！」

ユーノも立ち上がって頭を下げた。

「だとは艦長殿」

銀時が笑みを浮かべて言った。

「俺もあんたのやり方は気に入らねえ。だがコイツらは、あんたに言われたからじゃなく、本当に自分の意志で手伝うと言ってる」

銀時は真っ直ぐにリンディを見つめてる。リンディも銀時の視線を受け止めてる。

「……わかりました。あなた方の乗艦を許可します」

「艦長！？本気ですか！？」

「二人の善意を利用しようとした私には、この頼みを断る事は出来ません」

リンディは静かに語った。

「高町なのはさん。ユーノ・スクライアさん。先ほどは、あなた達を利用しようとして申し訳ありませんでした」

リンディは二人に頭を下げた。

「い……いえ……そんな……」

頭を下げられて、なのははあたふたする。リンディは頭を上げた。

「ご協力に感謝します。それと改めて、二人ともよろしく願います」

「は……はい！よろしく願います！」

「お願いします！」

こうして、なのは達は管理局に協力する事になった。

「では、なのはさんは一度ご家族とお話をして、また明日、公園にきてください」

「はい！」

「クロノ。二人を元の世界へお送りして」

「……はい」

クロノはまだ納得していないようだったが、渋々了解した。なのはとユーノ、クロノが部屋から出ていった。

リンディは銀時に顔を向けた。

「あなたはどうしますか？」

「あ？俺か？」

銀時はお茶を飲み干した。

「俺達も協力させてもらっぜ。あいつらだけじゃ心配だから」

『なのはとユーノが心配だしな……それにフェイトもだ』

銀時と銀龍はそう言った。

「わかりました。あなた方もこれからよろしくお願いします。それと……先ほどは失礼しました」

リンディは、なのは達を利用しようとした事を銀時達にも謝った。

「まあ……アイツらなら、どっちにしろ協力を申し出たかもな」

銀時が言った。

『そうだろうな』

銀龍も答えた。

「後、一つ聞いて良いですか？」

「何だ？」

リンディが銀時に訪ねる。

「その銀龍は本当にデバイスではないと？報告は受けましたが『喋る刀』なんて」

「ああ、こいつはデバイスじゃねえぜ」

『うむ、皆がそう言うからな』

銀龍はそう言った。

「わかりました」

リンディが承知した後、沖田が立ち上がった。

「あゝ俺、腹減っちゃいましたよ。そろそろ飯にしませんかい？」

「そうだな」

沖田の言葉で、全員が立ち上がった。

「それじゃあ食堂へ案内します」

リンディが先頭に立って銀時達を案内した。

（……フェイトとアルフのやつ……大丈夫だろうな？）

二人の事を思いながら、銀時はリンディの後を歩いた。

*

（銀時は次元漂流者だから保護してくれるよね）

フェイトは銀時が心配であった。

「…ねえフェイト…もう止めようよ…」

アルフはフェイトに詰め寄った。

「本気で捜査されたら…此処だっていずれはバレちゃうよ」

「…でも私、母さんの願いを叶えてあげたいの」

「あたしは…！」

アルフが声を荒げる。

「フェイトには幸せになつてほしいんだよ！フェイトが泣いたり悲しんだりすると、あたしの胸も苦しくなるんだよ！」

アルフは床に伏せて、必死にフェイトを説得した。

「アルフと私は精神がリンクしてるから、私の感情が流れちゃって
いるんだね…ごめんね。私、もう泣かないよ」

フェイトの決意は固かった。アルフの説得もフェイトには届かなかった。

「なら…約束して…あの女の為じゃなくて、フェイトは自分の為
に頑張るって！そしたらあたしは、全力でフェイトを護るよ！」

「うん。ありがとうアルフ…」

フェイトは、優しくアルフの頭を撫でた。

（銀時…）

フェイトの表情が少し暗くなった。

（ごめんね銀時…無理しないって約束…破るかもしれない）
フェイトの目から一筋の涙が流れた。

（あれ…？もう泣かないって…決めたばかりなのに…）
アルフは顔を俯いていて、フェイトが泣いている事に気付いていない。

（銀時…）

銀時の事を考えると、胸が苦しくなる。

(…会いたいよ……銀時……)

フェイトは、アルフに気付かれないように、そっと涙を拭いた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生……!」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

ユーノ「ユーノ・スクライアです」

銀八「それじゃあ行こうか」

ユーノ「ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』そうですかそうですか。もう良いです。こうなれば質問で
報復してやります!! 質問です」

1・なのはとフェイトに質問。なんと銀さんのタイプはグラマーな
人らしいです。残念でした。

2・フェイトに質問。銀さんが、“あ、俺ガキは無理だからお前と
は付き合いねえわ”とか言っていました(黒笑)

3・なのはとフェイトに質問。なんとリリカルなのはの人気投票で
はフェイトが圧倒的票数で一位だそうです。二人はどう思いますか
?『完全に報復してますね』

銀八「だな。一つ目だが」

なのは「なら、なれる様に頑張る！」

フェイト「私も！」

銀八「Strikers編では大人だもんな。二つ目だが」

フェイト「そうなんだ……」

フェイトは暗い顔をする。

銀八「大人になった時を考えろよ」

フェイト「そうだね！」

フェイトは立ち直った。

銀八「三つ目だけど」

なのは「凄い人気だねフェイトちゃん」

フェイト「私人気あるんだ」

銀八「だそうだ……って何二人ともデバイスとバリアジャケット出してんの？」

なのは「また苛めの質問でしたからア」

『遊戯王の主人公が使うエースモンスターの攻撃力は大抵2500』
・『遊戯王の主人公が最初に戦うデュエリストのエースモンスターの攻撃力は大抵3000』では土方さんと決闘デュエルしましたが、見事に大勝利しました。

そして土方に向かって負け犬と叫びましたがその感想を♪

マヨラーへ

貴方は銀時に決闘デュエルで敗れてしまい、あげくに負け犬と言われちゃいました。

そのご感想を（黒笑）

なのは・フェイトへ

新八の前のデッキは女の子をばかり入れていたハーレムデッキですが、そんな新八のデッキのご感想を（黒笑）『銀さん』

銀時「いい気味だぜ♪そのままと負けちまえ」

銀八「だそうだ。で、負け犬」

土方「誰が負け犬だ！負け犬だとオオオオオオ！納得いかねえ！万事屋ア！斬ってやらあ！」

銀時「無駄無駄」

銀時は土方から逃げていた。

銀八「最後だが」

なのは「……最低ですね」

フェイト「私もそう思う」

ミラクル∞「ガーン」

銀八「と言う訳で『黒神』さん廊下に立ってなさい」

ユーノ「質問は以上です」

銀八「また次回」

第十三訓：お茶に砂糖を入れてはいけません（後書き）

ナナフシ「追試ダルかった」

銀時「ご苦労さん」

ナナフシ「と言う訳でまた次回！」

第十四訓：鎖で遊んではいけません！（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「おい！」

ナナフシ「暇で暇で」

銀時「知るか！」

フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始
まります」

第十四訓：鎖で遊んではいけません！

ここはアースラの食堂

『思えばこの連中は、アニメの世界だと知っているのか？』

銀龍が疑問に思い訪ねる。

「リンディ艦長とクロノには、この世界がアニメの世界である事を教えてある」

「まあ最初はリンディ艦長達も、自分達がアニメのキャラクターである事には信じられなかったみたいだな」

近藤が腕を組んで言う。

「そりゃあそうだ。自分達がアニメのキャラクターで、住んでいる世界が架空の世界だなんて、すぐに信じられるわけがない。

「ちよつといいかな？」

なのは達を送りに行ったクロノが、戻ってきた。

「銀時。貴方に聞きたい事があります」

「あ？何だ？失望官さん」

「失望官じゃない！執務官だ！！いい加減覚えろ！」

「わーったよ」

銀時は、手をヒラヒラ動かしながら答えた。

クロノが、コホンと咳をする。

「貴方はあの金髪の魔導師と一緒に行動していた。彼女の目的は何だ？」

真剣な表情で銀時に尋ねるクロノ。

だが、銀時は。

「あつ、すみません。チョコレートパフェお願いしますーす。え？話何だっけ？」

「人の話を聞けエエエー！」

叫びながらクロノは、強くテーブルを叩いた。

「あゝはいはい。アイツの目的ね」

「ちゃんと聞いてたのか!？」

クロノは肩で息をしている。

「おいおい、もう疲れたのか？新八だったらもつとイケるぜ？」

「聞かれた質問にだけ答える!!それに新八って誰だ!？」

『落ち着いたらどうだクロノよ』

銀龍に言われて落ち着くクロノ。

「質問の答ね。目的はわかんねーよ。俺人質みたいなもんだったから」

「そうか……」

クロノはそれで引いた。

「明日の会議で、君達の事を紹介する。遅れずに来てください」

「へいへい」

銀時は軽く返事をし、クロノは食堂を去っていった。

*

翌日。

アースラの会議室。

局員達が椅子に座ってる。

その中には万事屋、真選組、なのはとユーノの姿もあった。なのはとユーノは、緊張のせいか表情が固い。

リンディが局員達に、これからの事について説明している。

「……というわけで本日をもって、本艦の任務はジュエルシードの回収に変更されます」

局員を見渡しながらリンディが言う。

「また、今回は特例として問題のロストログアの発見者であり、結界魔導師でもあるこちら」
リンディがユーノを見る。

「はい！ユーノ・スクライアです！」

ユーノは緊張しながら立ち上がり、自己紹介をした。

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

「た…高町なのはです！」

なのはもユーノ程ではないが、緊張しながら自己紹介をした。

「最後に真選組以外の一般の協力者です」

『主よ』

銀龍が喋った事にやはり皆が驚いた。

銀時と銀龍はそれを無視した。

「たくつ、しょうがねえなア」

メンドくさそーに銀時は立ち上がった。

「どーも。坂田銀時です。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してまゝす」

緊張した様子もなく、ダラけた声で自己紹介する。

『我はこの主の相棒の銀龍だ』

銀龍も挨拶をした。

「え…えつと…彼らが臨時局員となって事態にあたってくれます」

「よろしく願います！」

なのは、ユーノは頭を下げて挨拶する。

銀時は椅子に座って欠伸あくびをかいている。

真選組の三人はそれを見て頭を抱えた。

＊

森の中。

なのは達は管理局が見つけたジュエルシード発見場所にいた。

そこには不死鳥のような姿の巨大な怪鳥がいた。怪鳥は、ユーノの緑色の鎖に繋がれて鳴き声を上げながら暴れる。

「あゝあゝダメでさア、ユーノ」

そう言いながらユーノに近づいたのは沖田だった。

「沖田さん？」

「鎖の締め具合が甘えぜ。もつとキツく締めな」

そう言つて沖田は、一本の鎖を思いつきり引つ張つた。

「グアアアアア！！」

怪鳥は先ほどよりも大きな悲鳴を上げながら暴れた。

「おつ、なかなかいい悲鳴上げるじゃねえか。道具持ってきてくりゃあよかつたな」

沖田は、道具を持ってこなかった事を心底後悔した。

「あの…この鎖は相手を痛ぶるための物じゃないんですけど…」

ユーノは、やんわりと沖田に言つた。

「他に道具はねえのかイ？」

「いや…それは……」

沖田の質問に、ユーノは困つた顔をする。

「じゃあ鎖の数もつと増やしな」

「いや貴方、鬼？」

二人がそんなやり取りをしてる間に、なのははジュエルシードを封印した。

「あゝ全然イジメ足りなかったけど、仕方ねえや」

沖田は少し残念そうな顔をした。

そんな沖田を見て、なのはとユーノは顔を引きつらせた。

*

遺跡。

フェイトとアルフがいた。

「フェイト。ダメだ。また空振りみたいだ」

「そう」

フェイトは目の前にある遺跡を見つめた。

「やっぱり向こうに気付かれずに、隠れて探すのは難しいよ」

「うん。でも、もう少し頑張ろう」

フェイトは空を見上げた。

（銀時…今頃どうしてるかな？）

*

時の庭園。

プレシアは一人王座に座っていた。

（フェイト…今頃、私のためにジュエルシードを集めてるのかしら……）

プレシアは考えた。

（坂田銀時…あの男の言葉を聞いてから…何故かフェイトの事を考えるようになったわ……）

銀時に言われた言葉を思い出す。

「ああ…そうか……」

プレシアは気付いた。

「フェイトはフェイト。あの子はアリシアの代わりなんかじゃない……こんな事に今まで気付かなかったなんて…」

プレシアはため息をついた。

「アリシアもフェイトも私の娘。私は二人の母親」

ようやく気付いた真実。

プレシアは、自分にこの事を気付かせてくれた男を思い浮かべた。

「銀時…魔法も使えないただの人間が、この大魔導師に向かってあんな事を言うなんて……いい度胸をしているわ」

プレシアは短く笑った。

「…自分の大切なものを…自分で傷つけていたなんて……」

プレシアは自嘲の笑みを浮かべた。それからプレシアの表情は、少しずつ暗くなっていた。

「何故…」

手が震える。

「何故…… やつと大切なものに気付いたのに……」
目には涙が浮かぶ。

「私は死に近づいていくの？」

あの男のお陰でようやく気付いたのに。 フェイトが大事だって気付いたのに。

プレシアは両手で顔を覆った。

「…フェイト…」

自分の娘の名を言いながら、プレシアは涙を流した。

*

クロノとオペレーターのエイミィ・リミエッタがフェイトについて調べていた。

「フェイト・テストロッサ。かつての大魔導師と同じファミリネームだ」

画面を見ながらクロノが言った。

「じゃあ、その関係者かな？」

「わからない。偽名かもしれない。でも、もしかしたら、その大魔導師と繋がりがあるかもしれない」

*

銀時達がアースラに移ってから十日目。なのはが回収したジュエルシードは8、9、10の計三つ。

一方、フェイトが回収した数は2、5の計二つ。残るジュエルシードは六つ。だが、その残り六つが見つからずにいた。

銀時達は食堂にいた。

それぞれ料理を持って、席に着いたのだが。

「……………」

なのはとユーノは、苦い顔をしていた。原因は銀時と土方にあった。銀時は白いご飯の上に大量の『小豆』をかけた。

土方はカツ丼の上に大量の『マヨネーズ』をかけていた。

小豆テンコ盛りの『宇治銀時丼』と、マヨネーズたっぷりの『カツ丼土方スペシャル』。

「銀さん……土方さん……それは？」

なのはは恐る恐る聞いてみた。

「ん？宇治銀時丼だ」

「土方スペシャルだ」

二人はそう答えた。

「食うか？」

銀時がなのはに宇治銀時丼を差し出した。

『主……さすがにそれは』

「あの……じゃあ……一口だけ」

『なのは！？』

銀龍は驚いた。

「やめとけ。そんなのまずいに決まってる」

土方が言う。

「お前の犬の餌と一緒にするな」

「何を！？」

銀時と土方は睨み合っている。

なのははと言うと。

ゆっくりと宇治銀時丼に箸を伸ばし、少し掴んで口の中に入れた。

もぐもぐ、と口の中で噛んで飲み込んだ。

「おいしい」

「おっ、マジで」

銀時は少し身を乗り出す。

「うん！凄くおいしいよ銀さん！」

なのはは目を輝かせている。

「おおっ！やっとこの味がわかる奴に出会えたぜ！」

なのはと言う同士が見つかって大喜びする。

『マジで?』

その場に居た皆が呟いた。

「万事屋」

「何だゴリラ」

近藤が銀時に声を掛けた。

「フェイトちゃんを管理局に保護を頼まなくて良いのか?」

近藤が銀時に聞く。

公園の時に、体を張ってまでフェイト達を護ったのだ。銀時なら、リンディ艦長に頼んでフェイト達を保護して貰おうと考えそうなのだが。

「今、アイツらを管理局に保護してもらっても、何の解決にもならねえんだよ」

宇治銀時并を食べながら銀時は答えた。その顔は険しかった。

「何かワケありか?万事屋」

近藤が銀時に尋ねた。

「ああ。まあな」

銀時は、井と箸をテーブルに置いた。

「アイツはよお。ガキのくせに一人で何でも背負おうとして、無茶ばっかする厄介なヤツなんだよ」

そう言って銀時は頬杖をついた。

「銀さん」

「ん?」

なのはが唐突に銀時に話し掛ける。

「私もね。小さい頃はよく一人だったんだ」

「…そうなんだ」

銀時は頬杖を解いて話を聞く。周りの皆も黙って話を聞いている。

「私が小さい頃に、お父さんが仕事で大怪我しちゃって…しばらくベッドから動けなかった事があるの」

なのはは話を続ける。

「喫茶店も始めたばかりで、まだ人気はなかったから、お兄ちゃんやお母さんもずっと忙しくて」

「……………」

なのはの話を、銀時は黙って聞いている。

話をしている時の、なのはの顔は少し寂しい表情をしていた。

「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で……だから私、割と最近まで家にいる事が多かったの」

そう言っ、なのはは笑顔を作った。

「銀さん」

「ん？」

「一人ぼっちの子にしてあげるのは、大丈夫って優しく言う事でも、心配する事でもないと思うんだ」

「……………」

銀時は黙って、なのはの答を待つ。

「同じ気持ちを分け合える事。悲しい気持ちも寂しい気持ちも半分にできる事だと思うんです」

なのはが答を言う。

答を聞いた銀時は、静かに目を閉じた。

銀時も最初は一人だった。家族もいない。一人で生きてきた。そんな銀時を一人の人物が拾った。

それから銀時には仲間ができた。気持ちを分け合い、解り合える大切な仲間。

だが、その仲間の多くを天人との譲夷戦争で失ってしまった。

そして時を経て、銀時に新しい仲間。いや、家族と呼べる者達が出てきた。

銀時は目を開けた。

「…そうだな」

そう言っ、銀時は微笑んだ。

その時、アースラ内に緊急事態のアラームが鳴った。

第十四訓：鎖で遊んではいけません！（後書き）

ナナフシ「次回は竜巻と対決」

銀時「俺も行くのか？」

ナナフシ「それは次回を待っていてください！」

第十五訓：乱入者っているんだね（前書き）

ナナフシ「調子に乗って三話連続投稿」

銀時「おい！」

ナナフシ「今回は『黒神』さんのリクエストです」

銀時「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀」始まるぞ」

第十五訓：乱入者っているんだね

曇天の海。

海上には巨大な金色の魔法陣が展開されていた。

「アルタス、クルタス、エイギアス…」

魔法陣の上には、呪文を唱えてるフェイトがいた。

魔法陣から少し離れた場所には、狼形態のアルフが心配そうにフェイトを見つめていた。

（海の中にあるジュエルシードの位置を特定するために、電気の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。それは間違ってるけど…）
アルフの表情が険しくなる。

「はぁぁぁぁぁ！」

呪文を唱え終えたフェイトが、海に向かって巨大な雷を放った。

海から六つのジュエルシードの光の柱が現れる。

「見つけた…残り六つ！」

フェイトの呼吸が荒くなる。

（これだけの魔力を打ち込んで、さらに全てを封印するなんて…いくらフェイトの魔力でも絶対限界を超えてる！）

フェイトの心配をしながら、アルフは数日前まで自分達と一緒にいた、銀髪の男を思い浮かべた。

（銀時… あんたなら… フェイトを上手く抑えられたのかな？）

アルフが考えていると、

「アルフ！」

フェイトがアルフに声をかけた。

「空間結界とサポートお願い！」

「あ… ああ！任せといて！」

フェイトの言葉でアルフは考えを切り替えた。

（弱気になるな！あたしはフェイトの使い魔なんだ！銀時は体を張

ってフェイトを護ったじゃないか！だつたら！）
アルフは決意を固めた眼をする。

（あたしも全力でフェイトを護るんだ！！）

フェイト達の前で、ジュエルシードの光は巨大な竜巻になった。

「いくよバルディッシュ。頑張ろう」

バルディッシュを構えて、フェイトは嵐の中を飛んだ。

＊

緊急事態のアラームを聞いた銀時達は、ブリッジに入った。

銀時達は画面を見た。ジュエルシードの力に弾き飛ばされても必死に戦うフェイトの姿が映っていた。

「フェイト！」

「フェイトちゃん！」

銀時となのはが、フェイトの名を叫んだ。

「なんとも呆れた無茶する子達だわ！」

画面を見ながらリンディが呆れ半分、心配半分に言った。

「無謀ですね。間違いなく自滅します」

クロノが悪びれた様子もなく言った。

その言葉に、銀時は眉を^{ひそ}顰めた。

「あれは個人が出せる魔力の限界を越えている」

「あの…私急いで現場に行きます！」

なのはが、ブリッジの転送装置に行こうとした時、

「その必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する」

クロノがそれを止めた。

「！？」

クロノの言葉に、なのはは驚いた顔をして動きを止めた。

銀時と真選組の三人は、表情を陰しくした。

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい。」

「でも…」

クロノの非情な言葉に、なのはは戸惑った。

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

クロノの指示を受けたオペレーターが準備をする。

「私達は、常に最善の選択をしなきゃいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンディが険しい表情で画面を見上げた。

フェイトは、まだジュエルシールドを封印しようと必死に戦っていた。画面を見上げていた銀時が口を開いた。

「最善の選択？ 最低の選択の間違いだろ」

「何だと!？」

クロノは、振り返って銀時を睨んだ。

「俺達のいた世界にも、幕府って組織があるが…どうやらテメーらも、幕府と同じくらい腐ってるみてえだな」

「貴様…！口を慎め!！」

クロノが銀時に向かって叫んだ。

直後、銀時の眼がカツと見開かれた。

「目の前で苦しんでるヤツらを救おうとしねーで、世界を管理するなんて大層な事吐かしてんじゃねエエエ!！」

銀時の怒声がブリッジに響き渡った。

その声にクロノとリンディだけでなく、ブリッジにいる局員全員がたじろいだ。

『主の言う通りだ!』

銀龍も流石に怒りだして怒鳴って叫びだす。

『世界を救う前に、目の前で必死に戦ってる少女を救ったらどうなんだ!？ 苦しんでる女の子を見捨てるなんて、お前ら薄情者以前に、そこらの罪人と変わりはない屑野郎だ!』

「ざ…罪人!？」

銀龍がリンディ達に向かって怒鳴った。

世界を救う為とは言え他人の命を見捨てるような行為…いや、他人の命を犠牲にしてまで自分の都合勝手な正義を突き通すような行為は偽善な考えで銀龍が怒らない訳には行かなかった。

「き…君達は……！」

銀時と銀龍の言葉に、クロノは歯を食いしばる。

「今のはクロノ達が悪い、そして万事屋の言うとおりだ」

と土方は鋭い視線でクロノ達をにらみつける。

土方は、静かに煙草とライターを取り出した。

「確かに何を優先させるべきかは、俺にもわかる。だがな、目の前で弱ってるガキを見捨てるテメーらを見ているだけで虫唾が走るぜ」

「土方さんまで!？」

土方の言葉に、クロノは大きく目を見開いた。

続いて沖田が言った。

「目の前で苦しんでる奴がいたら、いい奴だろーが悪い奴だろーが手え差し伸べる。でしたよね？近藤さん」

「その通りだ」

沖田の言葉に、近藤は大きく頷いた。

それから近藤はリンディを見つめた。

「リンディ艦長。俺達はあんたの部下でも管理局の者でもない」

隣にいる土方と沖田も、目を鋭くしてリンディを見つめた。

「俺達は真選組だ！」

毅然とした態度で近藤が言い放った。

銀時達や真選組の言葉に、クロノは表情をどんどん険しくした。

「貴方達は、事の重大さがわかってるのか!? おふざけはその変な天然パーマに変なマヨネーズ方のライターだけにしろ！」

ブチィ×2

銀時はなのはに近づいてなのは自身の気持ちを聞きに来た。

「なのは……てめエは、フェイトを助けたいか？」

「はい！私は…フェイトちゃんを助けたいです！」

なのはの言葉に、なのはは決意のこもったまなざしでそう言う。銀時は『OK』と言うと、ユーノに振り向く。

「ユーノ、転送魔法でなのはをフェイトの元に移動させる！」

「は・・・はい」

ユーノの足元から魔法陣が現れた。なのはもユーノの魔法陣に入ろうとしたその時だった。

「待って！」

声が聞こえ、なのはは振り向くと、リンディだった。リンディはオペレータに目配せをし、転送装置を起動させた。

「行動…許可します。気をつけてね」

「……はい、ありがとうございます！！」

「急ごう、なのは！」

リンディにお礼を言って、なのははユーノと一緒に転送装置に向かった。

*

荒れ狂う海上で、フェイトはバルディッシュを構えて竜巻に突っ込もうとする。もう何度弾かれたかわからない。バルディッシュの魔力の刃も失った。

それでもジュエルシードを封印しようとした時。

「！！！」

バリアジャケットを着て、レイジングハートを持った、なのはが現れた。

「フェイトの邪魔するなアア！！」

なのは気付いたアルフが、噛み付こうとする。

間にユーノが入り、魔法陣を展開してアルフを止めた。

「待ってくれ！僕達は戦いにきたんじゃない！」

「えっ！？」

アルフが驚きの声を上げる。

「今はジュエルシードの封印を！」

叫んで、ユーノは巨大な緑色の魔法陣を展開した。魔法陣から緑色の鎖を放ち、竜巻に巻きつけて動きを抑える。

「フェイトちゃん！」

なのはは、フェイトの隣に移動した。

「二人でジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートの赤い玉から、桜色の魔力が出る。桜色の魔力は、バルディッシュの黄色い玉に入っていた。

「Power charge」

バルディッシュに魔力の刃が戻る。

「Supplying complete」

フェイトは隣にいる、なのはに顔を向けた。

なのはは、頷いて応える。

ユーノが必死に竜巻を抑える。途中からアルフもオレンジ色の鎖を放って、一緒に竜巻を抑える。

「ユーノ君とアルフさんが止めてる今のうちに！」
隣にいるフェイトに顔を向ける。

「二人で”せーの！”で一気に封印するよ！」

レイジングハートを構える。

「デバインバスター、フルパワー！」

「All right, my master」

なのはの足下に、巨大な桜色の魔法陣が展開された。
フェイトもバルディッシュを構えて、巨大な金色の魔法陣を展開する。

「せーの！」

なのはが合図する。

「サンダー…」

「デイベイン…」

二人ともデバイスを構える。

「レイジー!!!」

巨大な雷が、竜巻に向かって放たれた。

「バスター!!!」

桜色の閃光が竜巻に直撃した。

金色の光と桜色の光が六つの竜巻を飲み込んだ。

*

アースラのブリッジ。

「ジュエルシード、六個全ての封印を確認しました！」
オペレーターのエイミィが報告する。

「な…なんてデタラメな…！」

クロノが驚く。

クロノだけでなく、ブリッジにいる全員が驚いていた。

「こいつぁスゲーや」

画面を見て、沖田が呟いた。

銀時は小さく微笑んだ。

その時だった。

「未確認物体がジュエルシードに近づいています！」
オペレーターが声を上げた。

「!!!」

皆は驚いた。

「モニターに出せる？」

「はい！」

モニターには機械らしきものが映っていた。

「おいおい、まさか雷雅の所の！」

「雷雅！？あいつもこの世界に来ていやがるのか！？」

土方は驚いた。

雷雅は自分の世界では殺人犯として指名手配されているのだ。

しかも全員浪人だ。

戦闘狂である雷雅は強者を求めているのだ。

機械は人型で、背中には悪魔の翼みたいのがあり、腰には刀を挿してある。

「ちっ！」

銀時は転送装置に向かった。

「何処に行くの！？」

「俺も行くんだよ！」

そう言いつと銀時は行ってしまった。

*

海上。

フェイトと、なのはの前に六つのジュエルシードが現れた。

嵐は収まり、雲が割れて太陽の光が差し込む。

「えっと…半分こ…で良いよね？」

「……………」

フェイトは無言で頷いた。

半分ずつジュエルシードを回収し、全てのジュエルシードを封印した。

回収を終えたフェイトは、アルフを連れて、その場から立ち去ろうとした。

その時だった。

「！！！」

機械がフェイトとなのはの元に向かってきているのだ。
しかも腰にある刀を抜いて……。

「何あれ！？」

なのはは驚いていた。

フェイトは魔力弾を撃つが刀で弾かれる。

「！！！」

フェイトは驚いた。

そして、そのままフェイトに刀を振り下ろしてきた。

「フェイトちゃん！！」

なのはが叫んだ。

フェイトは目を閉じた。

ガキイイイイン！

金属同士がぶつかる音がした。

目を開けると銀色の魔力を纏っており、その魔力で出来たドラゴンの翼を広げた銀時が銀龍を使って、そいつの攻撃を防いでいた。

「銀時！」

フェイトは銀時の名前を呼んだ。

「危ねえ……」

銀時はギリギリだな、と言う感じだった。

そして、そのまま銀龍を振るい、機械は後ろに後退する。

「大丈夫かフェイト？」

銀時が言う。

「うん」

フエイトは答える。

「さてと……やりますか」

銀時は銀龍を構えた。

『そうだな』

そして動き出した。

*

「銀時が魔法を使っているだと!?!」

クロノは驚いていた。

クロノだけじゃない、アースラ全員が驚いていた。

「え? あれって魔法なの?」

「凄いですねエ旦那。前から使っているのは見ていやしたが、まさか魔法だったとは」

「銀龍のおかげだったな」

土方の言葉を聞いてリンディは思う。

（銀龍……デバイスでもないのに持ち主が魔力を使える様にするなんて……一体）

リンディは不思議に思った。

*

「オラア!」

銀時が銀龍を振り下ろす。

機械はそれを刀で防ぐ。

「ちっ!」

銀時はそのまま蹴飛ばした。
シルバー・オブ・アーマー
白銀の鎧のおかげで身体能力も上がっており、蹴りは通常より強かった。

機械はそれを喰らい、怯む。

銀時は銀龍を鞘に納めた。

そして、一瞬にして相手に近づき、抜刀した。
すると機械にいくつもの斬撃が入る。

「瞬銀」

銀時は呟いた。

だが、機械はまだ壊れては居なかった。

「随分頑丈で」

コアに当たってなかった様だ。

銀時は魔力を溜め始める。

（あの技を使うか）

銀時はそう考えた。

それを狙う様に肩にあったランチャー二つを銀時に向ける。

「ちっ！」

銀時は弾を切り裂くつもりだった。

だが、ランチャーの先端に何かが溜められている。

『主！あれは魔法の砲撃だ！』

銀龍は言った。

「ちっ！なら！」

銀時はそのまま魔力を溜めるのに集中する。

そして……。

機械から魔法が放たれた。

「こっちも丁度終わったぜ！」

銀時がそう言っていると魔力を白銀の龍にして撃ちだした。

はくてんりゅう
「白天龍！！」

それはだいたい大きく、しかもスピードがだいたいあった。

「あつ、通常より溜めすぎたかも」

銀時がそう呟いた。

そのまま相手が放った魔法は打ち消され、機械を白銀の龍が飲み込んだ。

跡形もなく吹っ飛んだ。

『……』

その場に居たなのはやフェイトはもちろん、アースラの皆までもが驚いていた。

白銀の龍はそのまま天に昇っていった。

『主……溜めすぎだ。あやつなら中間ぐらいで十分だ』

「やつぱ？」

銀時と銀龍は普通に話をしていた。

フェイトはそのまま去ろうとする。

「待てフェイト」

銀時がフェイトを呼び止めた。

「また無茶したら二人とも拳骨だからな」

「……！！」

銀時の言葉にフェイトは目を見開いて、肩を一瞬振るわせた。アルフも驚いてる。

それからフェイトは、アルフを連れて姿を消した。

「フェイトちゃん……」

フェイト達が去った後に、なのはは小さく呟いた。

*

マンションに向かうフェイトとアルフ。

（銀時……私達の事……心配してくれてたんだ……）

フェイトは、胸に手を当てた。

（ありがと銀時……）

心の中でお礼を言いながら、フェイトはアルフと共にマンションに戻った。

第十五訓：乱入者っているんだね（後書き）

ナナフシ「『黒神』さんがリクエストした部分を出しました」

銀時「何処からだ？」

ナナフシ「何処からと言うと、「最善の選択？最低の選択の間違いだろ」から「リンディにお礼を言つて、なのははユーノと一緒に転送装置に向かった。」の所までが『黒神』さんのリクエストです。これでよかったですか『黒神』さん」

銀時「読者の皆、この気まま野郎に付き合ってくれてありがとう」
ナナフシ「それは連続投稿を言っているのか！？」

銀時「そう」

なのは「それではまた次回」

はくてんりゅう

白天龍

魔力を白銀の龍の姿で打ち出す技。

その威力はSランク以上。魔力の溜め方にはよってはSSSランク以上にもなるが、そうなると少しに溜めに時間が掛かる。

魔力が溜まるほど、大きさと速さは上がる。

第十六訓：決闘に横槍を入れるな！（前書き）

ナナフシ「アンケート結果発表！」

銀時「イエーイ」

ナナフシ「銀さん！？ノリ悪いよ！？」

銀時「ダルいしょ。さつさとやろうぜ」

ナナフシ「たくっ！それでは結果です」

スバルが銀時同様『喋る刀』を持たせる

1、賛成 4 票

2、反対 1 票

『銀龍』達『喋る刀』五つをどっちの呼び方にするか

1、五天魔刀 2 票

2、五天神刀 4 票

ナナフシ「と言う訳で、スバルは持つ事になりました」

銀時「なるほど」

ナナフシ「で、『銀龍』達『喋る刀』五本は『五天神刀』となりました」

銀龍『そうか』

ナナフシ「後書きで投稿された『喋る刀』を紹介します」

銀時「それじゃ、『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀

』始まるぜ！」

第十六訓：決闘に横槍を入れるな！

会議室。

銀時、銀龍、真選組、なのは、ユーノ、クロノとリンディが集まっていた。

「まったく。勝手にジュエルシードを半分ずつ分けて…」

壁に寄り掛かりながら、クロノがため息をついた。

「す…すみません」

なのはが謝る。

「何もしようとしなかった奴が、文句言う資格があんのか？」

「何!？」

銀時の言葉に、クロノは食ってかかる。

「やめなさいクロノ」

「…はい」

リンディに言われて、クロノは渋々下がった。

「で？今回の事件について、何かわかったのか？」

煙草をくわえながら土方が尋ねた。

「ああ。エイミイ映像を」

クロノはテーブルに歩み寄った。

「はいはい」

スピーカーからエイミイの声が聞こえた。

エイミイの声の後、テーブルの中心に映像が映し出された。

映し出されたのはプレシアだった。

「あら」

「!」

映像を見て、リンディは少し驚き、銀時は表情を険しくした。

「一体誰ですかイ？」

沖田がクロノに尋ねた。

「僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テストロッサ

だ」

映像を見ながらクロノが説明する。

「専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な大魔導師だったが、違法研究と事故によって放逐された人物です」

「テストロッサって…」

名前を聞いて、なのはが呟いた。

「あのフェイトという少女はおそらく」

「プレシアの娘…ね」

リンディが険しい表情で呟いた。

なのはは、プレシアの映像を見つめる。

「この人が、フェイトちゃんのお母さん…」

「つまり、この女が今回の黒幕ってことか…」

土方が腕を組んで言う。

「プレシア・テストロッサは、違法な素材を使った実験を行い失敗。中規模次元震を起こした事で中央を追放され、それからしばらくの内に行方不明となる。今わかってる事はこれくらいです」

クロノが説明を終える。

「ご苦労様。貴方達は一休みした方がいいわね」

なのは達に顔を向けて、リンディが言った。

「あ…でも…」

「特になのはさんは、長く学校休みっぱなしにするのはよくないでしょう」

優しく微笑みながらリンディが言う。

「一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せた方がいいでしょう」

そう言ってリンディは席を立った。

「銀さんと真選組の皆さんも、その間自由に休んでください」

『うむ、そうか』

銀龍は答えた。

銀時は険しい表情で、ジッとプレシアの映像を見つめた。

(プレシア……)

*

時の庭園。

フェイトとアルフは、プレシアにこれまでの事を報告しにきた。

プレシアは玉座に座り、フェイトは部屋を中心に立つてる。

「…ジュエルシードを、全ては回収できませんでした…」

怯えながらフェイトが報告する。

「…回収したジュエルシードの数は…全部で九つ……」

プレシアは、宙に佇む九つのジュエルシードを見つめた。

「ご…ごめんなさい、母さん……」

顔を俯かせて、フェイトはプレシアに謝った。

「………残りのジュエルシードを必ず回収するのよ。いいわねフェイト？」

「え…？あ…はい……」

フェイトは、少し呆然とした顔で返事をした。

いつもなら、ここでプレシアの折檻が始まるのだが、今回は違った。

「何をボーッとしているの？早く行きなさい」

「…はい……」

言われてフェイトは部屋を出た。

扉の前で待ってたアルフは、プレシアの折檻がなかった事を不思議に思いながら、フェイトの後を歩いた。

二人がいなくなり、部屋にはプレシアだけになった。

「ゴホッ…！ゴホッ…！」

プレシアは口を押さえて咳込んだ。自分の手は赤く染まり、床には血の池ができている。

「……私には…もう時間がないわ………」

口元に付いてる血を拭きながら、プレシアは顔を上げた。
「こんな私といても…フェイトは幸せにはなれない……」
自分の死を覚悟しながら、プレシアはフェイトの幸せを考えた。

*

高町家。

「……とまあ、そんな感じの十日間でしたのよ」

「まあ、そうなんですか」

リンデイと、なのはの母親の高町桃子は、意気投合して楽しく談笑している。

「ははは…」

二人の様子を見て、なのはとユーノは内心苦笑いを浮かべていた。
一方、真選組は特に用事も予定もないので、海鳴市の街を見て回った。

*

銀時はフェイト達が使ってるマンションの部屋にいた。部屋の中に、フェイト達の姿はなかった。

「やっぱいねーか」

頭を掻きながら部屋を見渡した。

「まあ向こうは、管理局と一緒にいる俺とは会いたくねーと思ってるだろうな」

言いながら銀時は、部屋を出ようとした。扉を開けて、一度振り返って誰もいない部屋を見た。

「…またな」

小さく呟いて、銀時は部屋を出て扉を閉めた。

*

時刻は夕方。

銀時は、高町家を目指して歩いていた。

「あつ、銀さん！」

歩いていると、なのはと出会った。

「なのは。どうした？」

「心配になったから、迎えにきました」

無邪気な笑顔で、なのはが答えた。

「そうか。わざわざ悪いな」

「いいえ」

二人は並んで歩いた。

なのはは、隣を歩く銀時を見上げた。

「あの…銀さん」

「何だ？」

「フェイトちゃんと居る時何してたんですか？」

「あ？ああ、特に……ってか、何でそんな事聞くんだ？」

「い、いえ……特に意味はないんです」

なのはは銀時にそう言った。

「なのは」

「何ですか？」

呼ばれて、なのはは銀時を見上げた。

「たぶん近い内に、フェイトの奴はジュエルシードを手に入れるために、なのはの前に現れる」

さつきまでと違って、銀時は真剣な表情で話す。

「はい」

「はい」

なのはも真剣な表情で、銀時の話を聞く。

「わかってると思うが、フェイトは強えぞ」

「はい」

なのはは、頷いて答える。

「フェイトちゃんと戦うのは辛いけど……でも私、どうしてもフェイトちゃんを助けたいんです！」

強い決意を表すように、力強くなのはが言った。

なのはの、決意の顔を見て銀時は微笑んだ。

「どうやら、俺の出番はねえみてーだな」

「銀さん……」

「なのは」

銀時は、なのはを見た。

「思いつきりぶつかっていけ！」

「はい！」

銀時の言葉に、なのはは笑顔で力強く答えた。

*

二日後の早朝。

時間はAM5:27。

なのは達は家の門の前に立ってる。

「ふあゝ。何もこんな朝早くに出なくてもよくね？」

欠伸をかきながら、銀時は背伸びをする。

「俺、朝弱いんだよ」

「ごめんなさい銀さん」

なのはは謝った。

『主はいつもこんな感じた。気にするな』

銀龍がそう言う。

「お前ら。喋ってねーで、さっさと行くぞ」

そう言っただけで土方が歩き出した。

＊

海鳴臨海公園。

時間はAM5:55。

なのは、銀時、ユーノの三人がいた。真選組の三人は公園の入口で待機してる。

なのはは小さく深呼吸をする。

「ここなら…いいよ」

なのはが口を開いた。

「出てきて、フェイトちゃん！」

姿の见えないフェイトに向かって、なのはが叫んだ。

朝の冷たい風が、頬に当たる。風に当たって林がざわつく。

なのはと銀時は、後ろを振り返った。

バルディッシュを持ったフェイトが立っていた。隣には狼形態のアルフがいる。

「銀時…」

銀時を見つめながら、フェイトが呟いた。

「安心しろ。こいつはお前と、なのはの戦いだ。俺とユーノは余計な手は出さねえ」

そう言つて銀時は腕を組んだ。

なのははバリアジアケツを着て、レイジングハートを持つ。

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね？」

片手にレイジングハートを持って、なのはは言葉を繋げる。

「逃げればいいってわけでもない」

真つ直ぐにフェイトを見つめる。

「きっかけはジュエルシード…だから賭けよう。お互いが持つてる全部のジュエルシードを！」

「Put out」

なのはの周囲にジュエルシールドが現れる。

「Put out」

フェイトの周囲にも九つのジュエルシールドが出る。

「それからだよ。全部それから」

両手でレイジングハートを構える。

フェイトも下段にバルディッシュを構える。

「私達の全てはまだ始まってすらいない……」

銀時とユーノ、アルフが黙って見守る。

「だから、本当の自分を始めるために……」

対峙する二人の魔導師。

「始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

*

アースラ。

「戦闘開始みたいだね」

なのはとフェイトの戦いの様子を、画面で見ながらエイミーが言った。隣にはクロノが立っている。

「ああ」

クロノとエイミーは、ただ戦いの様子を見守っているだけではない。なのはが戦闘で時間を稼いでる内に、こちらで帰還先追跡をしておくという作戦だ。

「頼りにしてるんだから、逃がさないでよ」

「おう！任せとけ！」

エイミーが親指を立てて返事をした。

*

「始まるな……」

「なら、こつちもやろうぜ」

銀時は聞き覚えのある声に驚いた。

そして、声のした方向を向く。

「雷雅！」

「よオ……銀の兄貴」

雷雅はニヤリと笑った。

ユ一ノとアルフは驚いている。

「様子を見に来たんだがなア……暇でな。それで丁度銀の兄貴が居たんでな」

雷雅は薙刀を構える。

「いやア……俺嫌な奴に好かれたねエ」

銀時も木刀を構える。

「勝負！」

雷雅が言うと同時にどちらも走り出した。

「オラア！」

銀時が木刀を振り下ろした。

雷雅はそれを薙刀で防ぐ。

雷雅は銀時にそのまま蹴りを入れた。

「ぐっ！」

銀時は怯む。

その隙を見逃さず、薙刀を振り下ろした。

「ちっ！」

銀時は舌打ちしながら後ろに飛んで避けた。

銀時はすぐさま雷雅の懐に入り、木刀を振り上げた。

ガンツと鈍い音が聞こえた。

雷雅の顎に直撃した。

「ぐっ！」

雷雅は二、三步退いた。

「やっぱおもしれえ……」

「ククク」と雷雅は笑う。

「ま……今回は挨拶程度だ……また会えると良いな」

雷雅は何しに來たのか……そのまま姿を消した。

銀時は空を見た。

*

（最初は、ただ魔力が強いただけの素人だったのに……）

フェイトは自身に迫る桜色の魔力弾を、バルディッシュで切り裂く。

（……強い！）

フェイトもバルディッシュを強く握り締める。

（でも……負けられない！）

フェイトは空中で静止した。

（母さんの為にも……絶対に負けられない！！）

両手でバルディッシュを掴んで、前に構える。フェイトの足下に、

巨大な金色の魔法陣が展開された。

*

「ん？フェイトのヤツ、何か大技でも出すのか？」

ユーノ達と、地上で観戦していた銀時が目を細めた。

「マズイ！フェイトは本気であの子を潰す気だ！」

アルフが焦った声で言う。

「つーことは……アレがフェイトの切り札ってヤツか……」

焦るアルフの隣で、銀時が冷静に言う。

空中にいるフェイトの周囲に複数の…いや、無数の魔力弾が佇む。
なのはがレイジングハートを構えようとした時、

「あっ！！」

なのはの両手両足を、金色の魔法陣が拘束した。

「ライトニングバインド」

フェイトが小さく呟いた。

「なのは！今サポートを！」

ユーノが魔法陣を展開しようとした時、

「やめろ、ユーノ」

銀時がそれを制した。

「余計な事はすんな」

「余計な事！？」

「でも銀時…フェイトのアレは本当にマズイんだよ！」

アルフが戸惑いながら言う。

「これはアイツらの決闘だ。そいつを邪魔する事は俺が許さねえ」

今の銀時の言葉には、普段にはない凄みが加わっていた。アルフと

ユーノは何も言い返せず、黙って二人の様子を見守った。

（銀さん…ありがとう）

三人の様子を見ていたなのはは、心の中で銀時に礼を言った。

「アルカス、クルタス、エイギアス…」

その間にもフェイトは、呪文を唱え続けていた。

「疾風なりし天神よ、今導きの元に撃ちかけ。バリエル・ザリエル・ブラウゼル」

呪文を唱え終える。

「フォトンランサー・フランクスシフト」

手を空に掲げ、バインドで拘束されてるなのはを睨み、

「打ち砕け！ファイアー！！」

手をなのはに向けて振り下ろしたのを合図に、無数の魔力弾がなのはに襲い掛かる。

無数の魔力弾がなのはに降り注ぎ、爆発する。

「なのは！」

「フェイト！」

ユーノとアルフが叫んだ。銀時は黙って見つめてる。

やがて魔力弾を撃ち終える。フェイトは残った魔力を集めて、魔力弾を作る。なのはのいる所に煙が立ち込める。

フェイトは魔力弾を片手に、立ち込める煙を見つめる。

やがて煙が晴れてくる。

「撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」

煙の中から、ほぼ無傷のなのはが姿を現した。

障壁を張って、あの魔力弾の雨を防ぎきったのだ。

「マジでか？」

流石の銀時も、この時は驚きを隠せず少し顔を引きつらせた。

「今度は…こっちの番だよ」

レイジングハートを突き出すように構える。

「受けてみて…デイバインバスターのバリエーション！」

前方に巨大な魔法陣を展開する。

「Starlight Breaker」

桜色の魔力がなのはの前に集まり、集束され、巨大な桜色の魔力弾が生成された。

「これが私の全力全開！」

レイジングハートを振り上げた。

「スターライト・ブレイカー……！」

なのはがレイジングハートを振り下ろすと、巨大な桜色の閃光がフェイトに向かって放たれた。

「はぁ……！」

フェイトは、片手に持つてる魔力弾を桜色の閃光目掛けて放った。

フェイトの魔力弾は、桜色の閃光に掻き消された。

「……！」

驚いたフェイトだが、すぐに障壁を張って防御する。だが、障壁は

桜色の閃光の前に簡単に破れてしまう。
フェイトは、成す術もなく閃光の中に飲み込まれた。

*

やがて閃光が収まり、二人の姿が見えてきた。

「なのは！」

「フェイトー！」

なのはは、空中で息を切らし、フェイトはバルディッシュを手放して海に落ちていく。

「フェイトちゃん！」

海に落ちる前に、なのははフェイトを抱き抱え、バルディッシュも掴んだ。

フェイトを抱えて、なのはは銀時達の元へ飛んでいった。

「ん……」

銀時達の元へ着いたところで、フェイトが目を覚ました。

「フェイト！」

「あつ、フェイトちゃん気がついた？」

アルフとなのはが声をかけた。

「…………私…負けたんだね…」

フェイトの表情が暗くなった。

「フェイト」

銀時が声をかけた。フェイトは、銀時に顔を向けた。

「よくやったよお前は。最後まで諦めずに戦ったんだ。恥じる事なんて何もねーぜ」

そう言っただけで銀時は微笑んだ。

「銀時……」

銀時の言葉に、フェイトは目に涙を浮かべる。

「あんた…本当にいい奴だねえ銀時い……」

銀時の隣にいるアルフは泣いていた。

「何でお前が泣いてんだよ」

と銀時。

「Put out」

バルディッシュからジュエルシードが出てきた。

その瞬間。

「アアアアアア！！！」

空が曇り、黒い雲から巨大な紫色の雷がフェイトに降り注いだ。

「フェイト！！」

「フェイトちゃん！！」

銀時となのはが叫ぶ。

九つのジュエルシードは、雲に出来た歪みの中に消えていった。

よろけるフェイトを銀時が抱き抱える。

「プレシアアアアア！！！」

雲の歪みに向かって、銀時は怒りの叫び声を上げた。

アースラでは、プレシアの居場所を突き止めようとしていた。

エイミイが座標を割り出した。

リンディが立ち上がる。

「武装局員、転送ボードから出動！任務は、プレシア・テストロッサの身柄確保！」

*

時の庭園。プレシア・テストロッサの部屋。

プレシアは、手で口を押さえて咳込んでいた。

「ハア…ハア…次元魔法は…もう体が耐えられないわね……」
顔を苦痛で歪ませる。

「それに…今のでこの場所も掴まれた……」

プレシアは、隣に映し出されてるフェイトの姿を見つめた。

「フェイト…よくここまで戦ったわね……」

フェイトを見つめながら、プレシアは優しく微笑んだ。

「こんな母さんの為に……今まで、よく頑張ったわね……」

愛おしそうにフェイトを見つめる。

「銀時…アルフ……フェイトをお願い……」

プレシアは、二人にフェイトの事を託した。

「さあ…全てを終わらせましょう」

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

近藤「真選組局長の近藤勲だ！」

銀八「ゴリラか」

近藤「ちよっ！銀八先生！？」

銀八「質問行くぞオ」

近藤「無視するな！まあ、良いか。まずはペンネーム『咲夜』さんからの質問

『それじゃあ質問です

こっちの銀さんは棗鈴という女の子になりましたけど

銀龍や近藤達はどっ思いますか？』マジで！？万事屋女になったの
！？』

銀八「ああ、転生してな」

銀龍『主が女になってしまつとは』

土方「万事屋が女か……プフッ」

沖田「面白そうでさア（黒笑）」

銀八「一人よからぬ事考えてるよ！と言う訳で『咲夜』さん廊下に
立ってなさい」

近藤「次だ！ペンネーム『黒神』さんからの質問
『では質問、

ナナフシさんへ

第二章では桂もエリザベスも出ますか？

ミラクル∞へ

ここでも僕のところでも出番がない気分はどうでしょうか（黒笑）

お妙へ

『リリカル銀魂シリーズ』での新八はロリコンアイドルオタクに堕ちていますが、そんな弟を受け入れますか？』新八君はどんな姿でも俺の義弟だ！」

銀八「お前にじゃねえよ！しかも殺されるぞ！一つ目だが」

ナナフシ「はい、出します。やっぱ桂とエリザベスも出した方が面白そうですしね」

銀八「二つ目だが」

ミラクル∞「ミラクル∞定着！？出してほしいに決まってるでしょうが！ってか、黒神！いい加減僕を出せええええええええええ！交渉してきてやるううううううう！」

新八は黒神さんの所に行った。

銀八「行っちゃったよ！で、三つ目だけど」

お妙「新ちゃん……新ちゃんは……ど、どんなになっても私の弟よ」

銀八「めっちゃ動揺してる！？」

近藤「と言う訳で『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次だな。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『1・クロノに質問。銀さんとマヨ方さんにボコボコにされた感想はどうですか？

2・フェイトとなのはに質問。マヨ方さんのもう一つの人格であるトッシーをどう思いますか？

3・ユーノに質問。淫獣になったご感想をどうぞ。『一つ目だが』

クロノ「不愉快だ！本当の事を言っただけだ」

銀時「ほう……まだ足りねえみてえだなア」

土方「覚悟しろよ……」

クロノ「ぎゃあああああああああ！」

銀八「あいつ等はほつといてなのは、フェイト」

なのは「何て言えば良いんだろ……ちょっと気持ち悪いかな」

フェイト「何故か嫌な予感がする」

銀八「フェイトのその予感は当たると思うぜ。最後だが」

ユーノ「何で淫獣ですか！？って言うか悲しいですよ！」

銀八「と言う訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

近藤「次だな。ペンネーム『支配者』さんからの質問
『質問です。』

なのはへ、

クロノが貴方の人形を作ってエロイ目で見まくっていました。如何しますか？

沖田へ

クロノが貴方の事を土方よりも無能な変態だと罵っていました。如何しますか？

フェイトへ

クロノが貴方の人形を作って『乳クリマンボー』をしていました如何しますか？』一つ目からだな」

なのは「スターライト・ブレイカー！」

クロノ「僕そんな事してんぎゃああああああああああ！」

沖田「良い度胸ですねエ」

クロノ「沖田さん！？」

クロノは沖田に何処かに連れて行かれた。

その後……。

クロノ「ぎゃあああああああああ！」

断末魔が響いた。

銀八「最後まで耐えてくれ」

フェイト「サンダースマツシャー！」

クロノ「ぎゃあああああああ！」

クロノはボロボロになった。

銀八「と言う訳で『支配者』さん。クロノを保健室に連れて行きなさい」

近藤「それだけ！？最後の質問だ。ペンネーム『真王』さんからの質問

『真王』仮妻だ。間違えんな。未婚だろうが。質問」

『冷血の鬼姫に出演のオリキャラズの容体プロフィール作ったら？』

『そっちのオリキャラズを超次元学園に参加させたいんですが……』

『雷雅は獲物をとられるのが嫌ですか？』『一つ目だが』

ナナフシ「考えようですねエ……誰も元にしていないからなア……

まあ、作ってみます。二つ目ですけど、良いですよ」

近藤「最後だが」

雷雅「そうだなア……獲物を取られるのは嫌だな。俺が目付けてるのに、仲間でもない奴が殺る場合はそいつを殺る」

銀八「相変わらず恐っ！と言う訳で『真王』さん。廊下に立ってなさい」

近藤「質問は以上だ！」

銀八「それではまた次回」

第十六訓：決闘に横槍を入れるな！（後書き）

ナナフシ「もうすぐ無印編が終わる」

銀時「そうだな」

ナナフシ「投稿された『喋る刀』です。まずはスバルが使う事になるやつから」

名前：天虎^{てんこ}

デザイン：鞘と柄は白虎のように白く、刀身は虎の模様が描かれている。刀身は青みが掛かっているので、蒼い光を薄く放つ。

鐔は普通とは異なり、白い虎の頭部を模したような形状で、虎の口から刀が出ているように見える。

ナナフシ「ですね。次は『麒麟』です」

名前：雷麟

デザイン：鞘と柄が黒く、刀身は黄色い。柄の先端には黒い束ねられた糸がある。

鐔はない。

ナナフシ「名前の投稿はありましたが、デザインは俺自身が作りました」

銀時「おい！」

ナナフシ「一樣、『炎凰』のデザインも紹介します」

デザイン：刀身は赤く、鳳凰が描かれており、鞘と柄は黒い。鍔は少し特殊で、羽が丸を描いた感じのやつ。

ナナフシ「これが『炎凰』のデザインです」

銀時「最後は『玄武』を元にしたやつか……」

ナナフシ「……まだ決まってるない」

銀時「は？」

ナナフシ「投稿もされてないし、俺自身も考えたがうまく見つからない」

銀時「おいおい」

ナナフシ「『玄武』はまだ募集します。俺も頑張らねえと」

銀時「それじゃ、また次回な」

第十七訓：笑顔にも色んな種類がある（前書き）

ナナフシ「後書きで、『玄武』を発表したいと思います」
銀時「おい！」

ナナフシ「それではどうぞ！」

銀龍『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ』

第十七訓：笑顔にも色んな種類がある

管理局の武装局員が、時の庭園に到着した。

アースラのブリッジに銀時、真選組、なのはとユーノ、それにフェイトと人間形態のアルフが入室してきた。

フェイトは銀時となのはの間に立っている。局員がフェイトに拘束具を付けようとしたが、

「んだコラ！お呼びじゃねーんだよ！殺すぞ！」

「ケツの穴にホース突っ込んで、水流して奥歯ガタガタ震わせてやりましょうかイ？」

と、銀時と沖田の脅しで拘束具は付けられなかった。

ブリッジには、時の庭園の様子が画面に映し出されていた。

「お疲れ様」

リンディが銀時達に近寄ってきた。それから、フェイトに顔を向けた。

「フェイトさん？初めまして」

フェイトは、手に待機状態のバルディッシュを握って顔を俯かせる。

「総員、玉座の間に進入。目標発見」

時の庭園では、武装局員がプレシアのいる部屋に突入していた。

「プレシア・テストロッサ。時空管理法違反の容疑で逮捕します」

「速やかに武装を解除してください」

局員の言葉に、プレシアは動じる事なく玉座に座ってる。

局員がプレシアを囲み、数名の局員が後ろに回る。

プレシアは後ろに回った局員を睨みつけた。

（あれ？ちよつと待て……このまま映像が映し出されると……）

銀時の顔に焦りの色が浮かんだ。

局員が隠し通路を見つけてしまう。

そして、アレを見つけてしまう。

「しまった！映すんじゃないエエ！！」

『やめろオオオオオ!!』

銀時と銀龍が慌てて叫んだ。

だが、もう遅かった。

「!!!?」

映し出された映像に、銀時と銀龍以外の全員が絶句した。

ガラス張りのケースの中、緑色の液体の中を漂うアリシアが映し出された。

「……………」

「……………」

フェイトとなのはは、驚愕に言葉も発せられなかった。

「おい、万事屋……こいつぁどういう事だ?」

動揺しながら土方は、銀時に尋ねた。

だが銀時は、土方には答えず顔を険しくして歯を食いしばった。

局員がアリシアの亡骸が入ったケースに近づいた時、

「ぐわあああ!!」

ケースの前に現れたプレシアに弾き飛ばされた。

「私のアリシアに近づかないで!!」

局員を睨みながら叫んだ。

「う…撃てう!」

局員は武器を構えて、閃光を放った。

だが、閃光はプレシアの障壁によって掻き消された。

「うるさいわ…」

プレシアは、手を前に突き出した。

「危ない、防いで!」

リンディが叫ぶが、

「ぐわあああ!!」

玉座の間に沢山の雷が落ち、局員達は悲鳴を上げた。雷を受けた局員達は、その場に倒れた。

「いけない!局員達を送還して!」

リンディの指示で、局員達はアースラに転送された。局員達は怪我

を負ったものの、死者は一人もいなかった。

その事に、銀時は疑問に思った。

「おかしいぜ」

『うむ』

「どうした？万事屋、刀」

銀時と銀龍の言葉に土方が反応した。

「俺が受けたアイツの雷の威力は、あんなもんじゃなかった…」

「どういう事ですかイ。旦那」

沖田は訪ねるが、銀時は答えない。

（手加減してるのか？……それとも予想以上に病が進行してるのか？）

プレシアを見つめながら銀時は考えた。

「アリ…シア？」

フェイトは目を見開いて、映像に映る自分と瓜二つの少女を見つめた。

プレシアはゆっくりとアリシアに近寄った。

「もうダメね…時間がないわ…たった九つのジュエルシードで、アルハザードに辿り着けるかわからないけど……」

プレシアは後ろを振り返った。

「…フェイト。そこにいるんでしょう？」

「…！」

プレシアに名前を呼ばれて、フェイトは体を小さく震わせた。

「貴女はね…アリシアの代わりにしようと…私が造ったアリシアのクローンなのよ……」

「…！？」

驚愕の事実、フェイトは信じられないと言った表情をする。

「…プレシアは最初の事故の時に、実の娘のアリシア・テストロツサを亡くしているの。」フェイト”と言う名は、当時の彼女の研究につけられてた開発コードです」

エイミィが陰しい表情でみんなに話した。

「よく調べたわね……」

プレシアは、ゆっくりと体をこちらに向けた。

「フェイト。正直に言うわ……私ね……貴女を造りだした時から、貴女を好きになれなかったの……」

表情を暗くしながらプレシアは語る。フェイトは体をビクツと震わせた。

「何故、貴女を嫌っていたのか……ある人のお陰でようやくわかったわ。私は貴女を『アリシアの代わり』としてしか見てこなかった……」

フェイトも銀時も周りにいる全員が、黙ってプレシアの話を聞く。

「……でもそれは間違い。アリシアの記憶をあげても貴女はアリシアじゃないし、アリシアの代わりでもない……貴女は『フェイト』だもの……」

プレシアは遠い目をしながら話を続ける。

「フェイト……貴女を『フェイト』という、私の娘として見た時に……」

……私の気持ちは大きく変わったわ……」

フェイトはジツとプレシアを見つめる。

「ごめんなさいフェイト……今更謝っても許されないのは、わかってるわ……でも……これだけは貴女に伝えておきたいの……」

そこでプレシアは優しく微笑んだ。

「フェイト……貴女の事が大好きよ」

優しく微笑みながら、プレシアは娘に自分の想いを伝えた。

「……！……」

プレシアの言葉を聞いて、フェイトは体を大きく揺らした。

目からは大粒の涙が零れ、その場に泣き崩れた。

「アルフ。貴女もいるんでしょ？」

プレシアは、今度はアルフに声をかけた。

「こんな私が頼めた義理じゃないけど……これからもフェイトをお願い……」

「プレシア……」

その時、緊急事態のアラームが鳴った。

「大変！屋敷内に魔力反応多数！」

「何だ！？何が起こってる！？」

クロノが動揺する。

屋敷の床から、様々な形をした無数の傀儡兵が現れる。

「庭園敷地内に魔力反応！しかも50、80と数を増やしていきま
す！！」

「プレシア・テストロッサ！一体何をするつもり！？」

プレシアは、アリシアの入ってるケースを固定装置から取り外した。

「それから銀時」

「！」

銀時は画面のプレシアを見上げた。

「最後に貴方に礼を言うわ……」

笑みを浮かべるプレシア。

「ありがとう」

次の瞬間、九つのジュエルシールドが強い光を発した。

「次元震です！中規模以上！！」

「振動防御！ディストーション・シールドを！」

リンデイが局員に指示を出す。

「ジュエルシールド九個発動！次元震、更に強くなります！」

「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動！！」

「了解！」

指示を受けた局員が動く。

「規模は更に拡大！このままでは『次元断層』が！！」

『次元断層』とは、いくつもの並行世界を壊滅させる程の災害。

局員達が慌ただしく騒ぐ中、銀時は画面のプレシアを見つめていた。

（バカヤロー……）

爪が食い込む程に、拳を強く握る。

「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで、

あと三十分足らずです!」

局員が焦った声で、報告する。

「あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードと同型のロストロギアです!それを発動させて、足りない出力を補っています!」

エイミイが説明した。

リンディは、顔を陰しくした。

*

「……銀時、銀龍」

銀時の後ろに立っているアルフが呼んだ。

銀時は静かに振り返った。

銀龍も姿を現す。

「あんた等……全部知ってたのかい?」

怒り、悲しみ、様々な感情が混ざった視線を銀時に向ける。

「『……………』」

銀時と銀龍は黙ってる。

真選組や周りの視線も銀時と銀龍に集まる。

「答えてよ!」

アルフが声を荒げる。

「……………すまねえ」

『すまぬ……………』

「謝って済む問題か!」

感情に任せて、アルフは右拳を銀時の顔に振るった。殴った後、アルフはハツとなる。

「あ……………ごめん、銀時……………あたし……………」

アルフは、震える右手を引っ込める。

「……オメーが謝る事はねーよ」

『そうだ……黙っていた我等も悪い』

場が重い沈黙に支配される。銀時は、隣で泣き崩れてるフェイトを見た。

「フェイト」

銀時が声をかけた。

「すまねえ」

『すまぬな』

フェイトにも謝った。

「……銀時と銀龍は……悪くないよ……」

小さな声で、フェイトは答えた。

フェイトを見つめながら、銀時は口を開いた。

「……フェイト。プレシアはアルハザードに行こうとしてる。アルハザードに辿り着けるかどうか、本当にアルハザードがあるかどうか……それは俺にもわからねえ」

フェイトは俯いたまま、銀時の話を聞いている。

銀時は、話を続ける。

「ただ、このままプレシアを放っておけば……アイツが、お前の手の届かない所に行っちゃうって事だけは確かだ」

銀時の言葉に、フェイトはかすかに、本当にかすかに肩を震わせた。

「このままここで泣き崩れてるか、今の自分の殻を破って前に進むか……今ここで決める」

その言葉を最後に、銀時は黙った。

再び、場が沈黙になる。フェイトは考える。これからどうすべきか。隣にいる銀時は、静かにフェイトの答を待つ。

「……私は……今まで母さんの為に頑張ってきた……母さんに笑ってほしくて……」

顔を俯いたまま、フェイトが沈黙を破った。

「……さつき母さんは……私に笑ってくれた……でも……！」

フェイトは、ギョツと両手を強く握った。

「あの時の母さんの笑顔は……すごく寂しい……悲しい笑顔だった……」

…！」

涙を流しながら、フェイトは言う。

「私は…もう母さんに、あんな笑顔をさせたくない！」

フェイトの声が、ブリッジに響いた。

やがてフェイトは、ゆっくりと顔を上げた。涙は止まっていた。

「銀時」

フェイトは、銀時を見上げながら言葉を繋げた。

「私、母さんを助けたい！」

迷いのない、固い決意の宿った瞳で銀時を見つめながら、フェイトは答を出した。

その答を聞いて、銀時は微笑んだ。いや、銀時だけではない。真選組の三人も微笑んでいた。

「フェイト」

アルフが声をかけた。

「アルフ…また、私に力を貸してくれる？」

立ち上がりながら、フェイトはアルフに尋ねた。

「もちろんだよ！フェイト！！」

フェイトに抱き付きながら、アルフは答えた。

「ありがとう。アルフ」

フェイトは微笑みながら、アルフに礼を言った。

「フェイトちゃん！」

呼ばれてフェイトは、振り返った。

なのはとユーノが立っていた。

「私も一緒に行くよ！！」

「僕も！」

二人が力強く、フェイトに言った。

「……！！」

なのは達の言葉に、フェイトは目を見開いた。

「僕も行く！このまま放つてはおけない！」

クロノが言った。

「みんな…」

フェイトは、なのは達を見渡した。

「お前は一人じゃねえって事さ」

横から銀時の声が聞こえた。

フェイトは、銀時に顔を向けた。

「あの…銀時…」

「ん？」

銀時は片眉を上げた。

フェイトは、頬を少し赤くしながら、何か言おうとして戸惑ってる。

「その…一緒に来てくれる？」

上目遣いに、おずおずとフェイトが尋ねた。

銀時は微笑みながら、ため息をついた。

「ああ。いいぜ」

「！！」

銀時の答えを聞いて、フェイトは笑顔になる。

「俺は万事屋だ。頼まれれば何でもやるぜ！」

『そうだな』

銀時は、力強くフェイトに言った。

銀龍はそう答えた。

「トシ！総悟！俺達、真選組も行くぞ！」

近藤が、右手で拳を握りながら叫んだ。

「ああ、久しぶりの喧嘩だ。思いっきり暴れるぜ」

「そろそろ体動かさねーと、鈍っちまいますア」

土方と沖田もやる気満々である。

「よし。行くぜお前ら！」

銀時が大声で叫んだ。

「待て万事屋」

「何だゴリラ？」

銀時が振り返った直後、

「オラアアアアアアア！」

真選組の三人が銀時に襲いかかった。

「ごばあ！な…何しやがんだテメーら…！？」

わけがわからないと、銀時は真選組に向かって叫んだ。

「テメーも、一人で背負ってんじゃねエエ！」

と土方。

「万事屋！一言、俺達にも言え！」

と近藤。

「すまねえ旦那。流れる的に俺も殴りまさら」

と沖田。

それぞれ言いたい事を言い終わると、再び銀時に鉄拳制裁を加えた。

「ぐわあああああ！！」

暴力の爆心地から、銀時の断末魔のような悲鳴が聞こえた。

フェイトとなのはは、オロオロしながらその様子を眺めてる。

やがて、鉄拳制裁が終わり、銀時が床を這いずりながらフェイトの方へ向かった。

「ぎ…銀時…大丈夫…？」

心配そうにフェイトが尋ねた。

「お…おお…大丈夫だ…」

言いながら銀時は、顔を上げた。

「それじゃあ行くか。お前の母ちゃんの、本当の笑顔を取り戻しに」

「うん！」

銀時の言葉に、フェイトは力強く頷いた。

「おまけ」

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ。質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

沖田「沖田総悟でさア」

銀八「お前かよ！まあ、質問行くか」

沖田「わかりやした。まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問
『黒龍』では、最後に質問します」

1・なのはとフェイトにお知らせ。なんとクロノとミラクル∞があなた達の大人モードの等身大人形で欲情して腰振ってたらしいです。

2・近藤に質問。お妙と大人フェイトと大人なのはどっちが綺麗ですか？

3・ミラクル∞とトツシーに質問。なんと今度はフェイトがあなた方を好きだと申ししていました。喜んでください。『ほほう……（黒笑）』

沖田は質問を見て黒い笑みを浮かべた。

なのはとフェイトは……。

なのは「最低です！」

フェイト「変態！」

魔法をクロノとミラクル∞に放った。

クロノ・ミラクル∞「『そんな事してんぎゃあああああああああ

ああああ！」「」

銀八「…………」

銀八は青ざめていた。

近藤「もちろんお妙さんだ！お妙さんが一番に決まっている」

銀八「こいつの事だからそう言うと思ったよ！最後だが」

フェイト「サンダーレイジー！」

トッシー・ミラクル∞「ぎゃあああああああああああ！！！」

「

フェイトは襲われる前に魔法をトッシーとミラクル∞に放った。

銀八「と言う訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

沖田「次でさア。ペンネーム『支配者』さんからの質問

『まあ、質問です。』

神楽に質問

この世で一番ブライクでダサイヒロインは神楽だ！とクロノが言っていました、どうしますか？

ミラクル∞に質問

クロノが貴方のことを「永遠にミラクル∞でいれば良いんじゃない

のか？所詮新八なんて存在する価値もないんだし」と言っていました。如何しますか？

お妙に質問

クロノが貴方と近藤の人形を使って結婚式を開いて遊んでいました。如何しますか？』これもまた面白そうでさア（黒笑）」

沖田がまた黒い笑みを浮かべる。

クロノはと言うと……。

神楽「あんだとコラアアアアアアアア！」

クロノ「ぎゃあああああああああああああ！」

ミラクル∞「価値がないとはどういう事だアアアアアアア！」

クロノ「あああああああああああああ！」

お妙「そんな事するんじゃないやねえええええええええええ！」

クロノ「ぐぎゃあああああああああああああ！」

クロノはもうボロボロであった。

銀八「と言う訳で『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

沖田「次でさア。ペンネーム『ケン』さんからの質問
『早速質問するかな。』

屁怒紹様へ

クロノが貴方様が大事にしていたお花や植物を管理局の正義の為に滅茶苦茶にし、更に貴方様の事を『生きる価値の無い化け物』と罵り、家族の事も罵っていました。

証拠映像もありますのでお話してやってください。

松平のつつあんへ

クロノが貴方様の娘である栗子さんを襲い、雌奴隷にしようと企んでいます。

このクロノを蜂の巣にしますか？それとも若本系の必殺技で処刑しますか？

土方へ

クロノが貴方が愛しているマヨネーズを『犬の餌』と罵り、唾を吐いて踏みにじり、貴方の事を変態トッシーと罵っていました。どうしますか？

クロノよ・・・絶望に唸るがいい・・・『今回はクロノ質問が多いですぜエ（黒笑）』

ただでさえボロボロのクロノに……。

屁怒紹「少しO H A N A S Iしましょうか」

クロノは怯えながら連れて行かれ……。

ら質問だ。

『クロノに質問…もし自分が女の娘になったら、どういった反応をする？』『クロノ』

クロノを無理矢理起こし、答えさせる。

クロノ「そりゃ、驚くだろ……」

短くしか言えず、力尽きたのか、ガクンとなってしまうた。

銀八「と言う訳で『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

沖田「質問は以上でさア」

銀八「それではまた」

第十七訓：笑顔にも色んな種類がある（後書き）

ナナフシ「『玄武』を決めました」

銀時「ほう」

ナナフシ「どうぞ！」

玄武帝
げんぶてい

デザイン：刀身が通常の刀より三倍も大きく重量級の長刀。

柄が長く、柄の先端には蛇の頭が模されている。

鍔は亀の甲羅を模した形で、見た感じは亀の甲羅から刀と言う首が出ている感じだ。

刀の強度と破壊力は飛び抜けている。

鞘は刀に合わせた様に大きく、黄金の蛇の飾りが全体的に撒きついている。

刀身の強度は刀よりも更に硬く、盾に使える。

ナナフシ「『玄武帝』になりました。一樣、五天神刀の中では一番の強度だと思えますよ……ってか、元々そう考えてた」
銀時「そうかよ」

ナナフシ「また次回！」

銀時「たまには次回『~~~~~』とか言ったらどうなんだ！」

ナナフシ「書く時の思いつきで」

銀時「おい！」

投稿してくれた人達ありがとうございました！

第十八訓：邪魔する奴ってやつば居るんだね（前書き）

ナナフシ「……」

銀時「どうした？」

ナナフシ「いや……『真王』さんの質問で冷血の鬼姫に出演しているオリキャラの容体プロフィール作ったら？ってあったけど……髪型と髪色と目の色しか思いつかないんだよね。冷血の鬼姫でも目と髪の色だけだったし」

銀時「おい！」

ナナフシ「まあ……始めようか……」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀」始まります」

第十八訓：邪魔する奴ってやつば居るんだね

銀時達は、時の庭園に転送された。
直後、

「おぼろろろろー！！」

真選組は盛大なゲロを吐いた。

「きゃあ！？だ！大丈夫ですか！？」

「ど…どうしたんですか！？」

なのはとユーノが驚く。

「おいおい。今からそんなんじゃ、先が思いやられるねえ」

銀時は、憎たらしい笑みを浮かべて真選組を見下ろす。

「いや、あんたも最初に来た時、ゲロ吐いたじゃないか」

アルフが目を細めて言った。

「テメエも吐いてたのかよ！！」

アルフの言葉を聞いて、土方は銀時に怒鳴った。

「バツカ、アルフ！お前それ言うなや」

と銀時。

「…気持ち悪……」

口を押さえながら、土方達が立ち上がる。顔色はまだ少し青い。

「銀時もそうだったけど。ここはさっきまでとは別空間で環境も違うから、魔導師でない貴方達は慣れないと体調が悪くなるみたいなの」

フェイトが土方達に説明した。

「なるほど…つかテメー知ってたんなら教えるや！」

土方は、銀時に向かって怒鳴った。

「いやゝ悪いな。すっかり忘れてたぜ」

悪意に満ちた笑みを浮かべながら、銀時が答えた。

「ふざけんなよ、コノヤロー！！」

銀時に掴みかかる。

「ちょっ…止せ、トシ！」

『落ち着け土方！』

近藤と銀龍が、二人を止めようとする。フェイトやなのは達は、困りながら様子を見ている。

「旦那ア、土方さん」

沖田がいつもの、のんびりとした声で二人を呼んだ。

「何だ！？」

二人は沖田に顔を向けた。

「お二人が騒いでる間に…」

言いながら沖田は、前方を指差した。

沖田が指差した先には、様々な鎧の形をした、沢山の傀儡兵が剣や槍などを持って構えていた。

「おいでなすったぜイ」

ニヤリと沖田は、笑みを浮かべた。

フェイト達もデバイスを構える。

「い…いっぱいいるね」

なのはは、緊張した表情でレイジングハートを両手で構える。

「まだ入口だ。中にはもつという」

クロノは、前方の敵を見据える。

銀時がゆつくりとフェイト達の前に出た。

「フェイト。俺達がこいつらを片付けるから、お前達は俺達の後に続け」

「え？」

フェイトは、銀時を見上げた。銀時の横には、真選組が居た。

「でも銀時…」

心配になって、フェイトが声をかける。いくらなんでも敵の数が多いすぎる。

「オメーは母ちゃんを助ける事だけ考えろや」

銀時は腰の木刀『洞爺湖』に手をかける。左手には銀龍を持つ。真選組も刀を構える。

沢山の傀儡兵が一斉に銀時達に襲い掛かる。

銀時は木刀を抜いて、横薙ぎに振るった。

次の瞬間、複数の傀儡兵は、胴が粉々になって吹き飛んだ。

フェイトやなのは達は、目を丸くした。

「はいイイイ！次イイイ！」

銀時は傀儡兵の軍の中に飛び込みながら、さらに木刀と銀龍を振るった。

傀儡兵の頭は砕いたり、真っ二つに斬ったり、武器を破壊して倒していく。時には斬撃を放っている。

「うらアアア！」

土方の刀が、傀儡兵を真っ二つに両断した。休まず刀を横薙ぎに振るって傀儡兵の首と胴体を切り離す。

「やりますねエ。旦那」

沖田は目にも止まらぬ剣技で、傀儡兵達を次々と切り裂いていく。

「ぬうおりやああああ！」

近藤が叫びながら、豪快に刀を振り下ろす。近藤の刀は、他より少しサイズが大きい傀儡兵を両断した。

「す…すごい…！」

なのは達は、デバイスを持ったまま身動きができなかった。

ハッキリ言って、なのは達が出る幕は、これっぽっちもなかった。

まさに鬼神の如き強さで暴れ回る万事屋と真選組。

「な…なんてデタラメな連中なんだ…」

クロノは、驚きを通り越して半分呆れていた。

もう誰にも止められない。銀時達が傀儡兵を次々倒していく。

そして、傀儡兵を倒し終える。

「よし！行くぞフェイト！」

「うん！」

銀時の声に答えながら、フェイトは走り出した。

＊

中に入って走り続ける。

床には所々、穴が空いていて空間が歪んでいる。

「その穴『虚数空間』だから気をつけて！」

クロノがみんなに叫んで注意した。

「虚数空間？」

沖田は首を傾げた。

「あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間だ。落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がってはこれない」

クロノの言葉を聞いて、なのはは冷汗を流した。

「まっ、要は落ちなきゃいいんだろ」

言いながら銀時は、走り続ける。

前にある扉を蹴破って中に入る。部屋には、更に沢山の傀儡兵がいた。

クロノが上に続く階段を見つけた。

「ここから二手に別れよう」

クロノがみんなに提案した。

「よし。そんじゃ公平に『ジャンケン』で分けるとすっか」

「え？」

銀時の案にクロノは顔をしかめた。

「銀時！こんな時にジャンケンなんて……」

「ジャ〜ンケ〜ン！」

クロノの異議をスルーして、ジャンケンを始める銀時。他のみんなも、戸惑いながらも手を構える。

「ポン！」

＊

「ひくじかゝた君。何で君は、いつつも俺と一緒にいるんだ？友達になりたいのか？友達になりたいのか？」

不機嫌な顔で銀時は、隣を走る土方を睨んだ。

「そりゃこつちのセリフだ。何で俺がテメーなんかと…！」

土方も銀時を睨みながら、眉を顰めた。

二人の後ろをフェイトとアルフ、クロノが走ってる。フェイトは苦笑いしながら、アルフとクロノは呆れながら二人の様子を眺めた。ジャンケンの結果、なのは、ユーノ、近藤、沖田が最上階の駆動炉のロストログア封印。銀時、土方、フェイト、アルフ、クロノが最下層にいるプレシアの元へ向かう事に決まった。ちなみにさっきの部屋にいた傀儡兵軍は、またも万事屋と真選組によつて全滅した。

「足引つ張んなよ、大串君」

「誰が大串君だ！」

さつきからずくっと、口喧嘩をしながら走る二人。

「あ…あの…」

フェイトが二人に声をかけた。

「何だ！？」

銀時と土方は振り返ってフェイトを見た。

「二人とも、仲良くやろう？」

微笑みながらフェイトは言った。

言われて銀時と土方は、互いに顔を見合わせた。

「…フェイトに言われちゃしようがねエ」

「…まっ、今は俺達で喧嘩してる場合じゃねーしな」

二人の喧嘩は収まった。

フェイトは嬉しそうに笑った。

「やれやれ。フェイトの方が大人だな」

「そうだねえ」

クロノとアルフが、ため息をつきながら言った。

*

最上階。

なのは達はエレベーターを使って最上階にやってきた。

エレベーターから出ると、駆動炉を守る大量の傀儡兵がいた。

「デイベインバスター！」

「やりますねエ！俺も負けてらんねエ！」

なのはと沖田が速攻で敵を倒していく。

（銀さんと一緒に良かったのにー！ー！ー！）

なのはは銀時と同じチームになれなかった事に怒っていた。

なのはが砲撃で敵を蹴散らした。

沖田も平然と傀儡兵を斬っていく。

その姿にユーノと近藤は青ざめる。

ユーノは何故なのはが怒っているのかわからなかった。

*

アースラ。

リンディが席を立った。

「私も出ます。庭園内でディストーション・シールドを展開して、次元震の進行を抑えます」

*

「うおらアアア!!!」

銀時達は、迫り来る傀儡兵達を倒しながら前に進む。飛行型の傀儡兵は、フェイト達が相手をする。

「サンダー・レイジー!!!」

フェイトから金色の雷が放たれた。雷を受けた傀儡兵達は爆発した。「スナイプ・ショット!!!」

クロノの黒いデバイスから、青い閃光が放たれた。閃光は傀儡兵達を貫いて、傀儡兵達は爆発した。

「はあああ!!!」

アルフも鋭い爪で、傀儡兵を切り裂いていく。

「どけ、ガラクタ共オオオ!!! てめーらに構ってる暇はねーんだアアア!!!」

『どけエエエエエエエエエ!!!』

叫びながら銀時は、木刀と銀龍で傀儡兵を斬り伏せながら先に進む。広い部屋に着いた瞬間、大きな音を立てて壁が崩れた。崩れて出来た穴から、両肩に砲身を付けた大型の傀儡兵が姿を現した。

「へっ。デケーのが現れやがったな」

「上等だコラ」

大型傀儡兵を睨みながら、二人は剣を構えた。

「銀時!いくら銀時でも...」

「お前達はそこにいろ!」

フェイトの言葉を最後まで聞かず、銀時と土方は大型傀儡兵に向かって走り出した。

「銀時!」

「土方さん!」

アルフとクロノが叫んだ。

大型傀儡兵は、銀時と土方に狙いを定めて砲身に魔力を集束する。魔力の光が強くなり、砲身から魔力砲が発射された。大爆発を起こ

して、部屋に轟音が響いた。

「銀時！！」

煙が立ち込める中、フェイトが叫んだ。

大型傀儡兵がフェイト達に狙いを定めた時、

「どこ見てやがるウウ！！」

煙の中から、頭から血を流した土方が飛び出して、大型傀儡兵の前に現れた。

「土方さん！」

クロノが叫んだ。

「うりゃああああ！！」

上段に構えた刀を振り下ろす。大型傀儡兵はバリアを張る。土方が振り下ろした刀は、バリアに亀裂を作った。

「ダメか！？」

クロノが叫んだ直後、

「うおおおお！！」

木刀を構えた銀時が、煙の中から跳んで姿を現した。

「銀時！！」

フェイトは弾んだ声を出した。

「食らいやがれエエエ！！」

土方が作った亀裂に、銀時は木刀を突き刺した。

亀裂は広がり、バリアはガラスのように粉々に砕け散った。

銀時は着地した。

「俺達の……」

銀龍を上段に構える。

「勝ちだアアア！！！！」

叫びながら銀時は、銀龍を振り下ろした。

巨大な銀色の斬撃が大型傀儡兵を真っ二つにした。

銀時と土方が離れた後、大型傀儡兵は爆発した。

「銀時！」

フェイト達が銀時と土方に駆け寄る。

「よお。怪我ねーか？」

そう言う銀時は、土方と同じく頭から血を流していた。

「いや、あんたが怪我してるじゃないか！」

アルフが声を上げた。

「こんなん、かすり傷だよ」

「…まったく、貴方達のデタラメさには本当に呆れる」

クロノは、ため息をついた。

「ふん」

土方は鼻を鳴らしながら、目を閉じた。

「そんじゃ、先に進むか」

銀時がそう言った途端だった。

「行かせねえよ」

いきなり目の前に人が現れた。

「行きたかったら、俺を倒してからにしな」

目の前に居たのは……、

「雷雅……」

「ちっ、厄介な奴が来やがった」

雷雅が居たのだ。

土方は舌打ちした。

「さア……始めようぜ……戦いを」

雷雅はそう言った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ。質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

土方「真選組副長土方十四郎だ」

銀八「ふんじゃ、始めるか」

土方「まずはペンネーム『支配者』さんからの質問
『質問です。』

銀時へ

貴方に魔法少女『リリカル銀時』の称号を与えます。

銀龍へ

クロノが貴方の事を『ロストロギア』として封印しようと襲い掛か
ってきたら如何しますか？

なのはへ

クロノが銀時を犯罪者に仕立てて逮捕しようとしています。ぶっ飛
ばしてやってください。『万事屋』

銀時「んな称号いるかアアアアアア！何故魔法少女『リリカル銀
時』！？何故魔法少女ってついてるんだアアアアアア！？」

銀八「二つ目だが」

銀龍「その時は、やむをえないな。ぶちのめす」

銀八「だそうです。最後だが」

なのは「そんな事しないでエエエエエエエ！」

クロノ「そんな事してnぎやあああああああああ！」

クロノはなのはの砲撃を喰らい、黒こげになった。

銀八「と言う訳で『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

土方「次で最後だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問だ

『黒龍』まあ、彼女いない歴十六年は放って置いて、質問にいきましよう」

1・ミラクル∞に質問。カップルのイベントであるクリスマスが近づいてきてますけど、どう思いますか？（黒笑）

2・ナナフシさんはジャンプを呼んでますか？

3・ナナフシさんに聞きたいのですが、うちのリリカル銀魂ライダーに出ている原作で知らない原作とありますか？『メガネ』

ミラクル∞「どうもこうも、悲しいに決まってるだろオオオオオオオオオオ！黒龍！そんなに僕を苛めて楽しいか！？」

銀八「楽しいからやってんじゃないのか？二つ目と三つ目を答える。ナナフシ」

ナナフシ「そうですね。ジャンプは毎週買うお金がないので、立ち

読みをしています。そのせいで、見逃したりするのが多いんですがね……だから、ほぼ単行本で補ってます。三つ目ですが、恋姫＋無双を知りませんね。仮面ライダークウガはもう記憶が曖昧ですし」

銀八「らしい。と言う訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

土方「質問は以上だ」

銀八「それではまた次回」

第十八訓：邪魔する奴ってやつは居るんだね（後書き）

ナナフシ「今回は銀時VS雷雅です」

銀時「よく現れるな」

ナナフシ「だね。戦闘狂だから。あの子」

銀時「まあ、そうだな」

ナナフシ「それではまた次回！」

第十九訓：迅雷との戦い（前書き）

ナナフシ「うゝむ、サブタイトルがまともだ」

銀時「それしかなかったんだろ」

ナナフシ「そうなんだよねエ……と言っ訳で！」

フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の子と白銀の刀』始
まります」

第十九訓：迅雷との戦い

「さア……始めようぜ……戦いを」

雷雅がそう言う。

「あいつは俺に任せろ」

銀時が木刀だけを構えて言う。

「で……でも……あいつはやばい感じだよ銀時」
アルフが銀時に言う。

「心配すんな……慣れてるさ」

銀時はそれだけを言う。

銀時はよく雷雅に狙われるのだ。

「あいつは万事屋に任せとけ」

土方も銀時に賛成する。

「う……うん」

フェイトは頷く。

銀時と雷雅が対峙する。

「行くぜ……銀の兄貴」

雷雅がそれを言うのと走り出した。

銀時も走り出す。

「ハア！」

雷雅が突きを放ってきた。

銀時はそれを左に交わして、木刀を雷雅の顔面目掛けて横薙ぎに振った。

「くっ！」

雷雅は薙刀の柄を少し上に傾けて防ぐ

雷雅はその後、素早く後ろに下がった。

「やっぱ、本気出すかなア」

雷雅はそう言うのと姿を消した。

『消えた！』

フエイト、アルフ、クロノは驚いていた。
プシュツ。

銀時の体に切り傷が出来る。

それが引き金になり、ドンドン銀時の体に切り傷が出来る。

「ちっ！」

銀時は舌打ちをする。

素早くて見えない雷雅。

銀時は目で追いかけようとするが見えない。
すると……。

「俺は後ろだぜ？」

銀時はその声に振り返った途端、腹に衝撃が走った。

銀時は腹を抑えて、ちゃんと見る。

雷雅が柄の先端で銀時の腹に打撃を入れたのだ。

「オラア！」

雷雅がそのまま薙刀を振り下ろしてくる。

銀時はそれを木刀で防ぐ。

つばぜり合いの状態だ。

「銀の兄貴……本気を出せよ」

「何言ってんだ？俺は本気だぜ」

雷雅の言葉に銀時は答える。

「嘔吐くなよ……なあ『白夜叉』」

雷雅はそう言う。

「それを言っなよ……『迅雷』」

銀時はそう言った。

お互いを異名で言い合った。

二人は一旦離れて睨み合う。

そして……走り出した。

「てえやああああああ！」

銀時が木刀を振り下ろす。

雷雅はそれを薙刀で防ぎ、銀時に蹴りを入れる。

「くっ！」

銀時は怯むが、雷雅に蹴り返す。

「ちっ！」

雷雅も怯む。

「ダラア！」

「でえいや！」

銀時と雷雅の武器が何度もぶつかり合う。

*

フェイト達はそれを見て驚いている。

「あの男……銀時と対等にやり合ってる！」

フェイトは驚いていた。

「何て言う戦いなんだい」

もうあれは武神同士の戦いにしか見えなかった。

「身体能力だけであれだけの戦いを！」

クロノも驚いていた。

あれに介入すれば死は確定だった。

それを黙ってみるしかなかった。

*

「オラア！」

銀時の木刀が雷雅の腹に叩き込まれる。

「ぐっ！ハア！」

雷雅は柄の部分で、銀時の顔を殴る。

「ちっ！てえや！」

「オラア！」

ガキイイイイイン！

木刀と薙刀がぶつかり合う。

「ちっ！」

銀時は雷雅を蹴り飛ばす。

「ぐっ！」

雷雅は態勢を立て直し、立ち上がる。

二人共ふらふらである。

「ハアハア……いい加減倒れるや」

銀時は言う。

「ハアハア……嫌だね」

雷雅がそう言う。

二人は睨み合ったまま動かない。

「なら……これで終わりだ！」

「望む所だ！」

それを言うと二人は走り出した。

「ハアアアアアアア！」

「オオオオオオオオ！」

銀時は木刀を振るい、雷雅は薙刀を振るう。

そして、すれ違う。

ブシュッ！

銀時の左肩に切り傷が入る。

そこから血が噴き出す。

「ぐっ！」

「ハアハア……また会おうや……銀の兄貴」

雷雅はそれを言うと倒れた。

「ハアハア」

銀時は息を整える。

「……やった！銀時が勝った！」

フェイトは喜ぶ。

フェイト達は銀時に近づく。

土方は手錠を取り出して、雷雅を逮捕しようとする。
だが……。

「！！」

土方は何かに気付き、後ろに飛んだ。

土方が立っていた場所にはクナイが数本刺さる。

「雷雅を逮捕なんてさせないよ」

現れたのは忍^{しのぶ}だった。

「ちっ！『流星の忍』星斑 忍か！」

忍は雷雅を担ぐ。

「私達は元の世界に帰るわ。また会えたら会いましょう」
それを言うと姿を消した。

「ちっ！逃げたか」

土方は手錠をしまった。

「そんじゃ、行くか」

「うん！」

銀時がそう言っているとフェイトは頷いた。

*

時の庭園、最下層。

プレシアは、アリシアの入ってるケースの隣に立っている。

「誰か乗り込んできたみたいね……」

上を見ながら、プレシアは呟いた。

（恐らく管理局の執務官……）

プレシアは短く笑った。

「でも無駄よ。私を捕まえても……私はもう長くはない……」

悲しい表情を浮かべながら、プレシアはアリシアを見つめた。
「アリシア…ごめんなさい。こんな事になってしまつて……」
庭園が激しく揺れる。

「フェイト…貴女だけでも幸せになつて……」

プレシアがそう言つた直後、背後から爆音が聞こえた。

「！」

慌ててプレシアは、振り返つた。

「きたわね」

執務官が来たと思い、プレシアは杖を構えた。
だが、

「おう。最下層はここかい？」

聞こえてきた声にプレシアは驚いた。

聞き覚えのある声。

いえ、まさか……あの男がここに来るなんて……。

そして、壁に空いた穴から人影が姿を現した。

「どーも。万事屋で〜す」

銀髪の侍。

そして、

「母さん！」

自分の愛する娘。

「銀時…フェイト……」

プレシアは、信じられないと言つた顔をする。

フェイトは、固い決意の宿つた眼でプレシアを見つめた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ。質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「それじゃ、質問行こうか」

なのは「まずはペンネーム『真王』さんからの質問

『咲や葵は出ないんで？』

『銀龍の会いは？』

『新八と神楽の登場はいつに？』『咲さんと葵さんって誰？』

なのはは質問コーナーでも会った事がないので知らない。

銀八「後々に出会っぞ。咲は出てきます。葵は『月光閃火』さんが投稿したオリキャラと苗字は違うが名前は同じなので出すか、出さないか悩んでいるらしいです」

なのは「そうなんだ」

銀八「二つ目だが、銀龍との出会いは書きます。A、S編で書くそうです」

なのは「どんな風に出会ったんだろ？」

銀八「それはA、S編になってからな。最後だが、新八と神楽はA、S編に出します」

なのは「早く会ってみたいなア」

銀八「と言う訳で『真王』さん。廊下に立ってなさい」

なのは「次です。ペンネーム『黒神』さんからの質問

『黒神

「では質問です」

近藤へ

『リリカル銀魂シリーズ』の新八は寺門通親衛隊の隊士軍曹から鉄の掟と言う名で『リリカルなのはシリーズ』のグッズを奪いました。これは立派な強盗と同じですので兄以前に警察としてはどう思いますか？（黒笑）

マヨラーへ

僕の小説、『リリカル銀魂strickers（攘夷戦争）』では桂は主役の1人として大活躍しており、山崎もディエチと言う彼女を持って出番があります。

それに対して自分は出番はまだ先なので、そんな2人にどう思いますか（黒笑）

総悟へ

なのは好きの新八がなのはが銀時に惚れている事を知ったら、彼が

どれだけの絶望を味わうか創造してみてください（黒笑）『全部凄
いイジメ質問だね』

なのはは苦笑いする。

近藤「新八君！そんな事はしてはいけないぞ！警察として、将来の
兄として言うておくぞ！」

新八「あんたの義弟になるつもりはねえよ！」

銀八「あのバカ共はほつといて、土方くゝん」

土方「何で桂が活躍しているんだ！っていうか、何で山崎が先に出
てるんだよ！何で彼女いるんだよ！」

銀八「こっちで葵が出れば、お前にもチャンスはあるだろうが」

土方「はあ？」

銀八「ダメだ……こいつもわかってねえ。最後だが」

沖田「そうですねエ……」

~~~~~

新八「なのはちゃんが銀さんの事が好きだなんて……」

沖田「キス（嘘）もしてやしたぜ」

新八「ガーーーーーン！」

沖田「更には。。。 ×××（嘘）もしたらしいですぜ」

新八「ガンガン！」

新八は廃人と化し……引きこもりになって、現実を見なくなった。

~~~~~

沖田「こんな感じですかい？」

銀八「作者がこういうの下手だからな」

銀時「おい！あれじゃ、俺がロリコンじゃねえか！」

沖田「安心してくだせえ……大人の時と言う事にしやした」

銀時「そう言う問題か！」

銀八「ついでに銀時もイジメたな」

なのはは沖田の回想を見て顔を真っ赤にさせて気絶した。

銀八「なのは！と言う訳で『黒神』さん！廊下に立ってなさい！」

なのは「あれ？私は……」

銀八「次の質問行くぞ」

なのは「あ、はい。最後です。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍「まあ、彼には頑張って耐えてもらっしかないですね。では、質問します」

1・クロノに質問。なんで自分が嫌われているか分かりますか？

2・銀さんに質問。時空管理局と全面対決、なんて展開になったらどうしますか？ やっぱここは逃げますか？

3・なのはとフェイトに質問。クロノを一言で表すとどんな感じになりますか」『一つ目だけど

クロノ「分からない！何で嫌われているんだ！？」

銀八「知らないのかよ！二つ目だが」

銀時「さすがに無理あるからな。さすがに逃げ出すからな」

銀八「だそうだ。最後の質問をなのは、フェイト」

なのは「最低な人？」

フェイト「変態？」

質問コーナーのせいでクロノはなのはとフェイトにそう思われた。

銀八「だそうだ。と言う訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

なのは「質問は以上です」

銀八「また次回」

第十九訓：迅雷との戦い（後書き）

ナナフシ「やっと……やっと無印編の最後に近づいたアアアアアアアアアア！」

銀時「よかったな」

ナナフシ「早く終わらせたいなア」

銀時「頑張れ」

ナナフシ「俺は頑張るよ！銀さん！と言っ訳でまた次回！」

第二十訓：本当に大事なモノなら手放すな（前書き）

ナナフシ「銀魂のキャラポスコレクションを買ったぜ！」

銀時「で、何が当たったんだ？」

ナナフシ「高杉攘夷戦争時と沖田が当たった」

銀時「よかったじゃねえか」

ナナフシ「後、銀さんの攘夷戦争時がほしいなア」

銀時「金貯まったら買えばいいだろ」

ナナフシ「そうですね！それでは！」

銀時「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぜ！」

第二十訓：本当に大事なモノなら手放すな

「オラアアアアア！」

沖田は刀を振るって傀儡兵を倒す。

「ぬうおりやああああああ！」

近藤も刀を振るって傀儡兵を倒す。

そして、最後の一体を倒す。

周りには、傀儡兵の無残な残骸が散らばっている。

沖田と近藤の背後で、赤い光が輝いた。振り返って見ると、なのはが駆動炉のロストログアの封印に成功した。

「やった！」

ユーノが声を上げた。

その時、

（皆さん、よく頑張りました）

なのはとユーノに、リンディからの念話が聞こえた。

（私も現地で次元震を抑えています。おそらく、これで次元断層は起こらないでしょう）

「よかった……」

リンディの言葉に、なのはは安堵のため息をついた。

これで最悪の事態は防げた。

残すは………。

*

最下層。

フェイトは銀時達と共に、プレシアの前に降り立った。

「フェイト……どうして来たの……？」

プレシアは驚いた顔で、目の前にいるフェイトを見つめた。

「母さん…」

フェイトは、ゆっくりとプレシアに歩み寄る。

「貴女…何しにきたの…？」

目を細めてフェイトを睨む。その目にフェイトは足を止めてしまう。

「私は…」

真っ直ぐにプレシアを見つめる。

「母さんを助けにきました」

「…！」

フェイトの言葉に目を見開く。体がかすかに震えた。

「母さん。私は、母さんに笑ってほしかった…」

自分の想いをプレシアに伝える。

「母さんは…さっき私に笑ってくれた…けど、私が見たかった母さんの笑顔は…あんな悲しそうな笑顔じゃない！」

声が大きくなり、最下層にフェイトの声が響く。

プレシアと銀時達は、黙ってフェイトの話を聞く。

「母さんには…楽しそうに…嬉しそうに笑ってほしいの…心からの、本当の笑顔になってほしいの！」

母に伝える娘の想い。

フェイトの言葉が、プレシアの心を揺り動かす。この娘は、こんな私をまだ『母さん』と呼んでくれる。こんな私の為に、危険を覚悟してここまでできた。

杖を握るプレシアの手が震える。

「だから、母さん…」

そっと、プレシアに手を伸ばす。

「一緒に帰ろう」

優しく微笑む。

フェイトの言葉に、笑顔に、プレシアは目を見開き涙が出そうになる。

フェイトは手を伸ばしたまま、プレシアの答を待つ。

「……………」

プレシアは顔を俯いて、迷いを振り払おうとする。

「フェイト……」

顔を上げてフェイトを見る。

「ごめんなさい」

「！」

プレシアは杖を掲げる。

『主！』

「わかってらァ！トシ！」

プレシアの動きに気付いた銀時と銀龍は、土方を呼びながら走り出す。

「お前が”トシ”って呼ぶんじゃねーよー！！」

銀時の意図に気付いた土方も走り出した。

プレシアは掲げた杖を地面に叩いて、魔法陣を展開した。プレシアの足場が崩れていく。

「母さん！」

フェイトが叫んで走り出す。フェイトの横を銀時と土方が通り過ぎた。

崩れた足場が、プレシアとアリシアを飲み込もうとした時、

「おおおおー！！」

銀時が叫びながら、アリシアの入ってるケースを後ろに押しつけ、崩れた足場に落ちていくプレシアの手を掴んだ。

後ろにいた土方が、ケースを受け止める。

「銀時！！」

プレシアとフェイトの声が重なった。

「く……！」

銀時は両膝を地面に着き、右手でプレシアの手を掴み取る。

「は……離しなさい銀時！このままだと貴方まで……！！」

プレシアは、銀時の手を離そうとする。

「プレシア……アンタ、まだフェイトから逃げてる事に気付かないの

か？」

「え…？」

プレシアの手の動きが止まる。

「フェイトが、本当はまだ自分を恐れているんじゃないかと…自分が一緒にいたら、フェイトは幸せになれないと恐れて…アンタはフェイトから逃げてるんだ」

歯を食いしばりながら、銀時が言う。

銀時の後ろに立ってるフェイトとアルフ、アリシアの入ってるケースを後ろに運んでる土方、様子を見守ってるクロノも銀時の言葉を聞いている。

「プレシア…アンタを助けるために、危険を覚悟でここまできたフェイトがアンタを恐れてると思うか？自分を想ってくれる親がいて、他に何がいるんだよ」

プレシアを真っ直ぐに見つめながら、銀時が言う。

「もう逃げるんじゃないやねエ！！」

プレシアに向かって怒鳴る。

銀時の声に、プレシアは目を見開く。

「本当にフェイトの事を想っているなら、アイツの傍にいやがれ！」

銀時の言葉がプレシアの心に響く。

「その手で、その腕で、思いっきり抱きしめろ！涙が出るくらいに強く抱きしめやがれ！！」

銀時の叫び声が、最下層に響いた。

「この手は離さねえ」

プレシアの手を、更に強く握る。

「もう目の前で、大切なモノは取り零さねエ！！」

「銀時…」

必死に自分を助けようとする銀時を見つめる。

その時プレシアは、銀時の瞳に一瞬、悲しみの色が見えた気がした。銀時がプレシアを引き上げようとした瞬間、地面に亀裂が入った。

ガラガラと音を立てて、銀時の足下が崩れる。

「え？」

後ろで見ていたフェイトが小さな声を出した。

目の前の光景が信じられなかった。フェイトの目の前で、銀時とプレシアが崩れていく足場に飲み込まれていく。

『間に合わない！』

シルバー・オブ・アーマー

銀龍は白銀の鎧を展開しようとしたが、間に合わなかった。

「銀時！！母さん！！」

「銀時！！」

フェイトとアルフが同時に走り出した。

「万事屋アア！！」

「銀時！！」

土方はアリシアの入ってるケースを置き、クロノと一緒に駆け出した。

フェイトが落ちていく銀時に手を伸ばす。

だが、フェイトの手は虚しく空を掴み、銀時とプレシアは虚数空間に落ちていく。

フェイト達は、ただその光景を見ている事しかできなかった。銀時

とプレシアは穴の中に消えていった。

「…嘘だろ…？」

アルフが震える声で小さく呟いた。

「…母…さん…銀時…」

穴を見つめながら、フェイトは呟いた。

やっと、母さんと解り合えたかもしれないのに。銀時が必死に母さんを助けようとしたのに。

フェイトは、悲痛な顔で穴を見つめた。

その時、アースラにいるエイミーから連絡が入る。

「みんな！庭園が崩壊するわ！急いで脱出して！！」

焦った声で脱出を求めた。

「フェイト・テストロッサ！アルフ！土方さん！脱出するぞ！！」
クロノが三人に向かって叫んだ。

「…行くぞ。フェイト、アルフ」

重い声で土方が二人に言った。

「…でも…銀時が……」

アルフは、今にも泣きそうな顔をしていた。

「…野郎は、こんな事でくたばる奴じゃねえ」

そう言つて土方は、フェイトの方を向いた。

「アイツを信じる。信じて待つてろ。それに刀も居るしな」

それだけ言つて、土方は振り返つて歩き出した。

「フェイト……」

アルフが心配そうにフェイトを呼んだ。

フェイトは、拳を強く握った。

「……行こう、アルフ」

穴に背を向けて、アルフを連れて走り出す。

崩壊する庭園の中、転移魔法を使い、アースラに帰還した。

＊

アースラ。

「庭園崩壊終了。全て虚数空間に吸収されました」

「次元震停止します」

「断層発生ありません」

「了解」

局員の報告を聞いて、リンディは頷いた。

そして、土方が持ってきたアリシアの亡骸が入ったケースは、別室に保管された。

＊

医務室。

「ぎ…銀さんが!？」

クロノから、銀時とプレシアが虚数空間に落ちた事を知らされた。
なのはとユーノは愕然とする。

「…すまない」

クロノは頭を下げて、心からの謝罪をした。

「あの！何か助ける方法はないんですか！」

なのはは声を上げて言う。僅かな可能性を求めて。

「……方法は…ない」

目を固く閉じ、拳を震わせながら、クロノは悔しそうに答えた。

「そんな……」

なのはは表情を暗くする。

医務室は重たい空気に囲まれた。

*

独房。

フェイトとアルフ、真選組が入っている。

真選組も同室する事で、フェイトへの拘束具の取り付けはなくなった。

やはり銀時とプレシアの事がショックなのか、フェイトは顔を俯いたまま黙っている。隣にいるアルフは、心配そうにフェイトを見つめてる。

「元氣出せ！お嬢ちゃん！」

近藤が沈黙を破った。

「万事屋の野郎は、そんな事でくたばるような男じゃない！きっと

プレシアさんを連れて帰ってくるさ！！俺達が保証する！」

「旦那のしぶとさは、ゴキブリ並ですからねエ」

沖田も、いつもの軽い口調で言った。

「…うん」

フェイトは小さく頷いた。

（銀時…母さん…私、信じて待つてるから）

両手を胸に当てながら、フェイトは二人の無事を願い、信じて待つのだった。

*

真っ黒い空。

（アレ？なんだコレ？空が真っ黒だ…）

銀髪の男と長い黒髪の女が倒れてる。

（アレ？真っ黒なのは俺じゃねーか）

銀髪の男がうつすらと片目を開けてる。

（アレ？なんで俺、こんな所にいるんだ？アレ？こんな前にもなかったっけ？原作でやったよね？アレ…？）

*

「ん…」

プレシア・テストロッサは意識を取り戻した。

ゆっくりと目を開けると、顔に何か当たってる感触がした。プレシアは顔を上げて見ると、銀時の顔があった。

「きゃああ！？ぎ…銀時っ!？」

慌ててプレシアは起き上がって、銀時から離れた。

どうやら自分は、銀時の上に倒れていたようだ。深呼吸して気分を落ち着かせる。落ちていて銀時の脈を確認したり、息をしているか確認する。脈はあるし、息もしている。銀時はただ眠っているだけだった。

「よかった…」

銀時が無事な事に、プレシアはひとまず安心した。

銀時の無事を確認した後、周囲を見渡した。何もない真っ暗闇。だが明かりもないのに、自分の体と銀時の姿だけ妙にハッキリと見える。

「ここは一体…？」

プレシアは考えた。

自分達は確か、虚数空間に落ちたはず。という事はここは死後の世界？天国？地獄？少なくとも天国という感じではない。

顎に手を当てて考えていると、

「ふあゝ」

銀時が欠伸をかきながら、上半身を起こした。

「銀時！気がついたのね」

「あ…？プレシア…？」

寝ぼけながらプレシアを見た後、銀時は周りを見渡した。

「何この真っ黒い空間？」

銀時は目を細めた。

「私にも解らないわ」

プレシアは床に落ちてる、自分の杖を拾った。

銀時は立ち上がった。

「銀龍わかるか？」

『我にもわからん』

銀時は銀龍にも聞くが銀龍もわからないと答える。

「まさか仙人が出てくるとかないよな…？」

『それはないだろ』

銀時がそんな不安を抱いて、銀龍がツツコンだ時、

「おお。これは驚きました。自力でこの空間に来るとはどこからか、男の声が聞こえてきた。」

「！！」

すぐに銀時とプレシアは、周囲を警戒した。

周りには誰もいない。

「まあ待って下さい。私は敵ではありません」

また男の声が聞こえる。

「おい。コソコソ隠れてねーで、出て来たらどうだ？」

銀時は、腰に差してある木刀を掴む。左手には銀龍を握る。

プレシアも、杖を構えながら警戒を続ける。

「私なら、ここにいますよ」

「どこだよ？」

銀時はキョロキョロと周りを見る。やはり誰もいない。

「今、貴方達がいるこの空間ですよ」

「え？」

銀時とプレシアはポカンとなる。

『今……… なんて言っただ？』

銀龍が確かめる。

「だから、今、貴方達がいるこの空間ですよ」

声はそう言う。

互いに顔を見合わせる。それから顔を前に向ける。

「この空間が…貴方？」

プレシアが戸惑いながら尋ねた。

「はい。申し遅れました。私『アルハザード』と言います」

空間が自己紹介した。

「は？」

銀時とプレシア、銀龍は間拔けな声を出した。

しばし呆然となって、場が沈黙する。

「あゝ」

沈黙に耐えられず、『アルハザード』を名乗る空間が二人と一本に声をかける。

銀時の目が、カツと見開かれる。

「『アルハザードオオオオ!!?』」

ありつたけの声で、銀時と銀龍は叫んだ。銀時と銀龍の声が空間に響いた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生!」

銀八「ハイ。今回も質問コーナーやるぞオ。今回のアシスタントは」

フェイト「フェイト・テストロッサです」

銀八「それじゃ、質問行こうか」

フェイト「まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』では、質問にいきましょう」

1.なのはとフェイトへ。なんとクロノがあなた達の写真を見て欲情していました。どうしますか?

2・銀さんへ。このさい一夫多妻でラブーズたちを幸せにしたら？

3・ナナフシさんに質問です。全ての話をオリジナルにするのと、新八のハーレムものを書くの。どっちが辛いですか？」……なのは

なのは「うん」

二人はデバイスとバリアジャケットを展開し、

なのは「デイベインバスター！」

フェイト「サンダーレイジー！」

クロノ「ぎゃあああああああああ！」

クロノに魔法を放った。

銀八「ほつといて、二つ目だが……」

銀時「いや、何でそうなの！？一夫多妻って！無理だからな！絶対嫌な予感しかないからな！」

ナナフシ「良いかもしれない……」

銀時「するなアアアアア！」

ナナフシ「しょうがないなア、メインヒロインだけに」

銀時「変わらねえから！」

銀八「むかつく！ナナフシ最後の質問だけど」

ナナフシ「どっちでしょうね。新八のハーレムが一番考えにくいです。ね。オリジナルなら考えようがありますけど。だから、新八のハーレムが難しいです！」

銀八「だそうだ。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

フエイト「次で最後です。ペンネーム『ケン』さんからの質問『まあいい・・・質問しよう。』

お妙へ

クロノが貴方の事を『傲慢雌豚貧乳ゴリラ』と罵り、貴方が作った料理を『犬の餌以下の食い物でデメエは料理を作るな』と言っていました。

どうしますか？

クロノへ

貴方はエロノと呼ばれている由来はいつも女子更衣室や女風呂、女子トイレの盗撮をしたり、セクハラをしている所からきたのですか？（黒笑）

クロノへ

貴方に顔が屁怒組様の龍の屁怒組ドラゴンと屁怒組様の顔をしたキメラである屁怒組キメラを貴方に送りました。これをどうしますか？ちなみに魔法等の力は一切効きませんので絶望に唸って苦しんでボコボコにされてくださいえゝ（黒笑）

以上です。『クロノ……』

フェイトはクロノが哀れと思った。

お妙「んだと、コラアアアアアア！」

クロノ「言ってnぎやああああああああ！」

銀八「二つ目だが」

クロノ「そ……そんな事……して……い……ない」

銀八「すんげえボロボロだな。三つ目だが」

屁努紹ドラゴン「少し、O H A N A S Iしましょうか」

クロノは屁努紹ドラゴンと屁努紹キメラに連れて行かれた。

そして……、

クロノ「ぎやああああああああああああ！」

クロノの断末魔が響いた。

銀八「と言う訳で『ケン』さん。クロノをちゃんと病院に連れて行ってやって」

フェイト「質問は以上です」

銀八「また次回」

第二十訓：本当に大事なモノなら手放すな（後書き）

ナナフシ「『アルハザード』に来ました」

銀時「そうだな」

ナナフシ「アリシアは蘇るのか!？」

銀時「どうなんだ？」

ナナフシ「まあ、『アルハザード』で無理でも別の方法があるけど」

銀時「は？」

ナナフシ「と言う訳でまた次回！」

銀時「おい！最後のどういう意味なんだ!?!おい！」

第二十一訓：死んだ人と出会えると嬉しい（前書き）

ナナフシ「……」

銀時「珍しいな。お前が一日置きに投稿しないなんて」

ナナフシ「いやね。アリシアを蘇らせるべきか蘇らせないか悩んでた訳」

銀時「なるほど。で、後一つあるんだろ？」

ナナフシ「新しく買ったゲームのセブンスドラゴンにはまってました！今もはまり中！」

銀時「おい！」

ナナフシ「面白いんだから良いだろ！セブンスドラゴンで作ったキヤラクター三人とも俺が好きな声優だし」

銀時「誰と誰と誰だ？」

ナナフシ「杉。さんと水。さんと田。さんだ！」

銀時「oooooooooooooooooooo！それ完全に俺とフェイトとなのはの声優じゃねえか！？」

ナナフシ「だから、好きな声優さんだよ！そろそろ始めようぜ！」

銀龍『『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ！』

第二十一訓：死んだ人と出会えると嬉しい

「『アルハザードオオオオ!!?』」

ありつたけの声で、銀時と銀龍は叫んだ。銀時と銀龍の声が空間に響いた。

「まさか…ここが…アルハザード…?」

プレシアも驚きながら、再び周囲を見渡した。

自分達以外、誰もいない。何もない。ほとんど『無』に等しき空間。ここが、自分が探し求めてた場所『アルハザード』。

「嘘つくんじゃないエエ!こんな何もない真っ黒い空間がアルハザードだったらなア、俺の家の押し入れもアルハザードだろうがアアア!!」

「ちよつとオ!押し入れと一緒にしないでくださいよオ!」

銀時の言葉にアルハザードは怒る。

(何故だ?懐かしい感覚がする……)

銀龍は不思議に思った。

その時だった。

「ゲホツ…!ゲホツ…!ゴホツ…!」

銀時の隣にいるプレシアが、急に咳込んだ。

「プレシア!!」

銀時が駆け寄る。

「大丈夫か!?おい!しっかりしろ!!」

銀時は、プレシアの肩を抱きながら声をかけた。咳は激しくなり、最後には吐血をした。

「ハア…ハア…:…どうやら…もう限界みたいね…」

手に付着してる、自分の血を見ながらプレシアは呟いた。

「バカヤロー!諦めんな!何か方法があるはずだ!!」

『気をしっかりと持て!!』

必死にプレシアを助ける方法を考える。

その時、

「あの〜」

アルハザードの声がした。

「そちらの男ばかりに、気を取られて気付かなかったんですが…、貴女は病気なんですか？」

「ええ…不治の病よ……」

顔を上げながらプレシアは答えた。

プレシアの答を聞くと、アルハザードはしばし黙り込んだ。時折、う〜んと何か考え込んでいる声が聞こえた。

「…わかりました。貴方達がここに来たのも何かの縁。すみません。そちらの男の人の名前は？」

「銀時。坂田銀時だ」

アルハザードに聞かれて、銀時は名乗った。

「女性の方は？」

「プレシア。プレシア・テストロッサよ」

プレシアも自己紹介をした。

「では、坂田さん。テストロッサさんから少し離れてください」

「何するんだ？」

銀時は目を細めて空間を睨んだ。

「テストロッサさんの体を調べます。大丈夫です。絶対に危害は加えないと約束します」

ハッキリとアルハザードが言った。

銀時はしばし考えた後、プレシアに顔を向けた。咳は収まったが、プレシアは苦しそうな顔をしている。

まだアルハザードの事を、完全に信用したわけではない。だが、他に方法はない。

「…わかった。頼んだぜ」

「はい」

銀時の言葉に、アルハザードは力強く答えた。

銀時はプレシアから離れて様子を見る。

「では、テストロッサさん。そのまま動かないでください」

「え…ええ…」

戸惑いながらも、プレシアはアルハザードの声に従った。

プレシアの足下に巨大な魔法陣が展開された。

「ふむふむ…なるほど」

魔法陣を展開してから、アルハザードはブツブツ呟く。プレシアの体を調べているのだろう。

銀時は静かに様子を見守り、プレシアも黙って座っている。しばらくして、

「あゝはいはい。わかりました」

アルハザードの軽い声が響いた。

「じゃあ今から治しますんで、そのままじっとしてて下さい」

「え？」

アルハザードの言葉に、プレシアはポカンとなる。

足下の魔法陣が少し強い輝きを放った。時間にして二、三秒くらいか。輝きはおさまり、足下の魔法陣も消えた。

「オッケーです」

アルハザードがそう言った直後、

「…！」

プレシアは、自分の体の異変に気付いた。

「体が…軽いわ！痛みも苦しみも全くない！！」

「えっ！？」

様子を見守ってた銀時も、驚きの声を上げた。

慌ててプレシアに駆け寄る。

「信じられないわ…不治の病が治るなんて…！」

「そちらの世界では、不治の病かもしれませんが、私にとってはそうではありません。あつ、ついでに病気で弱ってた体を回復させて、健康状態も良好にしました。それなら別の病気にかかる心配はないでしょう」

と、軽い口調でアルハザードが説明した。

プレシアは、まだ信じられないと言った顔をして、自分の体を眺めてる。

「やるじゃねーかアルハザード！」

「いや、それほどでも」

銀時の言葉にアルハザードは照れた。

その時、プレシアはある事をアルハザードに聞くことにした。

「あの…アルハザードさん」

「あつ、呼び捨てで結構ですよ」

「じゃあ…アルハザード……貴方に聞きたい事があるの」

「何ですか？」

そこでプレシアは一旦、言葉を止めて目を閉じた。深呼吸をして、ゆっくりと目を開ける。

「貴方…死者の蘇生は可能かしら？」

険しい表情でプレシアは尋ねた。

隣にいる銀時は少し驚いたが、口は挟まなかった。

「死者の蘇生…ですか」

ポツリとアルハザードが呟いた。

プレシアは、手に汗を握りながら答えを待った。

そして、アルハザードはプレシアの問いに答える。

「申し訳ありませんが、いくら私の力でも死者の蘇生はできません」

プレシアは、アルハザードの答えを聞いて目を閉じた。

「そうよね…無理よね……そんな方法があるはず無いわね……」

顔を俯いて呟いた。

「…すみません」

本当に申し訳なさそうにアルハザードは謝った。

その時だった。

「あるのдаро？」

銀龍が答えた。

「あるのдаро？その魔法……何故隠す？」

銀龍が淡々と喋る。

「おい、銀龍？」

銀時は銀龍を不思議に思う。

プレシアは驚いた顔をしている。

「あなたは……その刀……まさか銀龍ですか？」

アルハザードが訪ねる。

『何故我を知っている？我は自己紹介はしていないぞ』

銀龍が言う。

「覚えてないんですか？」

『何をだ？』

アルハザードの問いに？マークを浮かべる銀龍。

銀時とプレシアもそうだ。

『我は記憶がないんだ。主と出会う前の記憶が……』

銀龍はそう言う。

「そうですか……」

アルハザードは黙り込む。

「銀龍……何であるって知ってたんだ？」

銀時が銀龍に訪ねる。

『何故だろうな……急にあると思った。記憶に一瞬だけそんなのが出てきた気がした』

銀龍はそう言う。

「わかりました……ありますよ」

「本当！？」

プレシアは驚く。

「ただし……特別ですよ」

「ええ」

プレシアは頷く。

「で……その死体は？」

『あ……』

アルハザードが訪ねると、二人と一本は間拔けな声を出した。事情をアルハザードに話す。

「では……ここに呼び出しましょう」

アルハザードがそう言うつと魔法陣が展開され、そこにアリシアの死体が現れた。

「それでは……」

アルハザードが言うつと、アリシアの所に魔法陣が展開される。そして、光が収まる。

「……ん」

アリシアはゆっくりと目を開けた。

プレシアはそれを見て涙を流した。

「お母さん？」

アリシアはそう言うつ。

「アリシア！」

プレシアはアリシアに抱きつく。

「どうしたのお母さん？涙が出てるよ？」

「大丈夫よ……何でもないの」

プレシアはギュツとアリシアを抱く。

「あんがとよ。アルハザード」

「いえいえ、あ、確かもう一人娘さんが居るんですよ。裸のままも何ですし……テストロッサさん。アリシアさんから一度離れてください」

「え……ええ」

言われた通りアリシアから離れた。

「それでは！」

アリシアの所に魔法陣が展開される。

すると、アリシアはフェイトと同じくらいに成長し、服も着ていた。

「あれ？大きくなった！」

アリシアは喜んでいた。

「アリシアさんの方が姉なのに、妹より小さいのはね。服はサーピスです」

アルハザードはそう言うつ。

「あれ？おじさん誰？」

「おじ……！？」

銀時はおじさんと言われてへこむ。

「あのさ……俺……加齢臭とかする？おじさんはやめてくれない？お兄さんって呼んでくれない？まだ二十代だから」

銀時はそう言う。

「ゴメンなさい！私はアリシア・テストロッサ！」

「俺は坂田銀時だ」

銀時はそう言う。

アリシアは銀時をマジマジ見てから……。

「よろしくね！銀時！」

銀時に抱きついた。

「おう、よろしくな」

銀時はそのままアリシアの頭を撫でる。

アリシアはまだ無邪気な部分が残っていた。

アリシアは頭を撫でられた気持ちいいのか、嬉しそうな顔をする。

「さてと……銀龍」

『なんだ？』

アルハザードは銀龍に喋り掛ける。

皆の視線が銀龍に集中する。

その時！

「刀が喋ってる！すごい！」

アリシアが目を輝かせながら銀龍を見る。

銀時に抱きついたまま。

『我は銀龍だ。よろしくな』

「うん。私はアリシア」

銀龍とアリシアは挨拶をした。

「それでは本題に……あなたは本当に何も覚えてないんですか？」

『すまぬ……本当に覚えておらん』

銀龍はそう言う。

「そうですか……後、もう一つ、自分以外の喋る刀に会いました？」
「あ？漸呀の奴が持つてなかったか？」

『ああ、『炎凰』だったな』

銀時と銀龍がそう言う。

「え！？『炎凰』と出会ってるんですか！？」

「ああ」

アルハザードは驚いていた。

「なら、私がアリシアさんを生き返らせる必要はなかったようですね。まあ、成長は私じゃないとダメですけど」

『どういう意味だ？』

「『炎凰』にも、あなたと同じ、翼が魔力で出来るのを知っていますよね？」

「ああ、たまに空から一緒に攻めた」

銀時がそう言う。

「あの翼には能力があるんです」

「能力？」

「はい……死人を蘇らせる事が出来るんです」

「『はあああああああ！？』」

銀時と銀龍は驚いた。

「マジでか！？」

「はい」

銀時はアルハザードに訪ねるとはいと言う。

銀時は考える。

（なら、何で攘夷戦争の時に使わなかった？……あ……戦争で死んだ奴が蘇っても……苦しいだけだよな）

銀時はそう思う。

「どうしたの？銀時」

アリシアは銀時に訪ねる。

銀時は知らぬ間に悲しい顔をしていたのだ。

「いや、何でもねえ」

銀時は普段の顔に戻す。

「後……あらゆる『厄』をも被い清める程の力を持っています」
「マジでかアアアアアアアア！」

銀時は声を上げた。

「あの翼には鳳凰の力が宿っていると言われてるんですよ」
「ある意味凄いわ……！」

銀時は叫ぶ。

「坂田さんが銀龍の主ですよ？」

「ああ」

アルハザードはそう言っていると銀時は頷く。

「銀龍をどんな風に使っていますか？」

「……大切な仲間を護る為にだ」

銀時がそう答える。

「そうですね。それはよかったです。気を付けてください。銀龍は使い
方によっては……世界を救うし、世界を滅ぼしてしまいます」

「それはどういう事だ？」

「その内わかる時が来ます。絶対に銀龍を悪い事には使わないでく
ださいね」

「ああ」

銀時は頷く。

『そろそろ帰るとしよう』

銀龍がそう言う。

「そうね。アルハザードありがとう」

「いえいえ」

プレシアはお礼と言う。

「アリシアは銀時にだいぶ懐いているようだし」

プレシアが銀時の方を見ると、アリシアはまだ銀時に抱きついてい
た。

それを見て、プレシアは微笑んだ。

「銀時」

「何だ？」

銀時はプレシアに声を掛けられ、返事をする。

「これからは、私とアリシアとフェイトと生きていくわ。もちろんアルフも」

「そうか」

銀時は微笑む。

プレシアは言い終えりとまた口を開く。

「それじゃあ元の世界へ戻りましょう」

「プレシア」

「何かしら？」

プレシアは首を傾げた。

「どうやって戻るんだ？」

「あ……」

そうだ。自分達は虚数空間に落ちてここに来たのだ。一体どうやって戻る？また虚数空間に落ちるか？いや、そんな事したら今度こそ命はない。

「ご心配なく。私が三人を元の世界へお送りします」

二人の足下に魔法陣が展開された。

「悪いな。いろいろ世話になったぜ」

「いえいえ。あつ、ただし一つお願いがあります」

「お願い？」

二人は首を傾げた。

「私の存在を外の世界に教えないでください。私の力を悪用しようとする者が、出てくるかもしれないので」

「ええ。わかったわ」

プレシアは頷いて答えた。

「貴方達だったら、いつでも歓迎しますけどね。まあ何もない所です」

「今度からキレイな姉ちゃん用意しときな」
笑みを浮かべながら銀時が言った。

「それは無理です」

「即答かよ」

そんな話をしてる内に魔法陣の光が強くなる。
そろそろお別れだ。

「それじゃあお二人さん、お幸せに」

「えっ！！？」

アルハザードの言葉に、プレシアは頬を赤くした。

「ちよっ…ちよっと待ちなさい！私と銀時はそんなんじゃ……！」
プレシアが言い終わらない内に、二人の姿はアルハザードから消えた。

「あの様子だと、テストロッサさんの方はまんざらでもない感じだな」

アルハザードは一人、楽しそうに呟いた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ。質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

アリシア「復活したアリシア・テストロッサです！」

銀八「今回出てきて、今回アシスタントかよ！まあ、いいや。始めるぞ」

アリシア「はい！まずはペンネーム『クロウ』さんからの質問

『ナナフシさんに質問なんですが

銀さんのハーレムエンドを考えてくれませんか？

単独ヒロインではなく2・3人の複数ヒロインエンドをみてみたい
です。』だって」

ナナフシ「そうですねエ……ここで言うネタバレになりますので、
考えておきます！」

銀八「むかつくんだけど！？と言う訳で『クロウ』さん。この最終章はまだまだ先ですが、最終章の最終回を楽しみにしててください」

アリシア「次で最後だよ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』それじゃ、質問に参ります」

1・かまっ娘クラブの皆さんへ。クロノがあなた達のことをかわい
い、と言っていましたけどどうしますか？

2・フェイトとなのはへ。銀さんがなんと、俺は俺より料理ができる
女が好きだぜ、とかなんとか言っていましたけど、どうしますか？

3・ミラクル∞とクロノが戦ったらどっちが勝ちますか？ 実際に
戦わせてみてください。敗者にはナナフシさんが考えた罰を。『一
つ目だけど」

アゴ美「あらア……可愛い子ねエ。キスしてあげるわ」

クロノ「ぎゃあああああああああああああ！」

クロノはかまっ娘クラブの皆に捕まり、解放された後は、魂が抜けた様になっていた。

銀八「ドンマイだ。二つ目だが」

フェイト「私頑張るよ!」

なのは「私も!」

銀八「カーツペ!」

銀八は唾を吐いた。

アリシア「汚いよ。最後は」

ミラクル∞「絶対勝つ!」

クロノ「ちよっ、僕、今ぼろぼろぎゃあああああああああああ
あ!」

クロノはミラクル∞にボコボコにされた。

ナナフシ「勝者!ミラクル∞!よって敗者には!」

ナナフシの所にヒモが現れる。

それをナナフシは引っ張る。

ナナフシ「地獄で頑張ってきて」

ガゴン!

クロノの足下の床が開き、クロノは落ちていった。
下にいたのは……。

「ウホ、いい男」

ホモの軍団だった。

クロノ「ぎゃあああああああああああ！」

クロノの断末魔が響いた。
その床は閉じた。

銀八「と言う訳で『黒龍』さん。クロノがこの後どうなったかは想像に任せます」

アリシア「それでは」

銀八「また次回！」

第二十二訓：弁護をするのも大変です…… たぶん（前書き）

ナナフシ「アリシアは魔導士の才能がなかった事がわかりました」
銀時「そうなのか？」

ナナフシ「はい、ルシフェルさんに教えてもらいました。何処のホームページかも教えてくれたので、そのホームページで見ると元々なかった事がわかりました」

銀時「そうか」

ナナフシ「それでは！」

アリシア「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるよ」

ナナフシ「セリフ取られたアアアアアアアア！」

第二十二訓：弁護をするのも大変です……たぶん

アースラ。

フェイト達が入ってる独房。

現在夜中の二時。

フェイトは眠れずにいた。真選組の三人とアルフは眠っている。

（母さん…銀時……）

両手を握って二人が帰ってくる事を祈る。

その時、フェイトの前で突然強い光が発せられた。

「！！」

あまりの眩しさに、フェイトは手で目を隠した。

やがて光がおさまり、フェイトは手をどけて前を見た。

ソレを見て、フェイトは目を大きく見開いた。

「どこだ、ここ？」

「どこかの部屋みたいだわ」

「どこだろう？」

坂田銀時とプレシア・テストロッサとアリシア・テストロッサが、フェイトの目の前にいた。

「母…さん…？」

「え？」

声に気付いて、プレシアは振り返った。

そこには、自分の愛する娘がいた。

「フェイト…」

プレシアは体が震えた。目から涙が零れる。

「母さん…」

フェイトがゆっくりと近づいてくる。

「フェイト！！」

プレシアは泣きながら、フェイトに抱き付いた。

「母さん！！」

フェイトも涙を流しながらプレシアを抱いた。

「フェイト……ごめんなさい……ごめんなさいフェイト！」

「うっん！母さん……母さんが生きててよかった！無事でよかった！」
プレシアとフェイトは涙を流しながら、離さないように互いの体を強く抱きしめた。

二人の様子を見つめながら、銀時は微笑んだ。

「よかったな……プレシア、フェイト」

すると、近藤が目を覚ました。

「何だか騒がしいな……」

目を擦りながら体を起こす。

そして目の前の光景に驚く。

「えっ！？万事屋！！？プレシアさん！！？」

近藤のデカイ声が、独房に響いた。

「よオ。いい夢見たかいゴリラ？」

銀時が近藤に言う。

「わぁ！ゴリラが居る〜！」

アリシアは近藤を見ながら言う。

「お嬢ちゃん！俺人間だから！ゴリラに似てると言われるけど人間だからって……」

近藤がアリシアを見て固まった。

「万事屋……もしかして……そいつは」

「ああ、アリシアだ」

土方の問いに銀時が答える。

「マジですかイ？死んでたんじゃ？」

「いやア……ドラゴ。ボールを使って蘇らせたの」

「マジでか！？」

近藤は完全に銀時が言った事を信じてしまった。

アリシアはフェイトに気付く。

「お母さん、この子は誰？」

アリシアは自分とそっくりのフェイトを見て、目を輝かせていた。

「この子はフェイト……あなたの妹よ」
「妹!!」

アリシアはそれを聞くと嬉しそうな顔をして、フェイトに近づく。

「私はアリシア。よろしくねフェイト!」

「よろしく、アリシア」

二人は握手をする。

銀時と真選組三人はそれを見て微笑む。

*

銀時とプレシアが虚数空間から生還した事実、アース内の人達は全員度肝を抜いた。最初は幽霊だと騒いだ者もいたが、すぐに生きている生身の人間だとわかった。

更には死んだはずのアリシアまで居るのだ。

なのは銀時を見て、泣きながら抱きついた。

当然、クロノとかに問い詰められたり。

「一体どうやって虚数空間から戻ってきたんだ!?!」

「海を漂ってたら、いつの間にか砂浜に着いてた感じ?」

「じゃあ、死んでいたはずのアリシアはどうなんだ!?!」

「ドラゴン。ールを使った」

「マジメに答える!!後、ドラ。ンボールって何だ!?!」

約束通り、銀時とプレシアとアリシアはアルハザードの存在を誰にも話さなかった。

銀時は、また騒がしい日常に戻った。

*

翌日。

プレシアとフェイトはリンディに呼ばれてた。アリシアはプレシアとフェイトについてきた。

部屋に入ると、リンディとクロノが待っていた。

「おはようございます。とりあえずお座り下さい」

リンディが椅子に座るように促した。

プレシアとフェイトは椅子に座った。

「それでは早速本題に入ります」

リンディは報告書を取り出た。

「フェイトさんとアリシアさんは、本局の保護施設に移送する事になります。ただ、今回の事件の重要参考人なので暫くは事情聴取を受ける事になります」

時折、紙に目を通してフェイトに説明した。

「あの…母さんは…？」

プレシアを心配そうに見ながらフェイトが尋ねた。

「…残念だけど、プレシアさんは管理法違反、しかも次元断層を引き起こそうとした張本人。私達も目をつむるわけにはいかないの」
険しい表情でリンディが語った。

「そんな…」

フェイトは表情を暗くする。

「お母さん……何かしたの？」

アリシアはプレシアに訪ねる。

「大丈夫よフェイト。母さんは大丈夫だから。アリシアも心配しないで」

プレシアは微笑みながら、優しくフェイトとアリシアの頭を撫でた。

「じゃあクロノ。この報告書を提出して…」

リンディがクロノに報告書を渡そうとした時、

「異議あり！」

扉の向こうから、男の声が聞こえた。

全員が扉へ振り返った。直後、扉は勢いよく開かれ、スーツ姿の二人の男が中に入ってきた。

「いやゝ突然すいません」

男は、くいつと眼鏡を上げた。プレシアの横を通り過ぎて足を止める。

「私、急遽プレシア・テストロッサの弁護をさせていただく…」
そこで男はプレシアとフェイトに振り返った。

「弁護士の坂田です。よろしく願いします」

ニヤリと笑みを浮かべるのは坂田銀時。

「銀時！！？」

「あ、銀時」

プレシアとフェイトの声が重なった。
アリシアは銀時の名を呼んだ。

「こちらは、助手の沖田君と銀龍君だ」

銀時は、隣にいる栗色の髪の男と手に持っている白銀の刀を紹介した。

「沖田です」

『銀龍です』

沖田と銀龍は、間延びした声で名乗った。

「な…何のつもりだ！？」

クロノが二人に向かって叫んだ。

「先ほどのプレシア・テストロッサの措置について異議がありましたねエ」

銀時は、不敵な笑みを浮かべる。

「私は、プレシア・テストロッサの無罪を主張します！！」

銀時はリンディとクロノの前でプレシアの無罪の主張した。

「ま…また貴方は無茶な事を…！」

クロノが銀時を睨みつけた。

「銀さん。いくら何でも今回ばかりは…」

「報告書よこしなア」

リンディが話してる途中で、沖田は報告書を取った。

「おい！勝手な事は許さんぞ！」

クロノが声を上げる。

だが、銀時と沖田は、クロノの声を可憐にスルーして報告書を見る。プレシアとフェイトは、もう黙って成り行きを見守る事にした。こちが何を言っても、おそらく銀時は止まらない。今までの銀時の行動でよくわかった。

「なるほどねえ……」

報告書を読み終わった銀時は、ため息をついた。

「思ったとおりでしたねエ」

隣にいる沖田もため息をついてる。

『うむ、そうだな……』

銀龍はため息をつけないが「ハア……」と聞こえた。

「い……一体何なんだ？」

クロノが尋ねた。

銀時は目を細めて、クロノ達を見た。

「この報告書……」

スツと報告書を前に突き出した。

「間違いだらけじゃねえかアアア！」

怒鳴りながら、報告書をデスクに叩きつけた。

リンディとクロノ、プレシアとフェイトとアリシアは体をビクリと震わせた。

「全部書き直しだ」

「ちよっ……ちよっと待て！書き直してどっいう事だ！？」

クロノが叫んだ。

「だーかーらー、間違いだらけの報告書を書き直せって言ってんだよ」

銀時は、眼鏡をクイツと上げながら言った。

「どこも間違えてないぞ！」

クロノが反論する。

『うむ、そうか。なら、主よ』

「おう、それじゃあ俺が間違いを指摘してやる」

そう言っただけ銀時は、報告書を開いた。

手には赤ペンを持ってる。

「『プレシア・テストロツサはジュエルシードを使用して次元断層を引き起こそうとした』。はい、ココ間違ってますね」

赤ペンで『×』を書きながら、銀時が言った。

「いや、間違っただけで！本人も認めてるんだ！」

クロノがデスクを叩きながら言った。

ここで沖田が手を挙げた。

「異議あり！どうせ不眠不休で相手を弱らせて、無理矢理、自供させたんだろ？そんな自供に証拠能力はありませんぜエ」

「いや、昨日一回話を聞いただけなんだが…」

クロノは顔をしかめた。

ここで銀時も口を開いた。

「次元断層が起きそうになったのは事実でしょう。しかし、これが故意に起きたのか偶発的に起きたのか甚だ疑問であります」

報告書を片手に銀時は言った。

「疑問って…プレシアが九つのジュエルシードを発動させて、次元断層が起これるようになったんだぞ。貴方も一緒に映像を見ただろ」

クロノが負けじと反論した。

また銀時が手を挙げる。

「異議あり！そもそもプレシアがジュエルシードを集めてた目的は、危険なロストログアを海鳴市から回収するため。つまり善意でジュエルシードを集めていたのです」

「ぎ…銀時？」

プレシアが声をかける。

『それにもしかしたら雷雅達に利用されていた可能性だってある！』
銀龍は言う。

「でも…プレシアが雷雅達を雇ったのを自分で言っているんだぞ」

！」

クロノは言う。

「元々、あいつ等は俺達の世界では指名手配犯でさア……それにト口くて薄情でいい加減な組織、時空管理局の代わりに、雷雅達の企みを知ったテスタロッサ親子は必死になってジュエルシード集めをしてたんでさア」

沖田が説明した。

再び銀時が口を開く。

「むしろこれは対応の遅れた、おたくら時空管理局に問題があるわけであり、プレシアとフェイトには何の罪もない」

『それはお前等が原因だ』

ニヤリと憎たらしい笑みを浮かべる。

クロノはグツと歯を食いしばり、リンディも険しい表情をする。銀時の言う通り管理局の対応が遅れたのは事実。

「だが…次元断層が…！」

クロノが反撃しようとするが、

「異議あり！あれは回収したジュエルシードが暴走した結果であり、プレシアに罪はない！」

「そもそもジュエルシードを早く管理局が預かっていれば、あんな事にはならなかったとうワケでさア」

銀時と沖田は怯む事なくクロノに言った。

管理局の対応の遅かった点を攻める二人に、クロノはなかなか反論できない。

「では銀さん」

ここで、今まで黙ってたリンディが口を開いた。

「プレシア女史が局員を攻撃した事については、どう説明するつもりですか？」

リンディが反撃に転じた。

だが、銀時は怯まない。

「異議あり！！あれはプレシアが娘のアリシアを護るために行った

行為！母が娘を護る行為を責める事は、誰にも出来ない！！」

「銀時……」

銀時の発言に、プレシアは思わず涙目になる。

沖田も銀時に続く。

「更に言えば、善意でジュエルシードを集めてたプレシアの城に、勝手に侵入した時空管理局の方が住居不法侵入罪で犯罪者でさア」
ニヤリと腹黒い笑みを浮かべる沖田。

「う……」

銀時と沖田の主張に、リンディの顔は険しくなる。

リンディの隣に立つてるクロノは苦い顔をしている。ダメだ。僕らじゃこの二人は止められない。この二人に勝てない。

「おや？どしたのかなクロノ君？リンディさん？」

「まさか証拠もなく、プレシアを犯罪者にしたのかイ？こいつア冤罪事件だねエ」

『それはダメだな……ちゃんとした証拠もなく犯罪者にするとは』
銀時と沖田が口元を歪める。

リンディとクロノは、返せる言葉がなかった。

時の庭園は崩壊して、証拠と呼べる証拠はない。

リンディは眉間にシワを作って考えた。部屋が静寂に包まれる。しばらくして、リンディはため息をついた。

「……わかりました。報告書を書き直し、プレシア女史をフェイトさんとアリシアさんと同じく、管理局で保護します」

ついにリンディが折れて、プレシアもフェイトと一緒に管理局に保護される事になった。

いつもなら、ここでクロノがリンディに叫ぶのだが、今回はなかった。クロノは疲れ切った顔をしている。

（きつと向こうで裁判をしても…この二人に勝てる検事はいないだろうな……）

なんて事を考えながら、クロノはため息をついた。

「それじゃあ…私と母さんとアリシアは……」

フェイトは身を乗り出す。

「これから三人は一緒に暮らす事になります」

リンディはフェイトに言った。

「母さん！」

すぐにフェイトは、プレシアに顔を向ける。

「フェイト！」

プレシアも笑顔でフェイトを見る。

アリシアも笑顔で居た。

そんな三人の様子を見て、リンディはため息をつきながら微笑んだ。

「ま…これはこれで、よかったのかもしれないわね」

リンディは席を立った。

「まったく…貴方は本当に……」

クロノは頭を抱えた。

「まあまあ。あんまり真面目すぎると、背が伸びねーぞ」

「背は関係ない!!」

今までで一番大きな声で、クロノが叫んだ。

「銀時！」

フェイトが銀時を呼んだ。

「ん？」

振り返ってフェイトを見る。

「ありがとう。銀龍もね」

笑顔でフェイトは、銀時に礼を言った。

「母ちゃん大事にしろよ」

『当然の事をしたまでだ』

そう言って銀時は部屋を出た。

「いやゝいい事した後は気分がいいですねエ」

沖田も部屋を出た。

「じゃあクロノ。悪いけど報告書の書き直し、お願いね。後、雷雅達、『雷撃』の組織をこちらでもSランクの指名手配をします」

「はい」

クロノは仕方なく報告書を受け取った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、質問コーナーを始めるぞオ。今回のアシスタントは」

ナナフシ「俺、ナナフシでエす！」

銀八「お前かよ！」

ナナフシ「良いじゃんか！一度くらい出てみたかったんだよ！」

銀八「たくつ、それでは質問行こうか」

ナナフシ「え」と、まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問
『黒龍』では、質問に入りましょう」

1・クロノに質問。最近の銀八先生コーナーで扱いが悪いですね。だったら、あなたが取っちゃえば良いんじゃないですか？

2・フェイトとなのはに質問。アリシアが銀さんと結婚するなんて展開になったらどうしますか？

3・なのはとフェイトに質問。銀さんと新婚旅行に行くならどこに行きたい？『一つ目だけど……』

クロノ「それで扱いがよくなるなら取るよ！」

ナナフシ「大変な事になっちゃいそうなので……バットで」

カキーン！

クロノ「ぎゃあああああああああ！」

クロノは星となった。

ナナフシ「二つ目答えて」

フェイト「え、え〜と、ど……どうしよう」

なのは「その時は私もよく……」

フェイトにとってはアリシアは姉である。

なのははまだアリシアの事をよく知らない。

銀八「最後の質問は却下で！」

ナナフシ「で、どうなの？」

銀八「聞いてる！」

なのは・フェイト「銀時（銀さん）となら何処でも！」

銀八「やっぱな！と言う訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

ナナフシ「次で最後だ。ペンネーム『黒神』さんからの質問
『質問します。』

ミラクル∞へ

僕の小説では銀時と神楽はメツチャ輝いています。
そんな2人にどんな気持ちを抱いてますか？

お妙へ

九兵衛はチンクの事を強く嫌っています。

そんな九兵衛が嫌う相手として自分もチンクを嫌いますか？『ミラクル∞」

ミラクル∞「羨ましいぞコンチクシヨオオオオオオオオオオオオ
！」

ナナフシ「……ほつとこ。二つ目だけど」

お妙「うゝん、九ちゃんがその子の事嫌いだからって、私は嫌った
りしないわよ」

ナナフシ「でも……お妙はリリカル組女多いから、人気の為になん

かやりそう……って、ぐばあああああああああ！」

ナナフシはお妙にボコ殴りされた。

銀八「余計な事言うからだ。と言う訳で『黒神』さん廊下に立ってなさい」

ナナフシ「質問は……以上……で……す」

銀八「また次回」

第二十二訓：弁護をするのも大変です……たぶん（後書き）

ナナフシ「雷雅達指名手配犯になっちゃったね。こっちでも銀時「そうだな」

ナナフシ「ま、当たり前か」

なのは「当たり前なの!？」

フェイト「ナナフシが考える事がよくわからない」

アリシア「そうだね」

ナナフシ「それでは」

なのは・フェイト・アリシア「『次回!』第二十三訓：別れは突然に』です!」「」

ナナフシ「次回予告出来るから言おうとしたのにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

第二十三訓：別れは突然に（前書き）

ナナフシ「無印編さつさと終わらせたいから連続投稿！」

銀時「おい！」

ナナフシ「さてと…… A、S 編では嵐が起きそうだ」

銀時「何故に！？」

ナナフシ「オリキャラも登場だからだよ。それでは」

フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の子と白銀の刀』始
まります」

ナナフシ「アリスアの次はフェイトかよオオオオオオオ！姉妹にセ
リフ取られたアアアア！」

第二十三訓：別れは突然に

ここは海鳴温泉。

旅館の宴会場に銀時達はいた。

プレシアも無罪となり、事件が無事解決した事を祝うために海鳴温泉で宴会を開く事になったのだ。

宴会場には、銀時と、近藤、土方、沖田の真選組の三人もいた。

もちろん、フェイト、アリシア、プレシア、アルフもいる。

なのはとユーノも。

リンディも、クロノとエイミィも、アースラに乗ってた局員達もいる。

とにかくみんな、いた。

近藤がビールの入ったコップを片手に立ち上がり、宴会場を見渡した。

「えー、皆さんの協力のおかげで無事、事件を解決する事ができました。今日は思う存分飲んで騒いで、疲れを癒してくれ」

そう言つて近藤は、コップを上に掲げた。

「みんな、今までおつかれやしたー！！」

「おつかれやしたー！！」

近藤の声の後、みんなが乾杯した。

「何でお前が仕切つてんだよ？」

酒を一口飲みながら銀時は呟いた。

皆はわいわい騒ぎながら、酒を飲んだり、料理を食べたりしている。

沖田は、ユーノに絡んでいた。

「よオ、むつつりスケベ。今日はフェレット姿で女湯に入らねえのかイ？」

酒を飲んで酔っているのか、沖田の顔は少し赤かった。

「だからアレは誤解ですってば！」

ユーノは必死で沖田に訴えた。

土方はクロノの隣で酒を飲んでいた。

「土方さん。お疲れ様です」

「オメーもな。野郎に振り回されて大変だったろ」

「ええ…まあ」

クロノは苦笑いをした。

「まあ今日は飲もうや。愚痴を肴にしてな」

そう言つて土方はクロノのコップにコーラを注いだ。その後、自分のコップにも酒を注いだ。

フェイトは、銀時とプレシアとアリシア、アルフと一緒に料理を食べていた。

「フェイトちゃん」

そこへ、なのはがやってきた。

「あ…」

呼ばれてフェイトは、なのはへ顔を向けた。

「一緒にいいかな？」

「う…うん」

フェイトは少し戸惑った顔をする。なのははフェイトの隣に座った。

「私ね、フェイトちゃんに伝えたい事があるんだ」

「え？」

フェイトが少し驚いた顔をする。

「私、フェイトちゃんと友達になりたいんだ」

優しく微笑みながら、なのはは想いを伝えた。

「……あ…あのね…私…アルフ以外に友達とか出来た事ないから…どうすればいいのか分からなくて……アリシアはわかる？」

「うん、わからない」

胸に手を当てて、フェイトは戸惑う。

アリシアに聞くが、アリシアもわからないと答える。

「簡単だよ。友達になる方法…すごく簡単」

なのはの言葉にフェイトは首を傾げる。

「名前を呼んで」

「名前？」

「うん。君とか貴女とかじゃなくて、その人の名前を呼んであげて全部そこから始まっていくから」

優しく微笑んでるなのはを、フェイトは見つめる。

「……なのは」

目の前にいる少女の名前を呼ぶ。

「うん」

なのはは頷く。

「なのは」

もう一度名前を呼ぶ。

「うん」

なのはは頷く。

「もう私とフェイトちゃんは友達だよ」

笑顔でなのはが言う。

フェイトは少し照れた顔をする。それからフェイトは優しく微笑んだ。

「ありがとう、なのは」

ハッキリと、なのはの名前を呼んだ。

それを聞いたなのはは、嬉しそうな笑顔で頷いた。

「うん！」

それから二人は笑顔で互いの手を握った。

互いが離れないように強く。

すると、アリシアがなのはに声を掛ける。

「私とも友達になってくれる？」

「うん！」

なのはが頷く。

アリシアは嬉しそうな顔をする。

「お母さん！友達が出来たよ！」

アリシアは笑顔でジャンプする。

三人の様子を銀時は微笑みながら、プレシアは涙目で微笑みながら

見つめた。

すると、

「ひっく……えぐ……」

プレシアの隣でアルフが泣いていた。

「何泣いてんのお前？」

「だってさ……なのはってばスゴく優しい子だし……フェイトも嬉しそうに笑ってるし……」

涙を流しながらアルフが言う。プレシアが涙を拭いてあげた。

「まあ……そうだな」

微笑みながら銀時は、酒を一口飲んだ。

いい感じになってるフェイト達だったが、この雰囲気を書き壊す人物が現れた。

「よし！次はカラオケいつてみようかア！！」

叫びながら近藤はカラオケセットを用意した。

「誰から行く！！」

近藤はそう言う。

「ゴリラが歌えよ」

「ん？そうか、万事屋が歌うか！」

「誰が歌うか！！」

銀時が近藤に言う。

「銀時歌ってよ」

アリシアが言う。

「いや、何故？」

「銀さんが歌う所見てみたいなあ」

なのはも銀時に言う。

「いや、だから」

「それじゃ、一緒に歌おうよ！」

フェイトはそう言う。銀時の手を取り、連れて行く。

「だから何でだアアアアアアアアアア！俺、ここの歌知らねえしいイイイイイイイ！」

「あ、私もフェイトちゃん！」
「私もオ！」

なのはとアリシアもついてきた。

「だから知らねえって言ってるだろうがアアアアアアアア！」

銀時は結局、なのはとフェイトとアリシアと一緒に歌わされた。

あ、銀龍もね……銀時が無理矢理にだけど。

*

そして、歌い終わって、銀時達が元の場所に戻っていた。

「もう我慢できないでござる……！」

急に誰かが立ち上がった。

その人物とは。

「ひ……土方さん!？」

隣に座ってるクロノはビックリした。

銀時は片眉を上げた。

「ござる？まさか……」。

銀時はイヤな予感がした。

「フェイトちゃあああん!!」

土方はフェイトに向かって走り出した。

「えっ!？」

フェイトは怯えて体を震わせた。

「ぼぼ、僕と握手して下さい！それとサインを……おお!!」

興奮しながらフェイトに迫る土方。

「フェイト!!」

プレシアとアルフがフェイトを護ろうとした時、

「トツシィィィィ……!!」

叫びながら銀時は、土方……いや、トツシィにドロップキックを食ら

わせた。

へタレたオタク、トツシー出現。

「ぶはああ!!」

トツシーは床に倒れた。

「な…何をするんだ坂田氏!？」

「汚え手でフェイトに触ろうとすんじゃねエエエ!!」

『まだ成仏していなかったのかアアアアア!』

銀時はトツシーに鉄拳制裁を加えた。

しばらくして『トツシー』から『土方』に戻り、銀時と喧嘩になった。

*

銀時となのはが白いご飯の上に小豆を乗せる。

「ぎ……銀時、なのは……これは？」

「ん？小豆テンコ盛り『宇治銀時丼』だ!」

銀時がフェイトの顔の前までやる。

「食うか？」

銀時が訪ねる。

「一口だけ……」

「私も食べてみる」

「フェイト、アリシア!？」

フェイトとアリシアは『宇治銀時丼』に箸をのばす。

プレシアは驚いた声を上げた。

「やめときなよ!フェイト!アリシア!絶対まずいつて!」

「おい、俺の『宇治銀時丼』をバカにするなよ」

アルフの言葉に銀時が言う。

二人はそれを口に入れて、ゆっくりと噛む……出た感想は

「おいしい」

「え!？」

フェイトとアリシアの声が重なり、プレシアとアルフの声は驚いた声を上げた。

「マジでか!？」

「本当!？フェイトちゃん、アリシアちゃん!」

「うん、おいしいよ!」

「こんなもあるんだア」

「う……噓……」

フェイトとアリシアを見て、プレシアとアルフはそう言った。

その後、リンディも食べて、リンディも気に入った。

*

まあそんな騒がしい宴会にも終わりはやってくる。みんな酒を飲んで騒いで疲れ切って眠っている。起きている者もいた。

銀時は宴会場の入口に一人座ってる。

するとフェイトがやってきた。

「どした？」

「ちよっと、お手洗いに行ってくるね」

そう言っただけでフェイトは宴会場を出た。

銀時は、フェイトの背中に声をかけた。

「フェイト」

「何？」

フェイトは足を止めて、振り返った。

「楽しかったか？」

「うん!」

フェイトは笑顔で頷いた。また歩き出して角を曲がって銀時の視界

から消えた。

銀時はため息をつきながら考えた。

プレシアも無事で、アリシアも蘇り、事件が解決したのはよかった。だが、肝心の元の世界に帰る方法はまだ見つかってない。

どうしたものかと銀時が思った時、目の前に小さな光が現れた。

「ん？」

目を細めて光を見る。

やがて光が消えてある物が床にあった。黒くて長方形の形をした物。

「こいつア……無線機か？」

銀時がそう呟いた直後、

「銀の字！銀の字！応答願います！」

無線機から声が発せられた。しかも聞き覚えのある声。

「こちら源外だ！応答願います！」

銀時はすぐに無線機を拾った。

「じーさん！」

「おお、銀の字無事か！？」

「無事か？じゃねーよ！テメーのせいで俺達は大変な目にあっただぞ！」

無線機に向かって銀時は怒鳴った。

「すまなかったな銀の字。後でちゃんと謝るから勘弁してくれ。こ

つちで、新八と神楽と咲がお前の事を心配しているぞ？」

「そうか」

銀時はそう答えた。

「それじゃ、本題を言う。すぐにこっちに戻す！」

「え？」

『すぐに』、という言葉に銀時は眉を寄せた。

「お前らを送った事で装置が故障してな。さっき、やっと装置の修理を終えたばかりなんだ。だが急いで直したもんだから、また何時故障するかわからん」

少し焦った感じで源外が説明した。

元の世界へ帰れるのは嬉しいが、まさかこんな急に帰る事になるとは。

「…わかった。あと真選組の三人もいるから」

「真選組！？なんで真選組がいるんだ！？」

無線機から源外の驚いた声が聞こえた。

「理由は後で話す。とにかく連中も一緒に連れていくから、ジーさんは装置を動かしたらどっかに隠れてろ」

銀時が言った。

源外は前に、カラクリ軍団を使って將軍の首を狙った事で指名手配されているのだ。

「しょうがねーなあ。わかった。そいつらも起こして連れてこい」

「悪いな」

無線機を片手に銀時は立ち上がった。

新八達を起こそうと振り返った時、

「帰っちゃうの？」

後ろから声が聞こえた。

銀時は声がした方を向いた。

そこには、表情を暗くしたなのはとフェイトが立っていた。

「銀時（銀さん）…」

「なのは…フェイト…」

本来、出逢うはずの無かった三人。その三人に別れの時がきた。

旅館の廊下で互いを見合う銀時とフェイトとなのは。窓から差し込んでくる月明りが、三人の姿を照らす。

「…帰っちゃうんだね。銀時」

フェイトは、寂しい表情を浮かべる。

「ああ、悪いな。急に帰る事になっちまった」

頭を掻きながら銀時が謝る。

フェイトとなのはは首を横に振る。

「謝らないで。よかったね銀時」

「そうだよ。銀さん」

悲しい気持ちを無理矢理抑えて、フェイトとなのはは笑顔を作った。それを見た銀時はため息をついた。
「そんな顔するな。これが今生の別れになるわけじゃねーんだからよ」

銀時はフェイトに無線機を渡した。

「銀時？」

「やるよ。コレで源外ってじーさんに連絡すれば、俺達の世界に来れる」

そう言って銀時は真選組を起こしにいった。

フェイトは銀時から渡された無線機を、ギュツと握り締めた。
なのははその無線機を見た。

*

みんなを起こさないように、銀時は真選組を起こして事情を説明した。

「本当に元の世界に帰れるのか？」

目を鋭くしながら土方が尋ねた。

「ああ」

銀時は頷く。

「まあ他に方法はないんだ。信じてみよう」

近藤が言った。

隣で沖田は眠そうに欠伸をかいてる。

フェイトが銀時に歩み寄った。

「銀時。みんなは起こさなくていいの？」

「ああ。大勢で見送りとかされちまうとな。あれだ」

銀時はそう言う。

「オメー等から皆に、世話になったなって伝えてくんねーか？」

「うん」

フェイトとなのはは頷いて答えた。
その時、

「銀時？」

フェイトの後ろから声が聞こえた。

見ると、さっきまで眠っていたはずのアルフが立っていた。
アリシアも居た。

「アルフ、アリシア」

「起きちゃったのか」

銀時はメンドくさそうに頭を掻いた。

「フェイト。銀時達……どうしたんだい？」

不安がこもった声でアルフは尋ねた。

「…帰るんだって…元の世界へ」

「えっ!？」

アルフは驚いて目を見開いた。

「そんな…！何で急に……もう少してもいいじゃないか！」

銀時の肩を掴んでアルフが叫んだ。

「そうなの？銀時？」

アリシアは涙目で訪ねる。

「悪いな。今帰らねーと、次はいつ帰れるかわかんねーんだ」

アルフは我慢できずに、涙を流して泣き出した。

「寂しいじゃないかあ……銀時い………！」

泣きながら銀時に抱き付く。肩を震わせながら涙を流す。狼の耳も
元気なく、ペタンと倒れている。

「銀時イ……」

アリシアも涙を流す。

そんなアルフとアリシアの姿を見て、銀時はため息をついた。

「フェイトにも言ったがよ。別にこれで二度と会えなくなるわけじ
やねーんだよ」

アルフの肩に手を置きながら銀時が言った。

アルフは鳴咽をもらしながら顔を上げた。

「ほ…本当かい…？」

「ああ」

銀時は優しくアルフの頭を撫でた。

アルフは腕で涙を拭いた。

「…わかった。絶対にまた会おうね、銀時」

「約束だよ」

「ああ」

微笑みながらアルフとアリシアに答えた。銀時は窓の外を眺めた。

「そういや、お前らと初めて会った夜も、こんな感じだったな」

夜空に輝く月を眺めながら銀時は呟いた。

皆も月を見る。

銀時はなのはとユーノと出会い、そしてジュエルシードを集めるの

を手伝い、フェイトとアルフと出会った。その後、プレシアを説得

して、アリシアも蘇った。

忙しかったが、楽しい日々だった。

「おお、そうだ！」

突然、近藤が声を上げた。

「せっかくだから、ちゃんと俺達の自己紹介をしないか？」

『そうだな』

近藤の言葉に銀龍は答える。

「そうだろ？じゃあまずは俺達、真選組からだ！」

近藤がコホンと咳をする。

「真選組局長、近藤勲だ！」

力強い声で近藤が名乗った。

「…真選組副長、土方十四郎だ」

煙草をくわえながら土方は、クールに名乗った。

「真選組一番隊隊長、沖田総悟。でも明日には副長になってまさら」

「テメーはホント、いい加減にしろよ総悟」

副長の座を狙う沖田を、土方は睨みつける。

『我は主の相棒の銀龍だ』

銀龍も自己紹介する。

「そして、俺はご存じ、万事屋のオーナーに坂田銀時だ」

銀時も自己紹介をする。

「私は高町なのは」

なのはは笑顔で自己紹介をした。

「私はフェイト。フェイト・テストロッサ」

フェイトも笑顔で自己紹介した。

「私はアリシア・テストロッサ」

アリシアも笑顔で自己紹介した。

「あたしはフェイトの使い魔のアルフ！」

アルフは元気に自己紹介した。

互いに自己紹介が終わり、別れの挨拶に移る。

まずは真選組の三人から。

「元気だな！フェイトちゃん！アルフ！」

「…じゃあな。フェイト。アルフ」

「フェイトとアルフも、一緒に土方さんを殺りませんか？」

「斬るぞテメエエエ！！」

土方と沖田の喧嘩が始まった。近藤は必死に二人を止めようとする。

それからフェイトは真選組の三人を見回した。

「近藤…土方…沖田…」

フェイトの目に涙が浮かんでくる。

最後に銀時と銀龍を見た。

「銀龍……銀時……」

銀時の名前を呼んで、フェイトは顔を俯いた。

涙がポロポロと床に落ちていく。

「元気だな。なのは、フェイト、アリシア」

銀時は優しく微笑んで、なのはとフェイトとアリシアの頭を撫でた。

「アルフもな」

「うん！」

アルフは涙目で頷いた。

「銀の字！そろそろいいか？」

フェイトの手にある無線機から、源外の声が聞こえた。

「ああ」

銀時はなのは達から離れて、真選組の元へ向かう。

「待ってください！銀さん！」

なのはがそう言う顔と顔をバツと上げて走り出した。

「ん？」

銀時はなのはに振り向く。

なのはは思いつきジャンプして、銀時の胸の中に飛び込んだ。

銀時は思わずなのはを抱いた。

「お……おい……なのは……」

なのはの行動に銀時が戸惑っていると、なのはは顔を銀時に近づけた。

次の瞬間、なのはと銀時の唇が重なった。

「……！！？」

銀時は目を見開いて驚いた。

銀時だけでなく、真選組の三人……いや、その場に居る皆も啞然としている。

キスをした後、なのはは下りて銀時から離れた。顔を真っ赤に染めながらも、真っ直ぐに銀時を見つめた。

「銀さん。貴方が好きです」

微笑みながらなのはは、みんなの前で銀時に告白した。

「……え……ちよっ……」

何とか我に帰った銀時が何か言おうとした時だった。

「私もこれだけ言わせて！銀時……私も貴方が好きです」

フェイトも言った。

「……え？……」

銀時は間抜けな声を出した。

そして、光が銀時達を包み、次の瞬間にはなのは達の前から消えて

しまった。

「『また会おうね銀時（銀さん）』」
なのはとフェイトは窓の外の月を見ながら呟いた。

*

江戸のかぶき町。

かぶき町にある、源外の工場内から強い光が発せられた。光は収まり、工場内にある装置の扉が開かれた。中から万事屋と真選組が出てきた。

「…本当に戻ってきたのか？」

真選組の三人は工場の外を見た。

居酒屋やスナックなどの店があり、街には着物を着た人達が行き交い、天人達も歩いている。

忘れるはずのない自分達の町。江戸のかぶき町である。

「…帰ってきたな」

土方が小さく呟いた。

ふと、三人は後ろを振り返った。

そこには、なのはにいきなりキスと告白の両方をされて、フェイトからは告白されて、どうしたらいいかわからないで呆然と立ち尽くす銀時の姿があった。

「じ…じゃあ俺ら屯所に帰るわ」

「じゃあな万事屋！」

「旦那ア、これから頑張ってくださいエ」

真選組の三人は逃げるように去っていった。

真選組がいなくなったのを確認して、隠れてた源外が出てきた。

「いやゝ悪かったな銀の字。まあ金はちゃんと払うから勘弁してくれ」

「銀さん、無事でよかった」

「そうアルな」

「神楽ちゃんも樂觀的だよ」

源外が頭を掻きながら謝った。

新八と神楽と咲はそう言う。（咲はオリキャラで、銀時の義妹です。出会いは『銀魂』冷血の鬼姫の日常』の一訓を見てください）だが、銀時は源外の言葉に反応しなかった。

「どうした銀の字？」

源外が尋ねた。

「銀さん？」

「銀ちゃんどうしたアルカ？」

「銀兄さん？」

銀時は口を開いた。

「……じーさん」

「ん？」

「俺はどうすればいいんだ？」

「は？」

源外は首を傾げた。

銀時は外に向かって、ゆっくり歩きながら呟く。

「どうすればいいの？ なのはにキスされた俺はどうすればいいの？ なのはとフェイトに告白された俺はどうすればいいの？ 俺の心はどうすればいいの？」

外に出て銀時は足を止めた。そして大きく息を吸い込み、

「教えてくれエエエ！ レイジング・ハートオオオオオオオオオオ！！

！バルディッシュウウウ！！！！」

青空に向かって叫んだ。

新八達は力無く笑いながら、銀時の背中を見つめた。

雲一つない青空の下、銀時達がかぶき町に帰ってきた。

第二十三訓：別れは突然に（後書き）

ナナフシ「咲の出る時がグダグダだ」

銀時「おい！」

ナナフシ「ま、連続投稿なので銀八先生コーナーはありません」

銀時「次回からはA、S編突入だ！」

ナナフシ「それでは！」

第二十四訓：新しい物語の始まりです！（前書き）

ナナフシ「今回からA、S編だぜエエエ！」

銀時「そうだな」

ナナフシ「テンション低っ！？」

銀時「いや、もうオリキャラが大量登場のこのA、S編は大丈夫なのだろうか」と

ナナフシ「心配しているのか！？全員出せるか心配しているのか！？」

銀時「たりめーだろ」

咲「まあ、ナナフシはそう言う人だし」

ナナフシ「咲！やっと出たね。冷血の鬼姫では主人公なのにね。こちではヒロインの一人だけだ」

咲「ナナフシが出さなかっただけでしょ」

ナナフシ「まあ、そうだけどね。それでは！」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』」始まります！」

ナナフシ「次はなのはかよオオオオオオオオオオ！」

第二十四訓：新しい物語の始まりです！

ジュエルシードの事件から数日。

銀時達は元の世界で平和な毎日を送っていた。

平和というか、依頼が来なくてグータラな毎日に戻っていた。

瞬間移動装置は、まだ調整が完全でないのでフェイト達の世界には行けない。

その代わり源外が送った無線機をフェイトが持っているので、それを使って連絡をとる事ができる。

そのフェイトは、銀時と沖田と銀龍の無茶苦茶な弁護のお陰で無罪となったプレシアやアルフ達と一緒に楽しく暮らしている。

ちなみに銀時達がみんなに黙って帰った後、眠りから起きたリンデイ達がなのはとフェイトとアリシアとアルフから銀時達が帰った事を聞いた時は、黙って帰った事に激怒したとか。

*

万事屋。

「もしもし。銀時？」

テーブルの上に置いてある無線機から、フェイトの声が発せられた。銀時が無線機を取る。

「はい。こちら万事屋。どうぞ」

「あつ、銀時。今日も依頼はないの？」

フェイトは少し意地悪な事を言った。

「お前は俺をイジメて楽しいか？」

「あはは。ごめんね銀時」

フェイトが謝った。

「この前、送ったビデオメール観た？」

「ああ、観た観た」

先ほども述べた通り、瞬間移動装置はまだ完全ではない。が、源外が調整して、軽い物資を送れるくらいはできるようになったのだ。フェイト達の方から連絡がきて、源外が装置を起動させてビデオメールをこっちに送らせた。

「元気でやってるみたいだな」

「うん。母さんやアルフとアリシア、クロノやリンディ提督と楽しくやってるよ」

無線機からフェイトの明るい声が聞こえてくる。

声を聞いて銀時は微笑んだ。

「後、こっちに來たら銀時と銀龍が驚く事が起きるよ」

「驚く事？」

銀時は？マークを浮かべた。

「ああ、アリシアは生前、魔導士の才能がなくて、復活した時に魔導士としての才能が目覚めたから、その魔法を見せるとか？」

そう、アリシアは蘇った事により、魔導士としての才能が目覚めたのだ。

アリシアは自分から魔導士になりたいと言い出したので、プレシアから魔法を教えて貰っていると聞いた。

「うーん、それもだけでもっと驚く事だよ」

フェイトが銀時に言う。

「ま、楽しみにしているわ」

『うむ、そうだな』

銀時がそう言うと、いきなり銀龍が姿を現して言った。

「どわっ！いきなり現れるな！」

『すまん、主』

銀龍が銀時に謝る。

「今度は銀時の家族を連れてくるんだよね？」

「まあ……家族みたなもんだ」

フエイトの問いに銀時が答える。

「あつ、銀時、アルフに代わるね」

そう言つてフエイトはアルフに無線機を渡した。

「銀時い！あんた何時になつたらこつちに来るんだい！？」

アルフの大声が無線機から発せられた。

銀時は無線機を遠ざけて耳を塞いでる。

「だからア！まだ装置が完全じゃねえって何度言えばわかんた、犬ところ！」

「犬じゃない！いい加減『狼』つて言つてよ！」

こんなやり取りもいつもの事。無線機で話す度に二人は、こんな感じなのだ。

「つーかお前！ビデオメールに映ってる時、肉ばっか食ってんじゃねーよ！」

「いいじゃないか！」

「よくねーよ！」

ギヤーギヤー騒ぎながら会話した。

*

アルフとの賑やかで騒がしい会話を終えた銀時は、再びフエイトと話を始めた。

「囑託魔導師？」

銀時は片眉を上げた。

「うん。それになつて管理局に協力しようと思つてるんだ」

「ふーん」

「まあ、囑託魔導師になるには試験に合格しなくちゃいけないんだけどね」

笑いながらフエイトが言った。

「大丈夫なのか？」

「うん。筆記の方は母さんが教えてくれるし、実施はアルフと組手をやってるから」

「そうか。まあ頑張れよ」

「うん」

そこで会話が途切れる。

銀時は少し考えて、フェイトに”あの事”を聞く事にした。

「なあフェイト」

「何、銀時？」

「……お前…本気で俺の事、好きなの？」

こちらの世界に帰る直前に受けたフェイトの告白。

フェイトが、あんな冗談を言うとは思えないが一応聞いてみた。

「…うん。本気だよ」

フェイトは真剣に答えた。

マジでか？と銀時は心の中で呟いた。

「今はまだ子供だけど…いつか絶対、銀時を振り向かせてみせるから。後、なのはも本気だって言ってたよ」

無線機での会話なので、フェイトの顔は見れないが、多分フェイトは笑顔で答えている。

「お前等が本気だって事がよくわかったよ」

銀時はため息をついた。

「あつ、そろそろ試験の勉強の時間だから。またね銀時」

「ああ」

銀時が答えた後、無線機は切れた。

無線機をテーブルの上に置く。

「やれやれ」

銀時は天井を仰ぎながらため息をついた。

なのは達の世界。

6月4日。AM0:00。

海鳴市の中丘町。八神家で、ある魔導書が起動した。一人の少女の前で本は輝きを放ち、少女の中から小さな光の玉が出て、本に触れて強い光を放った。

光が収まると、少女の前に、見知らぬ四人の男女がいた。女性三人は黒いワンピースで、男性は黒いタンクトップとパンツ姿だった。

「『闇の書』の起動。確認しました」

ピンク色の髪でポニテールの女性が言った。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます」
次に金髪の女性が言う。

「夜天の主の下に集いし雲」

白い髪で獣の耳と尻尾を付けた逞しい肉体の男性が言う。

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

最後に赤い髪を三つ編みにした女の子が言った。

四人とも片手と膝を床につけ、頭を下げて主の命令を待った。

しかし、いつまで経っても命令が来ない。焦れた赤い三つ編みの女の子が、少女に近寄ってみた。

（ねえ。ちよつとちよつと）

女の子は念話で仲間に話し掛けた。

（ヴィータちゃん、静かに）

金髪の女性が、赤い三つ編みの女の子『ヴィータ』に注意する。

（でもさあ）

（黙っている。主の前で無礼は許されん）

ポニテールの女性もヴィータを注意する。

（無礼ってかさあコイツ…）

ヴィータは倒れてる少女の顔を覗き込んだ。

（気絶してるように見えんだけど）

「ええっ!？」

気絶した少女の名は、八神はやて。

両親を早くに亡くして、一人暮らしをしている足が不自由な少女だ。突然、目の前に得体の知れない人達が現れて、ビックリして気絶してしまったのである。

守護騎士達は慌てて、はやてに駆け寄った。

*

江戸のかぶき町。

そこに何でもやる万事屋があった。部屋の中で四人の人物がテレビを見ている。

死んだ魚のような目をした銀髪の天然パーマの男、坂田銀時。

地味な眼鏡男、志村新八。

宇宙最強の戦闘種族『夜兔族』の一人、神楽。

銀時の義理妹で、水色の髪のロングヘアーの女、雨宮咲。

四人が見ているのは『魔法少女リリカルなのは無印』のDVDである。見終わって、新八はDVDをデッキから取り出した。

え?何であるのかって?それはね……

*

大江戸ドーム。

今ここでは人気絶頂のアイドル寺門通のライブが行われていた。

「みんな〜!今日は私のコンサートに来てくれてありがとうきびウ

ンコオオ!!」

ステージに立つのはアイドルの寺門通。

「とうきびウンコオオ!!」

観客がお通の声に応える。

「それじゃあ最後の一曲『お前の母ちゃん。人だ?』!!」

最後の一曲をお通が熱唱し、ドームの中の熱気は最高潮に達した。

*

ライブが終わり、ドームの中から沢山の人が出てくる。

「いやゝ今日も盛り上がったなあ!」

と口を開いたのは寺門通親衛隊のタカチン。

「そうだなあ。お通ちゃんのライブは最高だよ!」

「なあ軍曹…アレ?軍曹?」

タカチンは周りをキョロキョロ見て人混みの中、軍曹を探す。

「軍曹ならそこで携帯いじってますよ」

一人の隊員が指差す。

そこには携帯の画面を見ながらニヤついてる軍曹がいた。

「何やってんだ軍曹のやつ?まさか、また女とメールしてやがんのか!?!」

タカチンが額に血管を浮かべる。

「いえ違います。なんか最近、リリなんとかってアニメにハマったらしくて、暇さえあればそのアニメの待ち受け画像を見てるんですよ」

「アニメだとオ!?軍曹のくせに何やってんだ!?!」

タカチンが軍曹に掴みかかるうとした時。

「ぎゃあああああ!!」

軍曹が悲鳴を上げた。

見ると一人の男が軍曹の鼻の穴に指を突っ込んで体を持ち上げていた。

「……た……隊長オオオオ！！！！」

隊員達が恐怖に駆られた声を上げた。

軍曹を持ち上げている眼鏡男は寺門通親衛隊隊長・志村新八。普段は地味なツッコミ眼鏡だが、寺門通の事になるとス。ウターがぶっ壊れるくらいの戦闘力を発揮する。

「軍曹オオオ！寺門通親衛隊隊規十二条を言ってみろオオ！！」

新八は鬼の形相で軍曹を睨みつける。普段の新八にはない重い威圧感を放っている。

「いだだだっ！！」たっ、隊員はアニメ等の二次元の作品を観ることなかれ』であります！」

痛みと恐怖に怯えながらも軍曹は答えた。

「その通りだ！軍曹オ！貴様は幹部でありながらこれを破った！よって……」

新八の目がカツと見開かれる。

「鼻フックデストロイヤーファイナルブラスターの刑に処す！！！」

叫びながら新八は軍曹の頭を地面で擦り、そのまま一本の太い木に向かって投げた。

「ぶぎゃ！！！」

軍曹は木にぶつかり、ズルズルと地面に落ちた。

「軍曹オ！貴様の持つてるそのアニメのDVDやグッズは全て没収だア！全部俺が売ってやる！！！」

*

約一時間後。

軍曹は泣く泣く全てのアニメのDVDとグッズを新八に渡した。渡した後、軍曹は泣きながら帰っていった。

新八はDVDのパッケージを見た。そこには一人の少女が写っていた。

アニメ『魔法少女リリカルなのは』の主人公の高町なのは。

新八はパッケージに写ってる、なのはを見て顔を赤くした。

（あ…アニメなんて…アニメなんて…！！）

DVDを持つ新八の手が震える。

（く…！ありがとうございました！！）

新八は頭を下げて心の中で礼を言った。一体誰に言っているのだろう。

そんで軍曹から没収した『リリカルなのは』のDVDとグッズを売らずに家に持って帰った。

*

と言う訳です。

新八の部分は見逃してください。

変わってない事を。

新八達は銀時から話を聞いて驚いた顔をした。

最初は可愛そうな人と言う目で見られていたが、通信機の会話で本当である事がわかった。

『本当なら、あのままフェイトとプレシアは分かり合えず、更にはアリシアも復活していなかったのだな』

銀龍が言う。

「俺と銀龍が介入したせいで変わったのかもな」

『いや、近藤と土方と沖田も居たぞ』

銀時が言った言葉に銀龍が付け足す。

「おい、天パ、今度は私達も連れ行けヨ」

「わーってるって」

銀時はそう言う。

「楽しみだね」

咲も言う。

銀時はフェイトから送られてきた写真を見た。
そこには、笑顔のフェイトとアリシアとプレシアとアルフが写っていた。
それを見て銀時は微笑んだ。

*

八神家。

「そつか。この子が闇の書つてもんなんやね」

車椅子に座り、手に闇の書を持ちながらはやてが言った。

「はい」

ポニテールの女性が答える。

「物心つく頃には棚にあつたんよ。綺麗な本やから、大事にはしてたんやけど……」

言いながら車椅子を動かして、棚の前に移動する。

「覚醒の時と眠ってる間に、闇の書の声を聞きましたか？」

金髪の女性が尋ねた。

「んゝ私、魔法使いとちゃうから、漠然とやったけど……あ、あった」

答えながら、はやては探し物を見つけた。

「わかった事が一つある。闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住、キッチリ面倒見なアカンゆうことや」

「え？」

はやての言葉に、ポニテールの女性がポカンとなる。

「幸い住むトコはあるし、料理は得意や。みんなのお洋服、買_こってくるからサイズ測らせてな」

そう言つてはやては、手に持つてるメジャーを伸ばした。

はやての少しズレた考えに、守護騎士達は呆然とする。

「ほんならまず…えっと……」

ポニテールの女性を見つめながら、はやてが悩む。

「私はベルカの騎士ヴォルケンリッターが将。『剣の騎士』シグナムと申します」

ポニテールの女性、シグナムが自己紹介した。

「私は『鉄槌の騎士』ヴィータ」

赤い三つ編みの女の子、ヴィータも自己紹介した。

「私は『湖の騎士』シャマルです」

金髪の女性、シャマルがヴィータに続いて自己紹介した。

「『盾の守護獣』ザフィーラ」

最後に獣の耳と尻尾がある男性、ザフィーラが名乗った。

「ほんなら、シグナムからサイズ測ろうか」

笑顔ではやてが言う。

はやての、これまでの主とずいぶん違った接し方にシグナム達は戸惑ったが、悪い気はしなかった。

この時、守護騎士も、はやても、誰も気付いていなかった。闇の書の中に眠る強大な『悪』の存在を。

その『悪』の鼓動に、誰も気付いていなかった。闇の書の中に眠る『悪』は、静かに時を待った。自分が復活する時を。

*

時は流れ。12月1日。

時空管理局艦船アースラ内。

「管理局本局へのドッキング準備、全て完了です」

「んゝ予定は順調ね」

砂糖とミルクの入ったお茶を飲みながら、リンディ・ハラオウンは頷いた。

「やっと私達も一休みできますね」

エイミィ・リミエッタがやってきた。

「そうねえ」

「レティ提督の方は大変みたいですけど…」

「一級搜索指定のロストロギアで、搜索担当班は大変みたいね」
リンディはため息をついた。

*

アースラの戦闘訓練室。

フェイト・テストロッサとアルフ、クロノ・ハラオウンの三人が戦闘訓練を終えた。

「はあゝ疲れたあゝ」

背伸びをしながらアルフが訓練室を出た。その後ろをフェイトとクロノが歩く。

「アルフ、クロノ。お疲れ様」

「フェイトもお疲れ」

「ああ、お疲れ」

三人は汗をタオルで拭きながら廊下を歩いた。

「じゃあ僕はシャワーを浴びてくるよ」

「うん」

フェイト達と分かれて、クロノはシャワー室へ向かった。

「フェイト、アルフ」

廊下の向こうから、プレシア・テストロッサが二人に声をかけた。
プレシアの隣にはアリシアが居た。

「母さん」

二人はプレシアに駆け寄った。

「二人ともお疲れ様。おやつ作ったんだけど、食べる？」

「一緒に食べよう！」

「うん！」

「わーい！」

二人は喜びながら、プレシアと一緒に部屋に向かった。

部屋に入った三人は、おやつを食べながら話をしていた。

「そういえば、もう少しで銀時がこっちの世界に来れるのよね？」

お茶を飲みながらプレシアが言った。

「本当かい！？」

アルフが嬉しさのあまり席を立つ。

「うん。装置の調整がもう少しで完成するって、源外さんが言ってたよ」

フェイトも嬉しそうな表情をしている。

「楽しみだな」

アリシアも楽しみにしていた。

「そうね。アリシアのそれを見せたら驚くかもね」

プレシアがそう言うところを見る。

アリシアの隣に、鞘と柄が黒く、柄の先端には黒い束ねられた糸があり、鐔がない刀が椅子に置かれてあった。

「そうだね。銀時と銀龍が驚く所早く見たいな」

その刀を鞘から抜く。刀身は黄色く煌めいていた。

「あゝ！早く銀時に会いたいなあ！」

アルフは、銀時との再会を楽しみにしながら、バクバクおやつを食べる。

「アルフ、一人で食べ過ぎよ」

「はい」

プレシアに注意されて、アルフは少しへこんだ。

そんな様子を見ながら、フェイトは微笑んだ。

（私も…早く会いたいな）

一枚の写真を手に取って見る。

銀時達から送られた写真。写っているのは万事屋の四人。

*

12月2日。

海鳴市の市街地。
闇の書を巡る戦いが今始まり、銀龍達『喋る刀』の秘密が明かされる。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

アリシア「アリシア・テストロッサだよ」

銀八「つい出てきたばっかじゃなか！」

アリシア「気にしない。質問行きます。ペンネーム『支配者』さんからの質問

『質問です。』

ミラクル∞へ

リリカル銀魂全般での自分の扱いを如何思いますか？

ナナフシさんへ

A / Sのラスボスの怪物の事ですけど如何しますか？

銀時へ

銀龍の力を改めて如何思いますか？

では、さよなら「『ミラクル』」

ミラクル∞「アリシアちゃんまで！？まあ、それは……ほとんどが酷い扱いじゃねえかアアアアアアアア！良い扱いしてくれる所なんてめっちゃ少ないし！？」

銀八「だそうだ。ナナフシ次」

ナナフシ「そうですねエ……今の所、思いついてますけど、『赤夜叉』さん、『支配者』さんを見るとこれで良いのか？と思っちゃうんですよ。だから、今でも考え中です。ラスボスはちゃんと出しますんで」

銀八「だそうだ。三つ目だが」

銀時「改めて思うと凄いやな。こんな能力もあつて……」

銀八「だそうだ。と言う訳で『支配者』さん。ラスボスを楽しみにしててください」

アリシア「次だよ。ペンネーム『咲夜』さんからの質問
『銀さんへ

この小説や他の小説でも新八がロリコンならフェイトやなのは好意を持たれているうえ、キスされたんだから銀時もロリコンじゃないんですか（ニヤリ）人の事を言えないので銀さんもお仕置きを希望します（黒笑）

二つ目の質問です

近藤達へ

もし銀さんがリリカルなのはのフェイトになって現れたらどうしますか？

三つ目の質問です

新八とクロノへ

他の小説では悲惨な目に遭っている新八やクロノに朗報です。自分が書いているリリカル銀魂ではクロノと新八では見せ場があるので楽しみにしていて下さいね。『銀時』

銀時「俺はロリコンじゃねエエエエエエエエエエエエ！それは向こうからやってきたんだ！俺はロリコンになるつもりはこれっぽっちもねエエエエエエエエエエエエ！」

銀八「二つ目だが」

近藤「それは……プフ」

土方「そ……想像で……出来ねえ……ブッ」

沖田「面白そうでさア（黒笑）」

銀八「一名危ない奴いる！？三つ目だが」

新八「よっしゃアアアアアアアアアアアアアア！」

クロノ「嬉しいぞ！『咲夜』さんよろしく頼む！」

ナナフシ「新八はこつちでも幸せになる可能性大なんだけどね」

新八「ホント！？」

ナナフシ「おう」

新八「嬉しいイイイイイイイ！」

ナナフシ「壊れた。ついでにクロノは？だな」

クロノ「何故だアアアアアアア！」

銀八「と言う訳で『咲夜』さん。廊下に立ってなさい」

アリシア「次で最後です。ペンネーム『キムチ』さんからの質問
『月詠さんに質問です。』

銀魂原作で銀さんにフラグっぽいものが立ちましたが月詠さん自身
は銀さんの事どう思ってるんですか？『月詠って？』

銀八「まあ、まだ会ってないもんな。月詠」

月詠「わっちは特に何も思っくらんが？」

銀八「らしいです。と言う訳で『キムチ』さん。廊下に立ってなさい」

アリシア「質問は以上です」

銀八「また次回」

第二十四訓：新しい物語の始まりです！（後書き）

ナナフシ「さてと、こんなもんでしょうか」

銀時「ちよつと待て！あれ……アリシアが持ってたのって」

ナナフシ「ふん！」

銀時「ゴバツ！」

銀時はナナフシに殴られて気絶する。

ナナフシ「ネタバレになるからダメでしょうが」

フェイト「わかる人にはわかってると思うよ」

ナナフシ「やつぱ？」

アリシア「それじゃ、また次回！」

第二十五訓：ピンチの時にカッコよく駆けつける主人公が多いよね（前書き）

ナナフシ「少し遅いですが、新年あけまして」

全員『おめでとございます！』

ナナフシ「田舎に帰ってて投稿出来なかったんだよね」

銀時「そうか」

ナナフシ「それでは！『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります！」

第二十五訓：ピンチの時にカッコよく駆けつける主人公が多いよね

12月2日。

海鳴市の市街地。

高町なのはは、謎の襲撃者に襲われていた。

襲撃者はヴィータ。赤いドレスのような恰好で、手にはハンマーのような物を持っている。

なのはもバリアジャケットを着て、レイジングハートを構える。

ヴィータは鉄球を上上げて、なのはに向かった鉄球をハンマーで打った。

障壁を張ってなのはは、鉄球を防いだ。同時に二つの桜色の魔力弾を出した。

「どらああああ!!」

ハンマーを振り下ろしながら、ヴィータがなのはに迫る。

なのはは横に飛んで、ハンマーをかわした。

「いきなり襲い掛かられる覚えはないんだけど……!」

空中で止まって、ヴィータに向き直る。

「どこの子!? 一体なんでこんな事するの!?!」

大きな声でヴィータに理由を尋ねる。

ヴィータは黙って指の間に、新たな鉄球を出す。

「教えてくれなきゃ、わからないってばア!」

そう言っただけなのはは、先ほど出した二つの魔力弾『デイベインシューター』を操作して、ヴィータの背中目掛けて放った。

ヴィータは一発目を避けて、二発目を障壁で防いだ。

「このやるおおお!!」

ヴィータは怒りながらハンマーを振り上げて、なのはに襲い掛かる。振り下ろされるハンマーを、なのはは後ろに飛んでかわした。レイジングハートをシューティングモードにして、距離をとる。

「話を!」

レイジングハートを構える。

「聞いてつてばアー!!」

ヴィータに向かってディバインバスターを放つ。
ディバインバスターはヴィータの左側を掠った。その時に、ヴィータがかぶっていた帽子が落ちてしまった。

落ちていく帽子を見ながらヴィータは怒り、なのはを怒りの形相で睨んだ。睨まれたなのはは、少したじろいだ。

ヴィータは、足下に赤い魔法陣を展開する。

「グラーファイゼン！カートリッジロード!!」

ヴィータが叫んだ後、ハンマーがガシャンと撃鉄を打った音を立てて、ハンマーの形が変わった。

「え…え…!!?」

ハンマーの形が変わって、なのはが驚く。

ハンマーは片方の先の部分が尖って、もう片方の面は噴射口みたいだった。

「ラケーテン!!」

片方の面がジェット噴射して、ヴィータは回転する。

回転の勢いを使って、なのはに襲い掛かる。なのははすぐに障壁を展開するが、簡単に破られ、レイジングハートに直撃してしまう。

「ハンマー!!!」

ヴィータはハンマーを振り抜き、なのははビルに向かって吹き飛ばされる。

「ああああ!!」

窓ガラスを破って、ビルの中に入った。

埃や煙が立ち込める中、なのはは咳をしながら立ち上がった。

「でええええい!!」

ハンマーを構えたヴィータが、突っ込んでくる。再び障壁を張って防ぐ。

「ぶち抜けエエエ!!」

「了解」

ヴィータの叫びに、持っているハンマーが応えると、障壁は破られた。

バリアジャケットも破壊され、なのはは後ろに吹き飛び、壁に叩きつけられる。

ヴィータがなのはに近づく。

なのはは、なんとか傷ついたレイジングハートをヴィータに向ける。なのはの前でヴィータはハンマーを振り上げる。

（こんなので…終わり？嫌だ……ユーノ君…クロノ君…アリシアちゃん…銀さん…フェイトちゃん…！）

なのはは固く目を閉じた。

直後、金属同士がぶつかる音が前で響いた。

なのはは、ゆっくりと目を開けて恐る恐る前を見た。

そこには黒いマントを羽織って、自分を護っているフェイトの姿があった。

「ごめんなのは、遅くなった」

横から声をかけられて、なのはは見た。

「ユーノ、君…」

隣にいたのは、ユーノ・スクライアだった。

「く…！仲間か…？」

ヴィータはフェイトから距離をとった。

「友達だ」

バルディッシュを鎌に変形させ、構えながらフェイトが答えた。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

「なんだデメエ？管理局の魔導師か？」

ハンマーを構えながらヴィータが睨む。

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

一歩前に踏み出す。

「抵抗しなければ、弁護の機会がキミにはある。同意するなら武装を解除して」

バルディッシュを構えながら、一応武装の解除を促す。

「誰がするかよ！」

ヴィータはビルの外へ出た。

「ユーノ、なのはをお願い！」

「うん！」

すぐにフェイトは、ヴィータの後を追った。

残ったユーノは、なのはに回復の魔法をかける。

*

空中でヴィータとフェイトが対峙する。

「バルディッシュ」

フェイトは、バルディッシュの金色の魔力の刃をヴィータに向かって放った。

ヴィータも四つの鉄球をフェイトに向かって打ち放った。ヴィータは障壁を張って魔力の刃を防いだ。

フェイトは鉄球をかわすが、追尾型の鉄球はフェイトを追い続ける。その時、アルフがヴィータに拳を放った。ヴィータがアルフに意識を向けた瞬間、フェイトは上に避けて鉄球同士がぶつかった。

フェイトとヴィータがデバイスで打ち合う。十数回打ち合って、フェイトが一旦離れる。

その直後、アルフがバインドでヴィータの動きを止めた。

「く……！」

ヴィータが歯を食いしばる。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらうよ」

ヴィータにバルディッシュを向けながら言った。

その時、突如フェイトの前に剣を持ったシグナムが現れた。剣を横薙ぎに振り、フェイトはバルディッシュで防ぐが後ろに飛ばされる。

「シグナム」

ヴィータが呟いた。

「おおおおお！！」

別方向からザフィーラがやってきて、アルフに蹴りを放った。

「ああっ！」

アルフは腕で防御するが、吹き飛ばされてしまう。

「レヴァンティン。カートリッジモード」

シグナムの持つ剣が撃鉄を起こす。

直後、剣が炎に包まれた。

「紫電一閃！！！」

フェイトに向かって剣を振り下ろす。

バルディッシュで剣撃を防ごうとする。バルディッシュは真つ二つに斬れてしまった。

シグナムが再び剣を振り下ろす。フェイトは障壁を張って防御する。

フェイトはビルの上上に叩きつけられた。

「フェイト！！！」

アルフがフェイトの元へ行くこうとする。

が、ザフィーラが行く手を阻む。

*

アースラ内。

結界によって、画面に現地の様子が映らない。局員達が結界の解析を急ぐ。

「術式が違う。ミッドチルダ式の結界じゃない」

「そうなんだよ」

砂嵐の画面を見つめながら、クロノは表情を険しくし、エイミィは焦りの表情を浮かべる。

二人の後ろで、プレシアが心配そうに画面を見つめてる。現地の様子がわからなくて、プレシアの不安は大きくなる一方だった。

「フェイト…アルフ…」

プレシアは意を決して、黒い無線機を取り出した。

（まだ無理かもしれないけど……あの子達を助けて！）

無線機のスイッチを入れた。

*

シグナムはヴィータの前に浮かんだ。

「どうしたヴィータ？油断でもしたか？」

「うつせーよ。こっから逆転するところだったんだ！」

「そうか。それは邪魔したな」

そう言つてシグナムは、ヴィータにかかっているバインドを破壊した。

「だが、あまり無茶はするな。無茶をして怪我でもしたら、我らが主が心配する」

「わーってるよ！」

ヴィータはそっぽを向いてしまふ。

「ほら。落とし物だ」

シグナムはヴィータの頭に、先ほど落ちた帽子をかぶせた。ちなみに破損はシグナムが直してある。

「…ありがと。シグナム」

ヴィータは俯きながら礼を言った。

ユーノも加わつて、状況は三対三になった。

シグナムは、フェイトが落ちた屋上に降り立つ。倒れてるフェイトに近づいた。

「く…！」

フェイトは、目の前に立つシグナムを見た。

「じつとしている。抵抗しなければ、命までは取らない」

そう言つて剣を上に掲げる。

「だ…誰が…！」

足に力を入れて立ち上がろうとする。

「いい気迫だ。だが…残念だがここまでだ」

シグナムは剣を振り下ろす。

フェイトは目を閉じた。頭に浮かんだのは一人の男。

（銀時！）

とても強く、自分が好きになった男の名を心の中で叫んだ。
直後、フェイトとシグナムの間に光が出現した。

「何っ！？」

「えっ！？」

驚いたシグナムは剣を止め、フェイトは目を開いて光を見た。

そして光の中から、一本の木刀が現れ、シグナムに向かって突きを放った。

「くっ！」

シグナムは剣で木刀の突きを防ぎ、光から離れた。

やがて光が収まり、一人の男が姿を現した。

フェイトは目を見開いて驚いた。フェイトはこの男を知っている。

銀髪の天然パーマ、白い着物、『洞爺湖』の文字が入ってる木刀。

「よオ」

男はフェイトに振り返った。

「久しぶりだな」

笑みを浮かべながら、フェイトを見た。

「ぎ…」

フェイトの顔が自然と笑顔になった。

「銀時っ！！」

大きな声で銀時の名を呼んだ。

「まっ、再会を喜ぶのは後にしよーや」

銀時はシグナムに向き直った。

「貴様…何者だ？」

銀時に剣を向けながら、シグナムは鋭い眼で尋ねた。

「なアに」

銀時は不敵な笑みを浮かべた。

「ただの通りすがりの侍と」

『その侍の刀だ』

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「はい、新年あけましておめでとうございます。今回のアシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「それじゃ、行くか。まずはペンネーム『ケン』さんからの質問『屁怒紹様へ

新八は軍曹という人からリリカルなのはグッズを掟という名目で奪いました。

彼は反省もしてないのでお話して更生してやってください。

はやてへ

俺の作品では天使という解放形態に目覚め、人外に匹敵する身体能力も得ました。

これをどう思いますか？

銀さんへ

これからフラグを立て増え続けるラバーズに対し一夫多妻制を使うしかないですよ。』一つ目だが」

屁努組「志村さん。そんな事してはいけませんよ！少し話をしましょう」

新八「は……はい」

新八は屁努組に連れて行かれた。

銀八「二つ目だが」

はやて「そうなんや」。人外にも匹敵する身体能力もあるなんて……凄いなア。うちもそんな風になってみたいな」

銀八「はい、作者は関西弁がうまく書けてるか不安らしいんで。作者関西人のくせに」

なのは「最後だけど、銀さん」

銀時「何で毎回一夫多妻のやつが来るんだよオオオオオオオオオオオオオ！やるかアアアアアアアア！」

ナナフシ「ま、それは最終章の最終回を楽しみにしててください」

銀時「本当にやめろよオオオオ！」

銀八「と言う訳で『ケン』さん。新年あけましておめでとうございます」

なのは「次で最後です。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『1・咲に質問。あなたにとってなのはとフェイトが最大のライバ

ルと思いますが、どうしますか？

2・ナナフシさんに質問。劇場版銀魂く新訳紅桜編くを見た事がありますか？ でしたらなのはとフェイトを啜えた感想をお願いします。

3・なのはとフェイトに質問。これ以上銀さんにハーレムメンバーは必要ですか？『三つ目だけじゃないの！』

フェイト「うん！要らない！」

銀八「先に三つ目答えちゃったよ！一つ目だが」

咲「うゝん、どうしようか？」

銀八「まだよくわからないそうです。この子、根は優しいからな。二つ目だが」

ナナフシ「見た事ありますよ！DVDをレンタルして！凄くよかったです。銀さんと桂が格好良かったなア」

なのは「ナナフシに見せて貰ったけど、銀さん格好良かったの。桂さんも格好良かったね」

フェイト「そうだね。高杉に刺されるシーンは驚いたけど」

銀八「らしいです。と言う訳で『黒龍』さん。新年あけましておめでとうございます」

なのは「質問は以上です」

銀八「また次回」

第二十五訓：ピンチの時にカッコよく駆けつける主人公が多いよね（後書き）

ナナフシ「ここ……変えようがなかったんです……」

銀時「おい」

ナナフシ「バトルシーンは違うと思うので、見逃してください！」

銀時「おいおい」

ナナフシ「連続投稿しますんで！それでは！」

第二十六訓：戦いは緊張感を持って戦え！（前書き）

ナナフシ「連続投稿です」

銀時「だな」

ナナフシ「と言う訳で！」

銀龍『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ』

第二十六訓：戦いは緊張感を持って戦え！

空中ではザフィーラとアルフが戦っていた。

「ちっ！」

ザフィーラの攻撃に押され、アルフは防戦一方だった。

その時、

「わんっ！！！」

上空から犬の鳴き声のようなものが聞こえた。

「えっ！？」

二人は思わず上を見た。

巨大な白い犬のような生き物が、ザフィーラに向かって上空から突進…というか落ちてきた。

「なっ！？」

最初は驚いたが、すぐにザフィーラは障壁を張って防御した。白い犬はザフィーラの障壁にぶつかり、ザフィーラと白い犬はそのまま真下にあるビルの屋上に落ちた。

「な…何だいあの犬！？」

アルフが驚いていると、

「定春ウウウー！！」

また上空から声が聞こえた。

しかし、今度のは聞き覚えのある声。

アルフはまた上を見た。そこにいたのは、傘を持った赤いチャイナ服を着た少女だった。

そのまま神楽は、定春とザフィーラが落ちた屋上に着地した。

「定春っ！！」

「わんっ！」

神楽の声を聞いて、巨大な白い犬『定春』が駆け寄ってきた。

「定春！無事でよかったアル！」

神楽は定春を抱きしめた。

アルフも屋上に降り立った。

「あ、お前がアルフアルカ？」

「そうだけど」

神楽の問いにアルフは答える。

「私は神楽アル！よろしくネ」

「ああ、銀時が言ってた。よろしく」

神楽とアルフは握手した。

「俺まで何で……」

いきなり、隣から声が聞こえてそつちを見ると、金髪のウルフヘツドに淡い黒の瞳、ほどよく引き締まった体格のクールガイで甚平姿がトレードマークの男が居た。

「^{ぜんが}漸呀アルカ」

「さつき会ったばかりで呼び捨てかよ」

神楽は男の事を漸呀と呼んだ。

漸呀は神楽にツツコンだ。

「たくつ、銀時も変な事に首をつつこんだな」

漸呀はそう言った。

神楽は定春の頭を撫でる。

その時、ザフィーラが起き上がった。

「定春、アルフ、下がってるアル」

神楽がそう言った時だった。

「俺に任せろ」

漸呀がそう言った。

そう言うといきなり刀が漸呀の手元に現れた。

刀は鞘と柄が黒く、鍔が少し特殊で、羽が円を描いた感じになっていた。

（銀時と同じ様に！まさか……あの刀、銀龍と同じ『喋る刀』！？）
アルフはそれを見て思った。

「何を言ってるアルか！あいつは私が相手をするアル！」

「黙ってる夜兔族のガキ」

神楽はそう言われておとなしく退いた。

「それじゃ、始めようぜ」

漸呀は鞘から刀を抜く。

刀身は赤く、鳳凰えんおうが描かれていた。

「行くぞ。『炎鳳』」

『わかつている』

刀は喋った。

*

ユーノもヴィータの攻撃に押されていた。

「ぶっ潰せエエー！」

ヴィータがハンマーを振り上げた直後、

「そこまでだ」

上空から声が聞こえた。

「えっ！？」

ヴィータは上を見た。

上空から、刀を持った人物がヴィータに迫っていた。

「くっ！」

ヴィータはハンマーで、振り下ろされる刀を防いだ。

そのまま二人は屋上に着地した。刀を持った人物は一旦ヴィータから離れた。

「誰だデメエ！？」

突然の乱入者にヴィータは怒鳴った。

乱入者は手に刀を持ち、黒い髪の毛を後ろに束ね、左目に眼帯を付けている。

「柳生九兵衛だ」
やぎゅうきゅうへい

隻眼でヴィータを見据えながら九兵衛が名乗った。

「柳生…九兵衛？」

屋上の真上にいるユーノは、首を傾げた。

「若アアア！！」

すると一人の男が九兵衛と同じように、突然屋上の真上に現れ、屋上に着地した。

「大丈夫ですか、若！？お怪我はありませんか！？」

長髪で目が細めで物腰柔らかそうな男、東城歩が九兵衛に駆け寄った。

「心配するな。怪我はない」

「そうですか。では…」

九兵衛の返事に安心した東城は、どこからともなく鎧を取り出した。「コレを着てください。雨が降りそうな天気なので」

と、東城が九兵衛に鎧を着させようとした瞬間、九兵衛は東城の頭に手刀を叩き込んだ。

「またやられてるよ。東城さん」

すると、また着地して現れた女性が居た。

水色の髪に腰まであるロングヘアーだった。

雨宮咲である。

「さてと……私が相手だよ」

咲がそう言つと木刀を構えた。

*

なのはは、屋上でみんなの様子を見ていた。

「銀さん！」

銀時の姿を確認して、なのはも明るい表情になった。

他にも巨大な白い犬や、見たことがない人たちがいる。

チャイナ服を着ているのは……写真に載ってた神楽ちゃんって言っ

子だ。あの水色の髪の綺麗な女性は確か、銀さんの義理妹の雨宮咲さん。他にも見た事がない人も居る。

と、なのはが考えていると、

「なのはちゃん」

後ろから名前を呼ばれた。

なのはは振り返って後ろを見た。そこには志村新八がいた。

「えーと、新八さんですか？」

「そうだよ。初めましてなのはちゃん」

「こちらこそ」

なのはは新八の名前を確かめてから笑顔で挨拶する。

ふと、なのはは新八の隣にいる女性二人に気付いた。

「紹介するね。僕の姉上の志村妙」

妙の方を見ながら、新八はなのはに紹介した。

「初めまして。志村妙です」

ニツコリ笑いながら、妙が自己紹介した。

「私はさっき知り合ったばかりで、神宮寺葵^{じんぐうじ}って言うんだ」

「は…初めまして。高町なのはです」

ペコリと頭を下げながら、なのはも自己紹介した。

「なんだか大変な事になってるみたいだね」

状況を見ながら新八が呟いた。

「でも僕達が来たからには、もう大丈夫だよ！」

なのはを安心させるために、新八が力強く言った。

「はい！」

新八の言葉に、なのはは笑顔で頷いた。

*

漸呀VSザフィーラ

「うおおおおお！」

ザフィーラの拳を軽々と漸呀は避ける。

「オラァ！」

漸呀は炎凰を横薙ぎに振った。

「ぐっ！」

ザフィーラは何とか避けるが、肩にキズが入る。

「行くぞ！」

『ああ』

漸呀は刀を振り上げて……振り下ろした。

すると、金色の炎の斬撃が放たれた。

（魔法！？）

ザフィーラは驚いたが、すぐさま障壁を張り、防いだ。

「次行くぜ」

漸呀はそう言つと巨大な炎の球を作り始めた。

「喰らえ！ 剛炎球！」
ごうえんきゅう

そう言つとザフィーラに向かって投げた。

ザフィーラは障壁で防ごうとした。

威力が高い為か、障壁にヒビが入る。

「くっ！」

ザフィーラは苦しそうな顔をした。

「爆ぜるから気を付けろ」

「……！」

漸呀が言つた言葉にザフィーラが驚いた瞬間、炎の球が爆発した。

そこに煙が立ち上る。

アルフと神楽は驚いていた。

（やっぱり！ 銀龍と同じ『喋る刀』！！）

アルフは確信した。

マジックコントロール

魔力操作を使っており、喋っているのだから。

煙が消えるとそこにはザフィーラが倒れていた。

「それぐらいじゃ、やられねえだろ？ 殺す気では行っていないからな」

ザフィーラにそう言っているとザフィーラは起きあがった。

（何故あいつが魔法を使える！？魔導士ではないハズだ！それにあの刀……）

ザフィーラは驚きを隠せなかった。

『どうした？俺達に勝てると思うな』

炎鳳はそう言った。

「っ……強いアル」

「ワン……」

神楽と定春も驚いていた。

*

「うおおおおおおお！」

ヴィータが叫びながらグラーファイゼンを振り下ろした。

咲はそれを受け流していた。

咲の剣は静剣である。

（まただ！）

一旦、咲から離れる。

（コイツ…力を力で受けるんじゃないで、私の力を受け流してやがる！）

「ふう……それじゃ、本気を見せてあげようか」

咲がそう言つと無表情に変わった。

そして、無表情なのに鬼の様な鋭い視線をヴィータに向けた。

咲は『冷血の鬼姫』と化した。

普段はそう簡単にならないが、今回は本気を出す事にした。

ヴィータは一瞬怯んだが、すぐさま気を取り直した。

「行くよ……」

咲がそう言つと走り出した。

「なら、これでどうだ！」

鉄球を四つだして、咲に向かって打ち放った。

それを咲は、無駄のない小さな動作で素早く鉄球をかわす。だが追尾型の鉄球は、また咲に迫る。避けても無駄だと判断した咲は動きを止めた。

（諦めたか？）

ヴィータがそう思い、鉄球が咲に当たる瞬間だった。パカン。

いきなり四つの鉄球が真つ二つに割れた。

「え！？」

ヴィータは驚いた。

「よそ見してて大丈夫？」

咲はヴィータの目の前まで来ていた。

「ハア！！」

咲が木刀を横薙ぎに振るう。

しかも、単純すぎるのだ。

「こんなの！」

ヴィータは防ごうとした時だった。

ガンッ！

顎に衝撃が走った。

顔を前に戻すと、咲が木刀を振り上げた格好で居た。

「なっ！？さっきは横薙ぎに！？」

「私の剣は高速で振って、幻影を生み出す。だから、何処から来るかわからないよ？」

（つまり、最初のは、罠！？次の攻撃が本命か！）

ヴィータはわかったが、剣技が速く、何処から来るのかわからなかった。

上と思ったら、右から。左からと思ったら下から。

舞いの様な剣にヴィータは翻弄されていた。

「ハア！」

咲は木刀を振るう。

それをヴィータは避けた。

「本当に……人間の技か？」

「人間だよ……やろうと思えば出来るんじゃないかな？私の剣技」
咲はヴィータに木刀を構えながらそう言った。

*

シグナムは、屋上で銀時と対峙していた。

（一体何者だ、この男は？）

剣を構えながら、シグナムは銀時を見つめた。

（魔力を感じるが…魔導師ではない……だが…）

剣を握る手に力を入れる。

（この男…強い！）

鋭い眼光を銀時にぶつける。

対する銀時は、緊張した様子もなくシグナムを見ていた。

「おいおい。んな怖い顔してつと、せつかくの綺麗な顔が台無しだぜ？」

「なっ!？」

銀時の言葉に、シグナムは少し動揺する。

銀時の後ろにいるフェイトは、少しムツとした顔になる。

「どうだいネーちゃん。んな物騒な剣振り回さねーで、俺の股間のけ…」

と、銀時が言いかけた所で、フェイトが無表情で銀時の後頭部に、バルディッシュの魔力の刃を刺した。

「ぎゃあああああ!！」

後頭部を押さえながら、銀時が悲鳴を上げた。

「お…お前！何すんだコノヤロー!！」

涙を流しながらフェイトに怒鳴った。

ブイツとフェイトは無言でそっぽを向いた。

「おいコラ。助けてやったのに、そりゃないんじゃないの？ 銀さん泣くぞ？」

銀時が、そっぽを向いてるフェイトに話し掛ける。

が、フェイトはそれを見殺し。

「ん…コホンッ！」

二人の様子を見ていたシグナムが、わざとらしく大きな咳をした。そこで二人はようやくシグナムに向き直った。

「あ…悪い」

と、銀時が謝った。

気を取り直して、シグナムが剣を構える。

「貴様が何者か知らんが、邪魔をするなら容赦はしない」
殺気をぶつけながらシグナムが言った。

「下がってろ、フェイト」

「うん。銀時…気をつけて」

「後でチョコレートパフェ奢ってもらうからな」

フェイトは後ろに下がり、銀時は木刀を構えた。

銀時VSシグナム。

侍と騎士の対決が始まる。

他の所ではもう始まっているけどね。

第二十六訓：戦いは緊張感を持って戦え！（後書き）

ナナフシ「こんな感じでしょうか。月光閃火さん。漸呀の喋り方こんな感じでどうでしょう？葵は……もうちょつと後で。喋り方のチエツクは」

銀時「結局、あっちの白瀬葵は出さなかったな」

ナナフシ「無理！二人も同じ名前がいる奴が居たら無理！日常編は考えとくけど」

銀時「それでは！また次回！」

第二十七訓：最近の剣は色々な機能を付けすぎ……って銀龍もか（前書き）

ナナフシ「連続投稿」

銀時「暇人だな」

ナナフシ「うるさい。『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

第二十七訓：最近の剣は色んな機能を付けすぎ……って銀龍もか

ビルの屋上で、剣がぶつかり合う音が響く。

木刀『洞爺湖』とアームドデバイス『レヴァンティン』が火花を散らせてぶつかる。

「く……！」

シグナムは苦戦していた。

（何だ？この男の剣は！？）

銀時と剣を交えて思った。

この男の剣には、決まった『型』がない。まるで雲の如く変化する剣。

（正規の剣術ではない！我流か！？）

今まで出会った事がない剣筋に、シグナムは苦戦していた。

剣筋が読み難いだけでなく、この男自身の身体能力も高い。力と速さ、反応速度が並の人間を大きく超えている。魔法を使わず、純粋な剣の腕のみでベルカの騎士の私と剣を交えている。

（こんな人間は初めてだ！）

剣の打ち合いは激しさを増していく。

「うおおおおー！」

銀時が両手で持ちながら、木刀を上段から振り下ろした。

「くっ！」

シグナムは剣を頭上に構えて、木刀を防いだ。

銀時は、素早く木刀を引いて今度は右手に持ち替えて、横薙ぎの一撃を放った。シグナムも反応して剣で木刀を防ぐ。

戦況はシグナムが押され始めていた。

（くっ！やむを得ん！）

シグナムは一旦、銀時から離れて距離をとった。

「レヴァンティン！カートリッジロードー！」

レヴァンティンが撃鉄を起こした。

直後、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。

「な……!？」

それを見た銀時は、驚いた顔をする。

「紫電一閃!!!!」

高速で銀時に接近し、炎を纏ったレヴァンティンを振り下ろした。

振り下ろされたレヴァンティンによって床が砕け、辺りに煙が立ち込めた。

「銀時!!」

下がって戦いを見守っていたフェイトが叫んだ。

レヴァンティンの炎が消えた。シグナムは悲痛な顔で煙を見つめた。

（…殺すつもりはなかったが…コレを使わなければ、私がやられていたかもしれん）

シグナムがそう思った直後、

「おい」

煙の中から声が聞こえた。

「……!」

シグナムは目を見開いて煙を見た。

煙は晴れていき、中から服を埃だらけにし、頭から少し血を流した銀時の姿が現れた。

「危ねーな。当たったらどうすんだコノヤロー」

いつもと変わらぬ口調で銀時が言った。

（ま、漸呀と炎凰の炎よりまだマシだな）

銀時はそう思った。

シグナムとフェイトは驚愕した。いや、一番驚いているのは、やはり技を放ったシグナムだった。

（ば…馬鹿な!!紫電一閃を初見でかわした!!?）

シグナムは驚愕を隠せなかった。

今までこの『紫電一閃』を初見でかわされた事は一度もない。

（この男の実力…甘く見ていたワケではないが……!）

再び銀時から距離とって、シグナムは剣を構え直した。

だが、さすがに今度は銀時もシグナムを追って距離を縮めた。

銀時が横薙ぎに木刀を振るうと、シグナムは上に飛んで避けた。

「！」

銀時は、空に飛んだシグナムを見上げた。

「我らは負けるワケにはいかないのだ！レヴァンティン！！」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態『シュランゲフォルム』となった。

「おいイイイ！ちょっと待てお前！ソレもう『剣』じゃねーだろ！別の武器だろ！！」

シュランゲフォルムを見て銀時が叫んだ。

シグナムは構わず連結刃で銀時を攻撃した。

「ちっ！」

銀時は横に跳んで刃をかわした。

連結刃は蛇のように動き、銀時を翻弄する。

シグナムは連結刃の刃に紫色の炎を纏わせた。

「…すまない」

シグナムは小さな声で、銀時に謝罪をした。

そして炎を纏った連結刃を操る。

「飛竜一閃！！！！」

炎を纏った連結刃を銀時に放った。

屋上は大爆発を起こした。

「シグナム！？」

周りで戦ってる人達の意識が、シグナム達が戦ってるビルに向いた。ビルの屋上には大きな穴が空き、中から煙が立ち上る。

「ぎ…銀時…？」

フェイトはゆつくりと穴に近づいた。

銀時が負けた？死んだ？

フェイトの目に涙が浮かんだ。

「銀時イイイ！！」

フェイトの叫び声が響いた。

空中に浮いてるシグナムは、肩で息をしていた。

（銀髪の男…せめて倒す前に、お前の名を知りたかった……）

シグナムは静かに目を閉じた。

そしてシュランゲフォルムを解除しようとするが、

「えっ？」

何かに引っ掛かっているのか、連結刃がピンツと真っ直ぐに張って
いて戻らない。

（引っ掛かる？一体何に……）

シグナムがそう考えた時、

「オイ…姉ちゃん」

下から声が聞こえた。

シグナムは額から汗を流した。ゆっくりと声がした方……屋上に出
来た穴を見た。

声を聞いたフェイトも穴を見た。

煙が晴れて、屋上の下の階にいる一人の男が姿を現した。

「刃物遊びは終わりだコノヤロー」

連結刃を木刀に絡め、両手で木刀を上段に構えている銀時が立っ
ていた。

右肩には連結刃でやられた傷があった。

「銀時！！」

「な…！？」

フェイトは嬉しさで銀時の名を呼び、シグナムは目を見開いて驚愕
した。

「悪いな。テメーらにも譲れねーモンがあるみてえだが…」

木刀を持つ両腕に力を入れる。

「俺にも譲れねーモンがあるんだアアア！！」

叫びながら銀時は、思いつき木刀を振り下ろした。

「うわあっ！！」

レヴァンティンを持つてるシグナムは、引っ張られて屋上に叩きつ
けられた。

床は砕け、シグナムも銀時がいる階に落ちた。銀時は絡めた連結刃を解いた。

「くっ！」

シグナムは立ち上がって、シュランゲフォルムを解除し、元の長剣に戻した。

「いいか…テメーらがこの世界で何しようが、どうでもいいし俺の知った事じゃねエ」

木刀を突きつけながら、シグナムに言った。

「だが俺のこの剣。コイツが届く範囲は、俺の国だ」
鋭い眼光をシグナムにぶつける。

「無粋に入ってきて、俺の大事なモンを傷つける奴ア」

両手で木刀を握って構える。

シグナムも刀身を炎で包んで構える。

フェイトは屋上から戦いを見守る。

「魔導師だろうが、騎士だろうが…ロストロギアだろうが！」

二人は同時に地を蹴って動いた。

「ブツた斬る！！！」

すれ違い様に二本の刃が振り下ろされた。

二人の動きがピタリと止まった。

わずか二、三秒の沈黙の後、

「…無念」

シグナムが床に倒れた。

銀時は木刀を腰に差した。

「銀時！！」

フェイトが銀時に駆け寄った。

「銀時！大丈夫！？」

「ああ。心配いらねーよ」

そう言って銀時は、フェイトの頭に手を乗せた。

*

「ん…」

シグナムは意識を取り戻した。うつすらと目を開ける。

「あ…私は……」

ゆっくりと体を起こした。

「よォ」

声をかけられて見ると、銀時とフェイトがすぐ側に座っていた。

「き…貴様ら…!？」

シグナムはすぐに立ち上がろうとしたが、

「ぐっ…!」

銀時にやられた傷が痛んで、立てなかった。

「おいおい。急に立ち上がろうとすんじゃねーよ」

そう言つて銀時は、シグナムに手を差し出した。

「え…?」

シグナムは呆然となつて、差し出された手を見た。

『何をぼーつとしている?』

銀龍が姿を現した。

「刀が喋っている…!」

シグナムもやはり驚いた。

「それはもう良いから。ほら。さつさと掴みな」

「あ…ああ」

戸惑いながらも、シグナムは銀時の手を掴んで立ち上がった。

「やれやれ。お前のせいで服がボロボロだぜ」

服を叩きながら銀時が呟いた。

「…魔法を使わず、剣の腕だけで私を倒すとは…強いな」

「なァに。アンタも強かつたぜ」

シグナムと銀時は、互いに笑みを浮かべた。

「ベルカの騎士、ヴォルケンリッターが将。『剣の騎士』シグナム。

貴公の名は？」

「俺は銀時。坂田銀時だ」

「銀時か…魔導師の方の名は？」

シグナムはフェイトに顔を向けた。

「時空管理局囑託魔導師。フェイト・テストロッサ」

「テストロッサ…その刀にも名前はあるのか？」

『うむ、我は銀龍だ』

「銀龍か…二人と一本の名前しかと覚えた」

互いに自己紹介をした。

先ほどまでの緊張感はなくなっていた。

「シグナム。貴女達の目的を教えてもらえませんか？」

フェイトが真剣な表情で尋ねた。

「…すまないが、それは言えない」

シグナムも表情を険しくして答えた。

「おいおい。いきなり襲ってきて、そりゃないんじゃないの？」

と、銀時がシグナムに近づこうと歩き出した時、

「あ」

瓦礫につまづいてしまう。

グラついた銀時は、そのまま顔をシグナムの胸の谷間に埋めた。ち

なみにシグナムの胸は結構デカイ。

「なっ！！？」

『主……』

シグナムと銀時の後ろにいるフェイトは、顔を赤くした。

銀龍は顔がないからわからないが、多分ため息を吐いた顔になっている

いるだろう。

「お…おおっ！！？」

銀時も冷静さを失い、思わずシグナムの豊かな胸を掴んでしまう。

（け…結構デケーな…それに柔らかい……ってか何この。LOVE

Eる的な展開？）

胸を揉みながら銀時は思った。

その時、凄まじい殺気を感じた。銀時は恐る恐る、もう冷汗をダラダラ流しながら顔を上げた。

顔を真つ赤にしたシグナムが、殺気を放ちながら銀時を睨んでいた。「いや…ちょ待てよ…まずは話し合おう…」

後退りながら銀時が言う。

すると今度は背後から殺気を感じた。誰の殺気かはすぐにわかった。一応、銀時は後ろを振り返った。

そこには、シグナムと同じく顔を真つ赤にして、殺気を放ちながら両手でバルディッシュを構えるフェイトがいた。

「いや…お前これアレだよ？わざとじゃないから…事故だから…」
二人の鬼に挟まれて、銀時は生きた心地がしなかった。

「…テストロツサ。準備はいいか？」

「…はい、シグナム」

二人とも攻撃態勢に入る。

「おい…何する気？ちょ、銀龍！」

『すまん。偶然とは言え、今回は助けられん』

左右に首を動かしながら、銀時は銀龍に助けを求めるが、銀龍にも見捨てられた。

そして。

「紫電一閃！！」

「サンダースマッシュャー！！」

二人の魔法攻撃が銀時に襲い掛かった。

「あああああ！！」

銀時は悲鳴を上げながら、攻撃を受けた。

『すまん……主』

最後に銀龍はそう言った。

二人の攻撃を受けた銀時は、黒焦げになった。

ちなみにシグナムとフェイトは、まだご機嫌ななめである。

「そりゃ確かに俺が悪かったよ……でもコレやり過ぎじゃね？ペナルティーデカすぎじゃね？」

黒焦げの銀時が言うが、二人は口をきいてくれない。

「……何で俺ばつかこんな目に……」

落ち込んだ銀時は、その場に座り込んだ。

その時、

「なのはちゃん!!」

新八の叫び声が聞こえた。

銀時は立ち上がり、フェイトも新八の声がした方を見た。

なのはの体から、何者かの腕が出ていた。

なのはの体から出てる手の中に、光の玉があった。

「なのはアア!!」

すぐにフェイトは飛んで、なのはの元へ向かった。

銀時はシグナムを睨みつけ、胸倉を掴んだ。

「シグナム！なのはに何しやがった!？」

怒りの形相でシグナムに怒鳴る。

「落ちて着け銀時！あれは『リンカーコア』を蒐集しているんだ!」

「リンカーコア？」

銀時は片眉を上げた。

「リンカーコアとは魔導師が持つ魔力の源だ。それを奪われたら、しばらく魔法は使えなくなるが、命に別状はない」

銀時を落ち着かせるように、シグナムが説明した。

思えばそんな事聞いた様な……。

銀時はそう思った。

「……本当か？」

「嘘は言わん」

銀時は鋭い眼でシグナムを見つめ、シグナムも顔をそらす事なく銀

時を見つめる。

銀時は胸倉を掴む手を離れた。

「……すまない。だが我らには、こうする以外方法がないのだ」
シグナムが苦悶の表情で銀時に謝罪した。

「……目的は何だ？」

銀時が尋ねた。

シグナムは意を決して目的を言った。

「……闇の書の完成です」

「闇の書？」

聞き慣れない言葉に、銀時は目を細めた。

その時、仲間のシャマルからシグナム達に連絡が入った。

（蒐集は完了したわ。みんな各自離脱して）

（了解）

シャマルに答えてからヴィータ達は離脱し始めた。

シグナムも銀時から離れる。

「おい、シグナム！」

「すまない銀時！我らは捕まるワケにはいかないのだ！」

そう言ってシグナムも離脱した。

「……………」

銀時は静かにシグナムが去っていった方を見つめた。

銀龍は何故か考え事をしていた。

（闇の書？何処かで聞いた様な……）

銀龍は自分の記憶に関係あるのか？と思った。

（何故だ？嫌な予感しかないのは……）

銀龍は考えた。

*

リンカーコアを蒐集し、離脱したシグナム達は八神家へ向かった。

「シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ、大丈夫？」

心配そうな表情で、シャマルが三人に聞いた。

「ああ、大丈夫だ」

「全然平気だよ！」

「我も問題ない」

三人はシャマルに答えた。

「シャマルこそ大丈夫かよ？その腕」

シャマルの左腕を見ながらヴィータが言った。

シャマルの左腕には大きなアザがあった。

実は左腕のアザは、お妙にやられたのだ。なのはのリンカーコアの

蒐集を終え、腕を引つ込めようとした時、

「ぎゃああああ！お化けエエエエ！」

悲鳴を上げながら、お妙が腕に蹴りを決めたのだ。

「だ…大丈夫よ。これくらいすぐに治るから」

安心させるように、シャマルは笑顔で答えた。

「…それにしても、途中から現れた彼らは何者かしら？」

シャマルは先ほどの戦いに現れた、銀時達の事について考えた。

「魔力を感じなかったところを考えると…少なくとも魔導師ではないだろう」

狼形態になったザフィーラが言った。

「魔法も使ってねーのに結構強かったし…」

口を尖らせながらヴィータが言った。

「それに一番無茶苦茶なのは、あの天然パーマの奴だ！一対一の勝負でシグナムに勝ちやがった…！」

ヴィータが納得いかないと言った顔する。

シャマルもザフィーラも、シグナムが一人で負けるとは想像もしていなかった。

そのシグナムは、銀時の事を考えていた。魔導師でもない、魔法を

使わず剣の腕前だけで自分を倒した男。銀時の姿が頭から離れない。いつの間にか、シグナムの頬は少し赤くなっていた。

「シグナム？」

「えっ？あ…ああ、どうした？」

隣にいるシヤマルに声をかけられ、シグナムは慌てて答えた。

「大丈夫？顔が少し赤いけど」

「だ…大丈夫だ。心配いらない」

平静を装ってシグナムが答えた。

一行は八神家に到着した。ドアを開けて中に入る。

「主、只今戻りました」

「ただいま」

中に入って挨拶をする。

「みんなお帰り」

車椅子に乗ったはやてが玄関に来た。

その時、シグナム達は目を細めた。はやてに変わった所はない。シグナム達は、はやての後ろに立っている男を見て目を細めたのだ。

「…誰だよお前？」

ヴィータが、はやての後ろに立つてる男に尋ねた。

男は長い黒髪に着物を着ていた。ヴィータに聞かれ、男は自己紹介をする。

「初めまして、桂小太郎です。好物はそばだ」

「…何故、好物を言った？」

「そば出せってか？そば出せってか？」

シグナムが眉を寄せ、ヴィータは桂を睨みつける。

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

はやてがシグナムとヴィータをなだめる。

「桂さん、私の家の前に倒れててな。泊まる所もない言うから、家に泊めてあげる事にしたんや」

はやてがみんなに説明した。

「みんな仲良くしてな」

「よろしく頼む」

桂がシグナム達に頭を下げた。

まあ悪い人ではないようだから、シグナム達も警戒を解いた。
ふと、シグナムは思った。

（この男の服装…銀時達に似ている？）

そんな事を思いながら、シグナムは中に上がった。

一行は、はやてと桂の後に続いて部屋に入った。

「うわああ!!？」

部屋に入って、ヴィータが驚きの声を上げた。

シグナム達も目を見開いて驚いている。

部屋の中に、白い体に黄色いくちばし嘴が付いた、ペンギンお化けのような奴がいたからだ。

「な…何だこの化物!？」

「化物じゃないエリザベスだ」

ペンギンお化けみたいな生き物『エリザベス』を指差しながら叫んだヴィータに、桂が名前を教えた。

エリザベスは、

『おかえりなさい』

と書かれたボードを掲げた。

「た…ただいま」

とりあえずシグナム達は挨拶した。

「ほんなら皆揃った事やし、夕飯にしょか」

はやてが台所に向かう。

「私も運ぶの手伝います」

シャマルも台所に向かった。

「ところで八神殿、そばはないか？」

と桂が言った直後、ヴィータがハンマーで桂の頭を叩いた。

八神家に騒がしい居候が増えた。

＊

「やっぱ、この世界は捨てたもんじゃねえな」
そう言ったのは……雷雅だった。

彼はヴォルゲンリッターと銀時達の戦いを見ていたのだ。

「また……面白い事になりそうだ」

雷雅はそう言々と姿を消した。

第二十七訓：最近の剣は色んな機能を付けすぎ……って銀龍もか（後書き）

ナナフシ「もう……駄作者だな俺」

銀時「そうだな。何処もほとんど変わってねえもんな」

ナナフシ「悪かったな。それではまた次回」

第二十八訓：人の過去を勝手に話して良いのか？（前書き）

ナナフシ「さて……今回も頑張ろう！」

銀時「そうか」

ナナフシ「それでは」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります！」

第二十八訓：人の過去を勝手に話して良いのか？

シグナム達との戦いを終えた銀時達は、なのはを保護して、時空管理局本局にいた。

なのはは、魔力の源であるリンカーコアが縮小している以外に、特に外傷はないのですぐに良くなるそうだ。

フェイトは銀時と通路を歩いている。

「それにしても本当に驚いちゃった。どうして銀時達か？」

「お前の母ちゃんに呼ばれたんだよ」

「え？」

フェイトは少し驚いた顔をした。

「急に無線機に連絡があつてな。『フェイトを助けて』って頼まれたんだよ。装置の調整は大体完成してて、いけねー事はなかったかな。じーさんに無理言つてこつちに来た」

「そつか…ごめんね銀時。迷惑かけちゃって…」

顔を俯きながらフェイトが謝った。

「なアに。再会が少し早くなっただけだ」

笑つて銀時が言った。

銀時の顔を見て、フェイトも微笑んだ。

「そついえば、今回は写真に写つていた人以外もいたけど」

「心配すんな。俺の知り合いだ」

そう言つて銀時とフェイトは、フェイトとなのはのデバイスの修復作業が行われてる部屋に入った。

部屋の中にはクロノやアルフ、ユーノ。万事屋と漸呀ぜんがと葵とお妙、九兵衛と東城がいた。

「紹介するぜ。コイツは柳生九兵衛だ。神速の剣の使い手だ」

「柳生九兵衛だ。よろしく」

銀時に紹介された後、九兵衛はフェイトに挨拶した。

「フェイト・テストロッサです。よろしくお願いします」

フェイトも頭を下げ、挨拶した。

「んで隣にいるコイツは東城歩。頭はアホだが、剣の腕は柳生四天王最強だ」

「誰の頭がアホですか？私はただ、カーテンのシャーってなるやつが気になっただけです」

「お前はロフトに行つて、二度と戻つてくるな」

そう言つて銀時は、東城の紹介を終えた。そして今度は新八とお妙の方を向いた。

「コイツ等は志村新八と志村妙。苗字からわかる通り、この二人は姉弟だ」

「志村新八です。よろしくフェイトちゃん」

「志村妙です。よろしくフェイトちゃん」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

新八とお妙とフェイトは、互いに頭を下げ、挨拶した。

「んで、こつちのチャイナ服とデケーのが…」

銀時は視線を神楽と定春に向けた。

「神楽アル！こいつは定春アル！」

神楽が定春の名前を言った。

「定…春？」

定春を見つめながら、フェイトが呟いた。

「わんっ！」

定春が元気よく吠えた。

フェイトは神楽と挨拶をした。

「で、俺の義理の妹の雨宮咲だ」

「よろしくね」

「こちらこそ」

咲とフェイトは挨拶をする。

「でだ……こいつは神宮寺漸呀だ」

「ま、よろしくな」

「はい」

漸呀とフェイトは挨拶をした。

「おい、炎凰出せよ」

「あ？もう居んじゃない」

銀時が言うと、漸呀はそう言う。

炎凰が漸呀の隣に居た。

『俺は炎凰だ。銀龍を知っているのならわかんと思うが俺も『喋る刀』だ』

「どうも」

フェイトは銀龍で慣れているのか、普通に挨拶をした。

『正確には、銀龍と違って記憶はある』

「そうなんですか？」

フェイトは驚く。

『ま、奴が思い出すまで何も言わんがな』

どうやら、炎凰は銀龍に何も教えていないようだ。

「で、漸呀の隣に居るのが神宮寺葵だ。苗字からして、この二人は兄妹だ」

「よろしく」

「はい、こちらこそ」

葵とフェイトは挨拶をした。

えー、ちなみに何故、九兵衛と東城、お妙や定春がいるのかと言うと。

プレシアから連絡があった時、新八の家に九兵衛と東城がいたのだ。電話で銀時から連絡を受けた新八が行こうとしたら、お妙も行くと言い出したのだ。理由は新八の話で聞いてた、なのはやフェイト達に一目会いたからというものだった。すると九兵衛が、お妙の事が心配だからとついてきたのだ。東城も九兵衛を一人で行かせるワケにはいかないとついてきたのだ。定春は神楽が連れていきたいと言つて、連れてきたのである。

え？漸呀と葵はって？それはね、偶然源外の工場で出会って、銀時に無理矢理連れて来られたんだよ。

って言うか、元々源外もそのつもりで呼んだらしいから。

「そういえばさあ、あの連中の魔法って何か変じゃなかった？」
頭に包帯を巻いたアルフが尋ねた。

「あれは『ベルカ式』だ」

アルフと同じく、頭に包帯を巻いているクロノが答えた。

「ベルカ式？何ですかそれ？」

今度は新八が尋ねた。

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

新八の問いに、頭に包帯を巻いてるユーノが答えた。

え？何で三人とも頭に包帯巻いてるかって？そりゃあ定春に頭を噛まれたからですよ。

「遠距離や広範囲攻撃がある程度、度外視して対人戦闘に特化した魔法で、優れた術者は『騎士』と呼ばれる」

クロノがユーノに続いて説明した。

「そっぴやシグナムの奴、騎士って言ってたな」

思い出したように銀時が言った。

「最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムと呼ばれる武装だ。儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間的に爆発的な破壊力を得る」

最後にユーノが説明をした。

「あれはマジで反則だろ。剣が炎に包まれるしよオ。そんな奴は炎凰だけにしてくれて言うんだ」

「ちよっ…銀さん！炎の剣なんて、僕達の世界では普通ありませんよ！」

銀時の言葉を聞いて、新八が注意した。

「銀時」

「ん？」

クロノが銀時を呼んだ。

「貴方に会わせたい人がいます」

*

銀時はクロノの後ろ歩いてる。銀時の隣にはフェイトもいる。

フェイトが、

「私も一緒に行っていていいかな？」

と言ってきたのだ。

特に断る理由もなかったので、同行する事になった。

クロノの案内で、銀時とフェイトは部屋に入った。中には一人の老人が座っていた。

「グレアム提督。彼を連れてきました」

「やあクロノ。ご苦労だったね」

老人の名は、ギル・グレアム。時空管理局顧問官だ。

ふと、フェイトは銀時の顔を見た。何故か銀時は表情を険しくしていた。フェイトは、何故銀時がそんな顔をしているのかわからなかった。

グレアムに促された銀時とフェイトは、椅子に座った。

「私はギル・グレアム。君が坂田銀時さんか」

「…ああ」

銀時は素っ気ない返事をした。

「銀時！」

銀時の態度に、クロノが怒鳴る。

「いいんだクロノ」

「グレアム提督…」

グレアムに言われて、クロノは大人しくした。

銀時の隣に座ってるフェイトは、銀時の態度に違和感を感じた。

「で？俺に何の用ですか提督さん？」

「用という程の事ではない。ジュエルシード事件で活躍した、君の姿を一度見てみたくてね……後、銀龍さんにも興味があつてね」

穏やかな口調でグラムが言った。

『我に何か用か？』

銀龍は姿を現した。

「あなたが……デバイスでもないのに、持ち主の魔力を使える様にしている刀ですか……」

『そうだが？』

銀龍も素っ気なく答える。

「銀龍まで！」

クロノは銀龍にも怒鳴る。

「いいんだ。いや、興味があっただけだ」

「そうですか。じゃあ俺もう出ていいですか？糖分摂取してなくてイライラしてるんですよ」

言いながら銀時は立ち上がった。

「ぎ…銀時！？」

部屋を出ようとする銀時に、クロノが叫ぶ。

「ま…待つて銀時！」

慌ててフェイトが後を追う。

二人はそのまま部屋を出てしまった。

「アイツ…！提督に対して…！！」

「いいんだクロノ。私なら気にしていない」

そう言いながら、グラムは珈琲を一口飲んだ。

*

銀時とフェイトは通路を歩いていた。

「ねえ銀時、銀龍」

「ん？」

『なんだ？』

「銀時は…グラム提督が嫌いなのか？」

フェイトは、さっきから気になっていた事を聞いた。

グレアム提督を見てから、銀時の態度は少しおかしかった。

「別に。嫌いとかそういうんじゃないよ」

『うむ、私もそういう事じゃない』

「え？」

嫌いとかじゃない？じゃあどうして。

フェイトが考え込んでると、銀時が言った。

「なんつーか…胡散臭い感じがしたんだよなア、あのオッサン」

『ああ、何というか……な』

「胡散臭い？」

フェイトは首を傾げた。

「まあ俺の勘違いかもしれねーから、気にすんな」

そう言つて銀時は頭を掻いた。

じはらく歩くと、前からプレシアとアリシアがやってきた。

「母さん、アリシア」

「フェイト！」

プレシアは駆け寄つて、フェイトに抱き付いた。

「フェイト！無事でよかったわ！」

「心配かけてごめんね。でも、もう大丈夫だから」

安心させるように、フェイトが言う。

プレシアは顔を上げて銀時を見た。

「ありがとう、銀時」

「なアに、俺は万事屋だ。頼まれれば何でもやるぜ」

プレシアのお礼に、銀時は笑つて応えた。

「銀時久しぶり」

「おお、アリシアも元気だなによりだ」

銀時はアリシアの頭を撫でながら言った。

アリシアは撫でられて嬉しそうな顔をする。

「あ、銀時、銀龍！見せたい物があるんだ！」

「何だ？」

『どんな物だ？』

銀時と銀龍は聞く。

「じゃーん!!」

アリシアは銀時に刀を見せた。

鞘と柄は黒く、柄の先端には束ねられた黒い糸があり、鍔はなかった。

「刀身は黄色だよ」

アリシアはそう言った。

「で、刀がどうしたんだ?」

「うむ、刀を見せたかったのか?」

銀時と銀龍が訪ねると……、

『酷いですね。銀龍。私を忘れたのですか?』

いきなり、アリシアが持っていた刀がしゃべり出した。
女の声だった。

「『え?』」

銀時と銀龍は驚いた声を上げた。

『銀龍……私です。雷麟です』

「もしかして……」

銀時はアリシアが持っている刀……雷麟を指差しながら聞いた。

「うん! 銀龍と同じ『喋る刀』だよ」

「やっぱりかいいいいいいいいいい!!」

銀時はアリシアが答えた瞬間に声を上げた。

「てか、何処で手に入れたそれ!？」

「うーん……何処でって……たまたま見つけたんだ」

「たまたま!？」

銀時は驚いた。

てか、絶対あんたもたまたまだろ……銀龍見つけたの。

「うん、魔法をお母さんに教えて貰って、休憩をされていて、ちょっと遊びに行った時に見つけたの」

「いや、もう遊びに行った時にでよくな?」

銀時はツツコンだ。

アリシア曰く、森でたまたま見つけたらしい。岩に刺さっていて、興味本位で抜いたら、主として選ばれたらしい。

「で、お前の相棒になったと」

「うん！もうデバイスは必要ないね！銀時ともお揃いだし！」

銀時が聞くとアリシアはそう言った。

銀時と同じ『喋る刀』を持てて嬉しいのだ。

その頃……その銀龍と雷麟は……。

『記憶がない！？』

『ああ、炎鳳と同じ反応をするな』

雷麟の問いに銀龍は普通に答える。

『炎鳳！？あいつも居るの！？』

『ああ、居るぞ』

雷麟は炎鳳が居る事に驚いた。

『炎鳳から何か聞いたか？』

『いや、あいつは『記憶がない』なら、思い出すのを待つわ』
『って言ってたぞ』

『ハア……そうだったか』

雷麟はため息を吐いた。

なら、自分も待つ事にしようと思った。

『なら、私も待つわ』

『そうか』

銀龍って……なんか微妙に銀時に似ている様な……。
気のせいかな！

「作者……そんな事思ってたのか？」

銀時はツツコンだ。
すると、

「銀さん！」

今度は新八が走ってきた。

「どうした新八？」

新八は銀時の前で止まって、呼吸を整えた。

「桂さんとエリザベスがいません!!」

新八が大きな声で言った。

言われた銀時は数秒、呆然としてたが、やがて目と口を大きく開いた。

「あああつ!!」

思い出したように、銀時は大声を上げた。

「しまったアア!!あのバカの事すっかり忘れてたアア!!」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

フェイトとアリシアとプレシアは、ワケがわからず首を傾げていた。
「どこを探しても二人がいないんです!無理矢理、装置に入ってきたから別の場所に移動しちゃったのかも!」

焦りながら新八が言う。

実は桂小太郎とエリザベスも、瞬間移動装置でなのは達の世界に来たのだ。

銀時達が装置の中に入った後、桂がやってきて『銀時!俺と共にこの国を変えよう!』としつこく譲夷志士の勧誘にきたのだ。そして無理矢理、装置の中に入って銀時達とは、はぐれたが結果的に『リカルなのは』の世界にきたのである。

「もう知らねーよあんなバカなんて!エリザベスも一緒にいんだから大丈夫だろ!」

「いや、探してもあげましようよ!」

銀時と新八は、ギャーギャー騒ぎながら話し合った。

*

八神家。

夜中に桂は目が覚めた。

リビングに明かりがついているので、物音を立てないように静かに

近づいた。

リビングにはシグナム達が集まって、何やら話合いをしている。

「こんな時間に何をしている？」

桂が声をかけた。

「えっ！？」

驚いたシグナム達は、桂へ顔を向けた。

「な…何もしてねーよ！」

言いながらヴィータは、持っている闇の書を背中後ろに隠した。

「ふむ。ヴィータ殿。今後ろに何を隠した？」

「何も隠してねーよ！」

桂に向かってヴィータは叫んだ。

「まあ落ち着け。別にソレをどうこうしようと言っワケじゃない。

ただ、みんな深刻な表情をしていたので気になっただけだ」

真剣な顔になって桂が言った。

桂の真剣な顔を見て、シグナム達は顔を見合わせた。

やがてシグナムが口を開いた。

「…話を聞いてくれるか？」

「うむ」

桂は頷いた。

*

桂はシグナム達から闇の書についての説明を聞き終えた。説明を聞いた桂は驚いた。

「なんと…！では闇の書を使えば、天竺への道が開かれるのか！？」
闇の書を手に取って桂は興奮する。

「そうじゃねーよ！お前の頭力チ割ってやる…！」

「ヴィータ！落ち着け！」

「ヴィータちゃん！」

グラーファイゼンを構えるヴィータ。必死にヴィータを止めようと

するシグナムとシャル。

「まあ落ち着け。つまりこの闇の書。空白の666ページ全てを埋めれば、所有者は大いなる力を得る。そういう事だな？」
「そうだ」

桂の言葉にザフィーラが頷いた。

「しかし八神殿は力を欲している様子はないが…何故お前達は闇の書を完成させようとしているんだ？」

「…闇の書を完成させなければ、主はやてが死ぬからです
険しい表情でシグナムが答えた。

「何？」

「主はやての足は病気ではなく、闇の書の呪いなのです。それは徐々に上の方に進行している。それを止めるために、私達は蒐集を行っているのです」

シグナムが説明を終える。

桂も表情を険しくした。

「自らの主を呪うとは…皮肉な話だな……ちなみに他の方法はないのか？」

「ありません」

シグナムは苦悶の表情で答えた。

答えを聞いた桂は目を閉じて、腕を組んで考えた。しばらくして、ゆっくりと目を開けた。

「わかった。俺も闇の書の蒐集に協力しよう」

「えっ！！？」

桂の言葉にシグナム達は驚いた。

「魔法とやらは使えないが、剣の腕には自信があるつもりだ。足手まといにはならん」

「あの…本当にいいんですか？」

シャルが桂に尋ねた。

「正直、やり方には反対だが…八神殿を助ける手段がそれしかないのなら仕方なからう」

と桂が言った。

「貴方の協力は嬉しいが…何故そこまで？主はやてとは今日会ったばかりでは？」

シグナムが理由を尋ねた。

「八神殿は素性も知れぬ俺を家に泊め、飯まで世話をしてくれた。俺は侍だ。侍は受けた恩は返す」

桂はハッキリとそう言った。

「…わかりました。では、これからよろしく頼む」

シグナムが頭を下げて言った。

「それじゃあ問題は…あの銀髪の男ね」

「銀髪の男？」

シヤマルの言葉に桂は目を細めた。

「シグナムを一对一の勝負で倒した化物だよ」

ヴィータが桂に教えた。

「ちょっと待て。シグナム殿。その男の名は坂田銀時ではないか？」

「な…！？何故貴方が銀時の名を！？」

シグナムが驚いた顔で聞いた。

「やはり銀時か…」

桂はため息をついた。

「アイツの事知ってるのか？だったら教えてくれよ！」

ヴィータが袖を掴んで聞いてくる。

桂は少し迷ったが、シグナム達に話すことにした。

「…昔、俺達の世界で、宇宙から来た異人、天人あまんととの戦『攘夷戦争』

が起こった。その戦の中で銀時は、その鬼神の如き強さで数多の天人を倒し、敵はおろか味方からも恐れられ、まるで夜叉の様な事から『白夜叉』と呼ばれたのだ」

桂は自分達の過去と、銀時について話した。

「白夜叉…」

話を聞いたシグナムが呟いた。

「正直、俺でも銀時の相手は骨が折れる。それに銀時以外にも助っ

人はいたはずだ」

「うむ。何故か炎系の魔法を使える金髪の男と、水色の髪の女で目にも止まらない剣の使い手だ」

ザフィーラが桂に答えた。

「あいつ等まで居るのか……少し厄介だな……」

「二人を知っているのか!？」

ヴィータは漸呀と咲について聞いた。

「うむ、さっき話した『攘夷戦争』だがな」

「ああ」

シグナムは頷く。

「まずは、水色の髪の女の方からだ。銀時の義理妹で雨宮咲と言い、唯一『白夜叉』の隣に立ち、『白夜叉』同様、敵はおるか味方からも恐れられ鬼が姫の如く舞う様な事から『冷血の鬼姫』と呼ばれた」

「冷血の鬼姫……」

ヴィータが呟いた。

「で、金髪の男が、神宮寺漸呀と言い、銀時同様鬼神の如き強さで数多の天人を倒し、敵味方双方から恐れられ、まるで戦鬼の様な事から『黄金戦鬼』と呼ばれた」

「黄金戦鬼」

次はザフィーラが呟いた。

「だが、銀時と漸呀以外には欠点がある」

「欠点？」

桂の言葉にシヤマルは首を傾げた。

桂はその欠点を口にした。

「空を飛べない事だ。俺も向こうも魔導師ではないからな」

「あつ！」

桂の言葉に、シグナム達は同時に声を上げた。

桂の言うとおり、魔導師でない新八達は空を飛ぶことはできない。いかに剣の腕が凄くても、空に逃げられては攻撃のしようがない。

「地上や屋上に降りずに、空中にいれば新八君達との戦闘は避けら

れる。その場合は、管理局とやらの魔導師と戦う事になるがな」

「なら問題ないじゃん！魔導師相手なら負けはねえ！」

ヴィータが強気な声で言った。

シグナム達もヴィータの言葉に頷いている。

「そうだ……そう言えば銀時と漸呀は？あいつ等も飛べないハズだ」
ヴィータが桂に訪ねる。

「あの二人には『銀龍』と『炎凰』が居る」

「銀龍がどうした？」

シグナムは桂に訪ねた。

「あいつ等は……シグナム殿達が言う魔力を扱える様にする刀だ」

「デバイスでもないのか！？」

ヴィータは桂が言った事に驚いた。

「そう言えば、漸呀と言う男は使っていたな」

ザフィーラはそう言った。

「そして、魔力を身に纏う事で、銀時はドラゴンの様な翼、漸呀は炎翼を魔力で作り出して飛ぶ事が出来る」

桂はそう言った。

「そうか」

「でも、大丈夫だ！二人だけなら何とかなるかもしれないだろ！」

ヴィータはそう言った。

「うむ。では皆あまり無理はせぬように」

「ああ」

こうして話合いは終わり、桂も闇の書を巡る戦いに参戦する事となった。

——足りない——

ドクン

——力が足りない——

ドクン

——早くあの忌まわしき白銀を破壊してやりたい——

ドクン

——だが、もう少し魔力が必要だ——

ドクン

——守護騎士達よ……せいぜい頑張って蒐集を続けるがいい——

ドクン

——我が復活するために……そして我が復習を成し遂げる為に——

ドクン

闇の書の中に眠る『悪』。
ずっと待ち続ける。復活の時を……。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ、質問コーナー行くぞオ。今回のアシスタントは」

炎凰「主……つまりは漸呀の相棒の炎凰だ」

銀八「行くぞ」

炎凰「今回は一つだけだ。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問
『輝刃』ああ…特に漸呀の『炎凰』との協力での戦いっぷりは、なかなかインパクトがあつて良かったぞ。あ…それと質問…行くぞ？
まずは俺からだ。」

1・新八に質問…もし自分に銀時や漸呀みたく『喋る刀』との出会いがあつたら、どんなタイプの『喋る刀』が良い？ちなみに、銀時や漸呀の持つ『喋る刀』の系統とは別系なのでな。

ああ…『テイルズオブデスティニー』の『ソーディアン』みたいな感じな…。次は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問…『喋る刀』で一つ思いついたのがあるんだが、投稿いいかな？銀時や漸呀の持つ『喋る刀』とは別系統のだけど…。

輝刃「…何と云うか…俺の予感である意味『凄まじい』モノが浮かぶな…（汗）。」「一つ目だが」

新八「そうですね。僕にも魔力があれば良いんですけどね。って言うか作者がティルズはやった事がないのでわからないそうです。だから自分なりに答えます。とりあえず…別系統と言えば…持つたら目立てる刀がほしいです……」

銀八「そんな答えで良いのか？二つ目だが」

ナナフシ「そうですね……面白そうなので良いですよ！それを見てから使うか、使わないかは決めますので！」

銀八「らしい。と言う訳で『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

炎凰『質問は以上だ』

銀八「また次回」

第二十八訓：人の過去を勝手に話して良いのか？（後書き）

ナナフシ「さてと……咲と漸呀の奴は……あれ……出しとこうと思
ったので」

銀時「まあ、二人にも異名はあるからな」

ナナフシ「はい、咲は『冷血の鬼姫』、漸呀は『黄金戦鬼』です」

銀時「だな。漸呀強くねえか？」

ナナフシ「咲より強いかもね。と言う訳でまた次回！」

第二十九訓：引っ越しは楽しみかも知れない……多分（前書き）

ナナフシ「はつきり言っ
てサブタイトルって俺くらいじゃね？
そう
思っ
てんの」

銀時「さあな」

ナナフシ「と言う訳で」

炎凰『『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ』

第二十九訓：引越しは楽しみかも知れない……多分

今回の『闇の書事件』も、リンディ率いるアースラメンバーが捜査を担当する事に決定した。もちろん銀時達も一緒である。

なのはも起きて、フェイトと銀時達は、リンディ達と共に地球に赴いていた。アースラの整備が完了していないので、司令部をなのはの近所に移す事になった。

なのはは起きた時に銀時に思いつきり抱きついたのだ。

なのはは銀時との再会が嬉しかったのだ。

その時の新八……以上に恐かったそうだ。

アリシアも協力する事になり……。

「うわー！ 凄い近所だ」

「本当？」

「うん。ほら、あそこが私の家」

「何処？」

なのはとフェイトとアリシアは、ベランダから仲良く街を見ている。部屋の中では、銀時達が汗を流しながら荷物を運んでいた。

「な……何故私達が引越しの手伝いをしなければ……いけないのですか？」

「管理局のやつら……俺達を便利屋か何かと勘違いしてやがんだ。あゝ腹が立つ！」

「何でこんなメンドい事」

荷物を運んで、汗を流しながら東城が不満を言い、銀時と漸呀が文句を言う。

「貴方達の馬鹿力を有効に活用してるんですよ」

クロノが笑みを浮かべながら言った。

「おい東城、漸呀。後でコイツにヤキ入れようぜ。ついでに定春も連れてこい」

「なっ！？ ちょっと待て銀時！ 定春だけはやめてくれ！！」

「いや、いつその事、炎凰を使って黒こげに」
「それも勘弁してくれ!!」

定春の名を聞いて、クロノは顔を青くした。

漸呀が炎凰を使って、と言うと更に顔を青くした。

「みんなお疲れ様。一休みして頂戴」

プレシアが銀時達に言った。

「うース」

汗を拭きながら銀時達はリビングに向かった。

リビングにいるエイミィは、アルフとユーノを見つけた。

「ユーノ君とアルフは、こっちではその姿なんだ」

「新形態子犬フォーム!」

「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でないと…」

アルフは可愛い子犬姿で、ユーノは久々のフェレット姿になっていた。
た。

「わゝアルフちっちゃい!どうしたの?」

「可愛い!!」

「あら、本当!」

「ユーノ君もフェレットモード久しぶり!」

フェイトとアリシアとプレシアは子犬フォームのアルフに驚き、
なのは嬉しそうにフェレット姿のユーノに近寄る。

「可愛いだろ」

「うん!」

アルフがフェイトの頬を舐める。

「ぎゅうううううう!!」

「ちよいと!アリシア!く、苦しいよ」

アリシアにいきなり抱かれて、アルフは驚いた。

ユーノは、なのはに頬ずりされて苦笑している。

「!」

その時、アルフは銀時の視線に気付いた。

銀時はニヤリと笑った。アルフは嫌な予感がした。

「アルフ！お前、今言ったなアア！！新形態『子犬』フォームだど！つまり、お前は自分が『犬』である事を認めたワケだアア！！」
ビシッとアルフを指差しながら銀時が叫んだ。

「あっ……いや……そうゆうんじゃないくて……！」

「もう遅い！お前のさっきのセリフは、このカセットテープに録音してある！」

銀時は片手に持つてるカセットテープを見せた。

「何でそんなの持つてるのさ！？」

「そこはツツコむな！」

銀時とアルフがギャーギャー言い争う。

久しぶりに銀時とアルフの騒がしい会話を聞いて、フェイトは笑った。周りにいるなのはや新八達も笑った。

「なのは、フェイト、アリシア。友達だよ」

「はい！」

クロノの言葉に、フェイトとアリシアとなのはは嬉しそうな笑顔になった。

「こんにちは！」

「きたよー！」

玄関に行くと、アリサとすずかがいた。

「アリサちゃん、すずかちゃん」

「はじめまして……って言うのもちよつと変かな？」

「ビデオメールでは何度も会ってるもんね」

「うん。でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」

「よろしくね」

二人を見ながら、フェイトとアリシアは嬉しそうに笑った。

「うん！」

「私も！」

アリサとすずかも嬉しそうに笑う。

「それよりも……どっちがフェイトで、どっちがアリシアなの？」
アリサが訪ねる。

確かにフェイトとアリシアは瓜二つなのだ。

違う所と言えば……。

「緑色のリボンがアリシアだよ」

フェイトがそう言った。

「そうなんだ」

「凄い……間違い探しだね」

アリサとすずかはそう言った。

え？銀時達は何で普通にフェイトとアリシアがわかるかって？

そりゃ、先にフェイトとアリシアから聞いたからだよ！

その後、アリサとすずかは初めて会った新八達に挨拶をした。

*

銀時達は、リンディがなのはの両親に挨拶に行くという事で、喫茶翠屋へきていた。

「ユーノ君も久しぶりだね」

「キューキュー」

「こっちの犬も可愛い〜！」

「アンツ」

外のテラスでなのは達は、アルフやユーノと一緒に談笑していた。ちなみに銀時かというと。

「おお〜！こっちのも、うまそうだな！」

「それは今回作った新作なんですよ。よかったらお一つ食べてみま
すか？」

「え？マジで！？」

翠屋のケーキに目を奪われながら、士郎と仲良く話をしていた。

「……そんな訳で、これから暫くご近所になります。よろしく願
いします」

「こちらこそお願いします」

リンディと桃子が挨拶をしてる。その時、店の扉が開かれて、フェイト達が入ってきた。フェイトとアリシアは両手で小包を抱えていた。

「リンディていと…リンディさん」

「はい。なあに？」

「…あの…コレ…」

戸惑いながらフェイトは、小包の中を見た。中に入っていたのは白い制服だった。

「制服？」

銀時が片眉を上げた。

「転校手続き取つといたから。週明けからなのはさんのクラスメイ
トね」

笑顔でリンディが言った。

「あら素敵」

「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ。な？なのは」

「うん！」

「良かったわねフェイトちゃん、アリシアちゃん」

優しく微笑みながら、桃子が言った。

「あの…えと…はい、ありがとうございます」

「ありがとうございます！」

恥ずかしがりながらも、フェイトは嬉しそうに制服の入った小包を抱きしめた。

アリシアは元気よく言った。

「よかったなフェイト、アリシア。友達百人できるかな？」
と言いながら銀時はケーキを食べた。

『そう上手く出来るのか？』

銀龍は姿を消したまま、銀時の耳元で言った。
するとリンディが銀時と漸呀を呼んだ。

「銀さん、漸呀さん」

「ん？」

呼ばれた銀時は、フォークの動きを止めた。

漸呀は銀時の隣でボツとしていたので、リンディを見た。

「実は銀さんと漸呀さんにも…」

リンディは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「え？何？何か嫌な予感がするんですけど…」

「銀時……俺もだ」

瞬きしながら銀時が言った。

漸呀は自分も嫌な予感がすると言った。

*

そしてフェイトとアリシアが、なのは達が通ってる小学校に転校する日。

聖祥大付属小学校。なのはのクラスはざわついていた。

「さて皆さん。実は先週急に決まったんですが、今日から新しい友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。フェイトさんとアリシアさん、どうぞ」

「し、失礼します」

「失礼します」

先生に呼ばれ、フェイトとアリシアが教室の中に入ってきた。

なのは達と同じ白い制服を着て、教卓の前に立った。

「あの…フェイト・テストロッサと言います。よろしく願います」

「私はアリシア・テストロッサです。よろしく願います」

恥ずかしがりながらも、フェイトは自己紹介をした。

恥ずかしがる事なく、アリシアは自己紹介をした。

クラスの皆は拍手をして、フェイトを笑顔で迎え入れた。フェイト

とアリシアは嬉しそうに微笑んだ。

一樣、この学校にはフェイトとアリシアは双子と言う事で話しを通してある。

「それともう一つ皆さんにお知らせがあります。実は今日から私に代わって、しばらくの間臨時の二人の先生が皆さんの担任と副担任をやります」

先生がクラスの皆に言った。

その言葉に生徒達は再びざわついた。

（臨時の先生って…まさか！）

フェイトはハツとなって、教室の扉を見た。

なのはもフェイトと同じ事を考えたのか、教室の扉に視線を向けた。

「それでは入ってきてください」

「うゝス」

「へゝい」

扉の向こうから気だるげな声が返ってきた。

ガラリと扉が開けられ、二人の男が入ってきた。

ズレた眼鏡に、白衣とネクタイをだらしなく身につけた銀髪の天然パーマの男。

黒い服とネクタイを銀髪の男同様だらしなく身につけた金髪のウルフヘッドの男。

「どーも。今日から皆さんと一緒におふざ…じゃねーや。授業をする事になりました、担任の坂田銀八です」

「今日から皆さんと一緒に授業をする事になった、副担任の神宮寺漸八です」

この場に新八がいたら『今おふざけって言いそうになったろ！』というツツコミが入りそうな自己紹介をして登場したのは、坂田銀時と神宮寺漸八だった。

銀時…いや、銀八先生と漸八先生を見た生徒達は静まり、フェイトはズッコけた。

なのはは嬉しそうだったけど。

銀時と漸呀がなのは達の担任と副担任となつて学校に来たのは、デバイスを持つていない二人の護衛のためである。
二人は銀龍と炎凰のお陰で魔力も扱えるうえ、身体能力もズバ抜けているからである。
多分、生徒は思っただろう……「え？何このやる気なさそうな二人」と。

*

マンション。

「あの、クロノ君。そもそも闇の書って一体何なの？」
マンションに残つてゐる新八達は、クロノに闇の書について尋ねた。

「闇の書は魔力蓄積型のロストログア。魔導師の魔力の根源であるリンカーコアを食つて、全666ページを埋めるとその魔力を媒介に真の力を発揮する。次元干渉レベルの巨大な力をね」

「本体が破壊されるか所有者が死ぬかすると、白紙に戻つて別の世界で再生する」

クロノが説明をして、エイミイが補足をした。

「では、闇の書の破壊は不可能なのか？」

九兵衛が尋ねた。

「ああ。様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護騎士によって守られ、魔力を食つて永遠を生きる。破壊しても何度でも再生する、停止させる事ができない危険な魔導書」

クロノが険しい表情で説明した。

「という事は…我々に出来るのは闇の書の完成前の捕獲…ということとですか？」

涼やかな顔で東城が言った。

「そういう事になりますね」

*

昼休み。

フェイト達は、お弁当を持って屋上へ向かっていた。屋上の扉の前に着いて、フェイト達は足を止めた。扉の前に『立入禁止』と書かれた看板のような物が立てられていたのだ。

「おかしいわね。昨日まではこんな物なかったのに」
「さすがに困った顔をする。」

「こんなの無視しちゃえばいいのよ」

そう言つてアリサは、看板をどけてしまう。

フェイトが不安な顔になる。

「え？でも…いいの？」

「いいの、いいの」

「行こう行こう！」

アリシア……やはり中身は五歳のままだな……行こう行こうって。

アリサがドアノブを掴もうとした時、

「波アアア！」

扉の外から声が聞こえた。男の声である。

四人は顔を見合わせた。

「波アアアア！！」

また声が聞こえた。

アリサはドアノブを掴んで回すと、ゆっくりと扉を開けた。

そして五人は見た。声の主を。

「かーめー。ーめー波アアアアア！！！」

銀時が両手を構えながら、某メガヒット漫画に出てくる必殺技の練習をしていた。

フェイト達は、冷やかな目で銀時を見つめた。

近くでは漸呀が昼寝をしていた。

「なんか違うんだよね。もうちょいアレだな」

ブツブツ言いながら、銀時はまた構えた。

「かゝめゝ。ゝめゝ…」

構えながら、何気なく屋上の入口を見た。

「！！」

そこには、冷やかな目で銀時を見るフェイト達がいた。

「んあ？どうした？」

銀時の声が聞こえなくなり、漸呀は起きた。

そして……銀時を見ているのはとフェイト達を見て……。

「だからやめろって言ったんだ」

この言葉が出たのであった。

*

夕方。

帰りでアリサやなのは達と別れたすずかは、一人で図書館にきていた。

屋上の件は、あの後銀時は凄く落ち込んで、しばらく立ち直らなかった。

（銀八先生…大丈夫かな？）

銀時を心配しながら、すずかは本を探した。すると、隣にいる人にぶつかった。

「あつ！すみません！」

「いや、こつちこそ悪かったな」

二人は謝りながら相手の顔を見た。

「銀八先生！？」

「えっ？すずか！？」

顔を見て二人ともビツクリした。

その隣には漸呀も居た。

「銀八先生……どうしてこんな所に？」

すずかが驚いた顔で銀時に尋ねた。

「いや、暇つぶしに来てみたんだが……ちょっと失敗したな。字ばかりで頭がクラクラするぜ」

「俺も試しに来たが……同じくだ」

頭を掻きながら銀時が言った。

と、銀時は急に申し訳なさそうな顔になった。

「あのよお……屋上の件はすまなかった……『立入禁止』ってやれば誰も来ないと思って……つい屋上で……」

「あ、いえ！私達は大丈夫ですから、銀八先生も元気出してください！」

慌ててすずかは銀時を励ました。

「サンキューな……」

すずかの励ましで、銀時は少し元気になった。

「お前はガキだな」

「うるせえ！」

漸呀に言われて銀時は叫んだ。

その時、車椅子の音が聞こえた。すずかは音のする方を見た。

車椅子に乗ったはやてと、後ろで車椅子を引いてるシグナムがいた。

「はやてちゃん！」

すずかが、はやてを呼んだ。

「あつ、すずかちゃん！」

はやてもすずかに気付いた。

シグナムもすずかの方に顔を向けた。

「なっ！？」

すずかの隣にいる銀時と漸呀を見て、シグナムは思わず声を上げた。

「あ」

銀時もシグナムを見た。

漸呀は……気にしてないだろ。

「すずかちゃん。そちらの方は？」

「私のクラスの臨時担任の坂田銀八先生と臨時副担任の神宮寺漸八先生です」

「すずかが、はやてに教えた。」

（た…担任教師と副担任教師！？この男二人が！？）

シグナムは内心驚愕した。

「シグナム。坂田先生と神宮寺先生の事知ってるん？」

「あ…え、ええ……まあ……」

はやての問いに、シグナムは曖昧な返事をする。

「銀八先生、漸八先生。私の友達の八神はやてちゃんです」

「すずかが銀時に、はやてを紹介した。」

「どうも。八神はやてです」

ペコリと頭を下げながら、はやてが挨拶した。

「あ…どうもこちらこそ。すずかのクラスの臨時担任の坂田銀八です」

「同じく、すずかのクラスの臨時副担任の神宮寺漸八だ」

二人はそう言った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！！」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

漸呀「神宮寺漸呀だ」

銀八「それじゃ、行こうか」

漸呀「まずは、ペンネーム『黒龍』さんからの質問だ

『黒龍「ええ、これからどうなるのか楽しみです。では、質問に参りましょう」

1・ミラクル[∞]に質問。ついに本編登場を果たしたワケですが、無印編では銀さんとなのはがイチャイチャしていた事についてどう思いますか？（黒笑）

2・なのはとフェイトに質問。シグナムにフラグを立てた銀さん。そんなワケですが、今一番カップルであるのは銀さん×シグナムであるこの事実ついてどう思いますか？ 二人共大人なワケですし。

3・なのはとフェイトに質問。銀さんを落とすためならR18的な事もやっちゃいますか？

銀時「どれだけ酷い質問してんだてめえはアアアアアアアアアアアアア！！！」『だそうだ。ミラクル[∞]」

新八「漸呀さんまで！？って言うか……この腐れ天パアアアアアアアアアアア！」

新八は銀時に木刀で襲いかかった。

銀時「ちよつと待て！イチャイチャなんてしてねえぞ！？なのはと

たまたま出会って、帰るまで居候させてもらっただけだ!!」

新八「天誅!!」

銀時「来るなアアアアア!!」

銀時は新八から逃げた。

銀八「……二つ目だけど……」

なのは「黒龍さん……いつもそればっかだね……」
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

フェイト「覚悟出来てるよね?」
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

銀八「あのお二人さん?」

銀八は青ざめながら訪ねる。
漸呀もさすがに青ざめた。

なのは「デイバインバスター!!」

フェイト「サンダースマツシャー!!」

なのはとフェイトの砲撃が黒龍さんの所に飛んでいった。

銀八「……三つ目だが」

なのは・フェイト「やっちゃんかも……」
／＼／＼

二人は顔を赤くしながら答えた。

銀八「カーッペ！と言つ訳で『黒龍』さん！廊下に立ってなさい！」

漸呀「八つ当たりすんな。次で最後だ。ペンネーム『支配者』さんからの質問だ

『質問です

漸呀に質問

銀時と自分、どっちが強いと思ってます？

高杉については如何思いますか？

ミラクル∞に質問

ついにロリコンアイドルアニオタ眼鏡として動き出す時が来ましたが如何思いますか？いつその事Mにでも目覚めますか？（黒笑）
一つ目だが……わからねえな。戦った事がねえし」

漸呀はわからないと答える。

あの二人が戦えば……その場所が焼け野原になっていると思います。

漸呀「二つ目だが……高杉の事は気に止めねえ……確かに高杉とも戦友だ。だが、あいつは変わり果てた……もし、高杉が仲間を傷つけるなら俺は容赦しねえがな」

漸呀はそう答えた。

漸呀は確かに『攘夷戦争』を銀時や高杉達と共に駆け抜けた戦友で

ある。

だが……高杉が自分の仲間を傷つけるのであれば容赦はしないそう
だ。

銀八「らしいです。三つ目だが」

ミラクル∞「何故だアアアアアア！！M何かに目覚めてたまるか
アアアアアア！！」

銀八「だろうな。ミラクル∞……良い事はその内起きるぜ」

ミラクル∞「ちくしょおおおおおおお！！」

銀八「と言う訳で『支配者』さん。廊下に立ってなさい！」

漸呀「質問は以上だ」

銀八「また次回」

第二十九訓：引っ越しは楽しみかも知れない……多分（後書き）

ナナフシ「いやゝ、漸呀も先生って面白そうだったのやっちゃん
ました！」

銀時「おい！」

ナナフシ「良いじゃん!!」

銀時「たくつ、また次回な」

第三十訓：話し合いは大切です（前書き）

ナナフシ「さアてと……今回は連続投稿しようと思います。後、これ長めだと思っています」

銀時「またか……」

ナナフシ「暇人ですから俺。それでは」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』」始まります」

第三十訓：話し合いは大切です

図書館の近くにある公園。

そこではやてとすすかが楽しそうに話をしている。はやて達から少し離れたベンチに、銀時と漸呀とシグナムが座っていた。

「シグナム。お前子守のバイトでもやってんの？」

「……………」

銀時の問いに、シグナムは黙り込む。

夕焼けの空を見上げながら、銀時は考えた。

「ひよつとして…闇の書と何か関係あるとか？」

「……！」

銀時の言葉に、シグナムは動揺してしまい体が小さく震えてしまった。

「あれ？もしかして当たり？あの、はやてって子が闇の書の主なの？」

「スゲエな銀時……勘がさえてんじゃんか」

闇の書の事は、リンディやクロノからある程度の事は聞いていた。

シグナムは焦った。

感づかれた。だが何としても、主はやての事は管理局にバレる訳にはいかない。しかし、この場で戦闘をするワケにはいかないし、戦った所で銀時には勝てない。どうする？

焦りながらシグナムは必死に考えた。そして、はやての事を管理局には黙っていてもええないか、と頼んでみる事にした。

シグナムは銀時に顔を向けた。

「銀時、漸呀…主はやての事は、管理局には黙っていてくれないか？」

意を決してシグナムは、銀時に頼んだ。

「敵であるお前等に、こんな事を頼むのはおかしいかもしれないが…頼む！」

シグナムは銀時に頭を下げた。

銀時とは戦っても勝てない。こうやって頼むしか、主はやてを護る方法はない。断られても、なんとか銀時を説得してみせる。

シグナムがそう考えた時、

「止せよ、シグナム。俺なんかに頭下げんなよ」

銀時が言った。

「そうだけ。俺等二人に頭なんか下げんなや」

漸呀もそう言った。

「銀時、漸呀……」

言われたシグナムは、ゆつくりと顔を上げた。

銀時は、上がったシグナムの顔を見ながら言った。

「安心しな。はやての事は、管理局の連中には言わねーよ」

「俺もだ」

「ほ……本当ですか!？」

「ああ」

「保証はする」

シグナムの言葉に、銀時と漸呀は頷いた。

「そうか。すまないな銀時、漸呀。助かる」

「なアに、気にすんな」

「そうだな」

そう言つて銀時は、すずかと楽しそうに会話をしてるはやてを見た。

シグナムは銀時の言葉に、ホッと一安心した。一度剣を交えて、銀時が信用できる人物である事はわかっていた。なら銀時の言葉は信用できる。出会ったのが銀時で本当に良かった。もし管理局の者と出会っていたら、主はやての事はバレて、最悪全員捕まっていた。

「ところでシグナム。何で闇の書を完成させようとしてんだ？」

銀時が理由を尋ねた。

「主はやては闇の書の呪いを受けている。その呪いから解放させるために、我らは蒐集を行い、闇の書を完成させようとしているのです」

シグナムが理由を話した。

理由を聞いた銀時は、はやての足を見た。はやては足が不自由のようだが、アレが闇の書の呪いなのだろう。

「闇の書を完成させれば、はやての足は治るのか？」

「はい。少なくとも麻痺の進行は止まります」

「そうか…」

シグナムの言葉を聞いた銀時は、浮かない顔をした。

実際に闇の書を見たワケではないが、何か胸騒ぎのようなものがある。理由はわからないが、闇の書は完成させてはいけない気がする。だが、これは確証のない単なる自分の勘。それに闇の書を完成させる以外に、はやてを助ける方法がないのなら、シグナムに余計な事を言うべきではない。

「銀八先生！」

銀時が考え込んでいると、さすがに銀時を呼んだ。さすがとはやては、銀時とシグナムの前まで来た。

「そろそろ時間なので、私は帰ります」

「おう。気をつけて帰れよ」

「はい。さようなら。はやてちゃんもまたね」

「うん。たまねすずかちゃん」

銀時達に挨拶をした後、すずかは帰っていった。

「では主はやて。我らもそろそろ」

シグナムが、はやてに言った。

「そやな。あつ、今度は銀八先生ともお話したいです」

「ああ。また今度な。はやても早く足よくなれよ」

「おおきに」

銀時の言葉に、はやては笑顔で応えた。

「では」

シグナムがベンチから立ち上がった。

「シグナム」

「何ですか？」

銀時が呼び止め、シグナムは銀時を見た。

「あんま無茶すんなよ」

「！」

銀時の言葉に、シグナムは少し頬を赤くした。

「ああ。ありがとう」

少し嬉しくなり、シグナムは微笑みながら銀時に礼を言った。
車椅子を引いて、はやてと共に公園を出た。

（こいつ……鈍感すぎるだろ）

漸呀は銀時を見てそう思った。

二人になった銀時と漸呀は、周りに誰もいない事を確認した。
した後、近くに転がってる石を拾った。確認

そして後ろの林に振返り、

「それでテメーは何やってんだアア！！」

叫びながら石を投げた。

「ぐあっ！」

投げた石は誰かに当たり、男の悲鳴が聞こえた。

「ついでに俺も」

漸呀も銀時が投げた所に石を投げた。

「がばっ！」

銀時と漸呀は、悲鳴が聞こえた方へ向かった。そこには一人の男が倒れていた。

「こんな所で何やってんだ？ッラ」

男に向かって銀時が言った。

「本当だぜ。ッラ」

男は桂小太郎だった。

「ッラじゃない松だ！いや桂だ」

頭を押さえながら桂が立ち上がった。

「ふふ。やるではないか銀時、漸呀。完全に松になりきった俺を見破るとは」

「見破るも何も、テメー木の隣に突っ立ってただけだろーが。バカ

だろ。お前やつぱバカだろ」

「バカじゃない桂だ」

「いや、バカだろ？バカの何者でもないだろ？」

「だからバカじゃない桂だ」

桂と銀時、漸呀が睨み合う。

「で？こんな所で何やってんだ？」

「うむ。八神殿の事が気になってな。様子を見ていたのだ」

「はやての？」

桂の言葉に、銀時は片眉を上げた。

「実は今、俺とエリザベスは八神殿に世話になっていてな。シグナム達から事情を聞いて協力しているのだ」

「はやての家に？たくつ、はやても厄介な奴を拾ったな」

頭を掻きながら銀時が言った。

「ちょうどいい。銀時、漸呀、実はお前に話したい事がある」

急に桂がシリアスな顔になって言った。

思わず銀時も真剣な表情になる。

「実は何者かが八神殿を監視している」

「監視？」

桂の言葉に銀時は少し驚いた。

「機械か魔法か…方法はわからんが、視線のようなものを感じた」

「シグナム達は気付いてるのか？」

「いや、気付いてるのは俺とエリザベスだけだ。俺達は常に真選組の追跡を警戒し、周囲の視線に気を配っていた。だから俺とエリザベスは監視の視線に気付けた」

はやて達を監視。

それを聞いて銀時は考えた。

「狙いは闇の書か？」

「恐らくな。だがシグナム殿達の話では、闇の書は主以外には使えんらしい」

主以外には使えない。なら監視している奴の目的は何だ？

「監視している者は、八神殿と闇の書を知っている人物。シグナム殿達が八神殿を監視する理由はない。今日、八神殿の事を知ったお前も犯人ではない。となると残るは…」

桂は腕を組んで、一旦言葉を止めた。

銀時が口を開いた。

「…管理局か」

「ああ。それ以外に闇の書の内容を知る者はいない。銀時。八神殿達を監視している人物に、何か心当たりはないか？」

神妙な顔で桂が尋ねた。

銀時は考えた。管理局の中で怪しい人物。銀時の中に、一人の人物が思い浮かんだ。

「一人、胡散臭そうな奴がいるが…まだ確証がねえ」

「そうか。それと八神殿は亡くなった両親の親戚から生活費の援助を受けている。もしかしたら、その者が関係しているやもしれん」

話はそこで終わった。

「では俺は戻る。銀時、お前も気をつけろよ」

桂は振り返って歩き出した。

「ああ。じゃあな、ツラ」

銀時も振り返って歩き出した。

銀時の言葉を聞いて、桂は足を止めた。

「ツラじゃない、桂だ」

*

マンション。

銀時は部屋に入った。

「おい。銀さんが帰ったぞー」

言いながら銀時はリビングに入った。

「お帰りなさい。銀さん」

「あつ、お帰り銀時」

「銀時お帰りイ！」

なのはとフェイトとアリシアが笑顔で言った。手には待機モードのレイジングハートとバルディッシュがあった。

「おっ、バルディッシュとレイジングハート直ったのか？」

「うん」

フェイトは嬉しそうに頷いた。

「それに、部品交換の時に新しい機能が付いたみたいですよ」

新八が言った。

「マジでか？そくだ新八。ついでにお前も新しい機能とか付けたら？」

「いや、何で僕が？」

新八は顔をしかめた。

「脱地味だ」

「余計なお世話だ！」

新八がツツコんだ。

「そついや第二章に入ってから新八のツツコミが少なくなったな。

この際そのメガネに新機能を付けて脱地味……」

「普通のメガネでいいわ！地味を馬鹿にするな！！」

メガネに手を掛けながら新八が怒鳴った。

「そつだな……目からビームが出せるくらいのメガネに……」

「それ、人体改造だから！！」

漸呀が言った言葉に新八はツツコンだ。

「お兄ちゃん……いくらなんでも酷いと思うよ」

葵が漸呀に言う。

「それとツツコミが少ないとか言うな！僕だって気にしてんだから！！」

「とうとう新八からツツコミがなくなったアルカ」

神楽が、うんうんと頷く。

「いやツツコミなくならないから！ツツコミ続けるから！」

神楽にツツコむ新八。

「銀兄さんと神楽ちゃんも言い過ぎだよ」
咲が二人に言う。

その時、室内に緊急警報が鳴り響いた。

「至近距離で緊急事態発生！」

エイミイが皆に叫んだ。

「例の守護騎士達か？」

片手に刀を持つて九兵衛がやってきた。その後ろには東城もいる。

「ええ」

エイミイが九兵衛に頷いた。

「なのは」

「うん」

フエイトとなのはは頷いた。

「エイミイさん。私達、現場に行きます！」

なのはがエイミイに言った。

「俺達も行くぜ」

銀時達も武器を持って、準備万端である。

「わかった。皆お願いね」

銀時達は、現場に向かう事になった。

*

街の上空にヴィータとザフィーラ、それに二人を取り囲む十人の管理局の魔導師がいた。更に結界も張ってある。

「管理局か」

「でもチャライよ、コイツら。返り討ちだ！」

ヴィータがグラーファイゼンを構える。

すると魔導師達は、一斉にヴィータ達から離れた。

「え？」

魔導師達の行動に、ヴィータは訝しげる。

「上だ！」

上を見てザフィーラが叫んだ。ヴィータも上を見た。

上空に無数の青い魔力の刃があった。無数の刃の中心に、クロノがいた。

「ステインガーブレイド！エクスキュージョンシフト！！」

クロノは杖を振り下ろし、魔力の刃の雨がヴィータとザフィーラに降り懸かる。

「ちっ！」

ザフィーラがヴィータの前で障壁を張る。障壁に無数の刃の雨がぶつかり、青色の爆発が起きた。

「…少しは通ったか？」

煙が晴れてきて、ザフィーラ達の姿が見えてきた。

ザフィーラの左腕に、数本の刃が刺さっていた。

「ザフィーラ！」

「気にするな。この程度でどうにかなる程…ヤワじゃない！！」

ザフィーラは、腕に力を入れて刃を破壊した。

「上等！」

ヴィータは上空にいるクロノを睨んだ。

クロノも杖を構える。

その時、エイミーから通信が入った。

「クロノ君、現場に助っ人を転送したよ」

「え？」

クロノは視線をヴィータ達から外した。屋上を見ると、フェイトとなのは、銀時達がいいた。

「あいつら！」

「銀時と仲間達もいるな」

ヴィータとザフィーラも、銀時達の姿を確認した。

「レイジングハート！」

「バルディツシュ！」

「セーットアップ！！」

なのはとフェイトは、待機モードのデバイスを上に掲げた。

「レイジングハート・エクセリオン！！」

「バルディツシュ・アサルト！！」

二人は自分のデバイスの新しい名前を叫んだ。

二人の体が光に包まれ、新しいバリアジャケットを身につけ、生まれ変わったデバイスを手に持つ。

「あいつらのデバイス……！アレってまさか！？」

二人のデバイスを見て、ヴィータは驚いた。

二人のデバイスに新たに付けられたのは、カートリッジシステムだった。

「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」「どうして闇の書を完成させようとしてるの？」

フェイトとなのはがヴィータ達に尋ねた。

「あのさあ、ベルカの諺にこういのがあんだよ」

腕を組みながら、ヴィータが言った。

隣にいるザフィーラが、ヴィータを見た。

「和平の使者なら槍は持たない」

それを聞いたなのはとフェイトは、顔を見合わせて首を傾げた。

銀時達も、わからないと言う風に首を傾げた。

「話をしようつてのに、武器を持ってやって来る奴がいるか馬鹿って意味だよ。バカ！」

「なっ！？い、いきなり有無を言わず襲い掛かって来た子がそれを言う？」

ヴィータの言葉に、なのはが反論した。

隣にいる新八達も、うんうんと頷く。

「それにソレは諺ではなく、小話のオチだ」

ザフィーラがヴィータにツッコんだ。

「うっせー！いいんだよ細かい事は！」

ツッコまれてザフィーラに怒鳴る。

「ブハハハハ！仲間にツッコまれてやんの！ダッセー！！」

ヴィータを指差しながら、銀時と神楽は笑った。

「いや、あんたらも僕にツッコまれてるでしょ。ってか今もツッコんだし」

と、新八が二人にツッコんだ。

「うつせーよ！天然パーマバカ！」

「何だと！？オメーに天然パーマの苦しみがわかるかア！！」

ヴィータと銀時が怒鳴り合う。

その時、上空で爆発音が響いた。

ピンク色の雷が、銀時達のいる隣のビルに落ちた。屋上にシグナムの姿が見えた。

「シグナム！」

フェイトが声を上げた。

（アイツ派手な登場するなあ）

銀時は呑気にそんな事を思ってた。

「ユーノ君、クロノ君、銀さん。手を出さないでね。私あの子と一対一だから！」

ヴィータを見ながら、なのはが言った。

なのはの言った言葉が気に入らなかったのか、ヴィータはなのはを睨みつけた。

「余計な手出しはしねえよ」

銀時はなのはの言葉に頷いた。

「銀時」

「ん？」

「私も…彼女と一対一で…！」

シグナムを見つめながら、フェイトが言った。

「ああ。なのはにも言ったが、余計な手は出さねえ。行つてこい」
「うん！」

銀時に言われて、フェイトは頷いた。

「それじゃ、あたしは野郎の相手をするよ」

そう言いながら、アルフはザフィーラを睨んだ。

「え？何？発情期？」

「違う！！」

アルフは銀時の顔を思いっきり殴った。

銀時のせいで緊迫感が削がれたが、シグナム達となのは達がそれぞれの武器を構える。

そして、戦闘が始まった。

*

「でええええい！！」

ヴィータがグラーフアイゼンで、なのはに攻撃する。

なのはは障壁を張って防御する。障壁は以前より硬く、グラーフアイゼンの攻撃を防いだ。

なのははアクセルシューターを使って、ヴィータを追い詰める。

フェイトとシグナムも激しい空中戦をしていた。バルディッシュとレヴァンティンが火花を散らせてぶつかり合う。

フェイトが、複数の金色の魔力の槍『プラズマランサー』を放つ。それをシグナムは、レヴァンティンの炎で掻き消す。

空中でアルフとザフィーラは、互いに拳をぶつけ合って戦っていた。（状況はあまりよくないな。桂に言われた通り空中で戦う事によって、銀時達との戦闘は避けられた。だが魔導師達のデバイスが強化されていて、シグナム達も苦戦している）
ザフィーラは表情を陰しくした。

＊

銀時達は屋上で、フェイト達の戦いを見守っていた。

「いけー！なのは、フェイト！そこアルー！！」

神楽が大声で、なのは達を応援してる。

「魔導師の戦いは始めて見るな」

九兵衛も興味深そうに、戦いを見ている。

「うむ。魔導師の少女達もなかなかやるではないか」

桂が言った。

「そうですね…って桂さん！？」

桂の言葉に応えた後、新八は驚いた。

「何当たり前のように話に参加してるんですか！？」

新八は桂に向かって叫んだ。

「桂じゃない。俺はキャプテン・カッター！！」

「その衣裳どこで用意しやがったアアア！！」

桂の言葉の途中で、銀時が桂にドロップキックをした。

今の桂の恰好は、左目にエリザベスの絵が入った眼帯をして、海賊のような服装をしている。

「ツラ！お前今までどこに行ってたアルカ？」

「ちよっと、いろいろあつてな」

ドロップキックを受けた桂は立ち上がった。

「おいツラ。エリザベスはどうした？」

エリザベスがいない事に気付いた銀時は、桂に尋ねた。

「エリザベスは万が一の時のために、八神殿の護衛をしている」

「八神？誰ですか、その人？」

新八が首を傾げた。

「皆にも教えておこう。ただし管理局の者には言わないでくれ」

そう言って桂は、新八達に銀時に話した事と同じ事を話した。

＊

結界の外。

シャルは屋上から様子を見ている。

（私の力じゃこの結界は破れない…）

シャルは闇の書を使って、結界を破るか迷っていた。

今日は、はやてちゃんとの大事な約束がある。ソレを護るためにも、一刻も早く結界を破って離脱しなければいけない。

その時、背後に気配を感じた。

「搜索しているロストログアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します」

シャルの背後で、杖を突き付けて言ったのはクロノだった。

その時、乱入者が現れた。

突然現れた仮面を付けた男が、クロノを蹴り飛ばした。クロノは隣のビルの屋上まで飛ばされた。

「な…仲間！？」

クロノは仮面の男を睨みつけた。

「あ…貴方は？」

シャルが仮面の男に尋ねた。

「使え」

「え？」

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

「でもアレは…！」

シャルは闇の書を使う事を戸惑った。

「使用して減った頁はまた増やせばいい。仲間がやられてからでは遅かるう」

少し戸惑ったが、仮面の男の言葉でシャルは、闇の書を使う事にした。

（みんな、闇の書で結界を破壊するわ！うまくかわして撤退を！）
シャルが念話でシグナム達に伝えた。

「桂！シャルが闇の書で結界を破壊する！結界を破壊したら撤退

するぞ！」

シグナムが桂に向かって叫んだ。

「何！？闇の書を使つて！？」

そんな事をしたら、闇の書の頁が減ってしまう。桂は銀時達を見た後、シグナムに向き直った。

「シグナム殿！結界は我らが破壊する！だからシャルル殿に闇の書を使わないように伝えてくれ！」

「えっ！？」

「はっ！？」

桂の言葉に、シグナムと銀時は驚いた。

「我らとは…私達も入っているのか！？」

東城が桂に尋ねた。

「頼んだぞシグナム殿！」

東城を無視して、桂はシグナムに叫んだ。

（シャルル！闇の書はまだ使うな！）

（えっ！？）

急いでシグナムは、シャルルに連絡して、闇の書の使用を止めた。

「おいッラ。何勝手な事言つてんだ」

「そうですよ桂さん！」

銀時と新八が桂に言った。

「頼む銀時！今日は八神殿と大事な約束があるのだ！」

「約束？」

桂の言葉に、銀時は片眉を上げた。

「今日は八神殿の家に友達の月村殿が遊びに来るのだ。その時に皆で夕食を食べると約束したのだ！」

桂に言われて銀時は思い出した。

夕方公園で、はやてとすずかが楽しそうに話していたのを。多分あの時に、はやての家に遊びに行く約束をしたのだろう。

「頼む皆！武士の情けだ！」

桂が頭を下げ、銀時達に頼んだ。

銀時はため息をついた。

「誰がお前の頼みなんか聞くかよ」

言いながら銀時は、腰から木刀を抜きながら、近くの結界の壁に近寄った。

「今から結界破るのはテメーに頼まれたからじゃねエ。シグナム達に、はやてとの約束を破らせねえためだ」

銀時は目の前の結界を睨んだ。

「銀さん！本気ですか！？」

驚いた新八が叫んだ。

「ああ。オメーら準備しろ」

「合点アル！」

神楽は傘を構えた。

「合点しちゃうの！？」

新八がツツコんだ。

「全く。君はまた無茶な事を言うな」

そう言いながら九兵衛も刀を抜いた。

「私も手伝いますぞ、若」

東城も刀を抜く。

「すまん銀時、みんな」

桂は片手に丸い爆弾を持った。

「行くぞテメーらアア！！」

「おおっ！！」

銀時の声に、桂、神楽、九兵衛、東城が応えた。

「マジでやるんですか！？」

新八は一人戸惑ってる。

まずは九兵衛と東城が、結界に向かって走り出した。

「はあああああ！！」

結界に向かって、二人とも剣を振り下ろした。

結界に亀裂が入った。

続いて神楽が走り出した。

「ほあちゃああああー！」

亀裂に向かって傘を振った。亀裂が入った部分に傘を叩きつけ、亀裂が更に周りに広がる。

次に銀時が走る。

「うおおおおー！」

結界の亀裂に突きを放った。結界に木刀が突き刺さり、ガシャンと音を立てて結界が割れた。結界に大きな穴が出来た。

最後は桂。

「シャルル殿によって魔力が込められた、この爆弾の威力！しかと見るがいい！」

桂は結界に出来た穴に向かって爆弾を投げた。爆弾は大爆発を起こし、結界を粉々に砕いた。

ヴィータ達は、結界が破壊された事を確認した。

「ヴォルケンリッター『鉄槌の騎士』ヴィータ。あんたの名は？」

「なのは。高町なのは」互いに名を名乗った。

「高町なぬ……な……えーい、呼びにくい！」

「逆切れ！？」

「ともあれ勝負は預けた。次は殺すからな！ぜってーだ！」
そう言い残して、ヴィータは離脱した。

「あ……えつと……ヴィータちゃん！」

「悪いが我も離脱する。勝負はお預けだ」

「あつ！」

ザフィーラも離脱した。

「もう！銀時！何で結界を破ったんだい！？」

アルフは結界を破った銀時に怒った。

「すまん、テストロッサ。この勝負預ける」

「シグナム！」

シグナムもフェイトから離れた。

だがすぐに離脱をせずに、銀時に近寄った。

「銀時！」

「ん？」

シグナムに呼ばれ、銀時は振り返った。

「あ……その……お前達のお陰で、闇の書の頁を減らさずに済んだ……だから……その……」

シグナムは頬を赤くした。

「ありがとう」

少し照れながら、シグナムは銀時に礼を言った。

「へえ。照れてるところも可愛いじゃねーか」

悪戯っぽい笑みを浮かべて銀時が言った。

「なっ！？わ……私をからかっているのか！？」

顔を赤くしながら、シグナムが反論した。

「別にからかってねーよ。それより早く主の所に行ってやれよ」

「う……うむ。ではな銀時」

そう言つて、シグナムも離脱した。

「では俺も行くとするか」

桂が去ろうとした時、

「待て！」

数人の管理局の魔導師が、桂を取り囲んだ。

「逃がさんぞ！おとなしく投降しろ！」

杖を向けながら、魔導師が言った。

「ふふ。これで俺を囲んだつもりか？」

桂は懷に手を入れた。

魔導師達は警戒した。桂の懷から出てきたのは『んまい棒』だった。

「んまい棒、コンボタイジユ混捕駄呪！！」

んまい棒を地面に投げ、辺りが煙に包まれた。煙の中で魔導師達は混乱してる。その隙に桂は逃げた。

「ツラを捕まえるには、詰めが甘すぎるぜ」

後ろで見てる銀時が呟いた。

「銀さん」

「あ？」

新八に呼ばれて、銀時は振り返った。

「なんか…シグナムさんと仲良い感じでしたよね？」

目を細めながら新八が言った。

「付き合ってるアルカ？ 銀ちゃんとシグナム付き合ってるアルカ！？」

神楽が大声で言った。

「バカ。そんなじゃねーよ」

メンドくさそうに銀時は頭を掻いた。

「少なくともシグナムという女性の方は怪しかったですな。あれはホの字ですぞ」

東城が言った。

「いや、間違いなくホの字だ」

漸呀がそう言う。

「だよね。どう見たってね」

葵もそう言う。

「誰が誰にホの字なの？」

「教えてくれませんか？」

「私にも」

レイジングハートとバルディッシュを構えたなのはとフェイトがやってきた。

ちなみにバルディッシュは鎌の形態になってる。

咲も居た。

木刀を構えて。

「ちょ待てよ、なのは、フェイト、咲。お前等勘違いしてるって」
後ずさりながら、銀時が言う。

「『『問答無用！』』」

「あああああー!!」

銀時は悲鳴を上げながら、バルディッシュと木刀を振り回すフェイト、咲となのはのアクセルシューターから逃げた。

*

八神家。

銀時達のお陰で、シグナム達は夕飯に間に合った。はやてやすずかと一緒に鍋を食べていた。

「桂さん。遅いなあ」

「心配いりません、主はやて。桂ならもうすぐ戻ってきます」

桂の事を心配してるはやてに、シグナムが安心させるように言った。
「ただいま」

と、桂が帰ってきた。

「桂さん！おかえり！」

はやてが笑顔で言った。

「遅くなってすまない。そちらが月村殿か？」

「はい。初めまして。月村すずかです」

すずかは桂に挨拶した。

「俺は桂小太郎。好物はそばだ」

「いちいち好物を言うんじゃないやねエエエ!!」

ヴィータが、桂の顔面に飛び蹴りを食らわせた。

「あかんよヴィータ！」

「ヴィータちゃん！」

『暴力はよくない!!』

はやてとシャマル、エリザベスが止めに入った。

すずかはオロオロして、ザフィーラは獣姿で様子を見守ってる。

シグナムは、はやて達の賑やかな光景を見て微笑んだ。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生!!」

銀八「ハイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

葵「神宮寺葵です」

銀八「はい、それでは始めようか」

葵「今回は一つだけです。ペンネーム『黒神』さんからの質問
『質問します。』

ナナフシへ

クロノに木刀流腸をやっぱりしちゃいますか？
今回の偉そうな態度は流石にカチンと来ましたので。

ミラクルへ

人は失恋を乗り越えて大きく成長する者ですよ?」一つ目だけど

ナナフシ「望むなら今ここです!えい!」

ブスッ!

クロノ「あんぎゃあああああああああ！」

クロノは木刀で浣腸されて悲鳴を上げた。

ナナフシ「ふう……刺しっぱで良いか」

木刀を抜かずにそのままにしておいた。

葵「……二つ目ですけど」

ミラクル∞「ちくしょオオオオオオオオオオ！いつも銀さんばかりいいいいいい！」

銀八「そう言うもんだから。と言つ訳で『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

葵「質問は以上です」

銀八「また次回」

第三十訓：話し合いは大切です（後書き）

ナナフシ「はい！今回はね……ドンマイ銀さん！」

銀時「恐かったア……」

ナナフシ「それでは！」

第三十一訓：携帯電話で会話するのって少ないよね（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「はいはい」

ナナフシ「と言う訳で」

アリシア「『リリカル銀魂〜魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀〜』始まるよ」

第三十一訓：携帯電話で会話するのって少ないよね

戦闘が終わった後、銀時達はリンディに呼ばれ、リビングに集まっていた。

「まったく。どうして結界を破ったんですか？」

リンディがため息をつきながら、銀時達に尋ねた。

「すいません。敵が張った結界だと思って、間違えて壊しちゃいました」

すいませんと謝る銀時だが、反省してる様子は全く伺えない。

「貴方の無茶苦茶な行動は、今に始まった事じゃないですけど…周りの貴方達は彼を止める事が出来たはずだ！どうして一緒に結界を破壊したんですか！？」

今度はクロノが尋ねた。

「すまない」

九兵衛が頭を下げて謝った。

「若の責任ではありません！責任なら、この東城歩が取りましよう！」

東城は白い着物姿で、刀を持って座り込んだ。

「切腹する気ですか！？いやいやいや！やり過ぎですよ東城さん！」

「やり過ぎだよ東城さん！！」

新八達が、切腹しようとする東城を止める。

「東城！」

「な…なにもそこまでしなくても…！」

九兵衛とクロノが手を伸ばした。

その時、クロノの手が九兵衛の手に触れた。
その瞬間、

「うがぁああああ！！」

九兵衛は思いつきクロノを投げ飛ばした。

「ぐわっ!!」

クロノは壁に叩きつけられた。

「クロノ!」

リンディがクロノに駆け寄る。

「ああ、言い忘れてました。若は女性は平気ですが、男に触れられると投げ飛ばしちゃうんですよ」

切腹をやめた東城が説明した。

「最初に言え!!」

怒鳴りながらクロノが起き上がった。

「でも、男が苦手な男なんて珍しいねえ」

九兵衛を見ながら、エイミイが言った。

「何言ってるの? 九兵衛は『女』だぞ」

銀時が言った。

「え?」

銀時の言葉に、『リリカルなのは』組と神宮寺兄妹は固まった。

「九ちゃんね、ちよつと事情があつて、今まで男の子として生きてきたのよ」

お妙がフェイト達に教えた。

「ええええっ!!!??」

フェイト達は驚いた。

漸呀はふゝん程度であろう。

どれぐらい驚いたかと言うと、今までテストで0点ばかり取ってた小学生が突然、100点を取った時くらい驚いた。とにかくすごい驚いた。

まさに衝撃の事実である。

「今まで全然気付かなかった…!」

クロノも驚愕の表情をしている。

「まあ九兵衛が女だって知ってるのは極僅かな人間だけだからな」

「僕も土方さんに教えてもらって、初めて知りましたし」

銀時と新八が言った。

こうしてフェイト達は、九兵衛が女性であるという事実を知った。

*

八神家。

深夜のリビングで、シグナム達が集まって話し合いをしていた。

話の内容はシャマルを助けた仮面の男についてだ。

「ふむ。当面の敵にはならんだろうが、その仮面の男。信用できない」

話を聞いた桂は表情を険しくした。

「ああ。闇の書の完成を望んでいるみたいだが…」

シグナムも複雑な表情をする。

「素顔も晒せん者など信用できん。これは俺の勘だが、おそらく仮面の男は最後の最後で俺達の敵になるだろう。用心するに越した事はない」

桂の言葉にシグナム達は頷いた。

恐らく仮面の男が、八神殿を監視している者だろう。桂はそう思った。

「家の周りには厳重なセキュリティを張ってあるし、エリザベスさんも護衛してますから、はやてちゃんに危害が及ぶ事はないと思います」

エリザベスを見ながらシャマルが言った。

エリザベスは、

『心配無用！任せとけ！』

と書かれたボードを掲げた。

「うむ。だが用心のために俺も八神殿の側にいよう。やはり転送魔法や空を飛べない俺は、足手まといになりそうだからな」

と、桂が申し出た。

「そんな事はない。桂がいなければ、我らは闇の書の力を使い、頁を減らしていた」

「そうですよ。桂さんには感謝しています」

ザフィーラとシャルマルが、桂に感謝の言葉を言った。

「…結果破ってくれて…ありがとう…」

ヴィータも少し恥ずかしがりながら、桂に礼を言った。

「…なに。半分は銀時達に感謝してくれ」

微笑みながら桂は言った。

ふと桂がヴィータを見ると、ヴィータは浮かない顔をしていた。

「ねえ、闇の書を完成させてさあ、はやてが本当のマスターになつてさあ…それで、はやては幸せになれるんだよね？」

珍しくヴィータが弱々しい声で尋ねた。

「なんだいきなり？」

「闇の書の主は大いなる力を得る。守護者である私達は、それを誰より知ってるはずでしょ？」

シャルマルがヴィータの疑問に答えた。

「そうなんだけどさ。私はなんか…なんか大事な事を忘れてる気がするんだ」

よくわからないが、ヴィータは何か不安を抱いているようだ。

「ふむ。シャルマル殿。少し闇の書を見せてはくれないか？」

「はい」

桂に言われて、シャルマルは闇の書を渡した。

桂は手に取って闇の書を見た。頁が増えてる以外に、特に変わった所はない。

（やはり見ただけでは、何もわからぬか。しかしヴィータ殿は何を不安に思っているのか…）

そう思いながら、桂がシャルマルに闇の書を返そうとした時、

ドクン

それは聞こえた。

「えっ！？」

突然聞こえた音に、桂は驚いた。

「ん？どうした桂？」

シグナムが尋ねた。

どうやらシグナム達には、今の音は聞こえていなかったらしい。

（何だ今の音は！？何か…心臓の鼓動音のような音が…）

桂は闇の書を耳に当てた。

「桂さん？」

シヤマルが声をかけると、

「すまんが、皆静かにしてくれ」

桂が静かにするように言った。

言われた通りシグナム達は黙った。それからしばらくして、桂は耳から闇の書を離れた。

（…気のせい…か？）

桂は腑に落ちない顔をした。

「シグナム殿。闇の書が完成に近づく、何か心臓の鼓動音のようなものが聞こえたりするの？」

「心臓の鼓動音？いや、そんなものは聞こえたりしないが」

桂の問いに、シグナムは首を傾げながら答えた。

「そうか。変な質問をした。闇の書を返そう」

桂はシヤマルに闇の書を返した。

（あの音がもし俺の気のせいでなければ……闇の書には、シグナム殿達も知らない『何か』があるのか？）

桂も不安を抱きながら、険しい表情をした。

*

翌日。

聖祥小学校。なのはのクラス。

銀時の、それはそれは適当な授業が終わって帰りの時間。教室に、フェイト、アリシア、なのは、すずか、アリサがいた。

フエイトとアリシアの手には、様々な種類の携帯電話が載ってる本があった。

「な…なんだか、いっぱいあるね」

「まあ最近はどれも同じような性能だし、見た目で選んでいいんじゃない？」

とアリサが言った。

「でも、メール性能がいいヤツがいいよね」

「カメラが綺麗だと、いろいろ楽しいんだよ」

なのはとすずかも、それぞれの意見を言った。

「ん」

フエイトは真剣な表情で、どれにするか迷ってる。

そこへ、

「何やってんだオメーら？」

銀時と漸呀がやってきた。

「あつ、銀八先生と漸八先生！」

「フエイトちゃんとアリシアの携帯電話をどれにするか、みんなで相談してたんです」

「携帯電話？」

なのは達の言葉に、銀時は片眉を上げた。

「やっぱり色とデザインが大事でしょう」

「操作性も大事だよ」

アリサとなのはが意見を言い合う。

「たくつ、ガキのくせに携帯電話なんて持ちやがって」

と銀時が言った。

「銀と…銀八先生は携帯電話、持っていないの？」

フエイトが尋ねた。

「電話なら家にあるので充分だろ」

「でも携帯電話なら音楽とか聞けるし」

「携帯電話でテレビも見れるしね」

銀時の言葉の後に、なのは達が携帯電話の話で盛り上がる。

銀時は、なのは達の話の内容にイラついた。

「オイ、お前ら」

「え？」

銀時の不機嫌そうな声を聞いて、なのは達は銀時を見た。

「最近の携帯電話は、やれメール機能やら音楽機能やらテレビ機能やらカメラ機能やら付いてるけどよお」

銀時は、ドカッと机に座る。

「よく考えてみる。俺達は携帯電話で何をしたいんだ？テレビが見たいのか？音楽が聞きたいのか？画像が見たいのか？いや違う。俺達は、電話で話したいんだよオオオオオ！」

銀時の叫びが教室に響いた。

（情けねえ……子供如きにここまで……ってか、金ないお前が悪いだろ）

漸呀は銀時を見ながら思った。

*

時空管理局本局。

ユーノとクロノ、エイミィは通路を歩いていた。

「じゃあ僕は闇の書について調査すればいいんだね」

「ああ、これから会う二人は、その辺に顔がきくから」
そして三人は部屋の中に入った。

部屋には猫の耳と尻尾を持った、二人の女性がいた。

「リーゼ。久しぶりだ。クロノだ」

クロノが挨拶した直後、

「わああ！クロすけ、お久しぶりぶり〜！」

いきなりロッテが、クロノの顔を胸の方に抱き寄せた。

「ロッテ！離せコラ！」

「何だとコラ！久しぶりに会った師匠に冷たいじゃんかよ〜」
クロノが抵抗するが、ロッテから逃げられない。

「アリア！これを何とかしてくれ！！」

アリアに手を伸ばして、クロノは助けを求めた。
だが、

「久しぶりなんだし、好きにさせてやればいいじゃない。それに、満更でもなさそうだし」

と、あっさり見捨てられた。

「そんな訳ないだ…」

「ニャー！！」

クロノが言いかけた所で、ロツテがクロノを押し倒して何かいろろやっている。

ユーノは呆然とその様子を見つめて、エイミイはアリアと会話をしながら見ている。

クロノは思った。何でこんなのが僕の師匠なんだ？誰か助けてくれ。この際誰でもいい。母さん、フェイト、なのは、銀時イイイイ！！
クロノは心の中で助けを求めて叫んだ。

やっと騒ぎが落ち着き、クロノは二人に事情を説明した。

「ああ、なるほど闇の書の搜索ね」

「事態は父様から伺ってる。出来る限り力になるよ」

話を聞いた二人は、協力を承諾した。

「よろしく頼む」

クロノは協力してくれる事に礼を言った。

するとユーノが、隣に座ってるエイミイに小声で話し掛けた。

「エイミイさん。この人達って？」

「クロノ君の魔法と近接戦闘のお師匠様たち。魔法教育担当のリーゼ・アリアと近接戦闘教育担当のリーゼ・ロツテ。グレアム提督の双子の使い魔。見ての通り、素体は猫よ」

エイミイが二人を紹介した。ロツテが笑いながらユーノに手を振ると、ユーノは苦笑いしながら手を振り返した。

「実は、彼の事で頼みがあるんだ」

「食っていいの!？」

クロノが言った瞬間、ロツテはユーノを見た。フェレットに変身できるユーノから、鼠の匂いでも嗅ぎつけたのか。ユーノは怯えている。

「ああ。作業が終わったなら好きにしてくれ」

「なっ!？おい!ちよつと待て!！」

クロノの言葉に、ユーノは慌てて立ち上がる。

その姿にみんな笑ってしまった。

「それで頼みって？」

アリアがクロノに尋ねた。

「彼の無限書庫での調べ物に協力してやって欲しいんだ」

世界の全ての書籍やデータが納められてる超巨大データベース『無限書庫』。

そこでユーノ達は、闇の書の情報を集める事にしたのだ。

*

帰りにプレシアと一緒に、フェイトの携帯電話を購入して、途中で食材の買物をしてマンションに戻った。

「たっだいまゝ!」

しばらくしてエイミイが帰ってきた。

「艦長、本局に出掛けちゃった？」

「うん。アースラの武装追加が済んだから試験航行だっ」

エイミイの問いに、フェイトが答えた。

「武装って言うと、アルカンシエルか。ふう。あんな物騒な物、最後まで使わずに済めばいいんだけど」

ため息をつきながらエイミイが言った。

「クロノ君もいないですし。戻るまではエイミイさんが指揮代行だそうですよ」

と、なのはが言った。

「え？エイミイが指揮代行？大丈夫なの？」

「責任ジューダイ！」

銀時とアルフが、からかうように言った。

「コラ、銀時、アルフ。そんな事言わないの」

プレシアが二人を注意した。

「ふっ、まあそれも物騒といえば物騒かな。まっ、とはいえ早々非常事態なんて起こるわけが……」

エイミイの言葉が言い終わらない内に、警報が鳴り響いた。

ハイ、非常事態発生！

新八が口を開いた。

「エイミイさん。非常事態、起きました……」

「……マジで……？」

呆然となつてエイミイが呟いた。

とりあえず銀時達は、司令室に向かった。モニターを見ると、シグナムとザフィーラが映っていた。

「文化レベル0。人間は住んでない砂漠の世界だね。結界を張れる局員の集合まで最速で四十五分。む、まずいなあ」

困った顔をするエイミイ。

フェイトとアルフはジッと画面を見つめ、顔を合わせると頷いた。

「エイミイ。私が行く」

「あたしもだ」

二人は出勤を申し出た。

「うん、お願い。」

エイミイは了承した。

「念のために、銀さんと漸呀さんも一緒に行ってくれる？」

「俺も？しょうがねーな」

「俺はパス」

漸呀は文句を言うが。

「俺が無理矢理連れていく」

銀時がそう言った。

「ちっ、しゃあねえ」

漸呀は諦めた。

暑そうだな、とブツブツ文句を言いながら銀時は了承した。

「なのはちゃんや他のみんなはバックス。ここで待機してて」

「はい」

「わかりました」

なのはと新八達は、エイミイの指示に従った。

プレシアがフェイト達に声をかけた。

「フェイト、アルフ。気をつけてね」

「うん。行ってきます」

「おう！」

プレシアに返事をして、二人は司令室を出た。

「銀時」

「ん？」

プレシアに呼び止められ、銀時は足を止めた。

「お願いね」

「おお」

手を振ってプレシアに返事をしながら、銀時も司令室を出た。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生」

銀八「ハアイ。投稿した途端に質問が来たのでやる事になりました。今回はアシスタントなしで。それではペンネーム『月光閃火』さんからの質問

『輝刃』…漸呀の教師姿のモチーフ、伏せ字の意味無えな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・漸呀に質問…なのは達のクラスの副担として銀時と共に登場したが、担当教科は何になったんだ？

あ…確かに、それは気になる所だ。銀時は一応『現国』をよくやってたもんな…他の作者ん所の『リリカル銀魂シリーズ』で…。次は俺からだ。

2・新八に質問…というか忠告だ。今さっき、お前の下にサキュバス（美女）が行ったからとりあえずもてなしておいて。ちなみに、そのサキュバス（美女）…新八の事を話したら「フッフ…シンプルな人の生氣ほど、快感なモノは無いからね♪（妖笑）」と言っていたから吸われ尽くされないよう気をつけてね♪

輝刃「…閃火…たまに涼しく恐い事言う時あるな…（滝汗）。」「一つ目だが」

漸呀「俺か？俺は…アレだ。体育」

銀八「らしい。で、二つ目だが」

新八「ええ！！ど…どうすれば！！」

サキュバス「フッフ…」

新八「助けてくださアアアアアアい!!」

新八はとりあえず吸われない様に気を付けながらもてなしをした。

銀八「……と言っ訳で『月光閃火』さん。新八が吸われない様に頑張っているの……あれどうにかしてください」

今回はこれまで!また次回!

銀八「作者!お前がしめるな!」

第三十一訓：携帯電話で会話するのって少ないよね（後書き）

ナナフシ「はい、と言う訳で次回は砂漠です」

銀時「イヤだなア」

ナナフシ「それでは！」

第三十二訓：人を怒らす行為はやめましょう！（前書き）

ナナフシ「今回は砂漠です&長いです」

銀時「もう俺知らねえ……今日で三話分投稿じゃねえか」

ナナフシ「衝動を抑えられなくて。後、『月光閃火』さんが投稿してくれたアレが出ます。では！」

フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀」始まります」

第三十二訓：人を怒らす行為はやめましょう！

砂漠の世界で、シグナムは巨大な蛇のような生物と戦っていた。

「少々厄介な相手だな」

強さなら銀時の方が上だが、この巨大蛇は砂の中から攻撃してきて厄介だ。

シグナムがカートリッジをロードしようとした時、背後に巨大蛇の尻尾が出現した。

「はっ！」

シグナムは、巨大蛇の尻尾から現れた触手に捕まってしまう。

「く……しまった」

巨大蛇がシグナムを睨む。

巨大蛇の触手がシグナムを締め付ける。

「ぐう……うわぁ！」

締め付けられ、シグナムが悲鳴を上げる。

巨大蛇が、先端の尖った尻尾をシグナムに突き刺そうとする。

その時、数本の金色の魔力刃が巨大蛇に突き刺さり、シグナムを縛る触手も切った。

シグナムは上を見た。

そこには、金色の魔法陣を展開してるフェイトがいた。

「ブレイク！」

フェイトの言葉と共に、魔力刃が爆発して巨大蛇を倒した。

*

ザフィーラは、爆発音がした方を見つめた。

「ご主人様が心配かい？」

ザフィーラは声がした方を見た。

そこにいたのはアルフだった。

「お前か」

ザフィーラとアルフが睨み合う。

「シグナムは我らの将だが、主ではない」

睨み合ったまま、ザフィーラとアルフは構える。

*

フェイトにやられた巨大蛇は、砂の中に逃げていった。

フェイトとシグナムが空中で対峙する。

その時、

「フェイトちゃん！助けてどうするの！捕まえるんだよ！」

エイミイが通信で怒った。

「あつ、ごめんなさい。つい…」

フェイトはエイミイに謝った。

「礼は言わんぞ、テストロッサ」

「お邪魔でしたか？」

「蒐集対象を潰されてしまった」

言いながらシグナムは、カートリッジをロードする。

「まあ、悪い人の邪魔が私の仕事ですし」

「そつか…悪人だったな、私は」

*

司令室では、ヴィータの姿を確認した。

「本命はこっち。なのはちゃん！」

「はい！」

エイミイの言葉に、なのはは頷いた。

*

フェイトとシグナムは地上に降りて対峙した。

「預けた決着は、出来れば今しばらく先にしたいが、速度はお前の方が上だ。逃げられないのなら、戦うしかないな」

「はい。私も、そのつもりで来ました」

互いに武器を構える。

「ただ…戦う前に一つ聞いていいですか？」

「ん？」

シグナムは、かすかに首を傾げた。

「シグナムは…銀時が好きなんですか？」

「なっ…！？」

フェイトのあまりに予想外の質問に、シグナムは動揺して顔を赤くした。

これから戦うという時に、フェイトからそんな質問をされるとは思わなかった。

「答えてください」

シグナムを真っ直ぐに見つめながら、フェイトが言った。

シグナムは、どう答えるべきか迷った。しばらく考えた後、構えを解いて左手を胸に当てた。

「これが好きというものが、わからんが…銀時の事を考えると…胸が苦しくなる……」

胸に手を当てたまま、シグナムが答えた。

「それは貴女が、銀時を好きという事です」

フェイトが言った。

「…そうか…これが『好き』というものなのか……」

シグナムはゆっくりと目を閉じた。

この胸の高鳴り。熱くなる体。抑えられない気持ち。

シグナムは目を開いた。

「私は銀時が好きだ」

シグナムは、自分の気持ちをハッキリと口にした。

「私も銀時が好きです」

フェイトもシグナムに、銀時に対する想いを言った。

シグナムは、再びレヴァンティンを構える。

「戦う理由と、負けられない理由が増えたな」

「はい」

フェイトもバルディツシユを構える。

「はあああああー!!」

互いに譲れない想いを胸に、シグナムとフェイトは同時に駆け出した。

*

その頃、銀時と漸呀は、

「あああああー!!」

叫びながら走っていた。

叫びながら、後ろから迫り来る巨大蛇から全速力で逃げていた。

「おかしい！絶対おかしいイイイ！！何で俺だけこんな目に遭った！？何でフェイト達とはぐれてんだ！？」

銀時は涙目になる。

「知るか！俺も何でこんな目に遭ってんだよ！！」

暑さで汗だくになり、息も荒く、体もバテバテだった。巨大蛇が雄叫びを上げながら迫る。

「フェイトオオオ！アルフウウ！シグナムウウ！ヘルプミーイイイイ！」

砂漠に銀時の叫び声が響渡った。

*

なのははヴィータと対峙していた。

何とかヴィータの話を聞こうとするが、ヴィータは話す気はないらしい。ヴィータは赤い魔力球を出した。グラーファイゼンで赤い魔

力球を砕き、赤い閃光を放つ。閃光で目くらましをして、ヴィータはなのはから離れた。転送魔法で離脱するためだ。だが、ここで予想外の事態が起きた。

遠くにいるなのはが、レイジングハートをヴィータに向けて魔力を溜めているのだ。

「まさか……！撃ってくるのか！？」

ヴィータは、なのはの射程距離を見誤ったようだ。

なのはのレイジングハートから、桜色の閃光が放たれた。閃光は真っ直ぐにヴィータに迫る。閃光が当たり、爆発した。煙が晴れていく。

煙の中から、障壁を張った仮面の男が姿を現した。

「あ……あんた……」

仮面の男の後ろにいるヴィータは戸惑っている。
なのはも驚いている。

仮面の男は、ヴィータに少し顔を向けた。

「行け。闇の書を完成させるのだ」

*

フェイトとシグナムの激闘は続いていた。

フェイトはスピードを活かした攻撃を繰り返し、シグナムは剣と鞘を巧みに操って攻撃を防ぎ、反撃する。

両者は、一旦距離を離して動きを止めた。二人とも息が乱れている。

（流石に速いな……目で追えない攻撃が出てきた）

（今はスピードで翻弄してるけど、長くは続かない）

両者は、次の一撃で勝負を決めようとする。

「強いな、テストロッサ。それにバルディッシュも」

「シグナムとレヴァンティンも」

二人は、互いの強さを認め合う。

シグナムはレヴァンティンと鞘を構える。

（闇の書も、銀時への想いも譲れない！）

フェイトもバルディッシュを構える。

（この人に勝ちたい。だから全力を尽くす！）

二人が動き出そうとした瞬間、ヤツが……仮面の男が現れた。仮面の男は、背後からフェイトのリンカーコアを取り出した。

「え……？」

フェイトは呆然となつて、自らの体を貫いてる腕を見た。

「貴様……！」

シグナムが仮面の男に向かって叫ぶ。

だが仮面の男はそんな事、気にも止めない。

「さあ、奪え」

仮面の男が、フェイトのリンカーコアを差し出す。

シグナムは、仮面の男を睨んだ。

確かに、主はやてのためにもリンカーコアは必要だ。だが、こんな形で手に入れる事は望んでいない。

「どうした？早く奪え」

仮面の男が、シグナムにリンカーコアを奪うよう促した時、

「オイ」

仮面の男の背後から声が聞こえた。

直後、大きな打撃音と共に仮面の男が吹き飛んだ。

「がはっ……！」

仮面の男は、十数メートル先まで吹き飛び、砂漠の地面に倒れた。

シグナムは、仮面の男を吹き飛ばした人物を見た。

銀髪の男が右手に木刀を持ち、左腕でフェイトを抱き抱えていた。

巨大蛇から逃げ切った銀時だった。

「銀時……！」

名を呼びながら、シグナムは銀時に駆け寄った。

その時、シグナムは一瞬たじろいだ。

銀時は鋭い眼で仮面の男を睨みながら、静かな怒りを燃やしていた。
「……シグナム。フェイトを頼む」

そう言つて、銀時はシグナムにフェイトを預けた。

銀時は仮面の男に向かつて歩き出した。

シグナムは銀時の背中を見つめた。

（あれほどの怒りを表した銀時は初めて見る…）

砂漠の暑さの中、シグナムは冷汗を流した。

「銀時を怒らせちまったな」

「漸呀……」

漸呀は銀時を見てそう言つた。

仮面の男が、頭を押さえながら起き上がった。

（な…何だ？ 一体何が起こつた！？ 一瞬意識が吹き飛んだぞ！）

仮面の男は、頭を左右に振つた。

立ち上がるうとした時、膝がガクガク震えた。

（ば…馬鹿な！？ 今の一撃でもう足にきている！！）

動揺しながら震える足で、何とか立ち上がった。

その時、

「オイ。素顔も晒せねえ下衆仮面野郎」

銀時のドスの効いた声が聞こえた。

仮面の男は銀時を見た。その瞬間、銀時から凄まじい怒気を感じ、

仮面の男は思わず震え上がった。

「他人の大事なモンに手エ出したらどうなるか、教えてやろうか？」

銀時の眼は、獲物を狩る獣の眼になっていた。

仮面の男は、やってはいけない事をやり、夜叉の怒りに触れてしまった。

最悪だ。

仮面の男は思った。 よりにもよつて、この男と対峙するなんて。しかもフェイト・テストロッサに手を出した事で、男の怒りを買ってしまった。

管理局で噂になっている、『ジュエルシールド事件』で木刀と特殊な刀で活躍した男。

『銀髪の侍』坂田銀時。

銀時は鋭い眼で仮面の男を射抜き、仮面の男も銀時を見つめる。

（……だが所詮は魔法も使えない、ただの人間。今の不意打ちも油断さえしなきゃ……）

と仮面の男が思った直後、銀時が動いた。

砂を蹴って走りだし、一気に仮面の男との距離を詰める。

「速……！！」

仮面の男が驚く間もなく、銀時は木刀を横薙ぎに振る。

仮面の男は障壁を張る。

だが障壁は、木刀の一撃で粉々に砕け散った。

「ば……馬鹿な！？障壁を一撃で砕いた……！！」

仮面で顔は見えないが、明らかに動揺している。

動揺しながらも、仮面の男は後ろに下がって、銀時から離れようとする。だが銀時は仮面の男を逃がさない。素早く動いて、仮面の男との開いた距離を詰める。

「うおおおお……！！」

雄叫びを上げながら、再び木刀を振るう。

今度は一撃ではなく、連撃を繰り出す。仮面の男は障壁と両腕で辛うじて防御する。

（な……なんてスピードとパワーだ……！！本当に人間か……！？しかも剣筋が読めない……！！なんて無茶苦茶な攻撃だ……！！）

まさに防戦一方。

仮面の男は銀時の猛攻を受けて、反撃する事が出来ない。

銀時は、容赦のない猛攻を続ける。

「この仮面野郎！テメーの目的は何だアア……！！」

銀時は、木刀を上段から思いっきり振り下ろす。

障壁と両腕の防御を破って、仮面の男の頭に木刀が当たった。

「ぐあ……！！」

仮面の男は、なんとか意識を繋ぎ止める。

ここで倒れたら計画が水の泡だ。逃げなくては。この男には、どうやっても勝てない。強すぎる。今はとにかく逃げるんだ。

仮面の男は銀時から離れて、拳を振り上げた。

「はあっ！！」

砂漠の地面に拳を振り下ろし、砂を巻き上げた。

「くっ！」

思わず銀時は目を閉じた。

砂埃がおさまり、目を開けると仮面の男の姿はなくなっていた。転送魔法が何かで逃げたらしい。

一度舌打ちした後、仕方なく銀時は木刀を腰に差した。

そしてシグナムとフェイトの方を向いた。

「フェイト！」

銀時はシグナム達に駆け寄った。

「心配ない。気を失っているだけだ」

シグナムが銀時に言った。

「そうか…」

フェイトが無事で、銀時はとりあえず安心した。

銀時は、シグナムからフェイトを受け取る。

「あの仮面野郎は何者だ？」

銀時が尋ねた。

「我らにもわからない。理由はわからないが、奴も闇の書の完成を望んでいる」

「どういう事だ？闇の書は主以外は使えねえはずだろ？」

「ああ。だから何故奴が闇の書の完成を望んでいるのか、わからないんだ」

複雑な表情でシグナムが答えた。

「はやては大丈夫なのか？」

「主はやてには、桂とエリザベス、それにシャマルが護衛している。万が一にも主はやてに危害はないはずだ」

「そうか。まあ、ゾラがいりゃあ大丈夫だろ」

桂はアホな時があるが、強いという事は知ってる。

それにエリザベスも、なんやかんやで結構強かったりする。中身才

ッサンなのに。

「……………」

シグナムは、ジッと銀時を見つめた。

私は銀時の事が好きだ。テストロッサのお陰で、ようやく自分の気持ちハッキリとわかった。

シグナムは拳を強く握った。

だが、その想いは伝えられない。私と銀時は敵同士。その関係が余計に胸を苦しめる。こんな形で出会わなければ、自分の想いを銀時に伝えられたかもしれない。

そう思いながら、シグナムは一瞬辛い表情をした。

「では銀時。私はもう戻る。いつまでも此処にいたら管理局の連中がくるからな」

シグナムは、いつもの表情に戻って銀時に言った。

「ああ」

銀時は短く返事をした。

銀時の返事を聞いた後、シグナムは去っていった。砂漠には銀時とフェイトだけが残った。

「そっいや…」

残された銀時は呟いた。

「俺らどうやって帰るの？」

フェイトを抱き抱えながら、銀時は呆然と砂漠に立ち尽くした。

しばらくしてアルフがやってきて、帰ることができた。後でエイミに、シグナムを逃がした事で怒られたが、銀時はそれを可憐にスルーした。

*

時空管理局本局。

フェイトは医務室で寝ている。特に外傷はなく、リンカーコアも無事で、しばらくすれば目を覚ますそうだ。ベッドで寝ているフェイ

トの隣に、プレシアが付き添っている。

*

会議室。

銀時やリンディ、クロノ、なのは達が集まっている。その中には、グレアム提督の使い魔のロッテもいた。

「銀さん達が出動してしばらくして、管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって…それで指揮や連絡が取れなくて……ごめんね。私の責任だ」

エイミイが皆に謝った。

「んなことないよ。エイミイがすぐシステムを復帰させたから、アースラに連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だつて残せた」

「でもおかしいわね。向こうの機材は管理局で使っている物と同じシステムなのに、それを外部からクラッキングできる人間なんているものなのかしら」

「そうなんですよ。防壁も警報も全部素通りで、いきなりシステムをダウンさせるなんて……ユニットの組み替えはしてるけど……もっと強力なブロックを考えなきゃ」

リンディの疑問にエイミイも意見を言った。

「それだけ凄い技術者がいるって事ですか？」

なのはが尋ねた。

二人の話の内容は、なのはには複雑だったが、大変な事だという事はわかった。

一方、銀時はイラついていた。

これだけの人数がいて何故誰も『内部犯行』を思いつかないのか。フェイトが被害に遭った事で、銀時は少し熱くなっていた。多分仮面の男は、桂が言っていたはやてを監視してる奴か、その仲間。管理局内部に仮面の男、もしくはその仲間がいるかもしれないから、

余計な事は言わないつもりだったが、我慢できなかった。

「あのよオ」

銀時が頬杖をつきながら口を開いた。

皆の視線が銀時に集まる。

「内部犯行だつて誰も思いつかないの？」

イラついた声で銀時が言った。

「内部犯行だつて!？」

クロノが驚きの声を上げた。

他の皆も驚いている。

「管理局内部の人間なら、システムのクラッキングも楽にできんじやねーの？」

「そんな…管理局の人間が……」

銀時の意見に、リンディは驚きを隠せなかった。

他の皆も信じられないと言った顔をしている。どうやら本当に誰も、内部犯行を考えていなかったようだ。その事に銀時は少し呆れた。

「…だけど…どうして管理局の人間が、捜査の邪魔をして闇の書の完成の手助けを？」

リンディが銀時に尋ねた。

「さあな。そこまではわからねエ」

ため息をつきながら、銀時は答えた。

「そうですか……アレックス。アースラの航行に問題はないわね？」

「ありません」

「うん。では予定よりも少し早いですが、これより司令部をアースラに戻します」

アレックスに確認してリンディが言った。

「各位は所定の位置に」

「はい！」

リンディの言葉に、銀時以外の全員が応える。

「クロノ」

「ん？」

銀時に呼ばれ、クロノは顔を向けた。

「アイツ、誰？」

ロツテを指差しながら、銀時が尋ねた。

「リーゼ・ロツテ。僕の師匠で、グレアム提督の双子の使い魔だ」
クロノが答えた。

グレアム提督と言う言葉に、銀時はピクリと反応した。

グレアムの使い魔？双子？

銀時は考えた。

（そういえば仮面野郎は、なのはの所に現れて瞬間移動したように
フェイト達の所に現れた。最速で転移しても二十分かかるものを、
仮面野郎はわずか九分で移動したとエイミイが言ってたな……）

銀時は考え続けた。

闇の書。仮面の男。グレアム提督。双子の使い魔。

（待てよ！もしかしたら……！）

銀時の中で、仮面の男の謎が解けた。

（なるほどな。わかったぜ、仮面野郎の正体と目的……その黒幕
がな……）

*

翌朝。

八神家。

シグナム達は、朝早くにリビングに集まっていた。

「また仮面の男が現れたのか？」

話を聞いた桂が聞いた。

「ああ」

シグナムは頷いた。

「助けてもらったって事で……いいのかしら……？」

戸惑いながらシャルマルが言った。

「……だが、私は仮面の男のやり方は気に入らない」

シグナムが嫌悪感を露にして言った。

その時、はやての部屋からガシャンと何かが倒れる音がした。シグナム達は、すぐにはやての部屋に駆け付けた。

部屋の中ではやては、苦しそくに胸を押さえながら倒れていた。

「はやて!!」

ヴィータがはやての名を叫ぶ。

「シグナム殿！救急車を呼んでくれ！」

「ああ！」

桂に言われ、シグナムは電話で救急車を呼ぶ。
タイムリミットは刻一刻と迫っていた。

*

病院。

「もう大丈夫みたいね。良かったわ」

はやての治療を担当している、石田先生は安心した。

はやては病室のベッドにいて、今は落ち着いた様子をしている。病室には桂とシグナム達もいる。ちなみにザフィーラとエリザベスは目立ち過ぎるので、家で留守番をしている。

「はい。ありがとうございます」

はやてが石田先生にお礼を言う。

「うむ。安心したぞ八神殿」

桂達が石田先生の言葉に安堵する。

「せやから、ちょい目眩がして胸と手がツツただけって言うたやん。もう、皆して大事にするんやから」
と、はやてが言った。

「いや、あの様子を見たら誰でも焦るだろう」

「はい。何かあってからでは遅いですから」

桂とシグナムが言った。

闇の書の侵食が進んでいる。どうやらあまり時間は無いようだ。

「まあ来てもらったついでに、ちょっと検査とかしたいから、もう少しゆっくりしていつてね」

「はい」

石田先生の言葉に、は yet は返事をした。

「さて、シグナムさん、シャマルさん。ちよつと……」

石田先生が二人を呼んだ。

恐らく入院の話とかだろう。三人は病室を出た。

石田先生との話で、は yet は入院することになった。

*

銀時、クロノ、エイミィ、ロッテは司令室にいた。

これからユーノが、闇の書について報告をするのだ。

「まず、『闇の書』っていうのは本来の名前じゃない。古い資料によれば正式名称は『夜天の魔導書』。本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して研究するために作られた、主と共に旅する魔導書」

ユーノが報告をする。

銀時達は、黙ってモニターを見つめながら報告を聞いている。

「破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと思う」

「ロストロギアを使って、無闇矢鱈に莫大な力を得ようとする人が今も昔もいるってことね」

アリアが呆れた口調で言った。

「転生と無限再生はその改変が原因か」

クロノが呟いた。

「一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化。一定期間蒐集がないと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる。無差別破壊のために。だから、これまでの主はみんな完成してすぐに……」

「ああ。停止や封印方法についての資料は？」

クロノが尋ねる。

「それは今調べてる……ただ……」

「ただ？どうした？」

ユーノの様子に、クロノは首を傾げた。

「闇の書を調べてる内に、気になる文を見つけたんだ」

「気になる文？何だよ？」

今度が銀時が尋ねた。

「一冊の本に書いてあったんだ。『闇の書は、魔導師の技術の研究のために作られた物ではない』って」

「なっ！？さっき言ってた事と違うじゃないか！」

ユーノの言葉に、クロノは思わず声を大きくする。

「うん。だから僕もおかしいなって思ったんだ。気になって少し調べてみたんだけど、他には何も記されてなかった」

「何かの間違いじゃないのかな？」

エイミイが言った。

「もしそれが本当だとしたら…闇の書って一体何なんだ？」

とクロノが言った。

銀時は表情を険しくした。

（…どうやら、俺達が思ってる以上に厄介な事になりそうだな……）

*

司令室を出た銀時は、フェイトが眠ってる病室に向かった。

中に入ると、フェイトは目を覚ましていた。病室にはアリシアとプレシアとアルフもいる。

「銀時」

「よオ。もう大丈夫そうだな」

「うん。心配かけてごめんね」

微笑みながらフェイトが言った。

「銀時。フェイトを護ってくれてありがとう」
プレシアが銀時に礼を言った。
「なアに。礼なんていらねーよ」
「素直じゃないな」
アルフがからかうように言った。
すると、漸呀が病室に入ってきた。
「ぎ……銀時……ちょっと来い」
「あ？何だ漸呀？」
銀時は言われた通り、漸呀についていった。
フェイト達も気になり、ついてきた。

*

「これ……どう思う」
「ぎ……銀さん」
漸呀が言った後、新八がそう言った。
「は？何が……な！？」
銀時は驚いた。
新八の目の前には銀髪の腰まで伸びたロングヘアーに淡い黒の澄んだ瞳、年頃の背丈でスタイル抜群なやや童顔フェイスの女の娘が居た。
「誰だ！？こんな奴居たか！？」
「ほ、本当に誰だ！？」
銀龍も姿を現して、驚いた。
「あ、銀龍兄！久しぶり！」
女の娘は銀龍にそう言った。
「ぎ、銀龍兄？」
その場に居た皆が驚いた。

すると、炎凰と雷麟が姿を現した。

『もしかして……お前天魔か？』

「あ、炎凰兄も久しぶり！」

『え、炎凰兄？』

『あんたまで来るなんて……』

「あ、雷麟姉」

『ら、雷麟姉？』

銀時達と銀龍は驚いていた。

「久しぶりだね。本当に」

『天魔……銀龍に何を言っても無駄だぞ』

「え？どうして？」

『記憶がないのよ。銀龍』

「え！？本当なの！？銀龍兄！？」

『あ、ああ……ってか、銀龍兄とは？』

「あ、ゴメンね。実は」

天魔と言う女の娘は光出した。

銀時達は眩しくて、目を隠した。

すると……。

『こういう事』

何故か新八の手に灰色の柄にスケルトンの鍔、刀身は真ん中の線を中心に白銀と漆黒のツートンカラーでロングソードの少し長い感じの両刃の刀が握られていた。

『じゃ、喋る刀アアアアアア！？』

まさかの遭遇。

これはイヤな予感バリバリだ。

『そう、私は『天魔・双極』って言うんだ』

天魔はそう言った。

「え！？マジでか！？」

銀時は驚いた。

『私が銀龍兄達を兄と姉として呼んでいるのは、兄弟機だからだよ』

『え！？』

皆は驚いていた。

『私には人型になる事が出来る様になってるんだ』

「何それ！？銀龍達にはないのか！？」

銀時はツツコンだ。

「じゃあ、さっきのが、天魔さんの人の時の姿」
「なのはがそう言った。」

『うん、そうだよ。主を見つけたから現れたの』

「で、誰なの？その主は？」
「フェイトが訪ねる。」

『今、私を持っている人です』

『……………』

皆は新八を見た。

「え？僕？」

新八はそれを言うしかなかった。

第三十二訓：人を怒らす行為はやめましょう！（後書き）

ナナフシ「あまりにも長いので質問コーナーはありません」

銀時「おいおい」

ナナフシ「ホント、すみませエエエエエエん！」

銀時「今回は……天魔が新八を選んだ理由とクリスマスだ！じゃあな！」

第三十三訓：人を見た目で判断するな！（前書き）

ナナフシ「この三連休は……連続投稿する事にしました」

銀時「おい」

ナナフシ「せつかなんだしね……それよりも、発売したなのはのゲームほしいな」

銀時「買えば良いだろ」

ナナフシ「地元のゲーム店を見回ってもなかったので……それでは！」

雷麟『『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まり
ます』

皆は驚きの声を上げた。

「ま、マジでかアアアアアアア!?」

「は、はい／＼」

銀時の問いに天魔は顔を赤くして答える。

「え、嘘オオオオオオオオオ!!」

一番新八が驚いている……当たり前か。

（う、嘘オオオ!!こ、こんな可愛い子にひ、一目惚れされたなんてええええええ!!で、でも僕にはなのはちゃんが!!）

この人……まだ気付いてないよ!!

もうあんたの恋は終わってるんだよ!!

「凄いですね……銀さん。刀が人に恋を抱く所……初めてみました」

「俺もだよ。なのは」

銀時となのはは会話をしていた。

「銀時……なんか新八が変だよ」

フェイトがそう言ったので、新八を見ると……。

「え、えへへ」

完全に浮かれていた。

（おiiiiiiiiiiii!ぱつつあん!?大丈夫なのかアアアアアアア!?）

銀時は心配した。

『うむ、よかったな。新八』

銀龍がそう言う……。

「ど、どうすれば良いんだろうか?で、でも心に決めた人が……」

新八は迷う。

リリカル組以外は新八がDVDのパッケージのなのはを見て好きになった事は知っている。

だから、銀龍は迷いもなく……。

『なのはは主の事が好きだぞ』

そう言った。

「え、えええええええええ!!」

新八は驚きの声を上げた。

「ほ、本当なのはちゃん!？」

「は、はい／＼」

なのはは顔を赤くしながら言う。

「こ、この天パアアアアアアア!！」

新八は木刀を振りながら襲ってきた。

「ぎゃあああああ!来るなアアアアアア!！」

銀時は新八から逃げ回り、皆はそれを苦笑いしながら見ていた。

こうして……新八の恋は終わった……けど、よかったじゃん新八!

by 作者

「黙れ作者アアアアアアア!！」

新八はありったけの声で叫んだ。

こうして、新八は天魔の持ち主となった。

(新八君……もしかして)

葵は新八を見て思った。

実は葵は隠れオタクなのであった。

(後で話をしよう♪)

完全に仲間を見つけた様だ。

*

フェイトとなのはとアリシアは、学校に向かっていた。

フェイトは体に異常はなく、すっかり元気になっていた。三人共しばらくは呼び出しがあるまでは、普通の生活を送るように言われている。

バスに乗り、学校に到着。

「入院？」

「はやてちゃんが？」

教室に入った二人は、すずかから、はやての入院を知った。

「うん。昨日の夕方に連絡があったの。そんなに具合は悪くないそうなんだけど…検査とかいろいろあつてしばらくかかるって…」
心配そうな表情で、すずかが言った。

「そっか…じゃあ放課後にお見舞いに行く？」

アリサが提案した。

「え？いいの？」

すずかがアリサに聞いた。

「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれるって話だったしさ。お見舞いもどうせなら賑やかな方がいいじゃない」

「うーん。それはちよつとどうかと思うけど…」

と、なのは。

「でも、いいと思うよ」

「そうだよね」

フェイトとアリシアは頷いて言った。

「ありがとう！」

すずかは笑顔で、みんなにお礼を言った。

その時、教室の引き戸が開かれて、銀時と漸呀が入ってきた。

「あつ、銀八先生、漸八先生。おはようございます」

銀時に気付いたすずか達が挨拶した。

「おお」

「よっ」

銀時と漸呀は短く返事をした。

すると銀時は、フェイトに顔を向けた。

「フェイト。ちよつと携帯電話貸してくんない？」

「え？」

*

マンション。

部屋にはプレシアが一人でいた。

リンディ達はアースラの方にいるので、部屋にはプレシアしかいないのだ。

プレシアが本を読んでいると、テーブルに置いてある携帯電話が鳴った。フェイトの携帯電話と同じ型のやつだ。携帯電話を手にとってボタンを押す。

「もしもし？」

「おお、プレシア。俺だ。銀時だ」

「銀時！？」

プレシアは驚いた。

フェイトの携帯電話からかかってきたのに、何故銀時が出てくるのか？

「それフェイトの携帯電話じゃ……」

「そうだよ。フェイトから借りてんだよ」

「貴方ねえ……自分の携帯電話を買ったらどうなの？」

少し呆れながらプレシアは言った。

「金がねーんだよ」

銀時が即答した。

金がない。

それを言われたら、プレシアはもう何も言い返せなかった。

「それで？用件は何？」

「仮面野郎の正体と目的がわかった」

銀時が言った。

それを聞いた瞬間、プレシアの顔が険しくなった。眉を寄せて鋭い目つきになる。

仮面の男。自分の娘に手を出した謎の男。プレシアの中で怒りが込み上げてきた。

「それで、仮面の男の正体は誰なの？」

「グレアムってオッサンの双子の使い魔だ」

「グレアム提督の！？」

プレシアは驚いた。

まさか管理局の人間だとは思わなかった。プレシアはすぐに冷静になって考えた。姿は恐らく変身魔法で変えているのだろう。

「という事は…黒幕はグレアム提督？」

「ああ」

「でも、どうしてグレアム提督が？」

プレシアが疑問を言った。

闇の書は主以外には使えない。グレアム提督もその事は知っているはず。

「プレシア。アンタの前に、自分では使えない強力な道具があったらどうする？」

いきなり銀時は質問をした。

プレシアは、質問の意図がわからなかったが、答える事にした。

「…そうね…どこかにしまっておくか、処分するか…！！！」

そこでプレシアは、ハツとなった。

「まさか…！」

「ああ。グレアムの狙いは、闇の書の破壊。もしくは封印だ」

銀時がグレアムの目的を口にした。

今まで銀時達は、大きな勘違いをしていたのだ。

仮面の男の目的は、完成した闇の書を何らかの方法で横取りする事だと思っていた。

だが、実際はその逆。目的は闇の書の封印だった。

「…リンディから聞いた事があるわ。グレアム提督は十一年前、闇の書の封印に失敗して、クロノの父親クライドを失ったと……」

十一年前の悲劇。

あれからグレアム提督は責任を感じ続けているらしい。

「動機はそれだな。闇の書への復讐」

「でも…それなら何故闇の書の完成を？それに闇の書の封印は不可能のはずよ？」

「多分、その封印方法は、闇の書が完成した後じゃなきゃできねー

んだろ。どんな方法かはわからねーがな」

流石の銀時も、封印方法まではわからなかった。

「そう……」

プレシアは短く答えた。

「それにしても、一体どうやって気付いたの？」

「前の戦闘で仮面の男は、なのはのいた世界からわずか九分後にフ
イト達がいた世界に現れた。どんなに急いでも二十分はかかると
エイミイが言ってた。そこで双子の使い魔の事を知って思ったんだ。
もしかしたら、仮面の男は『二人』いるんじゃないかってな」

「なるほど。姿が同じだから、先入観で仮面の男は一人だと認識し
てしまったのね」

プレシアも納得した。

「伝えたい事はこれだけだ。まあ何の証拠もねえ俺の想像だけどな
……」

前の会議の時にリンディ達に内部犯行を言ったが、あまり信じても
らえなかった。

だがプレシアは違った。

「そんな事ないわ。私は貴方の言う事を信じる。教えてくれてあり
がとう」

プレシアは、銀時の言葉を信じて礼を言った。

「そうか。おっと、もう授業が始まっちゃうぜ。それじゃあな」
「ええ」

そこで電話は切れた。

プレシアは、これからどう動くべきか考えた。

*

放課後。

すずか、アリサ、フェイト、なのは、アリシア、それに銀時と漸呀
の七人ははやての病室に向かっていた。五人がはやての見舞いに行

くと聞いた時、銀時は内心焦った。下手をしたら、シグナム達と鉢合わせしてしまう。それにはやての入院にも驚いた。そこまで闇の書の侵食が進んでいたのか。

漸呀は飄々としていた。病室に入ると、シグナム達の姿はなかった。どうやら蒐集作業をしているようだ。

その代わり、はやての隣に桂がいた。

一瞬、フェイト達にバレないか冷や冷やした。以前の戦いで桂は、キャプテン・カツラという変装はしていたが、ハッキリ言って薄っぺらい変装だ。だが、意外にもフェイトとなのはとアリシアは桂に気付かなかった。

「はじめまして」

と、桂に挨拶している。

マジで気付いてないのか？

銀時は、安心したような呆れたような複雑な気分になった。

*

銀時と桂は一旦病室から出た。

二人とも互いに状況や情報を話した。はやては闇の書の侵食が進み、このままの速度でいくと持って一月。もしかしたらもっと短いかもしれないらしい。銀時からの情報にも桂は驚いた。

「闇の書の封印か…それは闇の書が完成した後に行われるのか？」

「ああ。多分な」

銀時は頷いて答えた。

「という事は…次にヤツらが動くのは、闇の書が完成した時か……」
真剣な顔で桂は腕を組んだ。

「とりあえず、はやての方は任せたぜ。ツラ」

「ツラじゃない桂だ」

*

12月23日。

すずかはメールを打っていた。

『明日の終業式の帰りの件。みんな大丈夫ですか？』
メール送信。

『はやてにプレゼントを渡しに行くんだよね』
と、フェイト。

『でも、内緒で行って大丈夫かな？』
と、なのは。

『まっ、もし都合が悪かったら、石田先生に渡してもらえばいいし』
と、アリサ。

『それじゃ、銀八先生も誘って、また明日ね。おやすみ』
最後にすずかが送信して、メールのやり取りは終わった。

*

12月24日。

はやての病室。

シグナム、シャマル、ヴィータがお見舞いに来ていた。桂もいつも通りいる。今回もザフィーラは家で留守番だが、エリザベスは病院の近くで待機している。

『はやて…ごめんね。あんまり会いに来れなくて』

『ううん。元気やったか？』

『めっちゃめっちゃ元気！』

はやてがヴィータの頭を撫でて、ヴィータは元気に答えた。

シグナムとシャマル、桂も微笑みながら、その光景を見ていた。

その時、ドアがノックされた。

『こんにちは』

ドアの向こうから、すずかの声が聞こえた。

シグナム達は焦った。

連絡がなかったので、今日は見舞いに来ないのだと思っていた。

「あれ？すずかちゃんや。はーい、どうぞ」

はやてがすずかに返事をして、中に入るように促す。

「こんにちは」

ドアが開かれて、すずか達が病室に入ってきた。

「あ、今日は皆さんお揃いですか？」

「こんにちは、はじめまして」

と、すずかとアリサが言う。

「あつ！？」

なのはとフェイトとアリシアは、シグナム達に気付いて思わず声を上げた。

「えっ！？」

フェイト達の後ろに立っている銀時と漸呀も驚いた。

（おいイイイ！！何でお前らがいるんだアアア！？）

（これは予想外だな）

心の中で銀時は叫んだ。漸呀も予想外の事に驚いている。桂も焦っている。

シグナムとヴィータは、敵意の目でフェイト達を睨んでる。

気まずい雰囲気になる。

「あ、すみません。お邪魔でした？」

と、アリサが言った。

「い、いや…そうじゃねーよな？いきなり見舞いに来られたからビ

ツクリしたんだよな？」

「あ…ああ…そうだ」

「本当に驚きました。いらっしやい」

銀時が何とか誤魔化そうとして、シグナムとシャルは銀時に話を合わせた。

「なんだ。よかった」

「驚かせてすみません」

すずかとアリサが安心する。

「ところで、今日はみんななどないしたん？」

はやてがすずか達に尋ねた。

すずかとアリサは、笑顔で互いに顔を見合わせ、

「せーの！」

二人は同時に、コートで隠していたプレゼントを出した。

「サプライズプレゼント！」

プレゼントをはやてに差し出した。

はやては嬉しそうな笑顔になる。

「今日はイヴだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「わあ、ほんまか。ありがとうな」

お礼を言いながら、はやては二人からプレゼントを受け取った。

「みんなで選んできたんだよ。後で開けてみてね」

アリサ達は楽しそうに話をしている。

ヴィータはまだなのはを睨んでいて、なのはは困った顔をしている。

隣にいるフェイトとアリシアも同じ表情をしている。

「ああ、みんなコートを預かるわ」

そう言つてシャルは、すずか達からコートを預かる。

「シグナム。ちよつと話があるから、廊下に出てくんない？」

「ああ」

銀時とシグナムは病室を出てドアを閉めた。

銀時は一度ため息をついてから、シグナムを見た。

「何でお前らがいるんだ？何でお前らがいるんだ？闇の書の蒐集やつてたんじゃねーのかよ！？」

中にいるはやて達に聞こえないように、銀時は小声でシグナムに言った。

「主はやてに心配をかけないように、今日は見舞いにきたんだ！銀時達こそ、どうして黙って見舞いにきた！？」

「はやてを驚かせようと思って黙ってきたんだよ！そしたらお前らがいて逆に俺達が驚いたちゃったじゃねーか！逆ドツキリかコレ！

？」

言い合った後、二人は気分を落ち着かせた。少しだけドアを開けて、中の様子を見る。

ヴィータはまだなのはを睨んでる。

「ヤベーよ、ヴィータ超睨んでるよ。なのはの事ガン見だよ。メンチ切ってるよ」

小声で銀時が呟いた。

「えと…あの…そんなに睨まないで…」

「睨んでねーです。こういう目つきなんです」

睨みながらヴィータが言った。

なのはは戸惑った。

すると、はやてがヴィータを怒った。

「なあ。この後どうすんの？俺はどうすればいいの？何とかしてくれシグナム。頼む。三百円あげるから！」

「何故、三百円？」

病室のドアの前で、銀時とシグナムはそんなやり取りをしていた。

*

「さようなら」

すずかとアリサが手を振りながら挨拶した。

シグナムとシャマルは病院の玄関口で、すずか達を見送った。夜になって辺りは暗くなっていた。

この後、銀時、フェイト、なのはの三人は近くのビルの屋上で、シグナム、シャマル、ヴィータと会う予定だ。桂は一人ではやての様子を見る事となった。

歩きながら銀時は、暗い空を見上げた。

（今夜は雪が降るかもな…）

そんな事を思いながら、銀時はすずか達と別れて、フェイト達と一緒に待ち合わせのビルへ向かった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生!!」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

天魔「主（新八）の相棒の天魔・双極です」

銀八「人型で登場か……まあ行くか」

天魔「まずはペンネーム『月光閃火』さんからの質問

『輝刃』なるほどな……あ……質問……行くぞ？まずは俺からだ。」

1・ナナフシに質問……勲の旦那の事だが、やはり新たな恋を見つけさせた方がいいのでは無いか？それなら閃火の方で用意出来るかもしれないぞ？

ハハハ……確かに、近藤さんにも幸せになってもraitたいからね。次は俺からだ。

2・高杉に質問……自分と同じ中の人である『SOUL EATER』の『エクスカリバー』をどう思う？というか……自分の物にしたい？

輝刃「……まさかの声優ネタか……（汗）。」『まずはナナフシ』

ナナフシ「そうですねエ。あの人……どう考えてもお妙一筋でしょ？だから難しいのでは……と思うんですが……諦めさせようにもあの人……凄いしぶといですし……無理だと思います」

銀八「曖昧だな。二つ目だが」

高杉「ククク……そうだなア……自分の物にはしてみてえな。それでこの腐った世界を……」

銀八「はい、と言う訳で『月光閃火』さん。近藤のは難しいそうなので、無理だと思います」

天魔「アハハ……次で最後です。ペンネーム『ケン』さんからの質問『なのはとフェイトへ』

銀さんとシグナムは大人でカップルとして見られ、咲という人も加わり、競争率が高くなりました。

そんな貴方方は絶望しますか？因みにこれはクロノが言っていました。

シャマルとお妙へ

貴方達は猛毒物質を作れるのですからボイズンレディーというグループを結成して活動したらどうですか？

因みにこれは近藤が呟いていました。

新八へ

貴方は巨乳派ですか？それとも貧乳派ですか？

正直に答えて下さい。

以上です。』なのは、フェイト」

なのは「酷いの！クロノ君！」

フェイト「本当だよ！」

クロノ「そんな事言って㇏ぎやあああああああ！！」

クロノはなのはとフェイトの砲撃を喰らい、黒こげになった。

そして、シャルとお妙は二つ目の質問を聞き……。

シャル「酷いですよ！近藤さん！」

お妙「このゴリラがアアアアアア！！」

近藤「シャル殿！お妙さん！俺そんな事言って㇏ぎやあああああ
あああああ！！」

近藤はボコボコにされた。

銀八「……新八答えろ」

新八「え！や、やっぱり……胸の大きい人がノノノ」

天魔（よし！）

天魔は新八の答えを聞いて「よし！」と思った。

天魔はスタイル抜群なのだ。

銀八「カーツペ！と言う訳で『ケン』さん。廊下に立ってなさい」

天魔「質問は以上です」

銀八「またな」

第三十三訓：人を見た目で判断するな！（後書き）

ナナフシ「新八に恋する人が!!」

銀時「葵も少し怪しいな」

銀龍『うむ、新八も幸せになるだろ』

ナナフシ「それでは!」

第三十四訓：騎士の魂を汚すな（前書き）

ナナフシ「連続投稿です」

銀時「だな」

ナナフシ「それでは」

アリシア「『リリカル銀魂〜魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀〜』始
まります」

第三十四訓：騎士の魂を汚すな

銀時、漸呀、フェイト、なのは、アリシアと、シグナム、シャマルはビルの屋上にいた。

「はやてちゃんが…闇の書の主……」

シグナム達から、話を聞いたなのはが呟いた。
フェイトも困惑の表情を浮かべている。

「悲願は後わずかで叶う」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも」

シグナム達が敵意を放ちながら言う。

「ちよつと待て」

銀時がなのはとフェイトの前に出る。

「ツラの奴にも言ったが、闇の書は…」

と、銀時が言いかけた時、上空からヴィータがグラーフアイゼンを構えながら迫ってきた。

銀時はヴィータに気付いて上を向いた。

「はああ!!」

ヴィータがグラーフアイゼンを上から振り下ろす。

グラーフアイゼンは銀時の頭に直撃した。

「がっ……!!」

銀時は頭から血を流し、口からも血を吐いた。ガクツと床に膝をつける。

「銀時!!」

「銀さん!!」

フェイトとなのはが銀時に駆け寄る。

（ヤベエ……！今はマジで効いたぜ……！！）

よろけながら、何とか立ち上がる。

ヴィータは下がって、シグナムの隣に立つ。シグナムも、レヴァンティンを出して右手に持つ。

「シグナム…」

頭を押さえながら、銀時はシグナムを見た。

「シャル。お前は離れて通信妨害に集中している」

「うん」

言われた通りに、シャルは後ろに下がった。

シグナムは両手でレヴァンティンを構える。

「…すまない、銀時。我らを許してくれとは言わない。だが…」

シグナムは悲痛な顔をする。

前髪に隠れている目から、一筋の涙が零れる。

「我ら守護騎士は…主の笑顔のためならば、騎士の誇りさえ捨てる
と決めた」

目から涙が溢れ出る。

目の前の愛しき人に刃を向ける。

「もう…止まれんのだ…！」

涙を流しながら、シグナムは銀時に向かって叫ぶ。

銀時は、覚悟のこもったシグナムの気迫を受け止めながら、目をそ
らす事なくシグナムを見つめた。

「フエイト…なのは…下がってる…」

「銀時…！」

「銀さん…！」

銀時は二人を後ろに下がらせた。

シグナムと対峙する銀時。

「はぁあああ…！」

シグナムが走り出す。

両手でレヴァンティンを握り、銀時に向かって突きを放つ。

一方の銀時は、木刀と銀龍も持たず、避けるそぶりすら見せない。

「え…！？」

シグナムの中で迷いが生まれた。

その迷いが突きの軌道をズラした。レヴァンティンは銀時の右肩に
刺さった。傷口から真っ赤な血が出る。

「ぐう…！」

銀時は齒を食いしばった。

シグナムは、信じられないと言った顔で銀時を見た。

漸呀以外の周りのみんなも、銀時の行動に驚いている。

「…何故避けなかった…？お前ほどの者なら…かわせたはずだ…！」
僅かに声を震わせながら、シグナムが言った。

「…こんなもん…はやてやオメーらが味わった苦しみや痛みに比べたら…どうってことねーよ」

銀時は不敵な笑みを浮かべた。

「…！」

シグナムの体が震えた。

わざと受けたのか？

お前の命を奪っていたかもしれないのに…。

「シグナム…ヴィータ…シャル…あと…ザフィーラだっけ…？」

銀時が、守護騎士達の名前を一人ずつ言った。

名前を言われたヴィータ達は、少し驚いた顔をした。

「もういいだろ。もう、テメーらで背負い込む必要はねーんだよ」

銀時は右手で、自分を刺してる剣を掴んだ。

「よく聞け、シグナム。俺は正義の味方でも、管理局の味方でもねエよ」

真っ直ぐにシグナムを見つめながら、銀時は続けて言った。

「テメーらの味方だ」

その言葉にシグナムは目を見開いた。

銀時の言葉はシグナムの心の奥にまで届き、シグナムは再び涙を流した。

後ろにいるシャルも涙目になり、ヴィータも動揺している。

「テメーらにとっちゃ、周りの奴ら全員が敵に見えてるんだろーが、それでも俺はテメーらの味方だ」

嘘偽りの無い銀時の言葉。

シグナムは嬉しかった。刃を向けた自分に、そんな言葉をかけてく

れるとは、思ってもいなかった。

シグナムは、銀時の右肩に刺したレヴァンティンを抜いた。

「……すまない…銀時……」

顔を俯かせ、涙を流しながら銀時に謝った。

「…謝る事はねーよ。お前らは、お前らの護りてえモン護ろうとしただけだ」

そう言つて銀時は微笑んだ。

シャマルとヴィータも武器をおろした。

様子を見守っていたフェイトとなのはは、とりあえず一安心した。だが安心したのも束の間、突如青いバインドが現れ、銀時を拘束した。

「なっ!?!」

銀時は、自分を拘束したバインドを見て驚いた。

「銀時!?!」

シグナムとフェイトが叫んだ。

その時、

「よし。まずは一番厄介な奴から拘束した」

上から声が聞こえた。

シグナム達は上を見た。そこには仮面の男がいた。

「貴様！銀時を放せ!!」

シグナムが仮面の男に立ち向かおうとするが、青いバインドに拘束されてしまう。フェイト達やヴィータ達も全員、バインドに捕まってしまった。

「よくやった」

そこへ、もう一人仮面の男が現れた。

「えっ!?!二人!?!」

仮面の男達を見て、なのはは驚きの声を上げた。

（やはり二人いやがったか…!）

銀時は仮面の男達を睨んだ。

「では、始めるとするか」

仮面の男が右手を上げた。すると闇の書が現れた。

「いつの間に!？」

闇の書を見て、シャルルが驚く。

「おい」

銀時が仮面の男達に声をかけた。

仮面の男達は、銀時に顔を向けた。

「闇の書はまだ完成してねーぜ。どうするつもりだ？管理局の子猫ちゃん達？」

不敵な笑みを浮かべながら銀時が言った。

「なっ!？」

銀時の言葉に、仮面の男達は動揺した。

(どうやら当たりのようだな)

銀時の疑惑は確信に変わった。

「く…構うな。ソイツが何を知っていても、今の状態では我々の邪魔はできん」

仮面の男が、闇の書を持つてる仮面の男に言った。

闇の書が開いて、紫色に光る。

「う…うああっ!！」

シグナム達から、それぞれ光の玉が現れる。

「シグナム!！」

銀時が叫ぶ。

「最後のページは、不要となった守護者自らが差し出す」

仮面の男の言葉の後に、闇の書が蒐集を始める。

「ああああ!！」

シャルルが闇の書に蒐集され、姿が消えた。

次にシグナムの蒐集が始まる。

「ああああ!！」

シグナムの体が下から消えていく。

「シグナム!！」

叫びながら銀時は、必死にバインドを解こうとする。

「ぎ…銀時……あ…主…はやてを……頼む……」

そう言い残してシグナムも消えた。

銀時は目を見開いて、呆然と立ち尽くした。

「シャマル！シグナム！」

ヴィータが叫ぶ。

「何なんだ？何なんだよテメーら！？」

仮面の男達に向かってヴィータが怒鳴る。

「プログラム風情が、知る必要はない」

仮面の男は静かに言った。

その何気なく言った言葉が、あの男の怒りを買つとも知らずに。

「……………じゃねーぞ」

銀時が小さく呟いた。

「ん？」

仮面の男達が銀時を見た。

ヴィータも、なのはもフェイトも、全員の視線が銀時に集まる。

「ふざけんじゃねーぞ」

顔を伏せたまま銀時が言った。

「プログラム風情？ふざけんよ。テメーら下衆野郎どもに、シグ

ナム達の何がわかるってんだ」

明らかに銀時の雰囲気が変わった。

荒々しい怒りの感情が出ている。

次の瞬間、銀時は顔を上げて仮面の男達を鋭い眼で睨んだ。その眼

には怒気以外に、凄まじい殺気も含まれていた。

「な……！！？」

滅多に放たない、銀時の凄まじい殺気を受けて、仮面の男達は身を震わせ冷汗を流した。

「テメーら如きが、シグナム達の気高い魂を汚すんじゃねエ」

血が出るくらいに拳を強く握る。腕に力を入れる。

「銀時……」

ヴィータは驚いていた。敵である自分達のために、銀時は仮面の男

に怒っている。ヴィータは、その事が少し嬉しかった。

「このクズ野郎どもがアアアア！！シグナム達を返しやがれエエエエー！！！」

怒りの形相で銀時が叫ぶ。

更に腕に力を入れて、無理矢理バインドを壊そうとする。すると、バキバキツと音を立てバインドにヒビが入った。

「な…何！？馬鹿な！腕力だけでバインドにヒビを…！！？」

仮面の男達がうろたえる。

「守護騎士達に傷を受けた体で…どこにあんな力が！？」

「こ…コイツ本物の化物だ！！！」

銀時の力に仮面の男達は恐怖した。

「うおおおお！！！」

銀時は雄叫びを上げながら、必死にバインドを壊そうとする。

「が…頑張れ銀時！もう少した！！！」

ヴィータが銀時を応援した。

「銀さん！」

「銀時！！！！」

なのはとフェイトとアリシアも、銀時の名を叫ぶ。

「ためエなら出来るぞ！銀時！！！」

漸呀も叫ぶ。

だが、そこで仮面の男が動いた。銀時の腹に蹴りを入れて、屋上の外に突き飛ばした。

「…え？」「…」

なのはとフェイトとアリシアは目を見開いて驚いた。

「いくらお前が化物でも、この高さから落ちたら命はない」

銀時を見下ろしながら、仮面の男が言った。

「うあああああ！！！」

銀時はバインドで縛られた状態で、二十階のビルの高さから地面に向かって落下した。

「銀時イイイイ（銀さアアアアアアん）！！！」

なのはとフェイトとアリシアが涙目で銀時の名を叫んだ。
止まる事なく、銀時は落ちていく。途中、ザフィーラの姿が見えた
気がした。その直後に悲鳴が聞こえた。
銀時の意識はそこで消えた。

＊

銀時は意識を取り戻した。ゆっくりと瞼を開ける。視界がぼやけて
る。背中に固く冷たい感触がする。

目の前は真っ白だった。いや、黄色い部分もある。だんだん視界が
ハッキリしてきた。そして、真っ白いモノの正体がわかった。

正体はエリザベスだった。

「うおおおお!!」

ビックリした銀時は、慌てて起き上がった。

「エ…エリザベスか!? ビックリさせんじゃねーよコノヤロー!!」
エリザベスに向かって怒鳴る。

どうやら銀時は、エリザベスに助けられたようだ。

すると、シグナム達にやられた傷が痛み出した。それで思い出した。
屋上での出来事を。仮面の男達が現れ、シグナム達が消えた事を。

「あの野郎!」

銀時が立ち上がろうとした。

その時、自分はまだバインドで縛られてる事に気付いた。

「エリザベスを付近に待機させといて正解だったな」

背後から声が聞こえた。

後ろを見ると桂がいた。

「ヅラ! 何でこんな所に!？」

「ヅラじゃない桂だ。胸騒ぎがしたから、様子を見に来たんだ」
桂が言った。

そして鞘から刀を抜いて構えた。

「バインドを斬る。動くなよ」

桂は刀を振り下ろし、銀時を拘束してるバインドを斬った。

「一体何があった？」

刀を鞘におさめながら、桂が尋ねた。

「仮面野郎どもが現れやがった」

「何！？ヤツらが動くのは、闇の書が完成してからではなかったのか！？」

驚きながら桂が尋ねた。

その時、ビルの屋上で大爆発が起こった。

二人は屋上を見上げた。

「何だ！？」

「まさか闇の書が！？」

銀時は舌打ちした。

「銀さあ ああん！！」

自分と呼ぶ声が聞こえた。

銀時は声がした方を見た。新八、神楽、定春、お妙、九兵衛、東城、葵、咲がこちらに向かって走っていた。

「お前ら！」

「銀ちゃん！無事アルカ！？」

新八達は銀時達の前に来た。

「お前らどうしてここに？」

「プレシアさんに頼んで、連れてきてもらったのよ」

銀時の問いに、お妙が答えた。

「プレシアに？」

*

銀時達がいる場所から、少し離れたビルの屋上。
そこに仮面の男達がいた。

「デュランダルの準備は？」

「出来ている」

仮面の男の手に一枚のカードのような物が出た。

その直後、紫色のバインドが仮面の男達を拘束した。

「な…何！？」

仮面の男達は拘束を振りほどこうとする。

「捕まえたわよ」

二人の前に一人の魔導師が現れた。

「お…お前は！？」

魔導師を見て、仮面の男達は驚いた。

魔導師は、長い黒髪的女性で片手に杖を持ち、黒いマントを羽織っていた。

魔導師の名は、プレシア・テストロッサ。

「さあ。素顔を晒しなさい」

プレシアが杖を仮面の男達に向け、紫色の光を放った。

「うあああああ！！」

光を浴びた仮面の男達は叫んだ。

「変身魔法を解除させてもらっわ」

仮面の男達を睨みながら、プレシアは呟いた。

仮面の男達の変身魔法が解け、正体を現した。仮面が床に落ちる。

仮面の男の正体は、グラム提督の使い魔の、アリアとロッテだった。

「プレシア・テストロッサ！」

アリアとロッテは、バインドで拘束されたままプレシアを睨んだ。

「銀時の推理通りだったわね」

二人を見ながら、プレシアが言った。

「銀時！？やっぱりあの男…気付いて…！！」

ロッテは悔しそうに顔を歪めた。

「さて。話があるから、二人ともついてきてもらっわよ」

プレシアは、二人に冷たい視線を向けた。

*

バインドを破ったなのはとフェイトとアリシアと漸呀は、屋上で闇の書と対峙していた。

仮面の男達が、はやてを屋上に転送し、目の前でヴィータとザフィーラを闇の書に蒐集した。

それを見た、はやては雄叫びを上げ、直後に大爆発を起こした。

闇の書を持ち、はやての姿が変わり、今に至る。

「はやてちゃん！」

「はやて！」

二人は、はやての名を呼んだ。

「また、全てが終わってしまった。決して終わらせる事が出来ない悲しみ……」

闇の書は涙を流しながら言った。

闇の書は片手を上に掲げると、黒い球体を作り出した。

「デアボリック・エミッション」

闇の書の言葉の後に、黒い球体が大きくなっていく。

「空間攻撃！」

「闇に……染まれ……」

黒い球体はどんどん大きくなる。

なのははフェイトの前に出て、障壁を展開した。

*

地上にいる銀時達にも、黒い球体は迫っていた。

「いかん！逃げろ！！」

桂が叫んだ。

「逃げるってどこに！？」

パニックになりながら、新八が叫んだ。

九兵衛が近くのマンホールの蓋を斬った。斬った蓋を外した。

「この中に逃げ込め！」

マンホールの中を指差しながら、九兵衛が叫んだ。

「でかした九兵衛！！」

一人ずつマンホールの中に飛び込む。

が、

「俺が先だ！」

「ふざけんな！傷を負ってる俺が先だろーが！！」

マンホールの入口で、桂と銀時が喧嘩する。

「いや、こんな時にまで喧嘩すんな！！」

新八が怒鳴りながら、二人を無理矢理、中に引っ張った。

間一髪、黒い球体の攻撃を免れた。

数秒の後、黒い球体は消えた。銀時達は外に出た。外に出た銀時は、

闇の書がある屋上を見上げた。

「若。とりあえず今は、ここから離れましょう」

「ああ」

東城の言葉に、九兵衛は頷いた。

「銀さん！一旦、ここから離れましょう！」

新八は銀時に向かって叫んだ。

だが銀時は、ジッと屋上を見つめてる。

「銀さん？」

新八は首を傾げた。

「お前らは先に行け。俺は闇の書に会ってくる」

「えっ！？」

「銀ちゃん！本気アルカ！？」

新八と神楽が驚いた。

周りにいる桂達も驚いている。

「悪いな。シグナムに、はやての事頼まれちゃったからよ」

新八達に振り返りながら、銀時が言った。

「そんな…無茶ですよ、銀さん！そんな体で！」

傷ついた銀時の体を見ながら新八が叫んだ。

「ヅラ、コイツらの事は任せたぜ！」

銀時は走って、ビルの中に入った。

「銀さん!!」

新八は追い掛けようとした。

だが桂に肩を掴まれて、止められてしまう。

「桂さん!？」

「俺達には止められん。行かせてやれ」

険しい表情で桂が言った。

新八は歯を食いしばった。悔しくて拳を強く握った。

「…行こう、新八君。ここに居ては、彼も安心して戦えない」

九兵衛が言った。

九兵衛の言葉の後に、新八達は走ってビルから離れた。桂は一旦、

足を止めて銀時が入っていったビルの入口を見た。

「…ヅラじゃない、桂だ」

桂は再び前を向いて走り出した。

*

黒い球体から逃れたのはとフェイトは、ビルの陰に隠れていた。

「なのは、ゴメン。ありがとう。大丈夫？」

お礼を言いながら、フェイトはなのはの事を心配した。

「うん。大丈夫」

フェイトを安心させるように返事をした。

「あの子、広域攻撃型だね。避けるのは難しいかな。バルディッシ
ユ」

フェイトはバリアジャケットを変えた。レイジングハートをなのは
に渡す。

「……はやてちゃん」

闇の書を見ながら、なのはが呟いた。

「なのは！」

「フェイト！」

ユーノとアルフが二人の所にやってきた。

直後、突風が起こり、街を何かがスッポリと覆った。

「前と同じ、閉じ込める結界だ」

アルフがフェイト達に言った。

「やっぱり、私達を狙ってるんだ」

「今、クロノが解決法を探してる。それにプレシアさんも」

「母さんも？」

フェイトはユーノに振り返った。

「それまで、僕達で何とかするしかない」

「うん」

フェイト達が話し合う。

その時、闇の書の様子を見ていたなのはが声を上げた。

「あ…あれ、銀さん！？」

「えっ！？」

なのはの言葉を聞いたフェイト達は、驚きながら闇の書がいる屋上を見た。

確かに闇の書の後ろ、屋上の入口に銀時が立っている。

「銀時！！よかった…無事だったんだ！」

銀時の姿を確認したフェイトは、安堵と嬉しさで涙目になる。

「それにしても…どうしてあんな所に？」

ユーノが疑問に思った。

「まさか！一人で闇の書を止めるつもりじゃ…！」

アルフが声を大きくして言った。

確かに銀時ならありうる。

「みんな、行こう！」

フェイトがなのは達に言った。

「うん！」

なのは達は頷いた。

＊

時空管理局本局。

一室にプレシア、グレアム提督とアリアとロツテがいた。

「二人に指示を出していたのは、やはり貴方ね。グレアム提督」
目の前にいるグレアムを見つめながら、プレシアが言った。

「違う、プレシア！」

「私達の独断だ。父様には関係ない！」

ロツテとアリアが反論するが、

「貴女達は黙ってなさい」

大魔導師としてのプレツシャーを放ちながら、プレシアは二人を睨んだ。

睨まれた二人は、たじろいだ。

「ロツテ、アリア、いいんだよ。プレシア女史はもうあらかたの事は掴んでる」

グレアム提督が言った。

銀時から教えられたプレシアは、独自にグレアム提督について調べていたのだ。

「貴方は、闇の書の転生先を調べて見つけたのね。闇の書の在り処と現在の主、八神はやてを」

「…両親に死なれ、体を悪くしたあの子を見て、心は痛んだが……運命だとも思った。孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなる」

はやての映像を見ながら、グレアムは語った。

プレシアは冷たい表情を保ちながら、内心怒っていた。悲しむ人は少なくなる？数でしか人を理解出来ない最低な人間の考えだわ。

そんな事を思いながら、以前、自分がフェイトにした事を思い出した。

（…私も偉そうな事は言えないわね）

そう思いながら、プレシアはグレアムに向き直った。

「彼女の生活の援助をしていたのも貴方ね？」

「永遠の眠りにつく前くらい、せめて幸せにしてやりたかった……」

グレアムは目を閉じて、少し顔を下げた。

「……偽善だな」

「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて、次元の狭間にでも閉じ込める。そんなところかしら？」

「ああ。それなら闇の書の転生機能は働かない」

プレシアの問いに、グレアムは答えた。

答えを聞いたプレシアは顎に手を当てて考えた。

すると、ロッテ達と言う。

「これまでの闇の書の主だって、アルカンシエルで蒸発させたりしてんだ。それと何にも変わんない！」

「プレシアさん。私達を解放して。凍結がかけられるのは、暴走が始まる数分だけなんだ」

二人の言葉を聞いたプレシアは、顔を上げた。

「八神はやてが何をしたというの？彼女はまだ犯罪者ではないわ。」

そんな行為は違法だわ」

「そのせいで、そんな決まりのせいで悲劇が繰り返されてんだ！クライド君だって……クロノのお父さんだって……！」

プレシアの言葉に、ロッテは身を乗り出して声を荒げた。

「貴女達がやるうとしてる事は単なる復讐よ。八神はやてを、貴女達の復讐の犠牲者にはさせないわ！」

プレシアは怯まずロッテ達に言った。

ロッテは何も言い返せなかった。プレシアはグレアムに向き直る。

「それに貴方のやり方にも問題があるわ。凍結の解除はそう難しくはないはずよ。どこに隠しても、必ず力を嗅ぎつけた者が出て来て使おうとするわ」

かつて、自分がジュエルシードを求め、アルハザードを目指そうとした時のように。

話を聞いたグレアム提督は、目を閉じて考えた。

「それじゃあ。私はこれで」

プレシアは立ち上がって部屋を出ようとする。

「待ってくれ」

グレアム提督が呼び止めた。

プレシアは立ち止まって振り返った。グレアム提督は一枚のカード、待機状態の『デュランドル』を差し出した。

「氷結の杖『デュランドル』だ。どう使うかは、貴女に任せる」

プレシアはデュランドルを受け取った。

「いいえ。コレを使うのは私じゃないわ」

プレシアの言葉の後、扉が開かれた。

クロノが部屋に入ってきた。

「クロノ！」

グレアム提督とアリア、ロツテは驚いた。

「提督。話は全部聞かせてもらいました」

クロノはグレアムに言った後に、プレシアに顔を向けた。

「頼めるかしら、クロノ？」

「はい」

クロノは、プレシアから差し出されたデュランドルを受け取った。

*

ビルの屋上。

闇の書は、街を見渡していた。

その時、後ろからカツン、カツンと足音が聞こえた。闇の書は後ろを振り返った。そこには銀髪の男が立っていた。

「オイオイ。闇の書がこんな綺麗な姉ちゃんなんて、聞いてねーぜ」

銀髪の男、銀時が頭を掻きながら言った。

「お前……は……」

銀時を見ながら、闇の書は呟いた。

「俺か？俺ア坂田銀時。侍だ」

ニヤツと笑いながら銀時は答えた。

『その相棒……銀龍だ』

銀龍は姿を現してそう言った。

第三十四訓：騎士の魂を汚すな（後書き）

ナナフシ「もう三話投稿しますんで」

銀時「おい」

ナナフシ「それでは！」

第三十五訓：破壊からは何も生まれない（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「はいはい」

ナナフシ「それでは！」

フェイト「『リリカル銀魂〜魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀〜』始
まります」

第三十五訓：破壊からは何も生まれない

銀時は、屋上で闇の書と対峙していた。屋上を中心辺りに闇の書が立っている。

白く染まった長い髪、黒いバリアジャケットを身に纏い、背中には黒い翼を生やしている。

「さか…た…ぎん…とき…」

闇の書が銀時の名を呟いた。

「…貴方が銀時か」

「俺の事知ってんのか？」

銀時が尋ねた。

「はい。私は騎士達と心がリンクしてますから」

闇の書が答えた。

「…はやてとシグナム達はお前の中か？」

「はい」

銀時は顔を険しくした。

いざとなったら、闇の書を破壊するしかないと考えていたが、そういう訳にはいかなかった。

闇の書を見つめながら、銀時は尋ねた。

「お前の目的は何だ？」

「主の願いを叶える事です」

「はやての願い？」

銀時は目を細めた。

「はい。愛する守護騎士達を奪った者達と、この世界を破壊し、主に穏やかな永遠の眠りを…」

目を閉じ、胸に手を当てながら闇の書は答えた。

「世界の破壊だ？んな事はやてが望んでると思ってるのか？」

「…止まる事は出来ません。それに私が止まってしまうたら、『アレ』が私の中から出て、数多に存在する全ての世界を破壊する」

銀時を見つめながら闇の書が言った。

銀時は闇の書の話の中で、気になる言葉を見つけた。

「『アレ』？『アレ』って何だ？」

「貴方に教える必要はありません」

教える気はないらしい。

「銀時。どうか邪魔をしないでください。守護騎士達…特にシグナムは貴方を愛おしく思っていました。できれば貴方とは戦いたくない」

戦いたくはないが、破壊行為はするつもりらしい。
結局、戦う事になるのか。銀時はため息をついた。

正直、シグナム達から受けた傷がある、今の状態で戦うのは少しキツイ。それでも引くわけにはいかない。

「悪いな。俺にも譲れねーモンがある」

『うむ、そうだな』

銀時は腰に差してある木刀を抜いた。

銀龍は腰に差し、見守る様だ。

「そうですか……でも、その前に話があります」

「何だ？」

銀時が訪ねる。

「銀龍……久しぶりです」

「『は？』」

銀時と銀龍は思わず間抜けな声を上げた。

『な、何を言っているのだ？我とお前は初対面のハズ』

「いえ、会っています……忘れたのですか？」

闇の書は訪ねる。

『我は……我は……』

銀龍は苦しむ。

「あの時一緒に！」

「おい、銀龍には記憶がないんだ」

闇の書が何かを言おうとした時に銀時が言った。

「記憶が……ない？」

闇の書は驚いた。

「そつだ。俺と会う前の記憶がないんだよ」

銀時が説明をした。

「そうですか。では…残念ですが、主の願いを叶えるため…貴方達には消えてもらいます」

闇の書が、重いプレッシャーを放ちながら銀時を睨んだ。

両者は口を閉ざし、静寂が訪れた。

屋上に強い風が吹いた後、銀時と闇の書は動き出した。

*

フェイト達は、銀時と闇の書がいる屋上に向かっていった。

「あつ！もう戦いが始まつてるよ！！」

屋上を指差しながらアルフが言った。

「銀時（銀さん）！」

なのはとフェイトとアリシアが叫んだ。

「うおおおおお！！」

銀時は雄叫びを上げながら、闇の書に木刀の連撃を繰り出す。

闇の書は障壁を張って連撃を防ぐ。障壁で防ぎながら、闇の書は魔力で強化させた拳を放つ。

拳に反応した銀時は、木刀で防御する。そこから闇の書が、両拳のラッシュで一気に攻める。銀時は木刀で両拳を防ぎながら、少しずつ後ろに退がっていった。

（ちっ！シグナム達にやられた傷が痛みやがる！）

痛みに耐えながら、銀時は攻撃を防ぎ続ける。

すると突然、闇の書が目の前から消えた。一瞬驚いたが、気配と殺気を感じて、頭を下げて体勢を低くした。

直後、銀時の頭上を、背後に回った闇の書の横薙ぎの手刀が掠めた。
「ムッ！」

手刀をかわされ、闇の書が少し驚いた。

手刀をかわした銀時は、背後にいる闇の書目掛けて木刀を振るった。
闇の書は後ろに跳んで、木刀をかわした。

距離を開けて二人は動きを止めた。

（速えな。それに障壁も硬え）

銀時は額の汗と血を拭きながら思った。

闇の書はジッと銀時を見つめてる。

（あの手負いで、この強さ。もし万全の状態であつたら……）
戦つて初めて闇の書は、銀時の強さを知った。

（……………この男なら…銀時なら『アレ』を倒せるか……………？）
銀時を見つめながら、闇の書は考えた。

（いや…例え何者でも、『アレ』を倒す事はできない……………例え……
銀龍の持ち主でも……………）

闇の書は、表情を陰しくした。

その時、

「銀時（銀さん）！」

フェイトとなのはとアリシアの声が聞こえた。

銀時は、空に浮いてるフェイト達を見つけた。

「銀時！大丈夫！？」

屋上に着地しながらフェイトが尋ねた。

「あんま大丈夫じゃねーな」

肩で息をしながら、銀時が答えた。

なのは達も銀時の側に立つ。

「アンタが苦戦するなんて珍しいね」
と、アルフが言った。

「そういつ時もあんだよ」

銀時が答えた。

フェイト達はデバイスを構えた。

するとバルディッシュが、一般市民を見つけた、とフェイト達に告げた。

「よし。フェイト達は、銀さんと協力して闇の書を止めて、僕となのはが一般市民の保護に向かう」

と、ユーノが言った。

みんな頷いて答えた。

「行こうなのは！」

「うん！」

ユーノとなのはは、空を飛んだ。

「銀さん！フェイトちゃん！アリシアちゃん！アルフさん！すぐに戻ってきますから！」

なのはの言葉を聞いた銀時は、手を振って応えた。

なのは達は一般市民の保護に向かった。

「そんじゃ、もう一頑張りすつか」

両手で木刀を構える。

「いくよアリシア、アルフ、バルディッシュ」

「うん！」

「Yes sir」

「そうだね」

アルフとバルディッシュが、フェイトに応えた。

アリシアは雷麟を構える。

*

なのはとユーノは、結界内に取り残された一般市民の所へ向かっていた。

なのはとユーノは地上に降りて、辺りを見回した。すると、なのは

は二人の人影を見つけた。

「あの、すみませーん！危ないですから、そこでジッとしててくださいー！」

人影に向かって叫んだ。

二人の人影は足を止めて、振り返った。

「え？」

「今の声って……」

二人は、声の主を見た。

「なのは！？」

「なのはちゃん！？」

なのはを見て、二人は驚いた。

二人を見て、なのはも驚く。

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

人影は、アリサとすずかだった。

「なのはちゃん」

「ねえ、これってどうなってるの？」

アリサがなのはに聞く。

なのはは、どう説明したらいいか悩んでいる。隣にいるユーノも、困った顔をしている。

「あの……ごめん。今は説明できなんだ。すぐに安全な場所に運んでもらうから」

なのはの言葉の後、アリサとすずかの足下に魔法陣が展開された。その直後、二人は転移された。

「二人に見られちゃった……」

なのはは少し、沈んだ顔をした。

「なのは」

ユーノが声をかけた。

「二人は、なのはの友達なんだから、きっと大丈夫だよ」

優しく話し掛けて、なのはを励ました。

「ユーノ君……うん。ありがとう」

なのはは、微笑みながらユーノにお礼を言った。
その時、

「なのはちゃん！」

なのはを呼ぶ声が聞こえた。

なのは達は声がした方を見た。新八達がこちらへ向かって走っていた。

「新八さん！神楽ちゃん！」

「みんなどうしてここに！？」

新八達を見て、なのはとユーノは驚いた。

「銀さんや、なのはちゃん達の事が心配で来たんだよ」

新八が答えた。

すると、遠くから爆発音が聞こえた。音は銀時達がいるビルから聞こえた。

「銀さんと闇の書が戦ってるんだわ」

ビルの方を見ながら、お妙が言った。

「そういえば、フェイトとアルフの姿がないが？」

周りを見ながら、九兵衛が言った。

「フェイトとアルフは、銀さんと一緒に闇の書と戦っている」

「フェイトちゃんとアルフさんも！？」

新八達は驚いた。

「皆さん。私も銀さん達を手伝いに行きます！だから皆さんは、転移したアリサちゃんとすずかちゃんをお願いします！！」

なのはは宙に浮いた。

「ユーノ君！新八さん達を、アリサちゃん達の所に案内して！」

「わかった」

なのはの言葉に、ユーノは頷いた。

「なのは！無茶したらダメアルヨ！」

「高町殿！銀時達を頼む！」

「はい！」

神楽達の言葉に応え、なのはは銀時達が戦っているビルに向かって

飛んでいった。

「ではユーノ君。なのはの友人の所まで案内してくれ」
「はい」

九兵衛に言われ、ユーノは案内した。

*

「うおおおお!!」

雄叫びを上げながら、銀時は木刀を振り下ろした。

闇の書は、障壁を張って木刀を防いだ。

「アークセイバー!!」

フェイトは、バルディッシュを横薙ぎに振って、金色の刃を闇の書目掛けて飛ばした。

闇の書は、金色の刃も障壁で防いだ。防がれた金色の刃は消えた。

闇の書は、魔力を纏った脚で銀時の腹を蹴った。銀時は腹を押さえながら後ずさった。

「はあっ!!」

アルフが闇の書の両手を、バインドで止めた。

銀時とフェイトが同時に斬りかかる。闇の書は障壁で防御する。

「碎け」

闇の書が呟いた。

直後、両手のバインドが碎けた。

「銀時!下がって!!」

闇の書から距離を取り、フェイトはバルディッシュを構える。

アリシアは雷麟を構える。

銀時はフェイトの後ろに下がった。

「プラズマ・スマッシュャー!ファイア!!」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる。

「ハア!!」

雷麟からは金色の雷の斬撃が放たれる。

「盾」

闇の書は、巨大な障壁を張った。障壁とプラズマ・スマツシャー、斬撃が、火花を散らせて激しくぶつかる。嵐のような風が吹き荒れる。

やがて金色の閃光が消えた。闇の書はかすり傷一つ無い。

「く……！」フェイトとアリシアは悔しそうに顔を歪めた。

「刃を撃て……血に染めよ」

闇の書を中心に、周りに複数の赤い刃が現れた。

「穿て……ブラッディ・ダガー」

赤い刃が、銀時、フェイト、アリシア、アルフに向かって放たれた。フェイトとアリシアとアルフは障壁を張って、何とか赤い刃を防ぐ。銀時は木刀を振るって赤い刃を弾く。

だが、やはり傷ついた体では全ての赤い刃は防げず、左肩、左足に赤い刃が刺さる。

「ぐ……！」

銀時は刺さった赤い刃を抜く。

「銀時！大丈夫！？」

「「銀時……！」」

フェイトとアリシアとアルフが銀時に駆け寄る。

「なアに。心配いらねーよ……」

笑みを浮かべながら、フェイト達に答えた。

闇の書が手を突き出し、攻撃をしようとした時、

「デイベイン・バスター……！」

桜色の閃光が、闇の書に向かって放たれた。

闇の書は、デイベイン・バスターを障壁で防いだ。

屋上の上空に、なのはがいた。

「なのは……！」

フェイトが声を上げた。

「遅くなってゴメン」

なのはは屋上に降り立った。

「闇の書さん！もうやめてください！」

闇の書に向かって、なのはが叫ぶ。

「世界を破壊して、それではやてちゃんが喜ぶと思ってるんですか！？」

「主は、自分の愛する者達を奪った世界が…悪い夢であってほしいと願った。私は主の願いを叶える道具。だから私は、主の願いを叶える」

闇の書は、破壊をやめようとはしない。

「闇の書さん！」

なのはが叫ぶ。

すると、銀時が前に出た。

「銀さん…」

「確かに…大切なモンを失った時はそう思うさ。だがな…どんなに辛くて悲しい事でも、その事を忘れようとしちゃいけないんだよ」

銀時も譲夷戦争で多くの大切な仲間を失った。

いつそ忘れてしまった方が楽になれる。だが銀時は忘れない。

失ってしまった大切なモノを、忘れるような事だけは絶対にしない。前に出て、闇の書と一対一で対峙する。

「闇の書。テーマは俺が止める」

銀時は、出来るだけ呼吸を整える。目の前にいる闇の書を、鋭い眼で睨む。

その眼を見て、闇の書は寒気を感じた。

（寒気…？私が？）

闇の書は表情を陰しくした。

眼だけでなく、明らかに銀時の雰囲気が変わっている。そう、アレは獲物を…魂を狩る獣の姿だ。

それだけではない……魂を狩る獣以外の雰囲気が伝わってくる……そう龍だ。

銀時からその二つの雰囲気を感じた。

銀時は、右手に木刀を持ちながら走り出した。

（速い！！？）

闇の書は、驚いた。

銀時の体は、戦いで傷ついているにも関わらず、その動きは先ほどよりも速くなっていた。

銀時は素早く木刀を横薙ぎに振った。

闇の書は障壁を張って防御する。

すると目の前の銀時が突然、視界から消えた。

「えっ！？」

闇の書だけでなく、フェイト達も驚いた。

次の瞬間、闇の書の背中に衝撃が走った。

「あぐうー！！」

背中を攻撃された闇の書は、振り向いて後ろを見た。

そこには、銀時がいた。

（馬鹿な！？いつの間に背後に！？）

闇の書は驚愕した。後ろに下がって、銀時から離れた。

次の攻撃が来るかと思われたが、銀時は床に膝をついた。息が荒くなり、傷口から血が出る。

「銀時！」

「銀さん！」

フェイトとなのはが叫んだ。

「…どうやら限界のようですね」

闇の書は、右手を前に掲げた。

「苦しいでしょう？今、楽にしてあげます」

哀れむような目で銀時を見つめる。

「咎人達に…滅びの光を」

闇の書の右手の前に、桜色の魔力が集束されていく。

「あれって…まさか…！？」

フェイトは驚愕の表情を浮かべる。

「スターライト・ブレイカー！？」

なのはも信じられないと言った顔をする。

「なのはは一度、闇の書に蒐集されてる。その時に魔法をコピーしたんだ！」

「ってマズイよ！いくら銀時でも、あんな状態でくらったら……！」

アルフが焦る。

銀時は殆ど動けない状態だ。

「星よ集え…全てを撃ち抜く光となれ」

魔力がどんどん溜まっていく。

「銀時！！」

「銀さん！！」

フェイト達が銀時を助けようと動く。

だが突如、床から触手が出現し、フェイト達の体に縛り付いて動きを止める。

「く…この…！！」

フェイト達は必死に、触手を振りほどこうとする。

「貫け…閃光」

だが、闇の書は魔力の集束を終えてしまう。

「スターライト・ブレイカー」

闇の書は、銀時に向かって巨大な桜色の閃光を放った。

閃光の光に、フェイト達は思わず目を閉じた。銀時は成す術もなく、桜色の閃光に飲み込まれた。

やがて閃光がおさまり、フェイト達は目を開けた。辺りに煙が立ち込めてる。

闇の書はジッと煙を見つめてる。

「銀時（銀さん）…！」

煙のせいで銀時の姿が確認できない。

煙が晴れてきた。

「なっ…！！？」

闇の書は、目を見開いて驚愕した。目の前に、銀時が立っているのだ。

「銀時!!」

「銀さん!!」

「銀時!!」

「銀時!!」

四人が銀時の名を叫んだ。なのはとフェイトとアリシアは今にも泣きそうな顔をしている。

「アレをまとめてに受けて…生きて…立っている…!？」

闇の書は額から汗を流した。

銀時は、頭や体中血だらけになり、服もボロボロだった。それでも右手にある木刀は、放さないように固く握っていた。

「何故…？どうして…？そんなにボロボロなのに……」

闇の書は、ボロボロの銀時を見つめる。

「何故…貴方は倒れない……」

闇の書の目から涙が流れた。

「……闇の書……」

銀時が口を開いた。

闇の書は、ビクツと体を震わせた。

銀時は、顔を上げて闇の書を見る。

「なんで…泣いてんだよ……？」

涙を流す闇の書を見ながら言った。

「こ…この涙は……主の涙だ……」

動揺しながら、闇の書は答えた。

銀時は、左足を引きずりながら歩き出した。ゆっくりと、ゆっくりと闇の書に近づいて行く。

闇の書は動かなかった。

いや、動けなかった。何故だかわからないが、体が言う事を聞かなかった。

銀時は闇の書に近寄り、顔に手を伸ばした。

闇の書の目から流れる涙を、手で拭いた。

「たくっ…泣くくらいなら……最初から…こんな事すんじゃないよ

……」

笑みを浮かべながら銀時が言った。

「銀……時……」

「ああ……俺が倒れない理由か……？」

思い出したように言った。

「俺は……俺の武士道、貫いて……俺の護りてエモンを護る……」

涙目の闇の書を見つめながら、銀時は語る。

「だから……お前が、どんなにスゲー魔法を撃っても……俺は倒れねエ……」

銀時の体がフラつく。

「……だからよオ……お前が……本当にはやてを……大事に想ってんなら……」

意識が薄れていく。

視界がぼやける。

「……はやての事……諦めんじゃ……ねエ……」

そこで銀時の意識は途絶えた。

倒れそうになる銀時を、闇の書が抱いた。

「銀時……もし、万全の状態であつたら……私に勝っていたかもしれない……」

ギュッと強く銀時の体を抱く。

闇の書は再び涙を流す。

「銀時……ダメなんだ……私は……止まらないんだ……」

今流れている涙は、はやてのものか。それとも闇の書のものか。それは誰にもわからなかった。

「……貴方は強い……よく、ここまで戦った……」

闇の書は、足下に黒い魔法陣を展開した。

「銀時……」

「闇の書！アンタ、銀時に何する気だい！？」

フェイトとアルフが叫んだ。

「闇の書さん……」

なのはも叫ぶ。

「強き魂を持った侍よ。もう休むがいい」

魔法陣の光が強くなる。

「銀時。私の中で」

銀時の体が薄れていく。

「眠れ」

銀時の姿は消えた。

「「銀時イイイイ!!」」

「銀さアアアアん!!」

フェイトとなのはとアリシアは叫んだ。

アルフも呆然となる。

「銀時よ。私の中で…安らかな…永遠の眠りを」

第三十五訓：破壊からは何も生まれない（後書き）

ナナフシ「今回はここまでで！それでは！」

第三十六訓：思い出は逃げる為にあるのではない（前書き）

ナナフシ「今回も連続投稿します」

銀時「おい」

ナナフシ「ままま、それでは！」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

第三十六訓：思い出は逃げる為にあるのではない

目の前は真つ暗だった。

銀時は重い瞼を開けた。

目の前に沢山の子供達がいて、木の机の前で正座して座っていた。手には教科書らしき物がある。

（寺子屋か……？）

そう思いながら銀時は、視線を前に向けた。

そこには、子供達に勉強を教えている先生がいた。

その先生を見て、銀時は驚愕した。

「松陽……先生……」

「松陽……だな……」

信じられなかった。

子供達の前に立っているのは、死んだはずの恩師・吉田松陽先生だった。

「ん？どうしました銀時、銀龍？」

松陽先生が起きた銀時に気付いて、声をかけた。

「どーせまた寝てたんだろ」

頬杖をついた男の子が言った。

銀時は男の子を見た。短い黒髪の男の子。

小さい頃の高杉晋助だ。

「高杉！？」

少年姿の高杉を見て、銀時は驚いた。

「あ？何デケー声出してんだよ。うるせーな」

耳を押さえながら、高杉が言った。

「銀時、静かにしろ。今は休憩時間じゃないぞ。それに銀龍まで寝ていたのか？珍しい」

長い黒髪を後ろに束ねた男の子が言った。

小さい頃の桂小太郎だ。

「ッラ!？」

「ッラじゃない桂だ!そのあだ名はやめろ!!」

桂が怒鳴った。

すると、松陽先生が、手をパンッパンッと叩いた。みんなが松陽先生に注目する。

「はいはい。喧嘩は終わりですよ」

松陽先生の言葉で、みんな教本を手にした。

桂は真面目に教本を見て、高杉は頬杖をつきながらジッと松陽先生を見ている。

銀時は周りを見回した。全員の顔に見覚えがある。

一緒に松陽先生の元で学んだ仲間たちだ。

これは、松陽先生に拾われ、先生の学舎で学んでいた時代………つまり、これは過去。

(どうなつてんだ?俺はタイムスリップでもしたのか!?)

銀時は少しパニックになった。

ふと銀時は思った。そういえば松陽先生も他のみんなも、大人の姿の俺を見ても全然驚いてない。何の反応もない。何故だ?

そう思った銀時は、自分の体を見た。手も足も、体全体が小さい。

桂達と同じ子供の姿になっていた。

(ま…マジでか!?!…あれ…?…ってことは……)

銀時は恐る恐る、自分のアソコを覗いた。

見た途端、銀時は青ざめた。銀時のアソコは毛が一本も生えていなかった。

「俺の子。コがアアア!」

ショックを受けた銀時は、ありったけの声で叫んだ。

「うるっせーよ銀時!!」

高杉がキレた。

*

銀龍と松陽が二人つきりになる。

『松陽……』

「何ですか？」

銀龍の問いに松陽は答える。

『そのだな……元氣か？』

「何言ってるんですか？いつも一緒に話をしているでしょ？」

『そ、そうだな』

銀龍は戸惑ってしまった。

そのまま銀龍と松陽は話をした。

*

授業が終わった後、銀時は学舎を出て、少し離れた所に一人で座った。

一体どうなっているのだろう。自分は確か、闇の書と戦って、途中で意識を失い……気付いたら此処にいた。

ということは、これは闇の書の仕業か？此処は闇の書が創った世界。

「どうしました銀時」

松陽先生がやってきた。

「松陽先生……」

顔を上げて松陽先生を見上げた。

見間違えるはずがない、自分の恩師。

「今日の銀時は、少し様子がおかしいですねえ。居眠りはいつも通りですが……銀龍も変ですよ？」

微笑みながら松陽先生が言う。

小さい頃、何度も見た松陽先生の笑顔。松陽先生の顔を見て、銀時は懐かしかった。

松陽先生だけではない。高杉も桂も他のみんなも昔のまんまだ。高

杉と喧嘩したり、その様子を坂本辰馬が笑って見守り、桂が止めに入るが、最終的に三人の喧嘩になる。騒がしかったあの頃のままだ。「何かあったのですか？」

松陽先生が尋ねた。

銀時はどう答えるか、しばし考えた。

「松陽先生……」

意を決して言う。

「此処は……この世界は夢か何かですか？」

『そうなんだろう？』

松陽先生に尋ねた。

「はい。そうです」

表情を崩さず、微笑みながら松陽先生は答えた。

「此処は、闇の書が銀時と銀龍の記憶を基に創った世界です」

少し強い風が吹いた。

学舎の外では、子供達が遊んでいる。桂と高杉が何やら睨み合っている。

「銀時。この世界にいれば、私や仲間達とずっと一緒にいられますよ」

松陽先生が言った。

失ってしまった大切な恩師、大事な仲間達。この世界にいれば、譲夷戦争もなく、松陽先生や仲間達とずっと一緒にいられる。

一瞬心が迷った。

だが、銀時は首を横に振った。

「悪い……松陽先生……」

前を直つ直ぐ見つめながら、銀時は松陽先生に謝った。

「俺……向こうに大事なモンが出来ちゃった」

そう、俺には今、掛け替えのない大切なモノがある。

過去の思い出にしがみついて、その大切なモノを捨てる訳にはいかない。自分の武士道を捨てる訳にはいかない。

そして、この世界は夢。夢での幸せは本当の幸せではない。

「だから俺は、向こうに戻らなきゃいけない」

ハッキリと自分の意志を、松陽先生に伝えた。

「そうですか」

松陽先生は微笑みを崩さない。

すると答を聞いた松陽先生は、銀時の頭に手を乗せた。

「よく、その言葉を言いました」

「え？」

銀時は松陽先生を見た。

松陽先生は、満足そうな笑みを浮かべていた。

「自分の幸せのために、大切なモノを捨てるように教えた覚えは、ありませんからね」

そう言って、松陽先生は銀時の頭から手を離れた。

「もし、この世界にいたいなんて答えたら、私は貴方を斬っていました」

「ええっ!!?」

銀時は思わず体が震えた。

「ふふ。冗談ですよ」

笑いながら松陽先生は言った。

冗談に聞こえねーよ、と銀時は小声で呟いた。

すると、銀時達の前に光が現れた。驚いた顔で銀時は光を見つめた。

「この光の中に入れば、この世界から出られます」

光を見ながら、松陽先生が言った。

銀時は立ち上がって、光に近づいた。

「銀時」

松陽先生が銀時を呼び止めた。

銀時は足を止めて振り返った。

「貴方が本当に戦うべき敵は闇の書ではなく、闇の書の中にある『

真の闇』です」

「闇の書の中の『真の闇』?」

銀時は考えた。

桂が闇の書から聞いた、心臓の鼓動音。そしてユーノが見つけた『闇の書は魔導師の技術の研究のための物ではない』という言葉。それと関係があるのか？

「『真の闇』の力は闇の書を上回ります。それでも貴方は行くのですか？」

銀時の覚悟を確かめるように、松陽先生は尋ねた。

銀時は松陽先生から目をそらさず、真っ直ぐに見つめた。

「相手が誰だろうと、俺は俺の大事なモンを護る」

松陽先生は、黙って銀時の答を聞く。

「それが俺の武士道だ」

眼に強い決意と信念を宿しながら、銀時は答を言った。

「良い眼ですね」

松陽先生は、再び満足そうな笑みを浮かべた。

「行きなさい銀時。貴方が信じる道を」

「はい」

松陽先生に応え、銀時は前を向いて歩き出した。

後ろを振り返らず、前に進む。

松陽先生……またアンタに会えて……嬉しかったぜ

心の中で恩師に別れを告げ、銀時は決意を胸に光の中へと入っていった。

「銀龍……銀時の事……頼みますよ」

松陽はそれだけを呟いた。

*

光から出た銀時は、真っ暗闇にいた。すると闇の書が姿を現した。

「銀時」

闇の書は、少し驚いた顔をしている。

「よオ。また会ったな」

「銀時…何故…夢の世界から抜け出した？あそこにいれば、何も失わず、穏やかで安らかな夢を見れたのに……」

闇の書は、わからないと言った顔をする。

「簡単な事だ。夢や思い出は、逃げ込む場所じゃねーからだ。まっ、俺は元から逃げるつもりはねーけどな」

『そうだ。我等は逃げるつもりなどさらさらない』

思い出は大事にすべきモノだが、決して逃げ込むための場所じゃない。

闇の書はどうするか考えている。

「闇の書。はやてを助ける方法は、本当にねーのか？」

銀時が尋ねた。

闇の書はどう答えるか迷っている。

「もしはやてを助ける方法があるなら、はやてを助けやがれ」

「…だが…私がこの行為をやめてしまったら……」

闇の書は口ごもった。

主の事は助けない。死なせたくない。

だが、主を助けたら『アレ』が外に出てしまうかもしれない。『アレ』が外に出たら、全ての世界が破壊されてしまう。そうになったら主も死んでしまう。

銀龍も覚えていない。

それなら、苦しんで死ぬよりも、安らかな永遠の眠りにつけた方が……。

「闇の書」

銀時が呼んだ。

「お前の中に何がいるのかは知らねエ。けど、もしソイツが外に出たら、俺と銀龍がソイツを止めてやる」

「だが…」

闇の書は戸惑った。

「ソイツのせいでお前やはやてが苦しむなら…涙を流すなら、俺がソイツをブツた斬ってやる」

銀時が力強く言った。

「銀時…」

「女に涙は似合わねーからな。笑ったお前の顔も見てみてーし」

『うむ、何故かそのセリフ……言った覚えがあるような……』

「……！！」

銀時の言葉に、闇の書は頬を赤くした。

笑った私の顔が見たい？ そんな事を言われるとは…人からそんな事を言われたのは初めてだ。

銀龍は何も覚えていないのだろうか？ 自分に言った言葉を……。

闇の書は、何とか気持ちを切り替えて銀時を見た。

この男なら、銀時なら何とかしてくれるかもしれない。

闇の書は決意した。

「…わかった。これから主の所へゆく」

「ああ。頼むぜ」

二人は、はやての所へ向かった。

*

はやても真つ暗闇の中にいた。

「ん…」

はやては重い瞼を開けた。周りは暗く、目の前には闇の書と銀時がいた。

「銀八先生！？」

車椅子に乗ってるはやては、銀時を見て身を乗り出した。

「銀八先生？」

銀時を見ながら、闇の書が呟いた。

「ああ、それは本名じゃねーんだ。本名は銀時。坂田銀時だ。なん

なら銀ちゃんって呼んでもいいぜ？」

はやてに本名を教えた。

「それじゃあ銀ちゃんって呼ぶわ」

『我も自己紹介をしておこう。銀龍だ。我も好きに呼んでくれ』

銀龍ははやてにそう言った。

「刀が喋つとる!？」

やつぱりはやても驚いた。

「凄いな。初めて見たわ。喋る刀なんて。それじゃ……龍ちゃん

や!銀ちゃんじゃ被るからな」

すると、はやては周りを見渡した。

「銀ちゃん、龍ちゃん、ここはどこなんや?それにその子は?」

「私は闇の書です。そして、ここは私の中です」

闇の書がはやてに答えた。

「えっ?あなたが闇の書!？」

はやては驚いた。

それから闇の書は、はやてに今までの事を全て話した。はやては真剣に闇の書の話聞いた。

話を聞き終えたはやては頷いた。

「わかった。ほんなら名前をあげる。闇の書なんて名前は、貴女に

は似合わへん。私は管理者や。私にはそれが出来る」

「主……」

はやて達の足下に白い魔法陣が展開される。

*

新八達は、アリサとすがと一緒に戦いの様子を見ていた。

なのは達は、海上で闇の書と戦っている。

「見てる事しか出来ないなんて……」

新八は悔しくて、歯を食いしばって拳を強く握った。

*

なのは、フェイト、アルフ、は空中で闇の書と対峙していた。何発か魔法攻撃を撃ったが、闇の書には通用しない。すると、突然闇の書の動きが鈍くなった。

その時、

（外の方！管理局の方！）

なのは達は念話を受けた。

（そこにいる子の保護者、八神はやてです！）

「はやてちゃん！？」

「「はやて！？」」

念話を受けた三人は驚いた。

（えっ！？なのはちゃんとフェイトちゃんとアリシアちゃん！？）
はやても驚いている。

（うん！なのはだよ）

（いろいろあつて、闇の書と戦ってるの）

二人ははやてに返事をした。

はやての声を聞いて、二人は少し安心した。

（ゴメンなのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん。何とかその子止めてあげてくれる？）

「え？」

（魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけど、その子が走つてると管理者権限が使えへん。今そっちに出てるのは、自動行動の防御プログラムだけやから。管理者権限が使えれば、銀ちゃんも外に出せる）

はやてがなのは達に説明した。

「わかった。魔力ダメージを与えればいいんだね」

「やろう、フェイトちゃん、アリシアちゃん！」

「「うん！」」

三人は、闇の書に向けてデバイスと雷麟を構えた。

デバイスの先に魔力を溜める。
雷麟の刀身に魔力を溜める。

*

闇の書の中。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る」
はやては両手を闇の書の顔に添える。

「強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール。リインフォース」
闇の書に新たな名を贈り、魔法陣は強く輝いた。

「スターライト・ブレイカー！！！！」

「プラズマ・スマッシュャー！！！！」

「ハア！！！！」

桜色の閃光と金色の閃光と金色の斬撃が同時に放たれた。
二つの閃光は闇の書を飲み込んだ。

「新名称『リインフォース』認識。管理者権限の使用が可能になります」

「うん」

「ですが、防御プログラムは止まりません」

「まあ何とかしよ」

はやての前に一冊の本『リインフォース』が現れた。

「行こか。リインフォース」

はやてはリインフォースを抱いた。

「はい。我が主」

はやては光に包まれた。

*

外にいるなのは達に、エイミィからの通信が入る。

「みんな気をつけて！闇の書の反応、まだ消えてないよ！」

海に黒い球体が現れた。闇の書の防御プログラムだ。

すると、なのは達のすぐ近くに白い光が現れた。

「おいで…私の騎士達…」

白い光を囲むように、守護騎士達が現れた。

「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

シグナム。

「主在る限り、我等の魂尽きる事無し」

シャル。

「この身に命在る限り、我等は御身のもとに在る」

ザフィーラ。

「我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に」

ヴィータ。

はやてによって、守護騎士達が復活した。

「シグナム！」

「ヴィータちゃん！」

シグナム達を見て、フェイトとなのはは名前を呼んだ。

光の中には、はやてとリインフォースがいた。

「リインフォース。私の杖と甲冑を」

「はい」

はやては黒いバリアジャケットを見につけ、杖を手にした。

直後、光は消えて、中からはやてが姿を現した。

「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風リインフォース。セーットアップ！！」

髪の色が変わり、騎士甲冑をイメージしたようなバリアジャケットを身に纏い、背中には翼のようなものが出た。

*

「あつ！あれシグナムさん達だ！」

様子を見守っていた新八が叫んだ。

「じゃあ、あの真ん中にいるのが、はやてアルカ？」

「うむ。間違いない、八神殿だ！どうやら救出できたみたいだ！」
神楽の言葉に、桂が答えた。

「よかったわ」

「本当だね」

「うん」

お妙と咲と葵はホッと一安心した。

「それじゃあ、僕もなのは達の所に行きます」

「うん。気をつけてねユーノ君！」

ユーノはなのは達の所へ向かった。

「あの…ちよつといいか？」

九兵衛が手を挙げながら言った。

みんなの注目が九兵衛に集まる。

「銀時の姿がないが…」

「…あれ……？」

さつきまで喜びで上がっていたテンションが一気に下がった。

そういえば、銀時の姿が見当たらない。

なのはちゃん達から念話を受けたユーノ君の話では、銀さんは闇の書に吸収されてしまったらしい。

「まさか…銀さん……なのはちゃん達の攻撃で、闇の書と一緒に吹っ飛ばされちゃったのかしら…」

心配そうな顔で、お妙が言った。

新八達はイヤな汗を流した。

「あの…皆さん？」

すずかが恐る恐る声をかけた。
が、誰も反応しなかった。

銀時は何処へ？

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

神楽「神楽アル！よろしくネ！」

銀八「それじゃ、行くか」

神楽「まずはペンネーム『ヒヨウガ』さんからの質問ネ

『話は変わりますが質問ですが

なのははユーノの事をどう思ってるのでしょうか？

次にアリシアは銀時の事が好きなのでしょうか？』まずはなのは、
どうアルカ？」

なのは「友達だと思っているよ」

銀八「だそうだ。二つ目だが」

アリシア「私？銀時の事……」

しばらく黙り込むアリシア……そして。

アリシア「そ…それは……ネタバレになるからちょっと／＼」

顔を赤くしながら答える。

銀八「怪しいな。と言う訳で『ヒョウガ』さん。廊下に立ってなさい」

神楽「次で最後アル。ペンネーム『坂井ゆら』さんからの質問ネ

『なぜ銀さん好きの女の子は皆

銀さんがモテると

その好きになった女の子ではなく

銀さんを攻撃するのですか？』銀ちゃん……女垂らしアル」

銀八「まったくだな。これにはナナフシが答える」

ナナフシ「多分ですね。嫉妬を銀さんにぶつけちゃうんですよ。」「私を見て」的な感じで」

銀八「だそうだ。と言う訳で『坂井ゆら』さん。女の嫉妬は恐ろしいものです」

神楽「以上アル」

銀八「それではまた」

第三十六訓：思い出は逃げる為にあるのではない（後書き）

ナナフシ「連続投稿しますので
銀時「じゃ」

第三十七訓：闇が目覚める（前書き）

ナナフシ「なんと！闇が目覚めてしまいます！」

銀時「リリカル銀魂ではよくあるパターンだな」

ナナフシ「うるさいですね。ちゃんと、オリジナルの奴なので。赤夜叉さんの『ゾーマ』ではありませんよ。だから、戦いもオリジナルになります。それでは」

銀時「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ！」

第三十七訓：闇が目覚める

「はやて…」

ヴィータは目に涙を浮かべている。

はやては優しく微笑んだ。

「すみません」

「はやてちゃん……あの……ごめんなさい」

シグナムとシャルが、はやてに謝った。

はやては首を横に振った。

「ええよ。みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。そやけど細かい事は後や」

はやては嬉しそうに微笑んだ。

「おかえり。みんな」

「う……うああああ！！」

はやての温かい言葉を聞いた後、ヴィータが泣きながら抱き付いた。

「はやて！はやて！はやてええええ！！」

涙を流しながら、ヴィータははやての名前を叫んだ。

はやては優しくヴィータを抱いて、頭を撫でた。

そこへ、なのはとフェイトがやってきた。

「なのはちゃんとフェイトちゃんもゴメンな。ウチの子達がいる迷惑掛けてもうて」

「ううん」

「平気」

なのはとフェイトは笑顔で答えた。

「主、申し訳ありません」

「ん？」

いきなりリインフォースが、はやてに謝った。

「銀時を少し離れた所に出してしまいました」

「あつ！そっいえば銀ちゃんがおらん！！」

慌ててはやては辺りを見回した。

「どこに出したんですか？」

なのはがリインフォースに尋ねた。

「上です」

「上？」

言われて全員が、顔を上に向けた。

すると上から銀時が落ちてきて、

「んがつ！！」

シグナムにぶつかった。

左手で顔を押さえながら、右手で銀時を抱えた。シグナムの腕の中に、体中傷ついた銀時がいた。

「銀時！？」

傷ついた銀時の姿を見て、シグナムは驚いた。

「どうして、こんな傷だらけに……！？」

「主を救うために、私と戦って傷ついたのです」

リインフォースがシグナムに教えた。

シグナムは思い出した。自分が消える間際に、銀時に言った言葉を。

主はやてを頼む

銀時は私の頼みを護るために、主はやてを護るために、こんなに傷つくまで戦ったのか。

私達から受けた傷も、浅くはなかったはず。

シグナムは銀時を強く抱いた。

「……ありがとう、銀時……」

涙を流しながら、銀時に礼を言った。

「……銀時」

ヴィータは銀時を見つめた。

シグナムとの約束を護るために、こんなにボロボロになるまで戦っ

たのかよ。

シャマルとザフィーラも銀時を見つめた。

「シャマル。銀時の治療を頼む」

「はい」

シャマルは頷いて答えた。

「クラールヴィント、本領発揮よ。静かなる風よ。癒しの恵を運んで」

シャマルの足下に、緑色の魔法陣が展開された。

緑色の花びらが風に舞う。銀時、それにフェイトとなのはの傷を癒した。

「『湖の騎士』シャマルと『風のリング』クラールヴィント。癒しと補助が本領です」

「凄いです！」

「ありがとうございます、シャマルさん！」

二人は傷が癒えて回復した。

銀時も傷は癒えたが、まだ目を覚まさない。

「銀さんの傷も癒したけど、目を覚ますにはもう少し時間がかかるわ」

「うむ。充分だ」

シグナムは頷いた。

そこへクロノがやってきた。

「すまないが。水を差してしまうんだが、時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。時間がないので簡潔に説明する」

クロノは視線を黒い球体に向けた。

「あその黒い淀み。闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在二つある」

クロノは待機状態のデュランダルを取り出した。

「まず一つは、極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ、軌道上に待機してあるアースラの魔導砲『アルカンシエル』で消滅させる」

クロノやアースラの皆では他に案が浮かばなかった。

「これ以外に他にいい手はないか？」

クロノが他に意見を求めた。

シャマルが手を挙げた。

「えーと…最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させてもコアがある限り、再生機能は止まらん」

シャマルとシグナムが渋い顔で言った。

「アルカンシエルも絶対ダメ！こんな所でアルカンシエル撃ったら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

ヴィータがアルカンシエルに反対する。

「そ…そんなに凄いの？」

なのはがユーノに尋ねた。

「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲。っていうと大体わかる？」

ユーノが説明した。

「あの、私もそれ反対！」

「同じく！絶対反対！！」

アルカンシエルの説明を聞いた、なのはとフェイトも反対した。確かにそんなものを撃ったら、はやての家どころか街まで消滅してしまう。

「僕も艦長も使いたくないよ。でもあれの暴走が本格的に始まったら被害はそれより、遥に大きくなる」

「はい、みんな！あと十五分しかないよ」

エイミイが通信で伝えた。

「何かないか？」

守護騎士達に尋ねた。

「すまないが、無い。あまり役に立てそうも無い」

悔しそうにシグナムが言った。

「暴走に立ち会った経験が、我等には殆どないのだ」

と、ザフィーラが言った。

「ああ！なんかゴチャゴチャ鬱陶しいなあ！みんなでズバツとぶっ飛ばしちゃうわけにはいかないの？」

焦れたアルフがそんな事を言った。

「ア…アルフ。そんな単純な話じゃ…」

ユーノが言った。

フェイトは考えた。

シグナムも考えた。

こんな時、銀時なら何て言うだろう。

そう思いながら、シグナムは背中に背負った銀時を見た。フェイトも、シグナムの背中で眠ってる銀時を見た。

銀時なら、きっと誰も思いつかないような事を考える。

——要は此処じゃなければ撃てんじゃね？——

という言葉が二人の頭に思い浮かんだ。

その瞬間、

「あっ！！」

二人は思いついた。

「クロノ。アルカンシエルってどこでも撃てるの？」

フェイトが尋ねた。

「どこでもって…例えば？」

「今、アースラがいる場所。宇宙空間だ」

空を見上げながら、シグナムが答えた。

話を聞いていたエイミィは、得意げな笑みを浮かべた。

「管理局のテクノロジー、ナメてもらっちゃ困りますなあ」

右手の親指を立てる。

「撃てますよ。宇宙だろうが、どこだろうが！」

自信満々に答えた。

「オイ！ちよつと待て君ら！ま…まさか……！」

二人の意見にクロノは驚いた。
フェイトとシグナムは、笑みを浮かべて頷いた。

*

「あの…海にある黒いのは何だろ？」

さすがが不安げに言った。

「一体何なの？まさかこんなのが…このままずっと続いたりしないよね？」

アリサも不安になる。

「大丈夫だよ」

新八が二人に言った。

「新八さん？」

二人は新八を見た。

「銀さんやなのはちゃん達が、きっと何とかしてくれる」
そう。あの人達ならきっと何とかしてくれる。

今まで、どんなピンチだって切り抜けてきたんだ。
だから。

「信じよう。銀さん達を信じて待とう」

笑顔で新八が言った。

「新八のくせに、たまにはいい事言うアルナ」

「だから”たまには”は余計だよ」

新八が神楽に言った。

「普段はふざけている男だが、銀時はやる時はやる男だ」

九兵衛が言った。

銀時の強さを知っているからこそ、彼女も銀時を信じている。

「私も信じます。なのはちゃんとフェイトちゃんも強い子だしね」
言った後、お妙はすずかとアリサに顔を向けた。

「二人は、なのはちゃん達のお友達なんでしょ？なら、なのはちゃん達を信じましょう」

微笑みながら二人に言った。

みんなの言葉を聞いて、すずかとアリサは不思議と不安はなくなり、表情が明るくなった。

「はい。なのはちゃん達を信じます!」

「私も! 私達は友達だもん!」

*

「なんとも、まあ……。まるで発想が銀さんね」

リンディは驚き半分呆れ半分の、複雑な笑みを浮かべた。

「計算上では実現可能というのが、また恐いですね。クロノ君。こちのスタンバイはオーケー。暴走臨界点まであと十分!」

エイミイはキーボードを操作しながら言った。

「個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが……やってみる価値はある」

クロノが皆に言った。

僅かでも可能性があるなら、それに賭けるしかない。

「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合四層式。まずはソレを破る」

と、はやてが言った。

「バリアを抜いたら本体がむけて、私達の一斉攻撃でコアを露出」と、フェイト。

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法で、アースラの前に転送!」空を見上げながら、なのはが言った。

「あとはアルカンシエルで蒸発」

リンディが言った。

グレアムは、現地の様子をモニターで見ている。

「アルカンシエル、チャージ開始!」

「はい!」

リンディの指示に局員が応える。

アルカンシエルの発射準備をする。

海上では、なのは達が防衛プログラムを止めるために、それぞれのデバイスを構える。銀時は、狼形態に変身したアルフの背中に乗せられている。

防衛プログラムの周辺に、数本の禍々しい黒い柱が立つ。防衛プログラムが暴走を開始する。

「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム。闇の書の『闇』」

はやてが呟いた。

黒い球体が消え、中から防衛プログラムが姿を現した。

カニのような足があり、カラスのような黒い翼が生えていて、獣のような鋭い爪を持った前足、幾つかの動物を合わせたような機械の怪物だった。頭部には、紫色の女性のようなモノがあった。

「チエーン・バインド!!」

「ストラグル・バインド!!」

アルフのオレンジ色のバインドと、ユーノの緑色のバインドが、防衛プログラムの周りにある尻尾のようなモノを捕らえる。

「鋼のくびき!!」

ザフィーラから白い魔力の線が出る。

白い線は複数の尻尾を斬った。

「レイジングハート!エクセリオンモード!!」

レイジングハートの形が変形する。

ヴィータがグラーフアイゼンを構えて近寄る。

「ちゃんと合わせるよ!高町なのは!!」

「ヴィータちゃんもね!!」

「『鉄槌の騎士』ヴィータと、『鉄の伯爵』グラーフアイゼン!!」
撃鉄を起こし、グラーフアイゼンは巨大なハンマーになる。

「轟天爆砕!!」

叫びながら、巨大ハンマーを振り上げる。

「ギガント・シュラアアアク!!!!」

巨大ハンマーを、防衛プログラム目掛けて振り下ろす。

防衛プログラムはバリアを張って、巨大ハンマーとぶつかる。衝撃で波が荒れる。バリアは、ヴィータの巨大ハンマーによって碎かれた。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます！」

足下に桜色の魔法陣を展開する。

カートリッジロードをする。レイジングハートから桜色の翼が出る。防衛プログラムに向けて構える。

「エクセリオンバスター！！」

先端に桜色の魔力が溜まる。

「ブレイク・シュート！！！」

桜色の閃光を放ち、防衛プログラムのバリアに直撃した。

桜色の閃光はバリアを破った。

次はシグナムとフェイトの番だ。

「『剣の騎士』シグナムが魂、『炎の魔剣』レヴァンティン！」「レヴァンティンを上に掲げる。

「刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

鞘とレヴァンティンを合わせる。

撃鉄を起こして、レヴァンティンと鞘は合わさって『弓』になった。魔力で矢を作り、防衛プログラムに向けて構える。

「翔けよ、隼！！！」

矢は紫色に輝き、防衛プログラムに向かって放たれた。

バリアに当たった矢は爆発し、バリアを砕いた。

「バルディッシュ！ザンバーフォーム！！」

バルディッシュの形が変形する。

金色の刃が出て、剣の形になる。

「フェイト・テストロッサ、バルディッシュザンバー！行きます！！」

「私も行くよ！フェイト！」

足下に金色の魔法陣が展開される。

バルディツシュを上に掲げ、撃鉄を起こす。

アリシアは雷麟を振り上げて、魔力を集中させる。

「撃ち抜け、雷神！！！」

「断ち切れ！」

バルディツシュを振り下ろし、金色の魔力刃が伸びる。

アリシアは雷麟を振り下ろし、巨大な斬撃を放つ。

伸びた金色の魔力刃と斬撃は、バリアを破って防衛プログラムを斬った。

防衛プログラムからミミズのようなモノが現れ、光線を放とうと魔力を溜める。

「『盾の守護獣』ザフィーラ！攻撃など撃たせん！！」

ザフィーラが白い魔法陣を展開する。

白い魔力の柱が、ミミズのようなモノを貫いて動きを止めた。

「彼方に来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け！！」
はやては白い魔法陣を展開する。

防衛プログラムの上空に、七ツの白い光を出す。

「石化の槍、ミストルティン！！！」

白い槍は防衛プログラムを貫き、防衛プログラムを石化させる。
すると、石化した防衛プログラム内から、獣の顔をした機械やら尻尾やらが無茶苦茶に出てきた。

「うわゝ！なんか凄い事になってるよ！」

アルフは若干引いた。

「やっぱり並の攻撃じゃ通じない！」

「だが、攻撃は通っている。プラン変更はなしだ！」

クロノが氷結の杖・デュランダルを構えて、エイミィに応えた。
「悠久なる凍土、凍てつく枢の地にて、永遠の眠りを与えよ」

クロノがデュランダルを振った。

直後、海が凍っていく。

「凍てつけ！！！」

そのまま防衛プログラムまで凍らせた。

それでも、まだ防衛プログラムは止まらない。

「行くよ、フェイトちゃん、はやてちゃん！」

「うん！」

なのはの言葉に、二人は頷いた。

最後は、三人による一斉攻撃だ。

なのはの前に魔法陣が展開され、桜色の魔力が集束される。

「全力全開！スターライト——」

レイジングハートを振り上げる。

「雷光一閃！プラズマザンバー——」

足下に金色の魔法陣を展開し、バルディッシュを構える。

空から紫色の雷が落ちて、金色の魔力刃に当たる。

はやては杖を空に掲げて魔力を溜める。

「ごめんな……おやすみな……」

防衛プログラムを見つめ、はやては辛い顔をして呟いた。

「響け終焉の笛、ラグナロク——」

三つの白い魔力の弾を作り出す。

「ブレイカー！！！！！」

三人が同時に叫び、桜色と金色と白色、三つの閃光が防衛プログラムに向けて放たれた。

閃光は直撃し、大爆発を起こした。

ドクン

防衛プログラムの中で鼓動が強くなった。

そして鼓動は防衛プログラムから消えた。

「捕まえた！」

シヤマルが防衛プログラムのコアを捕らえた。

「長距離転送！」

「目標軌道上！」

ユーノとアルフが転送準備をする。

「転送！！！」

シャル、ユーノ、アルフの三人によってコアは転送された。

「アルカンシエル、バレル展開！」

キーボードを操作しながらエイミーが言った。

リンディの前に発射装置が現れた。

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！」

「了解！」

局員が応える。

そしてアースラの前に、防衛プログラムのコアが転送された。

リンディは発射装置にキーを差し込む。

「アルカンシエル発射！」

キーを回す。

アースラからアルカンシエルが発射された。

光の中に飲み込まれ、コアは完全に消滅した。

退避したアースラは、コアの消滅を確認した。

「現場のみんな、お疲れ様！無事に終了しました！」

エイミーが通信でみんなに知らせた。

みんな安心し、喜びで笑顔になる。

なのはとフェイトとアリシアとはやては、ハイタッチした。

フェイトはアルフの背中中、眠っている銀時を見た。

これで全てが終わった。

銀時も起きれば、はやて達も混ざって、また騒がしくて楽しい毎日が始まる。

そう思った時、

「え？嘘……？何これ！？」

突然、エイミイが驚きの声を上げた。

「どうしたんだエイミイ？」

不審に思ったクロノが尋ねた。

「みんな気をつけて！海にある防衛プログラムの残骸から、物凄い魔力反応が……！！」

「何だって！？」

通信を聞いたクロノは、防衛プログラムの残骸を睨んだ。

コアはアルカンシエルで、完全に消滅したはず。なら一体何が？

全員の視線が残骸に集まる。

「……………できれば防衛プログラムのコアと共に、アルカンシエルで消滅してほしかったのですが……やはり弱まったコアから出ていましたか……」

リインフォースが言った。

「リインフォース？」

首を傾げながら、はやてはリインフォースを見た。

その時、海の中から何かが出てきた。

「……！！」

みんなは黙ってソレを見た。

ソイツは海から上がると、防衛プログラムの残骸の上に立った。

その瞬間、空気が重くなった。吐き気が襲った。

姿は二メートルを超え、右手には刀を持っており、爪と牙が見えるのだ。

そして大きく息を吸い込み、

「ゴオオオオオオオ！！！！」

歓喜の咆哮を上げた。

『外』に出れた歓喜の咆哮。

地を揺るがすような、禍々しき歓喜の咆哮。

ソレはついに、『外』に解き放たれてしまった。

第三十七訓：闇が目覚める（後書き）

ナナフシ「すみません。何かあんま変わっていませんね」
銀時「そうだな」

ナナフシ「また投稿しますので」

第三十八訓：バカな侍とバカな刀（前書き）

ナナフシ「特に言う事がないので」

銀龍『『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ』

第三十八訓：バカな侍とバカな刀

防衛プログラムの残骸の上に立っているソイツは、咆哮を上げた後、ジツと海の向こうを見つめた。

アースラでも、モニターでソイツの姿は確認している。

「な…何なのアレは…！？」

リンディは冷汗を流した。

手も震えている。

モニター越しからでも、ソイツの禍々しい感じが伝わってくる。

「わ…わかりません…突然、海に現れて…」

エイミイも声が震えている。

時空管理局本局の一室。

モニターで様子を見ているグレアム達も驚愕していた。

「と…父様…アレは一体！？」

アリアが震える声で、グレアムに尋ねた。

隣にいるロッテも、恐怖で震えている。

「わ…私にもわからない…！何だあの化物は！？」

グレアム自身も闇の書事件に関わり、その後も闇の書についてそれなりに調べてきた。

だが、あんな化物の存在は知らない。

別室で、プレシアもモニターで現地の様子を見ていた。

モニター越しからでも化物の禍々しさは伝わってきた。こんな危険な存在には、今まで出会った事がない。

恐らくその脅威は、闇の書の防衛プログラム以上。

プレシアは、急いで杖を持って部屋から出た。

*

フェイト達は上空から、化物を見ていた。向こうはまだコッチに気付いてない。

化物が出てきてから、明らかに空気が変わった。

あんな化け物を見たらなのは達は青ざめる。

そして本能が“逃げろ”と言っている。

あれと戦えば……

殺される

そう皆は思った。

*

「な…何だアレ…？」
化物を見て新八が呟いた。
新八も今まで、いろんな生物や敵と出会ってきた。
宇宙海賊、ターミナルに寄生した巨大えいりあん、
持ち主を支配する刀。

もしかすれば、夜王をも凌駕する威圧感を持っている。

だが今、新八が見ている化物は、それらを凌駕した存在に見えた。

「アレも闇の書の一部なのか？」

九兵衛も化物から、ただならぬ脅威を感じて冷汗を流している。

後ろでは、お妙が震えるすずかとアリサを安心させるように抱いている。

「俺にもわからん……」

桂も険しい表情で化物を睨んでる。

（もしや……俺が闇の書から聞いた、心臓の鼓動音の正体か！？）

*

化物は街とは反対方向の、海の方こうをジッと見つめていた。

すると、化物は口を開いた。鋭い牙が見えた。

「……久しぶりの……外だ……」

海を見つめながら、化物は喋った。

やっと外の世界に出れた。

何故、自分は今まで外に出れなかった？

人間如きに……いや、人間の力じゃ無理だったろう。

我を封印する為に協力をした……あの白銀の刀……！

許さん！天神刀如きに……この我が……！

化物の怒りと憎しみがこみ上げてくる。

拳を強く握って、鋭い歯を食いしばる。

アースラにいるエイミイは、化物の魔力の上昇を確認した。

「みんな気をつけて！化物の魔力がどんどん上がってる！何かする

気だよ……！

「えっ……！？」

エイミイから連絡を受けたフェイト達は、化物を見た。

「クソ人間と天神刀如きが、我を封印しやがってエエエエ!!」

すると、刀を振るうと巨大な斬撃が起きた。
すると……海が真つ二つに斬れた。

「!!!!」

皆は化け物の斬撃を見て驚いた。

銀時と漸呀の斬撃とは比べ物にならないくらいの……。

「……アア……最高の気分だぜ……」

化物は後ろを振り返った。

「ん？」

そして、街の存在に気付いた。

「なんだ。人間どもの街があるじゃねーか」

街を見つけた化物は、ニヤリと笑った。

*

「な……何なんですかアイツ!!? 斬撃出しましたよ!! 斬撃で海を真つ二つにしましたよ!! あんなの食らったら、街が跡形も無く吹っ飛びますよ!!」

化物を指差しながら、新八が叫んだ。

松っちゃん砲や蝮ズ、なのはちゃん達の魔砲攻撃など、いろいろ見てきたが、それらとは比べ物にならないくらいのデタラメな威力だった。

*

「……い……一体ヤツは何なんだ……!?!」

なんとかシグナムが口を開いた。

「『獄魔刀』……夢刀^{むとう}」

リインフォースが呟いた。

「え？」

シグナムはリインフォースを見た。

他のみんなも、リインフォースに注目する。

「本体はあいつが持っている刀『獄魔刀』の一つ『夢刀』、あの体は『夢刀』が自ら作り出した体です」

「『獄魔刀』とは？」

クロノが訪ねる。

「『獄魔刀』……何処で生み出されたかは知りませんが、最凶最悪の刀」

リインフォースが説明をする。

「実はですね……アレは銀龍の前の持ち主とたくさんの魔導士の力が集結して、私の中に封印したんです」

リインフォースから語られた言葉を聞いて、なのは達は驚いた。

まさか、リインフォースが封印の魔導書だったとは……。

一方でユーノは納得していた。自分が見つけた文の意味は、こういう事だったのか。

それよりもつと驚く事は……。

「ぎ、銀龍さんは一度『夢刀』って言うのと戦っているんですか！？」

なのはは驚いた様に訪ねた。

「はい、元の持ち主は……その戦いにより亡くなりました。封印が精一杯だったでしょう」

だから、リインフォースは銀時が銀龍を持っていようと無駄だと思っただのだ、

「フェイト、思ったんだ」

「何、アリシア？」

アリシアの言葉に皆が注目した。

「もしかして……その時に記憶を失ったんじゃないの？」

『あつ……』

皆は声を出した。

確かに……もしかしたら、その後銀時と出会い、今に至るのかもしれない。

「話を元に戻しますね。夢刀は私の魔力を奪って外に出ようとした。そこである魔導師が、私のプログラムを改変し、魔導師の魔力を蒐集して私の魔力を高め、その力で一定期間夢刀の活動を停止させる事にしたのです。そして活動停止させた後は、夢刀に余計な魔力を奪われないよう、破壊活動をして魔力を消費する。転生と再生機能は、私が破壊されて夢刀が外に出ないようにするためです」

リンフォースが説明を終えた。

リンフォースの真実。獄魔刀・夢刀。

夜天の魔導書は、呪われた魔導書なんかではなく、夢刀という強大な『悪』を封じていた封印の魔導書だった。

なのは達は複雑な気持ちになった。

だが、今は気持ちを切り替えて、夢刀を何とかしなければ。

フェイト達がそう思った時、

「うるさくて、眠れねーなア」

気だるげな声が聞こえた。

全員の視線が、アルフの背中に集まる。

銀時が起きて、頭をぽりぽりと掻いていた。

「銀時（銀さん）……！」

なのはとフェイトとアリシアとシグナムは、弾んだ声を出した。

「よオ。おはよう」

こんな時でも、呑気に挨拶をする銀時。

すると銀時は、海上にいる夢刀を見つけた。

「リン。アレがお前の中にいたヤツか？」

「はい」

リンフォースは答えた。

銀時は険しい表情で、ゾーマを見つめた。

アレが松陽先生が言っていた『真の闇』。本当に倒すべき敵。

「銀龍……」

『わかつている』

銀龍は姿を現す。

シルバー・オブ・アーマー
「白銀の鎧」

『わかった』

銀時が言うのと銀龍は答え、銀時が銀色の魔力を纏い、ドラゴンの様な銀色の翼を生やした。

「おい！もしかして一人で戦うつもりか！？いくら貴方達のコンビでも無理だ！奴は海をも両断する魔力を持っているんだぞ！！」

クロノが銀時を止める。

すると、リインフォースが。

「あの巨大な斬撃は膨大な魔力を使うので、次に撃てるようになるには、もう少し時間がかかります」

「どうやら、しばらくは撃てないようだ。」

「なら、行きますか」

「だから！」

銀時が行こうとするのを止めるクロノ……だが。

「銀時を止めようと無駄だぜ」

漸呀が口を開いた。

それに続く様に

「クロノ君……銀さんを行かせようよ」

「そうだよ……銀時は何を言っても止まらない」

「そうだよね……銀時を止めるのは誰にも出来ない」

なのは、フェイト、アリシアの順で言う。

皆はわかつている……。

銀時はそう言う男だと言う事を。

*

夢刀はどうやって街を攻めるか考えていた。

「部下共にやらせるか……」

すると、いきなり夢刀は力を入れて、いくつもの球体を作り出した。すると、人型になり、翼が生え、牙と爪が剥き出しの怪物になった。その数は数え切れない程だ。

「な……！？アイツ、自分の体から化物を生み出しやがった……！」
ヴィータが叫んだ。

「アレで街を襲う気だ！」

怪物達を見ながら、ユーノが言った。

「ほら。時間がねーぞ」

銀時が言った。

もう時間も、選択の余地もない。

「わかった……」

クロノは頷いた。

「ほんじゃ、行きますか」

銀時が飛んで行こうとする。

「待つて銀時！」

フェイトが銀時を止める。

銀時はフェイトに振り返る。

振り返った途端だった。

銀時に飛びついた。

「フェイト？」

「生きて……帰ってきてね」

フェイトはそう言つと銀時の唇に自分の唇を重ねた。

「……」

銀時は驚いていた。

見ている皆も驚いていた。

「あの時……なのはが先にしちゃったけど……生きて帰ってきてね。約束だよ」

強い決意が宿った目で、なのはが言った。

「それと…全部終わったら…また私達の先生をやってください」
「ああ」

短く答えて、銀時は頷いた。

「銀時！」

ヴィータが銀時を呼んだ。

少し涙目になっている。

「絶対に…絶対に勝って、帰ってこいよ!!」

「ヴィータちゃん…」

銀時の帰りを願ってるヴィータを見て、シャルは微笑んだ。

どうやらヴィータは、銀時の事が気に入ったようだ。

「お前が俺の心配するなんて珍しいな。今夜はハンマーでも降るか？」

と、銀時は空を見上げた。

「私もヴィータやシグナム達と一緒にや。銀ちゃんの事信じてるから」
ヴィータの肩に手を乗せながら、はやてが言った。

「へいへい」

手を振って銀時は応えた。

「必ず帰ってくる…侍はア…果たせねえ約束はしねえからな」
銀時が飛び立つと……。

アルフが近づいてきて。

「あたしも銀時の事好きなんだ。だから生きて帰ってよ」
耳元で言った。

そして、アルフはなのは達の所に戻った。

（何……こんな時にあの家族は……）
銀時は心の中で思った。

夢刀は自分が生み出した怪物達で、街を襲わせようとしていた。

「お前達！久しぶりの外だ！思う存分暴れるがいい！！」

「ギャゴオオオ！！」

怪物達が夢刀の言葉に応えて、雄叫びを上げた。

「よし、ゆけエエエ！！」

街を指差しながら、夢刀は命令した。

怪物達は街目掛けて、一直線に飛んでいった。

「我はここで、見物でもしているか」

夢刀が腕を組んだ時、

「ん？」

一つの機械が目に入った。

「こりゃ、大物だ」

その背中に乗っていたのは雷雅だった。

「誰だ？」

夢刀は聞く。

「俺は疾風雷雅……てめえに会いに来ただけだ……何せ戦闘狂なもんでな」

雷雅がそう言う。

「ふふ、面白い。我と戦おうと言うのか？」

「だが、生憎俺は空を飛べないんでな」

そう言う……。

「なら……は！」

夢刀は海を凍らせた。

そして、そこに降り立つ。

「来い……相手をしてやろう」

雷雅もそこに降りるが……。

「ま、まずはあいつと戦って勝てたら……俺が戦ってやる」

雷雅がある方向に指を差す。

夢刀も見る。

そこには……。

銀色の魔力を体に纏い、そこからドラゴンの様な銀色の翼を生やし、右手には白銀の刀を持っており、腰にはその鞘と木刀が差しており、銀髪の天然パーマの男が降り立った。

「お前は……何者だ？」

夢刀が聞くと、銀髪の男は……。

「宇宙一バカな侍だ。コノヤロー!!」

銀髪の男・坂田銀時がニタアと憎たらしい笑みを浮かべ、手をヒラヒラと動かしながら答えた。

大切なモノを護る為、『白夜叉』再び戦場へ！

第三十八訓：バカな侍とバカな刀（後書き）

ナナフシ「今回は銀時&銀龍VS夢刀の激戦です！」

銀時「夜王よりやばそうですけど！俺大丈夫なの！？」

ナナフシ「あんたなら勝てる！これで連続投稿は終わります」

第三十九訓：不思議な刀は厄介だ（前書き）

ナナフシ「……」

銀時・なのは・フェイト・アリシア「……」

ナナフシ「あの、凄く赤夜叉さんが大変な事になっているんですが……リリカル銀魂を続けて良いのか？と思うんです」

銀時「そうだな……心配だな」

フェイト「そうだよ」

なのは「……暗くなってもしょうがないよ！始めよう！」

ナナフシ「そ、そうですね。では、皆さん！」

ナナフシ・銀時・なのは・フェイト・アリシア「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』 始まります！」

第三十九訓：不思議な刀は厄介だ

夢刀に生み出された怪物達は、街へ向かって飛んでいた。

「ギャゴオオオオ!!」

叫び声を上げながら、街へ迫る。

その時、

「サンダー・レイジー!!」

声と共に怪物達に雷が落ちた。

何体かの怪物に雷は当たり、全身に火傷を負った。

「ギャゴオ!!」

怪物達が上を向く。

そこには、バルディッシュを構えたフェイトと、なのは達がいた。

「街には入れない」

フェイトは、怪物達を睨みつける。

怪物達も牙を向いて、フェイト達を睨む。

怪物達の体が一回り大きくなり、夢刀と同じくらいの大きさになる。

「ギャゴオオオ!!」

雄叫びを上げ、フェイト達に迫る。

なのははレイジングハートを構え、デイベイン・バスターを放った。

怪物達は、桜色の閃光に飲み込まれた。

アリシアは雷麟を振るって斬ったり、斬撃を放ったりしている。

漸呀も炎凰を振るって斬ったり、斬撃を放ったりしている。

はやても杖を怪物達に向け、石化の槍を放つ。槍に貫かれた怪物達

は、次々と石化した。

はやての隣にはリインフォースがいて、障壁を張ったりと、はやて

をサポートしている。

ザフィーラとアルフは獣形態になり、体当たりや鋭い爪で怪物達を

切る。

グイータはグラーファイゼンを振回し、怪物達を吹き飛ばす。

シグナムは鞘を使って怪物達と戦っている。急所に向かって鞘を振り抜き、怪物達を倒していく。

フェイトもプラズマ・スマッシュを撃つ。金色の閃光に飲み込まれ、怪物達は消滅した。

それでも、怪物達の数はまだまだ沢山いる。

フェイトの息が切れていく。

すると、数体の怪物達が後ろからフェイトに迫る。

「フェイト危ない!!」

怪物達に気付いたアルフが叫んだ。

「はっ！」

フェイトは後ろを振り返った。

怪物達がフェイトに迫る。

「テストロッサー!!」

シグナムも気付いて、フェイトの所へ向かおうとする。

が、間に合わない。

怪物が鋭い爪を振り下ろす。今から障壁を張っても間に合わない。

爪がフェイトに当たる直前、

「フェイトから離れなさい!!」

紫色の雷が怪物達に落ちた。

怪物達は悲鳴を上げた。やがて雷が消え、黒焦げになった怪物達は動かなくなり、力尽きて海に落ちていった。

フェイト達は上を見た。

そこには、杖を持ったプレシアがいた。

「母さん!!」

「プレシア!!」

フェイトとアルフは、驚きの声を上げた。

フェイトは自然と笑顔になった。

プレシアはフェイトに近寄った。

「フェイト。怪我はない？」

「うん。ありがとう、母さん」

フェイトは頷いた。

「プレシアさん！」

なのは達もプレシアに気付いた。

「私も加勢するわ。みんな頑張って！」

「はい！！」

プレシアの登場で、なのは達の士気が上がった。

怪物達がプレシアを囲む。

「大魔導師の肩書きは、伊達じゃないのよ」

怪物達を一瞥しながら、プレシアは言った。

プレシアが杖を振ると、再び紫色の雷が怪物達に直撃した。

「行くわよ、フェイト！」

「うん！」

金色と紫の雷が空に光った。

*

プレシアも加わって、怪物達の進攻を止めようとするが、数が多すぎて全ては止められなかった。

約半数近くの怪物達が、街に向かう。

そして怪物が街に入った瞬間、

「ほあちゃああああ！！」

「ハアアアアアア！！」

「ダラアアアアア！！」

建物の屋上にいる赤いチャイナ娘・神楽と咲と葵が、怪物達を回転蹴りと木刀と刀身が木製の薙刀で吹き飛ばしたで吹き飛ばした。

「ここいらは海鳴市の女王・神楽のモノアル！」

「後、私と」

「私が相手だ！」

傘と木刀を怪物達に向け、神楽と咲と葵が言い放った。

え？葵の性格変わってるって？葵はな、武器を手に取ると男勝りな性格に変わるんだよ！

「ギャゴオオオオ！！」

怪物達は雄叫びを上げる。

「勝手に入ってくるなアルウウウ！！」

「行かせない！！」

「ほいっと！！」

怪物達に向け、神楽は傘からマシンガンのように弾を発射した。

弾は怪物達に当たり、怯んだ隙に神楽は怪物達との距離を詰めた。

傘を振返し、怪物達を薙払った。

咲は木刀で怪物達を切り裂いたていく。

葵は薙刀でドンドン怪物達を薙ぎ払う。

下にいるお妙、すずか、アリサの所にも怪物達は迫っていた。

怪物達は口を開いて、鋭い牙を見せた。ダラダラと涎を垂らす。

「ギャゴオオオオ！！」

叫びながら、怪物達はお妙達に襲い掛かる。

その時、お妙達と怪物達の間にも九兵衛が現れた。

神速の速さで刀を横薙ぎに振るい、怪物達を真っ二つに切り裂いた。

上半身がズレて、ドチャツと音を立てて地面に落ちた。下半身の斬

り口から紫色の血が、噴水のように噴き出た。

「お妙ちゃん達には、指一本触れさせん」

九兵衛は鋭い目で、後ろにいる怪物達を睨んだ。

「ギャゴオオオオ！！」

怪物達が九兵衛に迫る。

口から黒い魔砲を放つ。九兵衛はソレをかわして、一気に怪物達の所まで駆ける。

怪物達は、拳を九兵衛に向けて振り下ろした。
九兵衛は、静かな川の流れのような動きで拳をかわし、すかさず神速の剣を振るう。

怪物達は血を噴き出して倒れた。

怪物達は、背後から九兵衛を襲おうとする。

その時、

「危ない、若アアア！！」

東城が叫びながら、刀を振るって怪物達を斬った。

「若を護るのが、この東城歩の務め！何人たりとも若には触れさせん！！」

怪物達に向け、東城は凄まじい気迫を放った。

屋上。

桂、エリザベス、新八は怪物達に囲まれていた。

怪物達はニヤリと口元を歪めた。

「ふん。俺を捕まえるには甘いな」

桂は懷に手を忍ばせた。

そして『んまい棒』を取り出した。

「んまい棒、鎖羅魅^{サロミ}！！」

んまい棒を床に投げ、屋上は煙に包まれた。

突然煙に包まれ、怪物達は混乱する。すると丸い玉のような物が怪物達の前に投げられた。

玉に表示されている数字がゼロになった瞬間、玉は大爆発を起こし、怪物達は粉々に吹き飛んだ。

爆発で煙も消え、生き残った怪物達は桂を見つけた。

「ギャゴオオオ！！」

二匹の怪物が桂に襲い掛かろうとした時、

「僕をツツコミだけのダメガネだと思ふなアアア！！」

『うおりゃあああ!!』

背後から新八とエリザベスが、それぞれの武器、木刀とボードを振り下ろして怪物の頭に攻撃した。

怪物達は痛みで頭を押さえ、その隙に桂が刀で怪物達を斬った。

「新八ー、ツラ、エリー！無事アルカ？」

隣のビルの屋上にいる神楽が呼びかけた。

「大丈夫だよ、神楽ちゃん！」

新八が返事をした。

すると神楽を背後から襲おうと、怪物達が後ろから迫っていた。

「危ないリーダー!!」

桂が危険を知らせた。

その時、

「わんっ!!」

定春が怪物達に体当たりをした。

「定春！」

神楽は定春に抱き付いた。

「よかった」

「うむ」

新八達はホッと一安心した。

『まだ気は抜けないですよ』

と、書かれたボードをエリザベスが掲げた。

「そうだったな」

桂達は気を引き締め直して、まだ残っている怪物達を見つめた。

新八は天魔を出して、立ち向かう事にした。

*

空や街で、フェイト達や新八達が怪物達と戦っている最中。

銀時と夢刀は、氷上で睨み合っていた。

「侍だと？」

夢刀はそう言った。

夢刀は気付いた……銀時の手に持っている物を……。

「き……貴様は銀龍……！」

『我に用か？』

銀龍は呑気に答える。

「ここで出会えるとはな……ここで恨みを晴らしてくれるううううう……！」

夢刀が雄叫びを上げた。

「その新しい主事！殺してくれるわアアアアアアアアア……！」

夢刀はそう言うのと走り出した。

銀時は木刀を左手に持ち、走り出す。

「オラア……！」

銀時は木刀を振り下ろす。

それを夢刀は空いている左手で受け止めた。

「……！」

銀時は素早く銀龍を横薙ぎに振ろつとすると、腹に蹴りを入れられた。

銀時は怯むが、相手を見る。

夢刀が刀を振り下ろしてくる。

それを右に飛んで避ける。

シルバー・オブ・アーマー

白銀の鎧のおかげで通常よりは素早い。

「ちっ……！」

銀時は舌打ちして、木刀で突きを放った。

「ふん……！」

それを夢刀は受け止めた。

そのまま持ち上げて、銀時を氷上に叩きつけた。

「がっ……！」

銀時はすぐさま起き上がり、夢刀に蹴りを入れた。

「くっ」

夢刀は少し怯んだ。

木刀を掴む力が弱くなったので、一旦後ろに飛んで退く。

「やるな……魔法を使わずここまでするとは」

「へへ、どうも」

銀時はそう言う。

「一つ聞こう。何故我を倒そうとする？」

夢刀は訪ねた。

「一つは、俺の大事なモンを護るため。そしてもう一つは……」

そこで銀時は一旦言葉を止め、空を見上げた。

視線の先にはリインフォースがいた。

そして夢刀に向き直る。

「アイツの笑顔が見てエのさ」

親指でリインフォースを指差しながら、銀時が言った。

「……………はア？」

思わず夢刀は間抜けな声を出した。

世界のためではなく、女のため？

女ために我と戦い、倒そうと言うのか？

「女に涙は似合わねエ」

夢刀はそれを聞いて……。

「そうか……ただそれだけに戦うか……実に興味深い男だ！ 気に入った！ 我が直々に葬ってやる！」

夢刀は甲高い笑い声を出しながらそう言った。

そして、両者が走り出した。

「ふん！」

夢刀は左手で、銀時の腹に拳を叩き込んだ。

「ぐっ！」

銀時が怯むと同時に。

「ガァ！」

刀を振り下ろしてきた。

「！！！」

銀時は咄嗟の行動で、木刀と銀龍で受け止める。

「我の一撃を受け止めるとはな」

夢刀はそう言う。

「ぬぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ！！！」

銀時の足が氷上にめり込んでいく。

（な……こいつ！どれだけ馬鹿力出してんだ！これ……夜王以上じやねえか！シルバー・オブ・アーマー白銀の鎧を纏ってなきや、一瞬でお陀仏だったぞこれ！！）

銀時は夢刀の力に驚いていた。

そして、齒を食いしぱり……。

「うおおおおおおおおおお！！！」

銀時は夢刀に蹴りを入れた。

「ぐっ！！！」

怯んだ事により、力が弱まった為、そこに木刀を横薙ぎに振るう。

「！！！」

夢刀はそれに気づき……受け止めた。

「！！！！！！！」

銀時は驚いていた。

そのまま上に持ち上げられ……。

上空目掛けて投げ飛ばされた。

「何のつもりだ！？」

銀時はそう言った。

翼を展開しようとする……こっちに猛スピードで迫る夢刀が居た。

「ちっ！！！」

銀時は銀龍を連続で振るい、斬撃を幾つも放つ。

「ぬるい！！！」

それを刀で全て打ち消す。

そのまま銀時の真上に来て……腹に拳を叩き込んだ。
ピシッ！！

白銀の鎧にヒビが入る。

「ガアアアアア！」

銀時はそのまま氷上に落ちていく。

その声に気付き、なのはやフェイト達は銀時の方を見る。

「銀時（銀さん）（銀ちゃん）！！」

見た皆が銀時の名前を呼ぶ。

そして、銀時は氷上に叩きつけられる。

そのまま、起きあがろうとした瞬間だった。

殺気を上から感じて見ると、目の前まで来ていた。

膝蹴りを腹にかまそうとしているので、木刀で防ごうとするが……。

ボキッ！！

木刀が折れてしまった。

そのまま腹に膝蹴りが直撃する。

「がはっ！！」

銀時は苦しがる。

そして、夢刀は左手で銀時の頭を掴む。

「あれま……銀の兄貴……ここまでか？」

雷雅はそう言った。

「があああああああ！！」

銀時は苦しがる。

『主！！』

銀龍は叫ぶ。

「ククク」

ガンガンッ！！

何度も銀時の頭を氷上に叩きつける。

「さて……苦しみなながら死ぬ所を見たいが……それでは銀龍を壊せん。お前が死ねば、新しい主を見つけようとするからな……しばらくは悪夢に苦しめ」

そう言うつと刃先を銀時に向ける。

それを見たなのは達は……。

「も、もしかして！」

「やめてエエエエエエエ！」

「イヤアアアアアア！」

なのはは何をするかわかり、フェイトとアリシアは叫んだ。

「我は『獄魔刀』の一つでな……『悪夢の獄魔刀』と呼ばれているんだ。意味がわかるよな？ 我の魔力を貴様に流し込めば……悪夢を見る事になる」

「がぁぁ！」

銀時に夢刀は説明する。

「説明はここまでだ……じゃあな。銀色の魂を持つ侍よ……良い悪夢^めを」

夢刀はそう言つと銀時目掛けて刀を振り下ろし……

グ
サ
ッ
!
!

銀時の腹に刺した。

「ごふっ！」

銀時は口から血を吐いた。

それを見ている皆は驚いた……。

（う……嘘……銀さんが……！）

（ぎ……銀時……！）

（ぎ……銀時……！生きて帰ってくるって！）

なのは、フェイト、アリシアにそう言う思考が走った。

見ている皆も同じ様な事が走っている。

『銀時イイイイイイイイ（銀さアアアアアアアん）（銀ちやアアアアアアアん）！！』

見ていた皆は叫んだ。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生!!」

銀八「ハアイ。質問コーナーを始めるぞオ。今回のアシスタントは」

アリシア「アリシア・テストロッサです!」

銀八「そんじゃ、行くか」

アリシア「まずはペンネーム『支配者』さんからの質問

『シヤナ』さあ、って…まあ…こっちの作者に分かるわけないか…
質問だけど今回の怪物ってStrikersに出るの?」

ヤミ「私も質問ですが、今回雷雅はどうなったんですか?全く出てきてませんけど」

神楽「私も言いたい事があるネ!何で新八なんぞに凄い刀があつて私には何にもないんじゃないじゃああああ!!ざけんなアルウウウウウ
!!!!!!」

新八「ちょッ!神楽ちゃん何すんの、ギアアアアアアアア!
!!!!!!!!????????」『向ここの新八が……』

銀八「はい、一つ目ですけど……あんな化け物出す予定はありません。
今の所」

アリシア「恐ろしいよね」

銀八「二つ目だが、雷雅は特に誰にも雇われていなかったの、強
敵を待っていただけです」

アリシア「そうなんだ」

銀八「最後は……ナナフシ曰く「神楽……要らないと思う。何故か」と言つと……十分強いじゃん。それにあの子刀なんて振るわないし」
つて言つてました。新八のは『月光閃火』さんに作ってもらったんです。と言つ訳で『支配者』さん。廊下に立つてなさい」

アリシア「次で最後です。ペンネーム『黒神』さんからの質問
『質問します。』

ミラクル∞へ 失恋後の新たな恋がかなえて良かったですね♪

アリシアへ 銀魂の最大の面白さつてのは何なのか知ってますか？

お妙へ 新たな恋を手に入れた新八はもう他の所の様にロリコン
アイドルオタクから解放されました。
そのご感想を。』 銀魂はね……ギャグが面白いな。ナナフシに見せて貰ったけど」

銀八「それだけ？」

アリシア「銀時がとっても格好良かった！」

銀八「はい、この銀時バカ。先に二つ目答えて。一つ目だが」

ミラクル∞「よかったよオオオオオオオ！！超嬉しい！！」

新八は嬉し涙を流していた。

銀八「最後だが」

お妙「よかったわね。新ちゃん。これで新ちゃんも真つ当な侍を
指せるわね」

お妙は嬉しがっていた。

銀八「はい、と言う訳で『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

アリシア「質問は以上です」

銀八「では」

第三十九訓：不思議な刀は厄介だ（後書き）

ナナフシ「これは……大丈夫なのかな。続けて」

銀時「さアな」

ナナフシ「やばい。バリ緊張感が!」

銀時「おい、ナナフシ？顔色やばいぞ！おい！」

ドサッ！

銀時「誰か救急車呼んでこい！早く！」

なのは「それでは一樣次回予告です。『第四十訓：悪夢は苦しいもの』です」

報告です（前書き）

ナナフシ「今回は報告です。どうぞ」

報告です

赤夜叉さんが退会してしまった事は悲しいです。
そして、このリリカル銀魂についてですが、書き続ける事にしました。

皆様……おさがわせしたのならすみません。

僕のこの小説を読んでくれてる皆様……続けますので安心してくだ
さい！

後、これは二百文字以上いかないと投稿出来ないの……少し文字
数を稼ぎます。

まあ、次回予告みたいなものです

~~~~~

夢刀に刺された銀時！

夢刀の能力は刺した相手に魔力を流し込み、悪夢を見せる能力！

銀時が苦しんだ幼少期……そして……

「俺は……この手で……殺しちまった……」

銀時が言う意味は！？

次回『第四十訓：悪夢は苦しい』です

~~~~~

次回予告の題名が変わっていたのならすみません。
それでは続けますので皆様よろしく願います

報告です（後書き）

ナナフシ「以上です。これからもよろしく願います」

第四十訓：悪夢は苦しいもの（前書き）

ナナフシ「今回は銀さんが悪夢に苦しむ話です。過去と現在^{いま}が合
さる悪夢から銀さんは脱出なるか!？」

銀龍『『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まる
ぞ』

第四十訓：悪夢は苦しいもの

（ちくしょう……眠気が……）

銀時に眠気が襲い、眠ってしまった。

「ククク、さあ苦しむが良い……夢の中で」

夢刀はそう言った。

「あれま……なら、俺と殺るか？」

雷雅は夢刀に訪ねる。

「待て、こいつを殺さねばならぬ」

「はあ？殺したら銀龍が新しい主を見つけるんじゃないのかよ？」

雷雅の言う通りだ。

銀時を殺せば銀龍は新しい主を見つける為に消える。

「こうするのだ」

夢刀は空高く飛び、腕を空に掲げると手のひらに黒い球が出来始める。

「これを……巨大にして叩き込んで、一緒に跡形もなく飛ばす」

夢刀はそう言った。

*

「銀さん……」

「「銀時イ……」」

なのは、フェイト、アリシアは悲しんでいた。

「おい！いつまでも泣いてんじゃないやねえ！」

漸呀は化け物達を斬りながらそう言った。

「クソ！邪魔だ！蓮獄炎！」

巨大な炎の渦を放ち、化け物共を一掃した。

「銀時はこんな事で死にやしねえ！」

「でも……刺されたんですよ？」

なのはは涙を流しながら漸呀を見た。

「クッ……だがな！」

「彼の言う通りです。多分銀時は夢の中に居ます」

『夢の中？』

リインフォースの言葉に皆は首を傾げた。

「はい、夢刀は別名『悪夢の獄魔刀』と呼ばれています。多分銀時に悪夢を見せているのでしょう」

「どうすればいいんですか？」

フェイトが訪ねる。

「……彼が悪夢から目覚める以外方法はありません」
リインフォースはそう言った。

「そんな……」

アリシアは悲しそうな顔をする。

「呼べ」

「え？」

漸呀の言葉に皆が振り向く。

「腹の底から！銀時の名前を呼べ！！」

漸呀はそう言った。

「届くハズだ！声は……銀時に光りの道を作ってやれ！！」
漸呀はそう言った。

「でも、こいつ等をどうにかしなくちゃ」

フェイトは言う。

「俺に任せろ」

化け物達に炎鳳を向けながら言う。

「お前！死ぬ気か！？」

シグナムは言った。

「俺を誰だと思ってる？銀時の戦友だぜ？任せな」
漸呀は言う。

「……本当に良いんですか？」

「ああ、だから、銀時を悪夢から引き戻してこい！」

「ありがとうな……漸呀さん」

「はやては漸呀にお礼を言った。」

『銀時イイイイイ（銀さアアアアアア）（銀ちやアアアアア）——！』

「なのは達は銀時に向かって名前を呼んだ。」

「漸呀は……。」

「さあて……化け物共……この俺……黄金戦鬼が相手だ」
化け物達の前に戦鬼^{おに}が居た。

＊

（ここは……？）

銀時は目を覚まして起きあがった。

「何処だここ？」

銀時は疑問に思うと自分の手には刀が握られていた。

「刀？」

銀時は不思議に思いつつ歩いていく……。

すると、女を見つける。

「おい、すまねえが、ここは何処なんだ？」

銀時の声に女は振り返る。

「え？ここですか？ここは……」

銀時の顔を見て、女は固まった。

「おい？」

「ひい——！」

銀時の声に驚く声を上げる。

「どうしたんだ？」

「お、鬼！！来ないで！！」

女は叫んだ。

銀時は身構えた。

だが、何処にも鬼は居ない。

「鬼なんていねえじゃねえか？」

銀時が近づこうとすると……。

「助けてエエエエエエ！！」

女は叫びながら走り出した。

「おい！待ってくれ！！」

銀時は女を追った。

*

銀時は女を追っていると村にたどり着いた。

「村か？」

銀時はそう思った。

すると、女が……。

「助けて！！鬼が！鬼が！！」

女は叫ぶ。

銀時は辺りを見回すが、鬼は居ない。

村の人達がぞろぞろと出てくる。

「お、鬼じゃ」

「鬼がおるぞ」

「皆！武器を持て！！」

村人の男共が武器を持って出てくる。

「何処に鬼なんて？」

銀時は見回す。

「怪しく煌めく銀髪に、あの血の様な赤い瞳……化け物じゃ！！鬼

を殺せ！！」

銀時はわかった。

自分が鬼なんだと……。

（お、俺が鬼だったのかよ……）

銀時は幼少の頃を思い出し、苦しくなる。

「鬼！」

「化け物！！」

村人がドンドン叫ぶ。

銀時の精神は崩壊仕始める。

「俺は……鬼でも、化け物でもねえ……人間だ!!」

銀時は叫んだ。

「噓吐くな！！鬼！！」

銀時にトドメの言葉の様に……心に何か刺さった。

「お……俺はやっぱ……鬼なのか？」

銀時は頭を抱え始める。

「死ね！鬼イイイイイイ！」

村人達が襲いかかる。

「俺が……俺が……何をしたって言うんだアアアアアアアアア
ア！！！」

銀時はそれを叫ぶと意識が途切れた。

*

「ハッ！？」

銀時は気が付く。

自分は知らぬ間に村の外に出ていた。

刀は何故か血が滴っている。

(も……もしかして……)

自分の手にも血が付いており……嫌な予感がした。

「ハア……ハア……ハア……」

銀時は緊張感がMAXまでいった。

「うわアアアアアアア！」

銀時は走った。

何処までも走った。

そして……見えてきたのがある。

見えたのは、なのは達だった。

「なのは！フェイト！アリシア！新八！神楽！皆……！」

銀時は叫んだ。

皆は銀時に呼ばれて止まる。

「なあ、ここ……何処なんだよ？」

銀時は訪ねる。

「あ、銀さん……いえ、鬼……なんですか？」

なのはがそう言った。

「……！」

銀時はその言葉に驚いた。

「なあ、何言ってるんだよ……」

銀時はなのはに近づこうとする。

「来ないで！鬼……！」

フェイトが銀時に言う。

「な……なあ」

銀時は皆に近寄ろうとする。

「鬼……」

「化け物……」

皆の口からそれが走る。

銀時の心は一気に崩壊した。

「ああ……ぐう……あが」

銀時から涙が零れる。

仲間から言われたのだからダメージは大である。

「鬼は……始末しないといけませんね？」

なのはがそう言う。

「そうアルナ。鬼は……殺さないといけないアル」

神楽もそう言う。

「化け物……死ぬ覚悟出来ました？」

アリシアが言う。

「元々出来てますよね……化け物」

新八が言う。

「うわああ……うわあああああああ……！」

銀時は空に向かって叫んだ。

涙が出てくる……。

「さて……皆……行くよ」

フェイトがそう言うと言った皆が襲いかかってきた。

『死ね！鬼イイイイイ！』

それが引き金となったのか……。

プツン……。

銀時の何かが崩壊した。

「テメエ等までエエエエエエエエエエ！！」

銀時はまた意識が途切れた。

*

「ハア……ハア……」

銀時は気が付き、自分が肩で息をしているのに気付いた。

ポタ……ポタ……。

自分の右手から聞こえて見てみると……刀から血が滴っていた。

手を見ると血が付いている。

そして……周りを見渡した。

生徒「銀八先生!!」

銀八「ハアイ。質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

漸呀「神宮寺漸呀だ」

銀八「ふんじゃ、行くか」

漸呀「まずはペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ

『輝刃「だろっな…。銀時にとって“あの人”は人生における『タ
ーニングポイント』となる存在だからな…。あ…質問…行くぞ?ま
ずは俺からだ。』

1・勲の旦那に質問…もし自分に一目惚れしている娘から告白され
たら、どんな反応を示すんだ?

あゝ…前の質問で言った娘か…。確かに気になる所だな…。次は俺
からだ。

2・ナナフシさんに質問…新八が天魔・双極を展開して戦うのって、
何時になるかな?

輝刃「ううむ…(汗)この場合だとStrikersまで伸びそう
だな…。」『まずは近藤だな」

近藤「俺はお妙さん一筋なんぞでな!!告白されてもどうも思わん!
!ちゃんと武士らしく断る!!」

銀八「らしいです。二つ目だが」

ナナフシ「すみません。考えてくださったのに……予想通りStrikers編になるかもしれません。本当にすみません」

銀八「と言う訳で『月光閃火』さん。天魔・双極と新八の活躍を楽しみにしていなさい」

漸呀「次だ。ペンネーム『白騎士君』さんからの質問だ
『白騎士君』では質問します。』

ナナフシさんに質問。白騎士物語を知っていますか？

皆に質問。レナードの味覚をどう思う？

銀龍に質問。ウィルをどう思いますか？

『以上です』『まずはナナフシだな』

ナナフシ「題名は聞いた事があります。買おうと思ったら金がなく
て……それで買う事が出来ず、友達からちよくちよく聞く程度でしたので、ストーリーはよくわかりません」

銀八「そうなのかよ。二つ目だが、レナードおかしいだろ!？」

漸呀「ふん。そうなのか。特にどうも思わねえよ」

銀八「何で!？」

漸呀「それだったら、そっちのフェイトの料理を送ってくれ。俺が
食ってやるよ」

銀八「死ぬ気か！？まあ、三つ目だが」

銀龍『うむ、元気で良いと思うぞ。我も人型になる事が出来れば…
…皆を助ける事が出来るのだが』

銀龍は悔しそうに言う。

銀八「と言う訳で『白騎士君』さん。廊下に立ってなさい」

漸呀「次で最後だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問だ

『黒龍』これからどうなるのか楽しみです。では、質問します」

1 . なのはとフェイトに質問。銀さんのためならどこまで出来る？

A . 無刀に立ち向かう。

B . 自分たちに発情したクロノに立ち向かう。

C . 自分たちに欲情したオタクの群れに立ち向かう。

D . とりあえず、新八と模擬戦する。

銀時「いや、なんだこの問い！？ A以外碌なのがねえー！？」

2 . クロノに質問。原作で、あなたの最大の見せ場をプレシアに掠め取られたことについてどう思いますか？

3・新八へ。春が来て良かったですね。これからは、あなたも非リア充軍団から狙われる毎日が続きますが、どうか頑張ってください。
(死)

銀時「いや、お前3の質問にありありと嫉妬が見え隠れしてるんですけど!？」『一つ目だが』

なのは「Aまでやってみせるの!!」

フェイト「私も!!」

銀八「つまりは銀時の為なら立ち向かえるのか……カーッペ!」

漸呀「うお!汚ね!!二つ目だが」

クロノ「く……悔しいに決まってる……」

クロノは震えながらそう言う。

銀八「……三つ目だが」

新八「『黒龍』さん!?どれだけ僕に怒りをぶつけてるんですか!?
嫉妬が丸見えですよ!!」

天魔「主」

新八「///」

天魔に抱きつかれて顔を真っ赤にする新八

銀八「カーツペー!!」

漸呀「だから汚ねえだろ!!」

銀八「と言う訳で『黒龍』さん!!廊下に立ってなさい!!」

漸呀「八つ当たりするな!!質問は以上だ」

銀八「それではまた」

第四十訓：悪夢は苦しいもの（後書き）

ナナフシ「銀さんが崩壊してしまいました」

なのは「銀さん……」

フェイト・アリシア「「銀時イ……」」

ナナフシ「次回！『第四十一訓：どんな闇にも一筋の光！』です！
！」

第四十一訓：どんな闇にも一筋の光！（前書き）

ナナフシ「銀さん！悪夢から脱出するか！！」

銀龍『『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ』

第四十一訓：どんな闇にも一筋の光！

[illegible]

銀時はまだ笑っていた。

泣きながら笑っていた。

そして……疲れたのか……笑うのをやめた。

「俺は……何笑ってんだ？……俺がこいつ等を殺っちまったのに……何で笑ってんだ？」

銀時はまだ悪夢と気付いていない。

「やっぱ……俺は誰も護れやしねえ……誰も……誰も……」

銀時は涙を流す。

「俺は結局は無力だ……」

銀時がそう言った時だった。

「そうだよ……銀時は無力だよ」

声が聞こえた。

声が聞こえた方向を見ると、倒れているハズのフェイトがこっちに顔を向け、ニヤツと不気味な笑みを浮かべた。

顔には血が付いている。

「フエ……フエイト？」

銀時は何で死んだ奴が動いているんだ？と思った。

「銀さんは……何も護れないんですよ」

次はなのはがこっちに向いた。

フェイトと同じ様に不気味な笑みを浮かべる。

もちろん顔に血が付いている。

「銀時は……何か護れた事があったの？」

アリシアも同じである。

皆が銀時を見て、不気味な笑みを浮かべて、顔に血が付いている。

「銀ちゃんは……何かを護る為に攘夷戦争に出たアル」

神樂がそう言う。

「でも、銀さんは……結局は何も護れなかった。自分の大切な仲間も……恩師も」

新八が言う。

「銀ちゃんは……攘夷戦争で、敵を斬って斬って斬りまくって……何が残ったん？」

はやてが言う。

『虚しさと悲しみだけだよね』

皆がそう言う。

「ああ……うう……黙れ！黙れエ！！！」

銀時は頭を抱えながら言う。

「銀さん……もう苦しむ必要はないよ……」

なのはが銀時に近づく。

「一緒に行こうよ」

フェイトも近づく。

「一緒に……」

アリシアが言うと言が銀時に近づく。

『地獄に……』

皆はそう言った。

なのは達の後ろにいきなり穴が空き、地獄の様な所が見える。

「ああ……ああ！嫌だああああああああ！！！」

もう銀時の精神は崩壊している為……いつもの坂田銀時ではなかった。

銀時は立ち上がり、走り出した。

「待ってよ銀さん」

「逃げてでも無駄アルよ」

「何処にも……逃げられないですよ」

なのは、神楽、新八が言う。

銀時は気にせず走った。

＊

『主……』

銀龍は何も出来ない自分に悔やんでいた。

『我は……我は……一体何者なんだ？』

銀龍は疑問に思う。

夢刀に恨みを買ったような事をして、更には自分の主が危険な状態なのに何も出来ない……。

銀龍は悔やんだ。

（松陽……約束……護れぬかもしれない）

銀龍は思った。

（皆が一生懸命主を呼んでいるのに……我は……我は）

銀龍はなのは達の声で、自分の無力差を憎む。

今までの聞いた言葉を思い出す。

~~~~~

あなたは……その刀……まさか銀龍ですか？

覚えてないんですか？

アルハザードの言葉

銀龍……久しぶりです

いえ、会っています……忘れたのですか？

あの時一緒に！

リインフォースの言葉

き……貴様は銀龍……！

ここで出会えるとはな……ここで恨みを晴らしてくれるううううう……！！

## 夢刀の言葉

~~~~~

ズキッ！

銀龍に頭痛が走る。

（我は……我は……！）

そして……。

（思い出した……我は）

銀龍はそう思った瞬間……。

『我は！『天神刀』が一つ！『天空の天神刀』！！『銀龍』なり！』

銀龍が叫んだ。

『我等『天神刀』は天より生まれし存在！我等が生まれた世界は既に滅びた！その世界の名は『スカイ』なりイ！！我はその『スカイ』で生まれた存在なりイ！！』

銀龍は叫んだ。

『あいつ……記憶がなかったのか？』

夢刀は黒い球を大きくしながら言った。

『主イイイイイイ！！起きろオオオオオオオオオオ！！』

銀龍も銀時を呼び始めた。

＊

なのは達は銀龍の言葉に驚いていた。

『もしかして！銀龍さん！記憶が戻ったの！！』

なのはは驚いた。

『『スカイ』って……』

プレシアはそれを聞き、驚いた。

「どうしたの母さん？」

フェイトが訪ねる。

「『スカイ』聞いた事があるわ。今からもう何千年前に滅びた世界よ。そこにも魔法文化があったと聞いた事があるわ。そして、特殊な武器を使いこなし、デバイスがなくとも魔法を使っていたって」

「それじゃ、銀龍はそこで生まれた存在！！」

プレシアの言った事を聞き、アリシアはそう思った。

「やつと思い出しましたか……銀龍」

雷麟がそう言う。

「もしかして……」

「はい、私と炎凰と天魔も……銀龍と同じく『スカイ』で作られた存在です」

それを聞き、なのは達は驚く。

「私と炎凰と銀龍は『天神刀』と言われる『スカイ』で一番強力な武器であり、伝説の刀でした。天魔は私達を作った後に生まれた兄弟機です」

雷麟は説明をした。

「それじゃ……」

「銀龍は……龍が長い眠りから目覚めました」

雷麟がそう言った。

「説明は後にしやがれ！！さっさと呼び戻せ！！」

漸呀が大量の化け物共を一人で相手をしていた。

正に戦鬼^{おに}だった。

なのは達は銀時の名前をまた呼び始めた。

*

「ハア……ハア……」

銀時は走っていた。

皆が走って銀時を追いかけてくる。

「待ってくださいよ」。銀さ〜ん」

「そうだよ銀時イ」

なのはとフェイトがそう言う。

「くっ!!」

銀時はスピードを上げる。

すると……。

ガラガラ!!

銀時は崖に落ちた。

崖の先を掴もうとしたが、間に合わなかった。

（俺も……ここまでか……）

銀時はそう思った……その時!!

ガシッ!!

銀時の手を誰かが握った。

小さい手が六本だ……。

銀時は恐る恐る顔を上に上げた。

「銀さん……銀さんが行くのは……そっちじゃないよ?」

「銀時は私達と同じ……」

「地獄に行くんだよ?」

銀時の手を掴んでいたのは……なのは、フェイト、アリシアだった。

「ああ……ああ!!」

銀時は絶望に染まっていく。

そして、ドンドン引き上げられる。

（諦めるしか……ないのか……）

銀時がそう思った時だった

「銀時……ここで諦めるのですか?」

銀時はその声にハッとした。

辺りを見回す。

すると、光が見えた。

その光の中に居たのは……松陽だった。
引き上げられるのがストップする。

「松陽……先生？」

銀時は驚く。

「銀時……あなたは……ここで諦めるのですか？私に言っただじゃないですか……相手が誰だろうと、俺は俺の大事なモンを護る……そう言っただじゃないですか。このまま悪夢にうなされるのですか？」
「……」

松陽の言葉に銀時は気付く……。

これは悪夢なんだと……そして……自分がただ逃げているのだと……戦う事から。

「銀時この声が聞こえないのですか？」

松陽がそう言うのと声が聞こえ始めた。

『主イイイイイイ！！起きろオオオオオオオ！！皆の声が聞こえぬのかアアアアアアア！！』

銀龍の声だった。

「銀さアアアアアん！！起きてエエエエエエエ！！」

「銀時イイイイイイ！！目覚めてエエエエエエエ！！」

「銀時イイイイイイ！！悪夢なんか負けちゃダメだよオオオオオオオ！！」

なのは、フェイト、アリシアの声が聞こえた。

「銀ちゃアアアアアん！！起きるんやアアアアアアア！！」

「銀時イイイイイイ！！」

はやて、シグナムの声が聞こえる……そして、皆の声が聞こえる。

「あなたの魂は……まだ折れてはいないでしょう？」

松陽がそう言うのと銀時はニコツと笑った。

「ああ、松陽先生……俺の魂は折れはしない……皆が居るかぎり！！」

銀時がそう言うのと辺り一面が光りに囲まれる。

銀色の光に……。

「銀時……それで良いんですよ。必ず……大切なものは護るのですよ?」

「はい……松陽先生」

銀時は頷く。

「銀時……また会えて……嬉しかったですよ」

「はい……しょ……松陽先生エ……」

銀時は涙を流しながら松陽に抱きつき……そして、松陽は消えた。

「銀時……また会いましょう」

松陽はそれだけを言った。

*

「ふん!これで終わりだ!!」

夢刀の手には巨大な黒の球体があった。

その時だった!

銀時が目を覚ました。

『主!!』

銀龍の言葉になのは達は反応した。

『銀時(銀さん)(銀ちゃん)!!』

皆が叫んだ。

「今頃遅い!!」

夢刀は黒の球体を銀時に投げつけた。

銀時は銀龍を握り……。

「行くぜ。銀龍」

『わかった。主』

銀時がそう言った後、銀龍は答えた。
そのまま黒の球体が銀時に直撃する。

なのは達はそれを見る。

「ハハハハハハハハハハ！これで銀龍は……」

夢刀がそう言った時だった。

ズババババババババババババババババ！

何かを斬る音が聞こえた。

そして……。

「なっ……！」

夢刀は驚いた。

今、自分の目の前に、銀色の魔力を纏い、ドラゴンの様な銀色の翼を生やしており、手には二つの刀が握られていた。

「な……何故！生きている……！」

球体の方を見ると、切り刻まれ、それが爆発していた。

「……」

銀時は無言のまま、夢刀を睨んだ。

「……！」

ゾクッ……！

夢刀は驚いた。

夢刀の目の前に……夜叉^{おに}が居る。

いや……夜叉^{おに}だけじゃない。

夜叉^{おに}と龍が居る。

白の夜叉^{おに}と銀の龍が居る……！！

そして、夢刀はある事に気付いた。

「ぎ……銀龍は何処だ……！」

夢刀がそう言った。

銀時が握っている二つの刀を見たのだ。

両方とも白銀の刀で、右手に握っている刀の刀身には龍が模った模様があり、左手に握っている刀には夜叉が模った模様がある。

「あ？居るじゃねえか……ここに」

銀時はそう言った。

「ま……まさか……！」

夢刀は驚いた。

「そう……この刀二つが銀龍だ！二天銀刀！！」
銀時はそう言った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！！」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

葵「神宮寺葵です！！」

銀八「それじゃ、行くか」

葵「まずはペンネーム『真王』さんからの質問

『真王』なら質問だ。『銀時、もし目の前に咎人の鬼（お前自身）とあったなら、どうする？』」

刃或「次は俺だ。『自分が殺人鬼だというのなら、』人口100万人を殺した奴』は殺人鬼か？』」

邪王（お、重てえ……）『一つ目だけど』

銀時「そんな時は……俺がそれを止めるしかあるめえよ」

銀時はそう答えた。

銀八「銀時らしいな。二つ目だが」

銀時「そうだな……俺にもそれはよくわかんねえ……人工100万人殺したからって……殺人鬼かどうかはわからねえ」

銀時はそう答える。

銀八「と言う訳で『真王』さん。廊下に立ってなさい」

葵「次です。ペンネーム『白騎士君』さんからの質問

『白騎士君』で、では……質問に移ります。』

1・銀さんに質問。マジンガーZのブレストファイアーに耐えられますか？（威力 3万度の熱線）

2・リリカルメンバーに質問。フェイトの料理を食べられますか？

『以上です』一つ目だけど

銀時「いやいやいや！いくら銀龍使っても無理だから！！」

銀時は全力で無理と答えた。

銀八「二つ目だが」

リリカル組（フェイト以外）『無理……』

フェイト「酷いよオオオオ！！」

実物を見せられてそう答えた。

フェイトはそれを言われて泣いた。

銀八「で、漸呀食うんだろ？」

漸呀「ああ。それじゃ、いただきます」

漸呀はそう言々とガツガツ食い始めた。

皆はそれを黙って見ていた。

漸呀「モグモグ……ま、うまいって評価するとやばいから、まあまあかな」

漸呀は普通に食べてしまった。

全員（フェイトと葵以外）　ええええええええええええええ！！！！

フェイトと葵以外は漸呀に驚いた。

銀八「どういう味覚してんだアアアアアアアア！」

銀八はツツコンだ。

漸呀「俺……猛毒キノコ食った事あるぜ？それよりもマシだ」

[illegible]

これにはフェイトも驚くが、葵は驚いていなかった。

銀時「何で生きてんだテメエ!？」

銀時は漸呀に言う。

漸呀「俺の一族はな。『不老』と『鋼体』を持ち合わせてんだ。つまり葵もだ」

漸呀はそう言う。

漸呀「『不老』はその名の通り、寿命では死にはしねえ。『鋼体』どんな病気でも数分で治っちまうんだ。それは毒も例外じゃねえ。後、人智を超えた舌と胃腸を持ち合わせてるんだ。だから、色んなもん食ってきたな」

漸呀はそう言った。

全員（葵以外）『ありえない一族がここに二名……』

葵以外はそう言った。

銀八「と……と言う訳で『白騎士君』さん！！漸呀がおいしく食べました！！」

葵「次で最後だよ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』さすがは、黒夜叉と白夜叉……言う事が違いますね。では、質問をします」

1・フェイトに質問。料理の腕は上達しましたか？

2・なのはとフェイトと銀さんに質問。うちの小説に出て来たナナシをどう思いますか？

3・なのはとフェイトに質問。セフィロスと戦って勝てると思いま
すか?』一つ目だけど」

フェイト「うつ……じょ……上達したよ!」

銀八「本当か?」

フェイト「ほ……本当だよ!」

銀八（嘘だな）

フェイトの嘘はわかりやすかった。

銀八「二つ目だが」

なのは「凄く強い」

フェイト「凄く強いと思うよ」

銀八「らしいです。三つ目だが」

なのは「無理無理無理無理!」

フェイト「同じく!」

なのはとフェイトは全力で無理と答えた。

銀八「と言う訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

葵「質問は以上です」

銀八「それでは」

第四十一訓：どんな闇にも一筋の光！（後書き）

ナナフシ「夜叉と龍が目覚めた！夢刀に勝てるのか！？ちなみにわ
かっていると思いますが『スカイ』はオリジナルです」

銀時「次回！『第四十二訓：魂を狩る夜叉と天を駆ける龍！』だ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2725z/>

リリカル銀魂～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～

2012年1月12日19時49分発行